金日成略伝

朝鮮・平壌

チュチェ90（2001）年

金日成略伝

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ 90(2001)

『金日成略伝』の刊行によせて

朝鮮労働党の創立者であり、朝鮮民主主義人民共和国の永遠なる主席であり、社会主義朝鮮の始祖である偉大な領袖金日成（キムイルソン）主席の革命的生涯は、20 世紀とともにあった天才的な思想家・理論家、傑出した政治家、非凡な軍事戦略家、卓越した指導芸術家、人民の慈父としての聖なる一生であった。

主席は 10 代の少年期に革命の道を踏みだして以来、80 代の高齢にいたる長い間、比類なき困難かつ複雑な朝鮮革命を輝かしい勝利に導いて祖国の解放をなし遂げ、人民大衆中心のもっともすぐれた社会主義朝鮮を建設し、世界革命の発展に特出した貢献をなした。

金日成主席はチュチェの革命偉業と全世界の自主化偉業を実現する闘争において、時代と歴史の前に積み上げた不滅の業績により、人類の心の中にチュチェの太陽として生きつづけている。

希世の偉人であり、革命と建設の偉大な英才である金日成主席の輝かしい革命的生涯と不滅の革命業績をさらに光輝あるものとし、末長く伝えるため、ここに金日成略伝を増補編纂して刊行することにした。

2001 年 7 月

目　次

1

1912 年 4 月～1931 年 12 月

金日成主席は、チュチェ 1（1912）年[1]4 月 15 日、平壌(ピョンヤン)市の万景台(マンギョンデ)で誕生した。

主席の一家はみな、国の自主独立と人民の自由と幸福のため勇敢にたたかった革命家であった。

曽祖父の金膺禹(キムウンウ)は 1866 年、アメリカの侵略船「シャーマン」号を撃沈する戦いの先頭に立った愛国者であった。

祖父の金輔鉉(キムボヒョン)と祖母の李宝益(リボイク)は子孫をみな革命闘争に立たせてそれを助けるとともに、日本帝国主義の厳しい弾圧と迫害にも屈せず、民族的節操をかたく守ってたたかった。

父の金亨稷(キムヒョンジク)（1894・7・10～1926・6・5）は祖国の独立と人民の自由と解放のために一生をささげた反日民族解放運動の卓越した指導者であった。

かれは「志遠」の思想を座右の銘として革命の道に立ち、1917 年 3 月 23 日、当時、朝鮮の愛国者による国内外組織のうち規模がもっとも大きく、反帝自主の立場に徹した、大衆的基盤の強固な反日地下革命組織である朝鮮国民会を結成し、それを指導した。そして 1919 年の 3・1 人民蜂起後は、変遷する情勢の要請に応じて、

朝鮮人民の反日民族解放運動を民族主義運動から共産主義運動へと方向を転換させるうえで先駆者の役割を果たした。

母の康盤石（カンバンソク）（1892・4・21〜1932・7・31）は、朝鮮革命の勝利と女性の社会的解放のためのたたかいに一生をささげた共産主義女性運動のすぐれた指導者であった。

叔父の金亨権（キムヒョングォン）、弟の金哲柱（キムチョルチュ）も早くから反日革命闘争に参加し断固としてたたかった熱烈な共産主義革命闘士であった。そして外祖父の康敦煜（カンドンウク）と外伯父の康晋錫（カンジンソク）も熱烈な愛国者、不屈の反日闘士であった。

主席の一家は愛国、愛族、愛民を家風とし、財はなさずとも生きられるが、仁徳がなくては生きられないということを家憲としていた。一家は代々、小作によって苦しい生計を立てていたが、愛国心と正義感が強く仁徳にすぐれていたため、「清貧にして義理と節操を重んずる家柄」として尊敬された。

父は国の柱になってほしいという願いをこめて、息子を「成柱（ソンジュ）」と名づけた。

主席は幼少のころから端整な面立ちに非凡な英知と探求心、大きな度量と包容力、強靭な意志と闊達な性情、明晰な判断力と卓抜な記憶力を天稟（てんぴん）としていた。

主席の生い育った時期は、朝鮮人民が日本帝国主義に国を奪われ、植民地的奴隷に転落した民族受難のもっとも暗澹たる時代であった。

主席は両親の革命的影響と自らのたゆまぬ勉学と探求、そして矛盾にみちた社会現象にたいする目撃と体験、日本帝国主義に反対する実践闘争の過程で、偉大な革命家としての品格と資質を備えて

いった。

主席は幼年期を万景台と烽火（ポンファ）里で送った。

幼いころ両親から、山紫水明のうるわしい祖国と 5，000 年の悠久の歴史、輝かしい文化をもった聡明で勇敢な朝鮮民族について、封建支配層と侵略者に抗して果敢にたたかった人民と愛国的名将について、そして朝鮮の亡国史と、日本帝国主義の野蛮な植民地支配と民族的蔑視、地主、資本家の苛酷な搾取について聞かされ、国と民族を愛する心を培った。

主席は 1917 年の秋、江東（カンドン）郡烽火里で、朝鮮国民会事件で日本の官憲に連行されながらもかれらを威圧した父の毅然たる態度、警官の横暴な家宅捜査にひるまずたたかう母の剛毅な姿、翌年の夏、平壌監獄の面会室で官憲のひどい拷問にも耐えて革命的気概を守りつづける父の不屈の姿を目のあたりにして、強盗日本帝国主義にたいする憎悪の念と不屈の革命的闘志をかき立てた。

1919 年に起きた全民族的な 3 ・ 1 人民蜂起は、幼い主席の胸に朝鮮人民の百折不撓の気概と朝鮮民族の英姿を深く刻みつける重要な契機となった。幼い身でデモの隊列に加わった主席は、万景台から普通（ポトン）門まで行進し、赤手空拳の群衆を銃剣で殺りくする日本官憲の横暴きわまる蛮行と、これにいささかもひるまず突き進む群衆の意気盛んな姿を目撃し、日本帝国主義侵略者こそ不倶戴天の敵であり、人民大衆の力は底知れないものであることを実感した。

主席は父の出獄後、両親の革命活動の路程にしたがって、国内と中国の各地を転々としながら少年時代を送った。1919 年の秋、両親とともに故郷の万景台を後にした主席は、中江（チュンガン）でしばらく過ごしたのち、鴨緑（アムノク）江を渡って中国の臨江に移った。ここで半年余り

中国語を習い、1920 年の春、臨江小学校に入学し、翌年の夏に長白県八道溝に移って中国人小学校（4 年制）に編入した。父の先見の明ある計らいで早くから中国語を習い、中国人の学校に通って中国語を自由にあやつれるようになったことは、その後の中国人民との反日共同闘争において大いに役立った。

1923 年の初、八道溝小学校を最優等の成績で卒業した主席は、革命のためには祖国の現実をよく知らねばならないという父の意を体して祖国へ旅立った。3 月 16 日に八道溝を発ち、月灘(ウォルタン)を経て五佳(オガ)山を越え、和平(ファピョン)、黒水(フクス)、江界(カンゲ)、城干(ソンガン)、前川(チョンチョン)、古仁(コイン)、清雲(チョンウン)、熙川(ヒチョン)、香山(ヒャンサン)、球場(クジャン)を経由して价川(ケチョン)まで歩き、そこで汽車に乗って 3 月 29 日、故郷の万景台にたどりついた。八道溝から万景台にいたる千里の道は、祖国と人民について学ばせた「学びの千里の道」であった。

祖国に帰った主席は、七谷(チルゴル)の母の実家へ身を寄せ、彰徳(チャンドク)学校（6 年制の私立学校）の 5 学年に編入して熱心に学び、日本帝国主義侵略者に無惨に踏みにじられている祖国の現実を骨身にしみて体験した。その過程で、いかなる力をもってもくじけることのない朝鮮人民の独立の意志を強く感じ、こうした人民大衆を正しく立ち上がらせれば朝鮮人民自身の力で国を取りもどすことができると確信するようになった。とくに狡猾な「文化統治」の名のもとに、朝鮮にたいする野蛮な植民地支配をおこなう日本帝国主義の蛮行を目のあたりにして、かれらこそ朝鮮人民のもっとも凶悪な絞殺者であり、悪辣な搾取者、略奪者であることをはっきり認識した。そして朝鮮民族はただ闘争によってのみ日本帝国主義者を追い出し、国の独立を達成することができるという信念をさらにかたくした。

主席は 1925 年 1 月、父がまた日本の警察に逮捕されたという知らせを受け、敢然として万景台を発ち、「解放の千里の道」を歩いて 13 日目に葡坪（ポピョン）に着いた。主席はそのとき、鴨緑江を渡りながら、朝鮮が独立しなければ二度ともどってこないとかたく誓った。

金日成主席はそのときのことを回想してつぎのように述べている。

「わたしは 13 歳のとき、朝鮮が独立しなければ二度と再び帰るまいとかたく決心して鴨緑江を渡りました。そのときわたしは誰かがつくった『鴨緑江の歌』をうたいながら、いつまたこの地を踏むことができるだろうか、自分が育ち、先祖の墳墓のあるこの地に再び帰る日は果たしていつのことであろうかと思うと、幼心にも悲しみをおさえることができませんでした」

鴨緑江を渡った主席は八道溝、臨江を経て、父が日本の警察に連行される途中脱走して移り住んでいた撫松へ行った。1925 年 4 月の初め、撫松第 1 優級小学校に編入し、翌年の春に最優等の成績で卒業した。主席は在学中、勉学にいそしみながら父の革命活動を積極的に助ける一方、『レーニン一生記』『社会主義大義』『露国革命史とレーニン』などの革命的な書物や朝鮮の愛国的名将、世界の偉人たちの伝記を耽読した。その過程で社会現象と革命闘争にたいする眼識を広げ、独自の思考力と真しな探求力を養った。

その遠大な志と雄大な抱負、該博な知識と高い政治的見識、それに大きな度量と包容力は、青少年学生と大衆をして主席を敬慕してやまなくした。

主席は 10 代にしてすでに徹底した反帝自主精神と断固たる階級的立場、科学的な洞察力と非凡な英知、卓越した指導力と高邁な徳性を体現した革命家に成長した。

1926 年 6 月 5 日、父の金亨稷が死去した。父を失った主席の悲しみは大きかったが、父が遺した「志遠」の思想、3 大覚悟[2]、同志獲得の思想、2 挺の拳銃――この貴い遺産から大きな力を得、その遺訓を守って必ずや祖国を解放するためにすべてをつくしてたたかう決意をかためた。

このころ、3・1 人民蜂起後の闘争舞台に新たに登場した初期共産主義者たちによる 6・10 万歳デモ[3]が起こった。この大衆的な反日デモは分派分子らの策動により、日本帝国主義の野蛮な弾圧に耐えることができず、失敗に終わった。主席は相つぐ反日運動の失敗から、日本帝国主義を打倒し、必ず祖国を取りもどさなければならないという強い思想的衝動にかられた。

主席を中学までは進学させるようにという父の遺言と母の願い、そして上級学校への進学を望む本人の意志を叶えてやろうとする父の知友たちの斡旋で、主席は 1926 年 6 月、樺甸の華成義塾に入学した。華成義塾は独立軍の幹部養成を目的に、1925 年初に設立された正義府[4]所轄の 2 年制の軍事・政治学校であった。この学校への入学は、武装闘争によって国の独立を達成しようという主席の構想とも合致するものであった。

華成義塾に入学した主席は、すべての事象を非凡な眼識で分析、判断し、批判的に受けとめた。義塾での教育は、民族主義思想と旧韓国時代の旧式の軍事教練だけであった。主席をもっとも失望させたのは、この学校の思想的立ち遅れであった。学校当局は民族主義思想のみを主張し、先進思想を頭からはねつけていた。華成義塾の制約性は、民族主義運動そのものの制約性をさらけだすものだった。主席は華成義塾を通じて民族主義運動の全貌を察することができた。

そして次第に、華成義塾にかけていた期待はくずれていった。民族主義運動家の古いやり方では国の独立を達成できないということを痛感し、新しい方法で祖国解放の道を切り開く決心をかため、その解答を得るため精力的な活動をくりひろげた。

主席は朝鮮革命の新しい道を模索し、『共産党宣言』をはじめマルクス・レーニン主義の書物に読みふけった。マルクス・レーニン主義の書物にある革命の原理を朝鮮の現実と結びつけて深く研究し、どのような方法で国の独立を実現すべきか、祖国解放のための闘争では敵とする対象と提携する階層をどう規定すべきか、独立を達成した後はどのような過程を経て社会主義・共産主義を建設すべきかといった諸問題について熟考を重ねた。

主席は、朝鮮革命の新しい道を切り開くためには事大主義とセクト主義に毒されていない新しい世代の真の共産主義者を育てなければならないとし、華成義塾の青年学生のあいだに共産主義思想を普及すると同時に、志と生死をともにできる革命同志を一人二人と結束していった。

主席は朝鮮革命の正しい道を見いだし、中核が整うと、新しいタイプの革命的前衛組織の結成に大きな力を注いだ。1926 年 9 月末、会合を開いて組織の必要性を説き、組織を結成するため、同志をより多く結集することを強調し、具体的な任務を分担した。

このような準備期間を経て、1926 年 10 月 10 日、革命組織結成のための予備会議を開き、組織の名称と性格、綱領、活動規範を討議にかけた後、10 月 17 日に打倒帝国主義同盟（略称「ㅌ（トゥ）・ㄷ（ドゥ）」）の結成を宣言した。そしてこの会合での報告『帝国主義を打倒しよう』で、反日闘争の歴史的経験と教訓を全面的に分析し、組織の綱

領を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「打倒帝国主義同盟は名実ともに帝国主義の打倒を使命としているため、その綱領では朝鮮人民の宿敵である日本帝国主義の打倒と、朝鮮の解放と独立の達成を当面の任務とし、最終目的として朝鮮に社会主義・共産主義を建設し、ひいてはすべての帝国主義を打倒して世界に共産主義を建設することを提起すべきです」

主席は、打倒帝国主義同盟の綱領を正しく実行するためには、同盟員が思想、意志のうえでかたく団結するとともに、日本帝国主義とのたたかいにすべてを尽くす決意をかためた信頼できる青年たちで組織を拡大、強化し、厳格な組織生活規範にもとづいて活動しなければならないと述べた。

会議では参加者の一致した意思により、金日成主席を打倒帝国主義同盟の責任者に推挙した。

打倒帝国主義同盟はチュチェの革命偉業を勝利に導く前衛組織であり、朝鮮で初めての真の共産主義的革命組織であった。打倒帝国主義同盟の結成によって革命の前衛組織が出現し、綱領が提示され、大衆にたいする指導が実現して、主席の革命活動が開始されたのである。

打倒帝国主義同盟の結成によって、朝鮮革命は自主性の原則にもとづいて前進する新しい時代を迎えることになった。「トゥ・ドゥ」の結成は、朝鮮における新しいタイプの党、チュチェ型の革命的党の創立をめざすたたかいの起点となった。主席が打倒帝国主義同盟を結成し、革命の陣頭に立ったときから、朝鮮革命の真の起原が開かれ、栄えあるチュチェの革命偉業が切り開かれることになった。

主席は革命活動を本格的に展開するため華成義塾を半年で中退し、満州における朝鮮人反日独立運動家と共産主義者が多く集まる、政治的中心地で交通の便のよい吉林に革命活動の舞台を移した。

吉林へ向かうに先立って撫松に立ち寄り、1926 年 12 月に、朝鮮における初の共産主義的少年組織であるセナル少年同盟を結成し、母の革命活動を助けて朝鮮における初の革命的女性大衆組織である反日婦女会の結成に寄与した。

主席は 1927 年 1 月中旬、吉林毓文中学校の 2 学年に編入した。この学校は市内の新興階層によって設立された私立学校で、思想的傾向が比較的よかった。

主席は朝鮮革命に関する理論と戦略戦術を探求するため、学科よりも先進思想の探求に熱中した。学校の図書主任に選ばれた有利な条件を利用して『共産党宣言』『資本論』『国家と革命』『賃労働と資本』などマルクス・レーニン主義の古典とその解説書を読みあさり、既成理論で解明ずみの問題を朝鮮の具体的実情と結びつけて深く研究する過程で、マルクス・レーニン主義をドグマとしてではなく実践の武器として受けとめ、真理の基準を抽象的な理論としてではなく朝鮮革命という具体的な実践のなかに求めるべきだという観点に立つようになった。政治書とならんで、『母』『鉄の流れ』などの革命的な小説や当時の現実生活を描いた進歩的な文学作品も数多く読みながら革命意識と階級意識をさらに高める一方、不平等な社会現象を目撃しながら、搾取階級と搾取社会を憎悪し、世界を改造し変革しなければならないという決意をさらにかためた。同時に革命的な文芸思想と文芸理論を体得し、演劇の台本や歌詞をつくり、作曲もするというすぐれた創作能力を身につけるようにな

った。こうして吉林時代に革命的世界観を確たるものにし、革命活動の過程での蓄積と体験にもとづき、自主的な革命思想の根幹を確立していった。

主席は朝鮮革命を成功裏に進めるため、先進思想で武装した新しい世代の共産主義者の育成に鋭意努力した。まず青年学生の間でのマルクス・レーニン主義の普及に力を注いだ。志を同じくする青年学生を誘ってまず毓文中学校で秘密読書グループをつくり、それを吉林市内の各学校に急速に拡大し、読書発表会、討論会、講演会、弁論大会などを頻繁に催して、かれらの思想・意識水準をたえず高め、かれらを組織的に結束する活動を積極的に進めた。1927 年 4 月に、吉林市内の朝鮮人少年を結集する合法的組織として朝鮮人吉林少年会をつくり、5 月には民族主義者が後援していた朝鮮人留学生の合法的組織であった朝鮮人旅吉学友会を純然たる親睦団体から革命的組織としての朝鮮人留吉学友会に改編した。

吉林一帯で新しい世代の青年学生の革命勢力が急速に伸びているというニュースは広範な地域に広まり、数多くの青年が主席の指導を仰ごうと吉林に集まって来た。主席はそれらの青年を教育して「トゥ・ドゥ」に加盟させる一方、その組織を吉林市内の各学校に拡大していった。「トゥ・ドゥ」の下部組織が多数つくられ、広範な青年学生のあいだで反日気運が高まるにともない、1927 年 8 月 27 日に「トゥ・ドゥ」をより大衆的な組織である反帝青年同盟に改編した。その後、反帝青年同盟は各学校と吉林周辺の農村地域はもちろんのこと、朝鮮青年のいる各地に深く根を下ろすようになった。

大衆組織が急増し、優秀な新しい世代の共産主義者が数多く育った状況のもとで、青年運動をさらに発展させるには新しい前衛組

織が必要になった。主席は青年運動の実態と革命発展の要請を深く洞察し、1927 年 8 月 28 日に朝鮮共産主義青年同盟を結成した。

朝鮮共産主義青年同盟は単なる青年組織ではなく、朝鮮革命の前途を切り開いていく使命をになった新しい世代の共産主義者の先鋒隊であり、各階層の大衆団体を組織し指導する革命的前衛組織であった。共青は青年の組織的結束を促し、中核を育て、朝鮮革命の主体的力量を準備するうえで大きな役割を果たした。共青の創立は、新しいタイプの党組織の結成をめざす青年共産主義者の活動の推進と、その大業の早期遂行において中枢的役割を果たした。

主席は同盟の責任者として活動するかたわら、中国系としての共青活動もおこなったので、中国の青年学生のあいだでも大きな影響力をもっていた。

主席は革命活動の舞台を広い地域に拡大しながら、人民のなかに深く入っていった。人民を教師とし、革命推進の原動力とみなし、広範な大衆を革命化するため、「人民のなかに入ろう！」というスローガンのもとに人民のなかに本格的に入るようになったのは 1927 年の冬休みのときからであった。主席は人民のなかに入って愛国主義教育、革命教育、反帝教育、階級的教育を主眼として人々を意識化し、かれらを各種の大衆組織に結集する方向で工作を進めた。

主席は各階層の青年と大衆を結集する階層別の大衆組織をつくる活動をおし進めた。1927 年 12 月 20 日、撫松地方の青年を中核に白頭（ペクトウ）山周辺の青年を結集し、大衆的反日青年組織である白山（ペクサン）青年同盟を結成した。1928 年 5 月には蛟河地方へ出向いて、民族主義者の影響下にあった麗新青年会の先進的な中核青年で反帝青年同盟蛟河支部を結成し、その役割を高めて麗新青年会と拉法青年会を革

命的に改造し、「東満青総」内の先進的な青年で真の共産主義勢力を整え、多数の反日青年を分派分子の影響から引き離し、革命的な組織に結集させた。

主席は農民大衆の獲得を革命の勝敗を左右する要諦とみなし、農民のなかに入ってかれらの組織化、革命化に努め、1928年3月10日に新安屯で朝鮮における初の革命的農民組織である農民同盟を結成した。そして吉林市内の労働者のなかに入ってかれらを階級的に目覚めさせ、それにもとづいて1928年8月25日に革命的な反日労働組合を組織した。

主席は革命組織をつくり、それを満州一帯と国内各地に拡大しながら、大衆の意識化をさまざまな形式と方法でくりひろげた。とくに革命闘争における文学・芸術の役割と重要性を十分考慮し、不朽の名作である革命演劇『安重根（アンジュングン）、伊藤博文を撃つ』『血噴万国会議』『娘からの手紙』、歌舞『13道お国自慢』『団結紐』、革命歌謡『朝鮮の歌』など数多くの文学・芸術作品を自ら創作した。そして学生少年たちで演芸宣伝隊を組織し、学期末休暇を利用して地方巡回の演芸宣伝活動を積極的にくりひろげ、人民を革命的に目覚めさせた。

主席は1928年1月、撫松一帯での演芸宣伝活動の最中に反動警察に逮捕されたが、母の指導のもとに展開された撫松住民の積極的な闘争によって釈放された。

主席は革命闘争の強力な思想的武器である革命的出版物による大衆教育に深い関心を払い、1928年1月15日に、撫松で朝鮮における初の革命的新聞である『セナル（新しい日）』を発刊し、翌年の夏には卡倫で『農民読本』という教科書を執筆して人民の革命意

識の培養に努めた。また各地に夜学を設け、各学校を革命的に改編して大衆教育の拠点とし、講演、講話、話の集いなどを通じて大衆を意識化する活動を積極化した。

主席は青年学生と広範な人民大衆を革命的に目覚めさせて革命組織に結集させる一方、科学的な戦略戦術によってかれらを日本帝国主義と反動軍閥に反対する実践闘争に立ち上がらせた。

主席は 1928 年の夏、吉林毓文中学校の学生の同盟休校を指導した。日本帝国主義者と反動軍閥は吉林毓文中学校が日を追って革命化されるようになると、反動的な教員と右翼系の学生を前面に立てて学校の民主的秩序を踏みにじり、進歩的な教員に圧力をかけ、先進的な学生の活動を弾圧した。かれらの策動を粉砕せずには学問の探究も青年運動も自由におこなうことができなかった。

主席は共青と反帝青年同盟のメンバーを動員し、学生の待遇改善をはかること、学生の要求する学科の授業を保障すること、進歩的な教員と校長に圧力を加えないことなどの要求をかかげて学生のあいだで宣伝活動を展開する一方、授業をボイコットして集会を開き、ビラの散布、檄、弾劾文の配付など各種の闘争を巧みに指導した。そして、他の学校でもこれに呼応して同盟休校に決起する周到な準備を整えさせた。同盟休校が市内の各学校に波及するきざしを見せると、恐れをなした軍閥当局は不承不承学生の要求をのまざるをえなくなった。

同盟休校の勝利は、日本帝国主義と結託した反動軍閥に大きな打撃を与え、学生青年には勝利の信念と新たな闘志を抱かせ、かれらを実践闘争のなかでさらに鍛えた。

主席は日本帝国主義の大陸侵略企図を粉砕し、人民大衆を反日

闘争へといっそう力強く立ち上がらせるため、1928 年 10 月から 11 月にかけて、日本帝国主義の吉会線鉄道の敷設に反対し、日本商品を排斥するより大規模な反日闘争を指導した。10 月上旬、共青および反帝青年同盟の幹部会議を招集し、日本帝国主義の吉会線鉄道敷設と日本商品流入の侵略的本質、それに反対する闘争の目的と意義を明らかにし、闘争のスローガンと行動方向、闘争方法を具体的に示した。そしてデモ隊を編成し、各隊の責任者を指名した。

デモの準備が整うと、吉林市内の各学校では吉敦線鉄道の開通式を前にして一斉に集会を開き、吉会線鉄道の敷設に反対する弾劾文を発表し、街頭デモを開始した。主席はデモ隊の先頭に立って闘争を励ました。数千名の青年学生が反日スローガンを声高く叫んで気勢を上げ、これに広範な大衆が合流した。これによって打撃を受けた日本帝国主義は、吉敦線鉄道の開通式を無期限延期せざるをえなくなった。吉林ではじまった反日闘争は満州全域に広がっていった。

デモ闘争がますます高揚し、広い地域に拡大すると、主席はついで大衆を日本商品排斥闘争へと導いた。40 日余りつづいた吉会線鉄道敷設反対闘争および日本商品排斥闘争の勝利は、満州侵略の野望を遂げようとする日本帝国主義侵略者、それにかれらと結託した中国の反動軍閥に甚大な打撃を与えた。この闘争を通じて主席は、大衆の力は底知れないものであり、大衆を正しく組織すれば銃剣によってもくじけない恐るべき力を発揮することになるという確信を強めた。

これらの闘争は、反日大衆闘争が領袖の指導のもとに新たな段階へと発展する歴史的な契機となった。

主席は 1929 年の秋、日本帝国主義の教唆のもとに「中東鉄道事

件[5]」を引き起こした国民党政府と反動軍閥の反ソ策動を粉砕するため、青年学生と大衆をソ連擁護の闘争に立ち上がらせた。

これらの闘争を通じて、新しい世代の共産主義者はさらに鍛えられていった。

主席は広範な反日勢力の団結のために、ブルジョア民族主義者と分派分子の策動を粉砕する闘争をくりひろげた。ブルジョア民族主義者の外勢依存思想と民族虚無主義思想、分派分子の左右の詭弁を思想的、理論的に論駁する一方、かれらの反動的思想毒素の影響を防ぐため、青年学生と大衆のあいだで講演と研究討論、それに演芸や出版物による宣伝活動を活発に展開し、誤った「主義主張」の反動的本質と弊害を深く認識させた。

主席は、民族主義運動団体である正義府、新民府[6]、参議府[7]が統合問題をめぐって地位争いに明け暮れていたとき、その頭領たちに会って諄々と諭したり、かれらの内幕を風刺した革命演劇『3 人 1 党』をつくって観覧させたりした。演劇を観て大きな衝撃を受けた民族主義者たちは、形式上ではあれ国民府[8]に統合せざるをえなかった。

1928 年の夏には「駐中青総」を結成して青年運動の「ヘゲモニー」を掌握しようとした分派分子の分裂主義的策動を破綻させた。その翌年の秋、国民府が南満青総大会なるものを開いて満州一帯の朝鮮人青年団体を手中におさめようとしたときには、白山青年同盟代表の資格で大会に参加し、民族主義者の分裂主義的策動に打撃を加え、その後、先進的な青年にたいする国民府の虐殺蛮行を暴露する弾劾文を発表した。これによって国民府のテロ分子は人民大衆の憎悪と糾弾の的となり、主席への民衆の信頼と期待はさらに高まっ

た。新しい世代の共産主義者と革命組織のメンバーは、革命で勝利するためには必ず卓越した領袖の指導を受けなければならないことを実践闘争を通じて痛感するようになった。金赫（キムヒョク）、車光秀（チャグァンス）をはじめ新しい世代の共産主義者と人民は主席を高く仰ぎ、亡国の悲運に閉ざされた朝鮮の夜空に高く差し昇り、三千里の山河を明るく照らす朝鮮革命の導きの星になってほしいという願いをこめて、主席を一星（ハンビョル）、または金一星（キムイルソン）と呼び、主席を称える不滅の革命頌歌『朝鮮の星』[9]をつくって人民のあいだに広く普及した。

共青と反帝青年同盟を組織し拡大し、学生の範囲を超えて労働者、農民をはじめ各階層の人民のなかに深く入り、いたるところに革命の種を播きつけていった吉林毓文中学校時代は、主席の青年運動において最盛期といえる時期であった。

主席は朝鮮革命の新しい道を独自に開拓しながら、精力的な思想・理論活動をくりひろげ、不滅のチュチェ思想を創始した。

革命の新しい指導思想を創始することは、朝鮮の歴史発展の特殊性と革命の複雑さ、困難さと関連してとくに重要かつ切実な問題となっていた。主席は父、金亨稷の崇高な「志遠」の思想と自力独立の精神、幼少のころから生と闘争における座右の銘としてきた「以民為天（人民を天のごとくみなす）」の思想、愛国、愛族、愛民を思想的・精神的源泉として革命の指導思想を創始するための思索と探求を重ねた。

主席は従来の労働者階級の革命思想と理論、国際共産主義運動の経験を朝鮮革命の実践と結びつけて深く研究する過程で、従来の思想と理論、外国の経験は朝鮮革命が問う諸問題に正解を与えることはできず、革命で提起される諸問題は朝鮮人民の願いと朝鮮の具

体的現実から発して自ら責任をもち、自国の実情に即して独創的に解決していくべきであるという確たる信念をもつようになった。

主席が獄中にあった期間は、チュチェ思想の定立において重要な契機となった。主席が中国の反動警察に逮捕され吉林監獄で鉄窓生活を送ったのは、1929 年の秋から翌年の 5 月初めにかけてであった。獄中での苦汁をなめながらも革命活動を一時も中断しなかった。そして朝鮮の民族解放闘争と共産主義運動の経験と教訓、外国の革命運動の経験を全面的に分析、総括する過程で、チュチェ思想の原点となる革命の真理を発見した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「わたしはわが国の民族主義運動と初期共産主義運動のこうした実態を分析し、革命をそういうやり方で進めてはならないと痛感した。

こうしてわたしは、自国の革命は自らが責任をもち、自国人民の力に依拠して遂行してこそ勝利するのであり、革命で提起されるすべての問題を自主的に、創造的に解決していかなければならないという信念を抱くようになった。これがいまにいうチュチェ思想の出発点となったのである」

先代の運動家の本質的な弱点の一つは、人民大衆の力に頼ろうとせず、それを無視したため人民大衆から遊離していたことであり、いま一つの弱点は派閥争いと事大主義、教条主義がはなはだしかったことだった。主席はこのような本質的弱点を鋭く分析する過程で、革命の主人は人民大衆であり、かれらを教育し立ち上がらせてこそ革命闘争の勝利をおさめることができるのであり、革命は誰かの承認や指示によってではなく、自らが責任をもち、自国人民の力に依

拠して革命で提起されるすべての問題を自国の実情に即して自主的に、創造的に解決していかなければならないという信念を抱くようになった。

主席はチュチェ思想の原点となる真理を発見したのみでなく、主体的な朝鮮革命の路線と闘争方針を確定した。吉林監獄で定立したチュチェ思想の原理を卡倫会議で明らかにし、その後、革命闘争と建設事業を指導しながら革命実践で提起される諸問題に新たな解答を与える過程で、チュチェ思想をたえず深化、発展させていった。

主席は獄中闘争をくりひろげて出獄した後、毓文中学校を中退し、職業革命家の道を踏みだした。吉林を離れ、東満州各県との連係を結ぶのに有利な敦化地方へ行って、革命組織を立て直す一方、四道荒溝で共青および反帝青年同盟中核の会議を開き、獄中で練った主体的な革命路線と戦略戦術について説明した。そしてさらに思索と探求を重ねてそれを完成させた。

主席は 1930 年 6 月 30 日から 7 月 2 日にかけて、卡倫で共青および反帝青年同盟の幹部会議を招集し、朝鮮革命の進路を示した。この会議での報告『朝鮮革命の進路』で、新たな情勢と従来の運動の歴史的教訓を全面的に分析し、チュチェ思想の原理を独創的に提示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「革命闘争の主人は人民大衆であり、人民大衆が立ち上がらなければ革命闘争で勝利することができません」

主席は、革命を勝利に導くためには人民大衆のなかに入ってかれらを立ち上がらせなければならず、革命で提起されるすべての問題を自ら責任をもち、それぞれの実情に応じて自主的に解決すべき

であるとし、朝鮮革命の主人は朝鮮人民であり、朝鮮革命はあくまでも朝鮮人民自身の力で、朝鮮の実情に即して遂行しなければならないという確固たる立場と態度をとるよう強調した。そしてチュチェ思想の原理にもとづき、朝鮮革命の性格と基本任務をつぎのように規定した。

「…朝鮮革命の基本任務は、日本帝国主義を打倒して朝鮮の独立を達成するとともに、封建的諸関係を一掃して民主主義を実現することであります。

朝鮮革命の基本任務から、現段階における朝鮮革命の性格は反帝反封建民主主義革命となるのであります」

歴史上初めて明示された反帝反封建民主主義革命は、ブルジョア民主主義革命や社会主義革命とは本質的に区別される新しい類型の社会革命であり、植民地、半植民地国の人民が自主性を実現するうえで第一義的に遂行すべき革命であった。そして、反帝反封建民主主義革命の原動力は労働者、農民、青年学生、知識人、小市民、それに良心的な民族資本家や宗教家まで包括する広範な反帝勢力であり、革命の対象は日本帝国主義およびかれらと結託した地主、資本家、親日派、民族反逆者であると規定された。

主席は、朝鮮革命を勝利に導くためにはまず、日本帝国主義およびかれらと結託した反動勢力を打倒して民族の解放と独立を達成し、ついで人民大衆の利益を擁護する人民政権を樹立し、反帝反封建民主主義革命を遂行し、さらに革命をつづけて社会主義・共産主義を建設し、ひいては世界革命を遂行すべきであるとした。

主席は、朝鮮革命の基本任務を遂行するための戦略戦術上の諸問題を全面的に明示した。まず、抗日武装闘争路線を提示した。朝

鮮の反日闘争の歴史的な経験と教訓、植民地民族解放闘争の合法則的要求から、大衆の暴力的進出を組織的な武装闘争に発展させるべきであるとし、さしあたり青年共産主義者によって革命的武装組織である朝鮮革命軍を結成し、武装闘争の展開に必要ないろいろな経験を蓄積すべきであると述べた。

ついで反日民族統一戦線路線をうちだした。朝鮮人自身の力で日本帝国主義を打倒して全民族を解放するためには、労働者、農民はもちろん、宗教家、良心的な民族資本家にいたるまで、反日的な思想をもつすべての勢力を反日の旗のもとにかたく結束すべきであるとした。

また、自主的に革命的な党を創立する方針を提示した。朝鮮共産党の解散から深刻な教訓を汲みとり、健全な基盤の上で党を創立する闘争をくりひろげるべきであるとし、必ず自分の力で新しい革命的な党を創立することにし、そのためには何の準備もなしに党中央を宣する方法ではなく、十分な準備のもとに党の基層組織を先につくり、それをたえず拡大、強化する方法で党を創立し、党創立の準備活動を日本帝国主義との闘争と密接に結びつけて進めるべきであると指摘した。

この歴史的な報告はチュチェ思想でつらぬかれている。卡倫会議はチュチェ思想の創始と主体的革命路線を宣言した歴史的な出来事であった。卡倫会議を転機として、朝鮮の反日民族解放闘争と共産主義運動はもっとも科学的で革命的な指導思想であるチュチェ思想と主体的な革命路線によって展開される新しい道に入ることになった。

卡倫会議以後、主席は新しいタイプの党を創立するための活動

に第一義的な力を注いだ。この活動はさまざまな障害と難関を克服する闘争をともなった。当時、共産主義隊伍内に残存していた分派分子は朝鮮共産党の解散後、国内国外で党再建運動を進めながら派閥争いをつづけており、コミンテルンが定めた 1 国 1 党制の原則は朝鮮の共産主義者に満州地方で独自の党を創立することは不可能だと認識させるきらいがあった。

このような実情にあって主席は、党中央を別個に設けて中国共産党と併存するようなことがなければ、1 国 1 党制の原則に反することはないとみなし、既存の世代によってではなく新しい世代の共産主義者が主人となって新しいタイプの党を創立し、党中央を宣する方法ではなく基層党組織を先につくり、それを拡大、強化していく方法で党を創立することにした。

主席は 1930 年 7 月 3 日、卡倫で党組織結成のための会議を開いた。この会議で共青および反帝青年同盟幹部たちの入党を保証し、党組織の結成を厳かに宣言した。この会議での演説『党組織の結成に際して』で、主体的な党組織建設の方針を再度明示し、結成された初の党組織の地位と使命、党組織メンバーの任務を示した。主席は同志を得ることから革命の第一歩を踏みだし、生死をともにする同志をたえず探しだして結束し、革命を深化、発展させ、最終的勝利を達成しようという抱負と意志をこめて、最初の党組織の名称を建設同志社とした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「最初の党組織――建設同志社はわが党の胎児であり種子であり、党の基層組織を結成し、拡大するうえで母体としての意義をもつ組織であった」

最初の党組織の結成によって、青年共産主義者と人民は革命の真の前衛組織を擁し、その統一的指導のもとに党創立準備活動と反日民族解放闘争をさらに強力に推進できるようになった。

最初の党組織の思想的代弁者の役割を果たす出版物として、雑誌『ボルシェビキ』を創刊した。

主席は建設同志社の結成について、武装闘争の準備の手はじめとして、1930 年 7 月 6 日、伊通県孤楡樹で朝鮮革命軍を結成した。朝鮮革命軍結成のための党および共青幹部会議での演説『朝鮮革命軍の使命と基本任務について』で、積極的な政治・軍事活動によって武装闘争の中核を育て、武装闘争に必要な武器を準備し、軍事的経験を積み、広範な人民大衆をかたく結束して、組織的な抗日武装闘争の準備をしっかり整えることが朝鮮革命軍の使命であり基本任務であると指摘した。

朝鮮革命軍は偉大なチュチェ思想を指導思想とする朝鮮共産主義者の初の武装組織であり、抗日武装闘争を準備するための政治・半軍事組織であった。

主席は、朝鮮革命軍をいくつかの隊に編制してその責任者を任命し、隊員に武器を授与した。そして朝鮮革命軍の各グループを長白、撫松など満州と国内の各地に派遣し、広範な大衆を教育して革命組織に結集させる活動、それに日本帝国主義侵略軍と反動警察を掃滅し、密偵と走狗を処刑して武器を手に入れるなどの軍事・政治活動を猛烈に展開させた。同時に、革命組織で鍛えられた優秀な青年を朝鮮革命軍に受け入れ、独立軍内の労働者、農民出身の愛国的青年を教育、改造して革命軍に編入させた。そして孤楡樹の三光学校に高等科を設けて、政治と軍事を兼備した指揮官を系統的に養成

し、短期軍事・政治学習を組織して革命武力の中核を育成した。

主席は武装闘争の大衆的基盤を築く活動に力を注いだ。日に何度となく変装して、敦化、卡倫、吉林、海竜、蛟河、ハルビン、延吉、汪清など、5・30暴動と8・1暴動の後遺症がはなはだしかった満州各地を巡り、破壊された革命組織を再建し、拡大していった。

主席は地下活動の日々、敵の監視がつきまとう危険な状況下で、禍が及ぶことを恐れて信義と友誼さえ捨て去って背を向ける独立運動家の卑劣な行為とは反対に、わが身の危険を顧みずに助けてくれた蛟河の名も知れぬ農村主婦の潔(いさぎよ)い行為から、革命家がつねに頼りとすべきふところは人民であるという革命の哲理を胸深く刻みつけた。

主席はこの時期、ハルビンにあったコミンテルン連絡所や賈家屯、五家子などでコミンテルンの派遣員を通してコミンテルンとの連係もつけた。コミンテルンは卡倫会議で主席が示した主体的な革命路線をはじめ朝鮮革命の生命ともいえる自主性の原則、創造性の原則に全幅の支持を表明した。そしてかれらは主席に大きな期待を寄せ、吉東地区〔10〕の共青責任書記の任務を委任し、モスクワへ行ってコミンテルンの運営する共産大学に入学するよう重ね重ね勧誘した。しかし主席は、われわれの教師は人民大衆であり、人民のなかに入って朝鮮革命の理論と方法を学びたいとし、モスクワへの留学ではなく朝鮮と隣合わせの東満州と北部朝鮮一帯の人民のなかに入り、かれらと苦楽をともにしながら積極的な革命活動を展開した。

主席は1930年の秋、東満州へ出向き、和竜県の大拉子と汪清県の石峴地区で破壊された革命組織を立て直す一方、闘争のなかで鍛えられた共青員と労働者、農民出身の中核をもって各地に基層党組織を新たに設け、豆満(トウマン)江沿岸の各県に革命組織区を設置した。

そして 1930 年 9 月末に国内の穏城（オンソン）地区へ赴き、豆満江沿岸の北部朝鮮一帯を革命の戦略的基地にする方針を示し、10 月 1 日には穏城郡頭婁（トゥル）峰で党組織結成会議を開き、穏城地区革命組織の中核によって党組織を結成した。穏城地区における党組織の出現は、国内に党建設の基礎を構築する突破口となり、国内人民の反日闘争を強力に推進する転機となった。

主席は朝鮮人口の絶対多数を占める農民大衆を労働者階級とともに革命の主力部隊とみなし、農村の革命化に大きな関心を払った。朝鮮革命軍のメンバーを各地の農村に派遣する一方、1930 年 10 月から翌年の初めにかけて懐徳県五家子で活動し、そこを農村革命化のモデルにつくりあげた。五家子は民族主義者が「理想村」の建設をめざしてつくった村里で、中部満州一帯における民族主義勢力の最後の根城であった。

主席はまず村の頑固な有志たちに会い、根気よく解説と感化教育を重ねて、かれらの古い物の考え方を変えさせた後、民族主義の影響下にあった大衆団体を革命的に改編し、青年はもちろん老人や婦女、少年にいたるまですべての人が反帝青年同盟、農民同盟、婦女会、少年探検隊に加入して政治生活をするようにし、地方自治行政機関の村公会を革命的な自治委員会に改編した。そして三星学校の教育内容を革命的に組み替え、無料教育を実施するようはからい、夜学を設けて青壮年と婦女に勉学の機会を与えた。また農民同盟の機関誌として『農友』を発行し、革命歌劇『花を売る乙女』をはじめ文芸作品を創作して公演し、『赤旗の歌』『革命歌』など革命的な歌の普及活動も活発におこなった。こうして大衆を階級的に目覚めさせ、反日闘争へと立ち上がらせた。

主席の巧みな大衆政治活動によって、五家子は革命的な村落に変わった。そしてその経験が一般化されて中部満州の各地域が朝鮮革命軍の強固な活動基地となり、武装闘争の大衆的基盤はさらに拡大された。

このころ主席の偉人としての品格に感服した同志たちと人民は、主席に自分の運命のすべてをゆだねるようになり、やがて朝鮮を導いていくかくも偉大で尊い人がどうして一つの星にのみたとえられようかと、その名をこの世に光と熱、万物に生をもたらす太陽と結びつけて呼ぼうという切なる願いを披瀝した。辺大愚（ピョンデウ）をはじめ旧世代の代弁者といえる五家子の有志や、崔一泉（チェイルチョン）のような青年共産主義者は、民族の運命を救う太陽になってほしいという全同胞の念願と、民族の偉大な指導者としていつまでも仰ぎ従おうという革命的信念と鉄の意志をこめて、主席の名を金日成と呼ぶようになった。

日本帝国主義の満州侵略がさし迫った緊張した情勢と関連して、主席は中部満州地方での革命活動を総括し、武装闘争の準備を急ぐ対策を講じるため、1930 年 12 月、五家子で朝鮮革命軍指揮メンバーおよび革命組織責任者会議を招集した。この会議での演説『新たな情勢の要請に応じて革命運動をさらに拡大、発展させよう』で、主席は卡倫会議以後、主体的革命路線をつらぬく過程での成果と経験を総括し、主要な闘争舞台を東満州に移し、そこで抗日武装闘争を本格的に展開する万端の準備をととのえる課題を示した。

五家子会議は朝鮮革命を武装闘争の段階へと発展させるうえで大きな意義をもつ会議であった。この会議は、青年学生運動と農村での地下活動から武装闘争段階へと移行して、敵に決定的な攻撃をかけようとする主席の決心を再確認し、抗日大戦への早道を示した。

主席は五家子会議後、革命活動の中心地を東満州に移した。東満州は自然地理的に朝鮮と直接つながっているだけでなく、住民の大多数が朝鮮人で占められており、その階級的構成が良好であったため、武装闘争の展開に有利であった。

主席は東満州へ向かうとき、第 1 段階の活動目標として、5 ・30 暴動の後遺症について総括し、広範な大衆を一つの政治勢力に結束する正しい組織路線を提示し、この路線で新しい世代の共産主義者を武装させるという二つの課題を打ち出した。

主席は東満州へ向かう途中、再び反動軍閥に逮捕され、長春監獄に 20 日間ほど拘留されたが、容共人士たちの強い抗議によって釈放された。

東満州に行った主席は 1931 年 3 月、敦化で朝鮮革命軍の隊員と革命組織の中核メンバーの講習会を開き、抗日武装闘争の準備を本格化するための課題と方途、そして基層党組織を統一的に指導し、革命大衆を組織的に結束させるための対策案を示した。この講習会について、安図、延吉、和竜、汪清県の各地域と国内の鍾城（チョンソン）、穏城一帯の革命組織の活動を指導した。

主席は武装闘争の準備をさらに早めるため、革命力量の構築に大きな力を注いだ。

1931 年 5 月、鍾城郡豊谷（プンゴク）面豊渓（プンゲ）洞共樹徳（コンスドク）で政治工作員および地下革命組織責任者会議を開き、武装闘争のための兵員を整え、広範な人民大衆を一つの政治勢力に結集し、豆満江沿岸の山岳地帯を武装闘争の中心地にする課題を示した。共樹徳会議は、抗日武装闘争のための主体的革命力量の構築において重要な転機となった。

主席は間島と国内の豆満江沿岸一帯の実態を十分に把握した後、

1931 年 5 月中旬、延吉県明月溝で、党および共青幹部会議（春の明月溝会議）を招集した。この会議での演説『極左冒険主義路線を排撃し、革命的組織路線を貫徹しよう』で、5・30 暴動の本質、それに失敗の原因、禍と教訓を分析、総括し、革命の基本大衆をしっかり結束し、各階層の反日勢力をかたく団結させて、全民族を一つの政治勢力に結集する革命的組織路線と、それを貫徹するための課題を示した。この革命的組織路線は、抗日武装闘争のための革命力量の準備において朝鮮の共産主義者が堅持すべき指導指針となった。

この会議の後、主席は抗日武装闘争の準備に有利な条件が備わっている安図地区を拠点にして活動しながら、1931 年 6 月中旬、安図県小沙河区党委員会を組織し、各地方に工作員を派遣して基層党組織の結成をはかった。そして共青組織を拡大し、農民協会、反帝同盟、革命互済会、少年探検隊などの反日大衆組織を結成した。

主席は安図一帯での成果と経験にもとづき、同年の夏から初秋にかけて和竜、延吉、汪清一帯に出向いて、5・30 暴動後四散していた大衆を結集し、革命組織を東満州の広い地域へと拡大していった。

主席は革命的組織路線を貫徹する闘争での成果にもとづき、革命大衆を大衆闘争のなかでさらに鍛えるため、間島の各革命組織区で秋収（秋の取り入れ）闘争をおこなう方針を示し、1931 年の秋、東満州各地の農村で一斉にこの闘争を展開するよう導いた。主席の指導のもとに秋収闘争は東満州の 10 余万の農民が参加する大規模かつ組織的な暴力闘争に発展し、日本帝国主義侵略者と反動地主に大きな打撃を与え、広範な反日大衆を実践闘争のなかでいっそう目覚めさせ鍛えた。

日本帝国主義侵略者が 1931 年 9 月 18 日に「満州事変」を起こして満州への武力侵攻を開始すると、主席は 9 月下旬の敦化での党および共青指導中核メンバーの会議と安図の松江地区革命組織責任者会議、そして 10 月の鍾城郡光明（クァンミョン）村での政治工作員と地下革命組織責任者の会議で、組織的な武装闘争の開始がこれ以上引き延ばすことのできない緊急な課題となっていることを告げ、武装闘争の準備を本格化する課題を示した。光明村会議は国内の人民と革命家に送る武装闘争開始の合図であり、シグナルであった。

主席は武装闘争の基本的な形式と方法を選択するための思索と探求に精力を注いだ。『孫子』『三国志』『東国兵鑑』『兵学指南』など種々の兵書を読み、外国のパルチザン名将たちと朝鮮の義兵出身の名将たちの多様な戦法や壬辰祖国戦争（文禄・慶長の役）について研究を深める過程で、数と技術のうえで優勢な強盗日本帝国主義侵略軍と戦って勝利するには変幻自在の遊撃戦を展開すべきであることを確信するようになった。

主席の賢明な指導のもとに、抗日武装闘争のための政治的・軍事的準備が整い、反日民族解放闘争はついに組織的な武装闘争へと発展することになった。

2

1931年12月～1936年2月

金日成主席は日本帝国主義の満州占領によって生じた新たな情勢のもとで、抗日武装闘争を早急に開始する戦略戦術上の方針を示すため、1931 年 12 月 16 日に延吉県明月溝で党および共青幹部会議（冬の明月溝会議）を招集した。

日本帝国主義の満州侵攻がはじまると、中国東北軍[11]が総退却し、軍閥の支配体制は麻痺した。それに日本帝国主義の支配体制はまだ確立にいたらなかったので満州全土は無政府状態に陥り、人民の反日闘争は日増しに高揚し、次第に暴力闘争に発展した。この時期にいたり、組織的な武装闘争展開の諸般の条件と可能性も十分に整った。

主席はさし迫った情勢と武装闘争に有利な局面を科学的に分析したうえで、この時期を抗日武装闘争開始の好機とみなし、会議での演説『日本帝国主義に反対する武装闘争を組織し展開することについて』で、抗日武装闘争を早急に展開する戦略戦術上の方針を示した。

主席はこの演説で、日本帝国主義に反対するすべての愛国勢力を祖国解放をめざす抗日武装闘争に総動員する方針を示し、銃のある人は銃を、金のある人は金を、力のある人は力を出し、全民族が

反日武装闘争に総決起するよう呼びかけた。そして、植民地解放闘争の特性と遊撃戦の優越性を全面的に分析し、それまで正規戦の補助手段としかみなされなかった遊撃戦を武装闘争の基本形式として位置づけた。

遊撃戦は、自己の兵員を保持しながら、敵に大きな政治的・軍事的打撃を加えることができ、少数の兵員をもって数量と技術のうえで優勢な敵を掃滅できるすぐれた武装闘争方法であり、人民の積極的な参加を前提とする人民戦争であった。遊撃戦の方法で武装闘争を展開してこそ、国家的後方と正規軍の支援がなくても、人民大衆の積極的な支持声援と有利な自然地理的条件に依拠して、強盗日本帝国主義を最終的に打倒することができるのであった。

遊撃戦を基本形式として武装闘争を展開するという主席の戦略的方針は、朝鮮革命発展の熟成した要求を反映した、もっとも積極的かつ主動的な方針であり、民族の団結した力で祖国の解放をなし遂げる主体的かつ独創的な方針であった。

主席は、遊撃戦の形式で武装闘争を展開するための課題と方途を全面的に明示した。

まず、常備の革命武力である反日人民遊撃隊を組織すべきであるとした。そのためには地下革命闘争で鍛えられたすぐれた青年共産主義者を根幹とし、革命闘争の実践のなかで鍛えられた先進的な労働者、農民、愛国青年を受け入れて遊撃隊の隊伍をたえず拡大し、遊撃隊にたいする共産主義者の指導を確固と保障すべきであると指摘した。また、武装力の 2 大要素の一つである武装を整えることを武装闘争の成果を左右する重要な要因とみなし、「武装はわれわれの生命だ！　武装には武装で！」というスローガンをかかげ、敵

の武器を奪って自らを武装すると同時に、自分の手で武器をつくることを強調した。

つぎに遊撃根拠地創設の課題を示した。遊撃根拠地を創設してこそ、強大な敵の包囲のなかでも武装部隊の拡大、強化をはかり、長期間の遊撃戦をおこない、敵の無差別的な虐殺蛮行から革命的大衆を守ることができるのであった。そして自己の強固な軍事的根拠地、後方基地、革命の策源地としての遊撃根拠地が切実に必要であった。

主席は、遊撃根拠地の創設に有利な条件が備わっていた豆満(トウマン)江沿岸一帯の山岳地帯と革命化された農村地域に解放地区形態の遊撃根拠地である遊撃区域を創設し、その周辺の農村地域を革命化して、この地域を表向きは敵の統治区域であっても実際においては遊撃区と変わりのない地域にすべきであるとした。

主席はさらに、武装闘争の大衆的基盤を築く課題を示した。遊撃戦は人民の積極的な参加を前提とする人民戦争であるため、遊撃隊が強固な大衆的基盤を築き、人民大衆との血縁的なつながりのもとで戦ってこそ、朝鮮人民自身の力で日本帝国主義を打倒し、最後の勝利を達成することができるのである。

主席は、武装闘争の大衆的基盤を強固に築くためには、広範な人民大衆を各種の革命組織に結集し、かれらにたいする革命的教育を強化し、革命実践を通じて革命勢力を戦闘的に鍛練し育成し、拡大すべきであると強調した。

つぎに、朝中人民の反日統一戦線の結成においてもっとも緊急な課題は中国人反日部隊との連合戦線を実現することであると強調した。

最後に、抗日武装闘争の展開において提起される課題を成功裏に遂行するためには、各地域に党組織をつくり、共青の活動をさらに強め、とくに党組織の前衛的役割を高めるべきであるとした。

この演説は、反日民族解放運動を新たな高い段階に発展させ、革命戦争と革命武力建設に関する労働者階級の革命理論のさらなる発展に大きく寄与した不朽の文献である。

冬の明月溝会議は抗日武装闘争の端緒を開いた。この会議を契機に、「武装には武装で、反革命的暴力には革命的暴力で！」というスローガンのもとに抗日戦争が正式に布告され、朝鮮の反日民族解放運動は新たな高い段階の武装闘争段階に入った。

主席は冬の明月溝会議後、抗日武装闘争の主導的力量となる反日人民遊撃隊を創建する活動を強力に推進した。

1931 年 12 月下旬、明月溝会議の方針を貫徹するため、党および共青の指導的中核、朝鮮革命軍の隊員、政治工作員に講習をおこない、かれらを豆満江沿岸の広い地域に派遣した後、遊撃戦の展開に有利な安図に出向いて、反日人民遊撃隊を創建する活動を統一的に指導した。1932 年 1 月上旬には安図松江一帯の革命組織責任者と半軍事組織責任者の会議を、1 月下旬には安図県小沙河の党および共青指導メンバーの会議を招集し、反日人民遊撃隊を創建する活動を促進した。

主席は武装隊伍の組織に第一義的な関心を払った。朝鮮革命軍と党および共青組織で鍛えられた青年共産主義者を根幹とし、秋収闘争をはじめ革命実践のなかで鍛えられた人たちと赤衛隊、少年先鋒隊、労働者行動隊などの半軍事組織のなかから参軍を志望する愛国青年を選抜して武装隊伍を組織するよう指導した。

主席は 1932 年 3 月、安図県小沙河で、手塩にかけて育ててきた李英培(リヨンベ)、金喆(キムチョル)などの青年共産主義者を中核として、まず小規模の遊撃隊を組織した。

主席は武装隊伍の組織と同時に、武装を整える活動も推進した。父から譲り受けた 2 挺の拳銃は革命武力の武装を整える基礎となった。主席は武器を提供する国家的後方も、銃を買う金もなかった状況のもとで、敵の武器を奪取する闘争をくりひろげる一方、自分の手で各種の武器をつくる運動も強力に推進するよう指導した。

主席は常備の革命武力建設の準備を急ぐ一方、抗日武装闘争の大衆的基盤を築くため、豆満江沿岸一帯の農村地帯を掌握することに深い関心を払った。

主席は、遊撃活動地帯の確保にあたって要地である富爾河村に「作男」を装って潜入し、1 か月半ほど活動し、「反動の巣窟」といわれていたこの村を革命化し、その経験を一般化した。また、1932 年の春、東満州各地の 10 余万の農民大衆を大規模な春慌（春の端境期）闘争へと立ち上がらせ、日本帝国主義者と反動地主に大きな打撃を与え、闘争のなかで小規模遊撃隊と革命組織を鍛え、革命大衆の覚醒を促した。

こうして、反日人民遊撃隊創建のための主体的力量はよりしっかり整った。

主席は中国人反日部隊との連合戦線の実現にも大きな力を傾けた。

当時、反日部隊は日本帝国主義の欺瞞宣伝と民族離間策に乗せられて、朝鮮共産主義者と朝鮮人を頭から敵視し、武装隊伍を訪ねてくる青年を手当たり次第に捕らえて虐殺していた。反日部隊の敵対行為を阻止し、かれらとの連合戦線を実現せずには、遊撃隊を組

織することも、その活動を合法化することもできなかった。

主席は 1932 年 4 月、安図県小沙河で開かれた革命組織責任者の会議で、反日部隊との連合戦線を実現するための積極的な対策を講じ、一身の危険を顧みず、安図の反日部隊の于司令との談判にのぞんだ。そして整然たる論理と大いなる包容力をもってかれを説き伏せて反日共同戦線に引き入れた。そのうえで中国人反日部隊との連合戦線を強固なものにするため別働隊と反日兵士委員会を組織し、反日部隊との活動を強化するよう指導した。このように、主席は反日人民遊撃隊の創建と武装闘争の展開に必要な準備をすべて整えたうえで、1932 年 4 月 25 日、安図県小沙河木条屯土器店谷の台地で、100 余名の青年からなる反日人民遊撃隊の創建を宣言した。

反日人民遊撃隊は車光秀（チャグァンス）、朴勲（パクフン）、金日竜（キムイルリョン）をはじめ、安図地方だけでなく東満州と南満州の各県から抜擢された前衛闘士と、朝鮮から来た先覚者で組織された。そしてその政治・軍事活動は白頭（ペクトウ）山地区と鴨緑（アムノク）江、豆満江沿岸の国境一帯の広い地域でくりひろげることを原則とした。

主席は反日人民遊撃隊の隊長兼政治委員になった。

主席は反日人民遊撃隊の創建式でおこなった『反日人民遊撃隊の創建に際して』と題する演説で、反日人民遊撃隊の性格と使命を明らかにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「反日人民遊撃隊は日本帝国主義者とその手先に反対し、祖国と人民を愛する労働者、農民および愛国青年で組織された、真に人民の利益を守る革命的武力であります。

人民遊撃隊の目的と使命は、朝鮮で日本帝国主義の植民地支配

をくつがえし、朝鮮人民の民族的独立と社会的解放を達成することです」

反日人民遊撃隊は、不滅のチュチェ思想を指導指針とする、真のチュチェ型の革命軍隊であった。また反日人民遊撃隊は、武器を手にとって日本帝国主義者と戦う戦闘隊伍であると同時に、人民大衆を教育し革命闘争へと立ち上がらせる政治的軍隊であり、プロレタリア国際主義的革命軍隊であった。

主席はその演説で、反日人民遊撃隊の力を養い、遊撃根拠地の創設を推進する問題、中国人民との反日統一戦線、とくに反日部隊との連合戦線を結成する問題、人民大衆との血縁的なつながりを強化する問題など、抗日武装闘争を本格的に展開するうえで提起される課題を明示した。

この反日人民遊撃隊の創建によって、自国の真の軍隊をもちたいという朝鮮人民の歴史的宿望がりっぱに実現し、反日民族解放運動は武装闘争を主流として力強く発展することになった。

主席が派遣した指導的中核によって、汪清、延吉、和竜、琿春などの東満州と南満州、北満州でも遊撃部隊が相ついで結成された。

主席は 1932 年 5 月、小沙河で反日人民遊撃隊の指揮メンバー、党および共青幹部の会議を招集し、反日人民遊撃隊を拡大、強化し、遊撃根拠地の創設を推進する課題を示し、南満州遠征の方針をうちだした。

主席は南満州遠征の準備を急ぐかたわら、同年 5 月に、安図県小営子嶺で遊撃隊創建後初の戦闘を指揮した。敵の輜重隊にたいする要撃戦での勝利は、遊撃隊員たちに勝利の信念を抱かせた。

主席は南満州遠征に先立ち、同志たちが求めてくれた 1 斗の粟

を持ってしばし家に立ち寄った。母の病状は最悪の状態であり、家の暮らし向きは見るに耐えないものであった。主席は、自分の病状より祖国と革命を先に思い、革命家が家事にかかずらっていては革命はできないという母の戒めを肝に銘じ、革命の壮途についた。

主席は小沙河会議の方針にしたがって、創建後間もない反日人民遊撃隊の拡大と全般的な抗日武装力量の強化のために南満州遠征（1932 年 6 月初～8 月下旬）を断行した。

6 月初旬、遠征隊を率いて南満州遠征の途につき、安図―撫松県境で日本侵略軍との遭遇戦を展開した。創建されて間もない反日人民遊撃隊が絶妙な遊撃戦で 1 個中隊の敵を全滅させたこの戦闘は、抗日武装闘争史上、初めて無敵を誇る日本帝国主義侵略軍の神話を打ち破った意義の大きい戦闘であった。

通化に到着した主席は、梁世鳳（リャン セ ボン）をはじめ独立軍の指揮官と兵士に朝鮮革命の主体的路線と反日救国の真の道を示し、反日統一戦線への参加を呼びかけ、日本帝国主義とあくまで戦うよう鼓舞激励した。そして三源浦、孤山子、柳河、海竜、濛江、安図にいたる帰還の道々で大衆を革命化し、破壊された革命組織を立て直し、遊撃隊の隊伍を拡大し、武力装備を改善する活動をくりひろげた。

南満州遠征の目的を達成した主席は、1932 年 8 月下旬、成長した反日人民遊撃隊の主力部隊を率いて安図県両江口に帰還した。

主席は 1932 年 9 月の両江口会議で、反日人民遊撃隊創建以後の半年の活動を総括し、反日人民遊撃隊根拠地の汪清地区への移転、反日部隊との連合戦線の強化、東満州一帯の遊撃闘争にたいする正しい指導、革命根拠地創設の推進などに関する方針を提示した。そして北満州遠征を準備する一方、両江口に留まる期間、反日部隊を

引き入れ敦化県城戦闘と額穆県城戦闘をおこなって敵に大きな打撃を与え、反日部隊の士気を高めた。

主席は南満州遠征の期間に母を亡くすという最大の悲しみにあった。両江口にもどった後、1 日で行ける家にも立ち寄れず忙しい日々を送っていた主席は、同志たちの切なる勧めで小沙河に行って、母が他界したという青天の霹靂の如き消息に接した。

母の墓を訪ねた主席はこみあげる悲しみをこらえて母の遺言をかみしめ、寄る辺ない 2 人の弟をある地下組織員に託して小沙河を後にした。その後、部隊を訪ねて入隊をせがむ弟の金哲柱（キムチョルチュ）をなだめて帰らせたが、以後、日本軍との戦闘で弟は戦死し、二度と会うことができなかった。

その年の 10 月、主席は反日人民遊撃隊の主力部隊を率いて両江口を発ち、敦化、額穆、汪清を経て反日部隊の集結している羅子溝に行った。12 月に同地で反日兵士委員会を招集し、救国軍部隊が戦いを放棄して逃走しようとしていることと関連して反日連合戦線を強化する対策を立て、反日部隊の上層に会って反日救国の抗戦に立ち上がるよう呼びかけた。しかし、反日部隊の主力は日本軍が大兵力を投入すると、ついに羅子溝を離れ、ソ連領を経由して中国関内へ行ってしまった。敵の四面包囲にさらされた遊撃隊は、ここでくじけてしまうか、さもなければ立ち上がって戦うかを決するきびしい試練に直面した。主席は自分がくじけてしまえば朝鮮は二度と蘇生できないという自覚と、朝鮮革命にたいする強い責任感を抱き、敢然として立ち上がった。羅子溝台地で馬という姓を名乗る老人の助けで死地を脱した主席は、遊撃隊員の軍事・政治学習をおこなった。やがて南満州と北満州への遠征と軍事・政治学習を通じてたく

ましい闘士に成長した遊撃隊伍を率いて 1933 年 2 月、腰営口を経て小汪清の馬村に行き、そこに革命の司令部を定めて朝鮮革命を勝利の道に導いた。

主席は反日人民遊撃隊の創建後、豆満江沿岸に遊撃根拠地を創設する活動を強力に推進した。そして明月溝会議と小沙河会議で示した方針にしたがって、遊撃根拠地の創設に有利な豆満江沿岸一帯の広い地域に遊撃区、半遊撃区、活動拠点をつくるよう指導した。

主席は、敵の支配体制から脱して遊撃隊が完全に掌握する解放地区形態の根拠地である遊撃区の創設に第一義的な関心を向けた。遊撃区創設の第 1 段階の活動として、間島の各地方に有能な指導中核を派遣し、農村の革命化を推進した。革命化された農村地域は、遊撃区が創設されるまで反日人民遊撃隊の暫定拠点となり、遊撃区創設の土台となった。

主席は反日人民遊撃隊が多くの戦闘をおこなって軍事的に敵を制圧し、遊撃区を創設する地域を確保し、そこに革命大衆を集結させるようにした。

主席の指導のもとに 1932 年 5 月の末、安図県小沙河に初の遊撃区が創設され、これを契機に遊撃区の創設は東満州の各県で急テンポで推進された。

主席の方針にしたがい、朝鮮共産主義者の忍耐強い努力と血みどろのたたかいによって、1932 年の夏から翌年のはじめにいたる期間に、牛腹洞、王隅溝、海蘭溝、石人溝、三道湾、小汪清、[illegible]呀河、漁郎村、大荒溝、煙筒拉子など、豆満江沿岸の広い地域に多くの遊撃区が創設された。

主席は、遊撃区で極左的なソビエト路線を克服し、人民政権建

設の路線を貫徹して人民革命政府を樹立する闘争を導いた。コミンテルンのソビエト路線にしたがってソビエト政権を樹立することは当時、国際共産主義運動において公認されたひとつの思潮となっていた。東満州の各遊撃区でも、左傾日和見主義者と分派・事大主義者はソビエト路線にならって遊撃区と朝鮮の実情に合わない「ソビエト」政府をうち立て、即時社会主義の実現という極左的なスローガンのもとに、私有財産一般の撤廃を宣布し、共同生活、共同労働、共同分配の実施を適用した。極左的なソビエト施策が禍して、遊撃区でははなはだしい動揺と混乱が生じ、多くの人がこれに不満を抱いて遊撃区を離れていった。

南満州と北満州への遠征を終えて帰った主席はこのような実態を知り、1933 年 2 月下旬に汪清県馬村で開かれた党および共青指導中核メンバーの会議をはじめ多くの会議で、ソビエト路線の極左的本質を暴露、批判し、遊撃区に樹立すべき政権は労働者階級の指導する労農同盟にもとづき、広範な反日勢力の統一戦線に依拠する人民革命政府であるべきことを明らかにした。

主席によって史上はじめて提示された人民革命政府路線は、卡倫会議で示された主体的な人民政権建設路線を遊撃区の実情に即して具体化したものであり、朝鮮革命の原動力の構成がかつてなく拡大された新たな歴史的環境に応じて革命政権建設のもっとも正しい道を示した独創的な政権建設路線であった。

主席はソビエト路線を主張する人たちに会い、理路整然とした論理で説得し、遊撃区の党組織で人民革命政府路線を貫徹するための討議をおこなうようにし、自ら各遊撃区に出向いて人民革命政府の優越性を説明した。

主席は 1933 年 3 月に[illegible]呀河遊撃区の泗水坪で、モデルケースとして汪清第 5 区人民革命政府を樹立する集会を開き、その場でおこなった演説『人民革命政府は真の人民の政権である』で、各遊撃区に人民革命政府を早急に樹立し強化する方途と、人民革命政府が実施すべき諸般の施策を明らかにした。

主席は 1933 年 4 月、小汪清馬村と十里坪でのコミンテルン派遣員との談話で、極左的なソビエト路線の不当性を指摘し、主体的な人民革命政府路線の正当性について説明した。そして、国際共産主義運動において提起される問題、朝鮮共産主義者と中国共産党との関係に関する問題、朝鮮における党建設の問題など、朝鮮革命の当面の問題と展望問題について原則的立場を明らかにした。コミンテルンの派遣員は、朝鮮革命に関する主体的な路線と立場に全面的な支持を表明した。

この年の夏、路線転換の問題を討議する重要な会議が開かれた。この会議で主席は人民革命政府路線を示し、人民革命政府の施政方針をあらためて明らかにした。これにもとづき会議では、各遊撃区でソビエトを人民革命政府に改編し、ソビエト路線の極左的偏向を正す闘争を展開するという決定が採択された。[illegible]呀河での人民革命政府の樹立と路線転換に関する会議を契機に、1933 年の夏までに東満州各県の革命組織区には区人民革命政府が、各村には村人民革命政府が樹立された。これらの人民革命政府は、労働者、農民、兵士はもちろん、青年学生、知識人、良心的な資本家、宗教家など広範な反日勢力を網羅し、かれらの利益を代表するもっとも人民的で民主的な政権であった。人民革命政府は朝鮮革命の性格に適合した政権であり、国の解放後に朝鮮に樹立されるべき人民政権のひな形

となった。

主席は、人民革命政府が遊撃区の人民に真の政治的自由と民主的権利を保障し、親日派地主、買弁資本家、民族反逆者に徹底した独裁を実施する一方、社会・経済・文化分野において諸般の民主的改革と施策を実施するよう指導した。遊撃区で日本帝国主義者と親日派地主、民族反逆者の土地を没収して農民に無償で分与し、産業分野で日本帝国主義者と買弁資本家の財産を一切没収する一方、良心的な民族資本家の企業を奨励し、8 時間労働制と最低賃金制を実施して人民に安定した生活を保障するようはからった。そして、女性には男性と同等の権利を与え、児童団学校で無料教育を実施し、遊撃区病院ですべての住民に無料治療をほどこす措置を講じた。

その結果、各遊撃区には新しい社会・経済関係と革命的秩序が確立され、遊撃区の人民は植民地的・封建的搾取と抑圧から脱し、政治的権利と自由を保障され、自由で幸せな生活を思う存分享受できるようになった。

主席は遊撃区の創設とあわせて、遊撃区の周辺に半遊撃区を創設する活動を強力に推進した。半遊撃区は形式上は敵の統治地域であるが、実際には遊撃隊と革命組織が掌握して指導する地域であった。

主席は遊撃区の創設にのみ固執する左傾日和見主義者と分派・事大主義者との闘争をくりひろげる一方、1933 年の春から半遊撃区の創設を積極的に推進した。数多くの政治工作員を遊撃区周辺の広い地域に派遣して革命組織を設け、大衆を革命化し、敵統治機関の末端単位を掌握し、遊撃隊と革命組織の活動をバックアップするようにした。また、遊撃区のうち、防御に不利な一部の地域を半遊撃区に切り換えた。こうして羅子溝、転角楼、涼水泉子をはじめ汪

清、延吉、琿春、安図、和竜地区の広い地域と、国内の穏城、会寧などの六邑地区に半遊撃区がつくられた。半遊撃区は遊撃区の軍隊と人民、人民政権と民主的施策を保護する強固な衛星地区となった。

主席は敵統治区域の主要都市と軍事要衝、鉄道沿線地帯に、地下革命組織と連絡所からなる機動的で暫定的な性格をおびる遊撃根拠地の一形態として、遊撃活動拠点を多くつくった。遊撃活動拠点は遊撃隊の目となり耳となり、軍事・政治活動の遂行に積極的に寄与した。

豆満江沿岸の広い地域に遊撃根拠地が創設された結果、朝鮮革命の策源地、反日人民遊撃隊の軍事戦略的基地、後方基地が強固に築かれ、抗日武装闘争を中心とする全般的朝鮮革命をさらに力強く前進させることができるようになった。

主席は豆満江沿岸に遊撃根拠地を創設し強固にする一方、武装闘争を国内へ拡大することに大きな関心を向けた。主席は抗日武装闘争の当初から、武装闘争の国内への拡大を朝鮮革命の主体性を固守する根本的要求とし、戦略的課題としてきた。

主席は反日人民遊撃隊の国内進出を阻もうとする極左排外主義者と分派・事大主義者の妨害策動をはねのけ、1933 年 3 月に遊撃隊の一部隊を率いて穏城地区に進出した。そして王在山で穏城地区地下革命組織の責任者・政治工作員会議を招集し、『武装闘争を国内へ拡大するために』と題する演説で抗日武装闘争を国内へ拡大する方針を示した。

主席は武装闘争を国内へ拡大するためには、すでに創設された豆満江沿岸の遊撃根拠地とつながる国内の広い地域に半遊撃区をよ

り多くつくり、それを強固にし、反日闘争において全民族を一つの政治勢力として結集しなければならないと強調した。また、武装闘争を国内へ拡大する活動とあわせて、これに大衆闘争を密接に結びつけるべきだとし、さまざまな形の反日闘争を展開し、遊撃隊と遊撃区の人民にたいする援護活動を積極的におこなうべきであると指摘した。そしてこの困難かつ複雑な革命任務を成功裏に遂行するためには革命の参謀部である党がなければならないとし、党創立の組織的・思想的準備を着実に整えていくべきであると強調した。

主席が自ら遊撃隊を率いて断行した穏城地区進出、それに王在山会議は、抗日武装闘争を国内へ拡大する序幕となり、民族解放闘争の発展においていま一つの新たな里程標を立てる歴史的な契機となった。

1933 年 3 月下旬と 5 月下旬に慶源（キョンウォン）（現在のセッピョル）郡の柳多（リュダ）島と鍾城（チョンソン）郡の新興（シンフン）村に進出して、地下革命組織の責任者と政治工作員の会議を開き、王在山会議の方針を貫徹する具体的な対策を講じた。

主席が示した方針にしたがって、反日人民遊撃隊の国内進出が積極化され、数多くの政治工作員が人民のあいだで組織・政治活動を活発にくりひろげた結果、反日人民遊撃隊と遊撃区にたいする国内からの支援がさらに強化され、日本帝国主義の植民地支配に反対するさまざまな形の大衆闘争が力強く展開された。

主席は日増しに激化する遊撃区域にたいする敵の「討伐」攻勢を成功裏に粉砕し、武装闘争を発展させるため、反日人民遊撃隊を大部隊の革命武力に急速に拡大する措置を講じた。遊撃区内の半軍事組織と革命組織を通じて鍛えられた中核と、実践のなかで点検ず

みの敵統治区域の青年を遊撃隊に大々的に受け入れて隊伍を拡大し、遊撃隊を政治的、軍事的にさらに強化した。

1933 年 4 月と 11 月に遊撃隊活動の諸原則と方法を簡明に規範化した『遊撃隊動作』と『遊撃隊常識』を発表した。これは革命武力の建設と主体的戦法の確立、発展のための原典となり、また遊撃隊の全般的軍事活動の指導指針となり、戦術的教範となった。

主席は、抗日遊撃隊内に整然とした命令・指揮体系、それに鉄の規律と秩序を確立するため、極端な軍事民主主義を克服するよう指導した。

抗日武装闘争の初期にあらわれた極端な軍事民主主義は、等級を無視し、部隊の指揮と管理において個々の軍人が上下の別なく同等の権限を行使し、軍事行動のすべての面で過度の平均主義を主張する極左的な思想傾向であり、遊撃隊の軍事作戦に重大な結果をもたらしていた。

主席は汪清県十里坪で開かれた東満州遊撃隊指揮官・政治委員の会議で、極端な軍事民主主義の弊害を分析、批判し、部隊の指揮において基本となるのは指揮官の決心であり、厳格な中央集権的規律と秩序であり、部隊の指揮、管理方法は政治活動を優先させることであると指摘した。そして、上下の区別を明確にし、上部の命令を確実に実行し、民主主義にもとづく個人責任制の原則によって部隊を指揮、管理することを強調した。

主席の教示を得て遊撃隊の指揮官と隊員は覚醒し、相つぐ戦闘の試練のなかで極端な軍事民主主義は完全に克服された。

主席は反日人民遊撃隊の指揮体系を確立するため、東満州各県における遊撃隊の中隊の急速な拡大にともない、1933 年の初めに

中隊を総轄する大隊を編制し、大隊の増加にともない同年の末には各県別に連隊を編制した。

各県の遊撃部隊が連隊以上の規模に拡大され、軍事活動地域と闘争範囲が広まった新たな現実は、これに応じて県別に活動している各遊撃部隊にたいする統一的な指揮を円滑に実現する指揮体系の確立を切実に求めていた。

主席は新たな軍事・政治情勢と反日人民遊撃隊自体の発展の要求を深く洞察し、1934 年 3 月に汪清県馬村で開かれた反日人民遊撃隊軍事・政治幹部会議で、反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編する歴史的な措置を講じた。この改編において、朝鮮人民革命軍内に 3 ・ 3 制によって師団と連隊、中隊、小隊、分隊を体系的に設けて正規の武力体系に編制した。これは単なる名称の変更や実務的な再編ではなく、武装隊伍の軍事組織体系を改善し、隊伍を質的、量的に強化するものであり、軍建設における新たな段階への発展を意味した。

主席は中国人反日部隊との連合戦線を全面的に実現するため積極的に活動した。

日本帝国主義の悪辣な民族離間策と排外主義者および分派・事大主義者の反革命的策動のため、反日部隊上層部が再び朝鮮共産主義者を敵視する重大な事態が生じた。これに関連し、1933 年 5 月に小汪清遊撃区馬村で豆満江沿岸の革命組織責任者と遊撃隊指揮幹部の会議を招集し、反日部隊との関係を改善する積極的な対策を立てた。そして 6 月には、一身の危険を顧みず、羅子溝の救国軍[12]前方司令呉義成と面談して反日連合戦線に引き入れるとともに、遊撃隊と反日部隊の代表を網羅する常設機構として反日部隊連合弁事処

を設け、その活動を強化した。

主席は 1933 年 9 月の東寧県城戦闘をはじめ、反日部隊をたびたび共同の戦闘に参加させて反日連合戦線を強化した。

主席は全民武装化と根拠地要塞化を実現して、遊撃区に全人民的防衛体制を確立した。主席は、遊撃区の青壮年と少年による反日自衛隊、青年義勇軍、少年先鋒隊といった半軍事組織を設け、その軍事訓練を強化する一方、自力更生の革命精神を強く発揮し、自らの力で武器をつくるよう指導した。一部の人は遊撃区に手榴弾工場を一つ建ててくれるようソ連に要請した。ところが、かれらはこの要請にたいしてなんらの回答もよこさなかった。自力更生以外に方法はないと、主席が強く決心したのはその時であった。主席は決心しさえすればできないことはないといって、自力更生の革命精神を強く発揮して各遊撃区で自らの力で兵器廠を設け、鍛冶場の鉄工具で拳銃、小銃、弾薬、火薬をつくり、延吉爆弾や木砲も製作するよう導いた。また遊撃区の随所にさまざまな防御構築物を設け、非常動員体制と待避対策を手ぬかりなく立て、全人民的監視・警戒体制を確立した。遊撃区に確立された全人民的防衛体制は、いかなる敵の武力侵攻をも自らの力で十分防げる、もっとも強力な防衛体制であった。

主席は遊撃区に確立された強固な全人民的防衛体制に依拠して、遊撃区防衛の闘争を勝利に導いた。

日本帝国主義侵略者は遊撃区が創設されると、それを発生期に崩壊させようと企み、経済封鎖とともに全面的な「焦土化作戦」を強行し、いたるところで無差別的な殺人、放火、略奪行為を働いた。1933 年の春、かれらは朝鮮革命の司令部が位置する小汪清遊撃区

に、火砲と航空機の援護のもとに、1，500 名を上回る大兵力を投入して春期「討伐」を強行した。

主席は主導権を握り、堅固な防御陣地に依拠して絶妙な誘引要撃戦と猛烈な襲撃戦を展開して敵に痛打を与えた。遊撃隊と遊撃区の人民は、老若男女をとわずこぞって立ち上がり、無比の犠牲的精神と不屈の闘争精神を発揮し、果敢に戦って度重なる敵の攻撃を退け、小汪清遊撃区を死守した。小汪清防御戦の勝利に大いに励まされた延吉、和竜、琿春一帯の防衛者たちも、集団的英雄主義を発揮して遊撃区をりっぱに守りとおした。

主席は、日本帝国主義者が 1933 年の秋から 5，000 余の「精鋭兵力」と航空隊まで繰り出して再び遊撃区にたいする「討伐」を開始すると、遊撃区防御戦と敵背撹乱作戦を組み合わせる戦略戦術的方針を示し、全民を遊撃区防衛に立ち上がらせる一方、自ら遊撃隊の一隊を率いて敵後方の涼水泉子、新南溝、北鳳梧洞、寺洞東谷、大肚川などにたいする襲撃戦を敢行した。遊撃区にたいする「討伐」作戦で惨敗を喫したうえに、後方が矢つぎ早に打撃を受けると、狼狽した敵は遊撃区にたいする包囲網を解いて、本拠へ引き下がらざるをえなかった。

最終掃討作戦だと豪語した冬期「討伐」で惨敗を喫した日本軍は、1934 年の春から「歩歩占領の堡塁戦術」と集団部落の設置、保甲制度による政治的・経済的封鎖を組み合わせた新「討伐」計画である囲攻作戦を強行した。

主席は敵の囲攻作戦を撃破するため、1934 年 3 月中旬、革命の司令部を腰営口遊撃区に移し、朝鮮人民革命軍の春期攻勢を主動的に展開して、敵の囲攻作戦を出ばなから粉砕した。

主席は 1934 年 6 月、汪清県大荒崴で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、春期攻勢についで夏期攻勢に移行する方針を示し、羅子溝戦闘をはじめ多くの戦闘をつぎつぎと敢行して、敵の囲攻作戦に致命的な打撃を与えた。ついで敵の新たな「長期特別治安工作」に対処して 1934 年 8 月、腰営口遊撃区で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を招集し、日本軍の囲攻作戦を最終的に撃破する敵背撹乱作戦を猛烈に展開することにした。

主席は遊撃区を堅守し、それに依拠して抗日武装闘争の拡大発展をはかる一方、党組織建設を強力に推進した。

主席は基層党組織をつくり、それをたえず拡大すると同時に党組織指導体系の整備、強化に大きな力を注いだ。まず、抗日武装闘争の主導的力量である反日人民遊撃隊内に各級党組織をつくり、統一的な党組織指導体系を確立した。中隊には党細胞を、小隊には党分組をつくり、遊撃隊が成長して大隊が生まれるにともない大隊党委員会を、大隊が連隊編制に改編されるにともない連隊党委員会を組織した。

こうして地域的単位でのみおこなわれていた党組織建設活動がより幅広く進められ、党創立の組織的・思想的基礎を築く活動は遊撃隊を基本にして展開されるようになった。

主席は各遊撃区で党員の審査と再登録をおこなう一方、確認ずみの革命組織のメンバーを党組織に受け入れ、集落単位に党細胞を、その下に党分組をつくり、革命組織区党委員会を整備もしくは新設した。そして県党委員会を敵の統治区域から遊撃区に移し、遊撃区の党組織と敵統治区域の党組織にたいする指導を同時にできるよう、県党委員会の機構を改編した。

主席はとくに、国内に党組織を拡大し、その組織指導体系を確立することに深い関心を払い、北部朝鮮一帯に数多くの党組織をつくり、1934 年 2 月には地域的な党指導機関である穏城地区党委員会を組織した。穏城地区党委員会の結成は、穏城地区はもちろん、国内各地に党組織を急速に拡大するための組織的拠点をつくる重要な契機となった。

党組織建設活動が強力に推進されるにともない、統一的党指導機関を設けることが切実な要求として提起された。主席は反日人民遊撃隊を朝鮮人民革命軍に改編すると同時に、統一的党指導機関として朝鮮人民革命軍党委員会を結成する方針を示した。

この方針は、革命の司令部が軍隊内にあり、一地域に固定せずたえず流動しながら革命運動全般を指導しなければならなかった状況のもとで、遊撃隊と地方党組織にたいする統一的な指導と、朝鮮革命全般にたいする党の指導をりっぱに実現する革命的な方針であった。

主席は、1934 年 5 月 31 日に大荒崴で朝鮮人民革命軍党代表会議を招集し、朝鮮人民革命軍党委員会の結成を宣した。

朝鮮人民革命軍党委員会は、主席の革命思想、チュチェ思想を確固たる指導思想とし、その実現をめざしてたたかう朝鮮共産主義者の強力な党指導機関であり、部隊内の各級党組織はもちろんのこと、地方党組織まですべて掌握し指導する統一的党指導機関、最高指導機関であった。主席の指導のもとに朝鮮人民革命軍党委員会が結成され、その指導的役割が高まった結果、抗日武装闘争と党創立準備活動、大衆団体建設、統一戦線運動はより強力に推進され、全般的な反日民族解放闘争をいちだんと発展させることができるよう

になった。

主席は武装闘争の烈火のなかで党創立の組織的根幹を多数育成すると同時に、とくに分派・事大主義を排し、革命隊伍の思想、意志の統一と純潔を保つことに大きな力を注いだ。主席は遊撃隊員と党および革命組織のメンバーを反分派闘争に立ち上がらせるため、1933 年 5 月、『セクト主義を一掃し、革命隊伍の統一と団結を強化しよう』と題する論文を発表した。論文では、セクト主義の思想的根源とその罪業、手口を暴露し、セクト主義を一掃し、革命隊伍の統一と団結を強化する課題を全面的に明示した。この論文は、セクト主義を組織的、思想的に克服し、革命隊伍の統一と団結を強化するために共産主義者が堅持すべき綱領的な指針となった。党組織と革命組織でセクト主義を克服する闘争が強力にくりひろげられた結果、分派分子は大衆から孤立し、主席を中心とする革命隊伍の思想・意志の団結と行動上の統一が保たれるようになった。

主席は党組織建設の活動とともに、大衆組織を拡大、強化する活動を強力に推進した。

まず、共青の活動に第一義的な関心を向けた。

主席は 1933 年 3 月に汪清で開かれた共青活動家会議での演説『共青活動を改善するためのいくつかの課題について』で、遊撃区の共青活動にあらわれた極左関門主義と右傾的偏向を指摘し、共青活動を改善するための課題を明示した。

主席は共青活動家の活動方法と作風を改善し、共青活動が青年大衆のなかに深く食い入るようにして、共青を組織的、思想的に強化し、その役割をさらに高め、青年が遊撃区の当面の政治的・経済的・軍事的課題遂行の先頭に立つようにした。

また、敵統治区域の青年との活動にも深い関心を払い、共青の幹部を東満州と国内をはじめ広範な地域に派遣し、青年を実際の闘争のなかで鍛え、組織に受け入れて前衛闘士に育てるよう指導した。

主席は児童団を党および共青とともに「3 代同盟」の一つとして位置づけ、1933 年 6 月に汪清県小北溝で児童団責任者と交わした談話『児童団員を革命の後続隊としてしっかり育てよう』で、児童団員を真の共産主義的革命家、朝鮮革命の頼もしい後続隊に育てるべきであるとした。そして、児童団員の学習と生活を肉親の情をもって気づかった。

主席は数多くの政治工作員を各地に派遣し、労働組合、農民協会、婦女会の組織を広い地域に拡大し、反日会、反帝同盟、革命互済会などの統一戦線的な大衆団体を設け、これに日本帝国主義に反対するすべての人を結集した。

その結果、大衆団体が拡大され、各階層の広範な大衆がかたく結集することにより、革命の主体的力量が強化され、武装闘争の大衆的基盤が確固と築かれるようになった。

主席は東満州遊撃区の「討伐」に集中した敵を分散、弱体化させるため、また北満州の共産主義者の要請を受けてかれらの闘争を援助するため、第 1 次北満州遠征を断行した。1934 年 10 月下旬、遠征隊を率いた主席は吹雪をついて険しい老爺嶺を越え北満州に進出し、中国共産主義者の抗日武装部隊の指揮官である周保中に会った。この対面を起点にして、朝鮮人民革命軍は中国共産主義者の率いる遊撃部隊との全面的な共同闘争を始めることになった。

北満州の行く先々で猛烈な軍事活動を展開して寧安駐屯の日本軍主力と靖安軍部隊を壊滅状態に陥れる一方、反日部隊との関係を

敵対関係から同盟関係に変えることにより、寧安遊撃隊の合法的活動を保障し、その隊伍の拡大、強化を促した。

主席は朝鮮人民革命軍ハーモニカ重奏団の公演を催し、日本帝国主義者の卑劣な反共宣伝と初期共産主義者の派閥争いのため反共思想に深く染まっていた寧安住民の心を強くゆさぶった後、多様な形式と方法で政治活動を活発におこない、村々を革命化した。こうして革命の不毛の地とされていた北満州では党の隊伍が拡大し、共青と婦女会、児童団などの革命組織が急速に拡大するようになった。

主席は遠征隊の軍事的・政治的任務を遂行し、1935 年 1 月下旬に帰路についた。

遠征隊を率いて日に数回もの戦闘を重ね、天橋嶺の吹雪をついての行軍のさなか、主席は傷寒に冒されて瀕死の状態に陥った。40 度の高熱にさいなまれながらも不屈の意志で革命歌謡『反日戦歌』をつくり、疲労困憊した隊員を励ました。韓興権(ハンフングォン)中隊長をはじめ遊撃隊員と天橋嶺伐採場の金(キム)老人、大[illegible]子山中の趙宅周(チョテクジュ)老一家などの人たちは敵の四面包囲のなかで主席の身辺の安全を守り、健康回復のためにまごころの限りを尽くした。

主席は反「民生団」闘争[13]の極左的な偏向を克服し、朝鮮革命の主体性と民族性を固守するための原則的なたたかいをくりひろげた。

朝鮮革命の運命を一身に担った主席は、反「民生団」闘争が極左的にくりひろげられていた当初から、この闘争で堅持すべき原則と方途を明示し、断固としてそれを貫いてきた。反「民生団」闘争は、あくまで革命隊伍の統一と団結を強化し、反日的要素のある人々をすべて結集し、革命勢力を最大限に拡大するという原則で進め、「民生団」容疑者を十分な根拠と確実な資料にもとづいて慎重

に処理し、ごく少数の悪質な「民生団」分子は裁くが、自覚不足で「民生団」に引きずり込まれた人たちは教育して革命の側に立たせるべきであるとした。また、この闘争を実践闘争とともに、反分派闘争と密接に結びつけておこなうよう指導した。

主席は重ね重ね「民生団」事件の真相を明かし、誤って処理された件を正し、いわれもなく「民生団」のレッテルを貼られてあらゆる迫害に苦しめられてきた多くの人々を救った。

主席の原則的な闘争によって、排外主義者と分派・事大主義者の極左的な分裂主義的策動は大きな打撃を受けたが、主席が北満州遠征の途につくと、かれらは反「民生団」闘争をいっそう極左的にくりひろげた。数多くの人が「反革命分子」「敵の手先」という濡れ衣を着せられて殺害され、遊撃区は再び不安と殺伐とした恐怖の雰囲気に包まれた。

第 1 次北満州遠征から帰還した主席は、病後の養生もできないまま 1935 年 2 月 24 日から 3 月 3 日までの期間、大荒崴で開かれた党および共青幹部会議に参加し、反「民生団」闘争を極左的にくりひろげている極左排外主義者と単身で立ち向かい敢然としてたたかった。

主席は会議での演説『朝鮮革命のためにたたかうのは朝鮮共産主義者の自主的権利である』で、何の根拠もなく東満州にいる朝鮮人の 70％、朝鮮人革命家の 80％ないし 90％は「民生団」かその容疑者であり、遊撃区は「民生団」の養成所だとする極左排外主義者の途方もない詭弁を科学的な資料にもとづいて思想的、理論的に論駁した。

主席は、いかなる物質であれ、本来の構成要素とは異なる要素

が 80%以上を占めるようになれば、すでにその物質は他の物質に変わっていることがあまりにも自明の理であるとし、反「民生団」闘争を偏狭な排外主義的目的と不純な分派的野望の達成に悪用するかれらの罪業を厳しく断罪した。そして、朝鮮人は少数民族であり、朝鮮人革命家は分派的習癖と動揺が多く、反動化しやすいので幹部にはなれないという民族排外主義的で非科学的な主張を糾弾し、革命にたいする忠実さと能力を基本にして幹部を抜擢する原則を堅持すべきであると強調した。また、中国の領土で活動している朝鮮共産主義者は民族解放のスローガンをかかげてはならないとして、朝鮮共産主義者に自国の革命から手を引かせようとする主張の不当性を暴露し、朝鮮革命にたいする主体的立場を断固と固守した。

中国の共産主義者をはじめ会議の参加者たちは、主席の原則的で理路整然とした主張に支持と共感を示した。

大荒崴会議での論争は、主席が自主の旗を高くかかげて朝鮮革命の主体的路線を堅持し、擁護するために展開した一大思想戦であった。この会議を契機に、数多くの人が「民生団」の汚名をすすぎ、「民生団」扱いにされて犠牲になった人々も政治的生命を取り戻すことになった。また隊伍内につくりだされた反目と不信、恐怖の雰囲気が解消され、革命隊伍の団結がなし遂げられるようになった。

大荒崴会議を分岐点として、朝鮮人民は金日成主席を民族の太陽として、不世出の愛国者としてさらに高く仰ぎ慕うようになった。

主席は大荒崴会議につぐ腰営口会議で、反「民生団」闘争での極左的偏向を重ねて暴露、批判し、それを是正する具体的な方途を示した。

主席は大荒崴会議と腰営口会議における論点で核心をなすいく

つかの重要な問題をコミンテルンに提訴することにした。

大荒崴会議と腰営口会議を契機に、反「民生団」闘争の極左的偏向を克服するための主席の原則的で献身的な闘争によって、朝鮮革命は危機から脱し、朝鮮の反日民族解放闘争はより力強く前進するようになった。

主席は反「民生団」闘争の極左的な弊害を一掃する闘争をくりひろげる一方、日本軍の囲攻作戦を完全に破綻させるため、1935 年 3 月に汪清県天橋嶺戦闘と塘水河子戦闘など、数々の戦闘をおこない、敵軍切り崩し工作を活発に展開して敵軍の内部を混乱させ、戦闘力を著しく弱体化させた。こうして日本軍の囲攻作戦は最終的に粉砕された。

主席は遊撃区を発展的に解散し武装闘争を広大な地帯に拡大する闘争を指導した。

1935 年になって、豆満江沿岸に創設された遊撃区の基本的使命と任務であった革命勢力の保存、育成、および武装闘争拡大のための政治的・軍事的・物質的土台の構築問題は成功裏に解決された。一方、この時期に日本帝国主義は数万の精鋭兵力を動員して遊撃区を幾重にも包囲し、遊撃区の軍隊と人民を孤立、圧殺する「討伐」作戦と飢餓作戦、封鎖作戦をいっそう悪辣に強行した。このような状況のもとで、固定した遊撃区の防衛にのみ没頭するならば、戦闘で守勢に立たされ、多年にわたって育成した革命勢力を保持することもできなかった。そのため、1935 年 3 月下旬の腰営口会議で、新たな情勢と革命任務に即して遊撃区を解散し、広大な地域に進出する戦略的方針を示した。この方針は抗日武装闘争を新たな段階へと発展させる革命的な方針であった。腰営口会議は朝鮮人民革命軍

が豆満江沿岸に創設された解放地区形態の遊撃根拠地を死守する戦略的防御から戦略的攻撃の新たな段階へ移行する転機となった。

主席は敵の軍事的封鎖と思想攻勢を粉砕する一方、遊撃隊と人民のあいだで遊撃区の解散と関連した組織・政治活動を活発に進め、人民の移動に必要な対策も手落ちなく立てた。こうして遊撃区解散の作業は、1935 年 5 月からはじまってその年の 11 月初、車廠子遊撃区の解散を最後に成功裏に完了した。

主席は遊撃区解散後、朝鮮人民革命軍部隊を北部朝鮮一帯と南満州および北満州の広大な地域に進出させた。

第 2 次北満州遠征に先立ち、1935 年 6 月中旬に老黒山戦闘と太平溝戦闘をおこなって朝鮮人民革命軍の威力を誇示し、遠征の準備を十分に整えた。

主席は 6 月下旬、汪清県太平溝で朝鮮人民革命軍北満州遠征部隊の指揮メンバーおよび隊員におこなった演説『革命の種子を広大な地域に積極的にまきつけていこう』で、北満州の人民に革命的影響を与え、北満州一帯の抗日武装部隊を積極的に援助して武装闘争を果敢に展開する課題を示した。

遠征隊を率いて太平溝を出発し、老爺嶺を越えて北満州に進出した主席は、1935 年 6 月下旬から翌年 2 月までの期間に、寧安県と額穆県など北満州の広大な地域を移動しながら、多様な戦法と戦術で多くの戦闘をおこない、敵に連続痛打を加えた。

主席は北満州の人民のなかに入り、オルガンを弾き、中国民謡『蘇武歌』をうたうなど多様な方法で政治活動を活発に進め、かれらを反日闘争に立ち上がらせた。

この時期、主席はコミンテルンの委任によって、抗日連軍第 2

軍と第 5 軍の合同指揮部の政治委員兼葦河部隊の司令官として活動し、朝中人民の反日共同闘争の発展に大きく貢献した。第 1 次北満州遠征を通じて端緒を開いた中国共産主義者との戦闘的同盟は、第 2 次北満州遠征を機にさらに強固なものとなった。

主席が腰営口会議で示した方針にしたがって広大な地帯に進出した朝鮮人民革命軍の他の部隊も、いたるところで軍事・政治活動を猛烈に展開し、敵に痛打を加えた。

主席が朝鮮人民革命軍を広大な地帯に進出させ、軍事・政治活動を積極化させることによって、抗日武装闘争を中心とする反日民族解放闘争を新たな段階に発展させる画期的な局面が開かれるようになった。

3

1936年2月～1940年8月

金日成主席は1930年代の後半期、抗日武装闘争を中心とする反日民族解放闘争を全国的規模で大高揚へと引き上げる闘争を指導した。

主席の指導のもとに、1930年代前半期の苦難にみちた闘争を通じて数多くの共産主義者が育成され、朝鮮人民革命軍は政治的、思想的に鍛えられ、豊富な戦闘経験を積んだ強力な武力に成長した。また、分派・事大主義と極左排外主義者との闘争を通じて革命隊伍の統一団結が実現し、武装闘争と党創立の大衆的基盤が強化され、中国人民との反日共同戦線がうちかためられた。国内国外の情勢も朝鮮人民の反日闘争に有利に進展していた。

主席は革命の主・客観的条件を科学的に分析し、反日民族解放闘争を主体的立場で新たな高い段階へと発展させる戦略戦術的方針を示すため、1936年2月27日から3月3日にかけて、寧安県南湖頭で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開いた。

会議では、朝鮮の共産主義者が朝鮮革命を責任をもって遂行することは絶対に譲歩できない神聖な権利であるということ、反「民生団」闘争での極左的誤謬にたいする主席の立場が正当であることをコミンテルンが認め、支持したということが伝達された。

主席はこの会議での報告『反日民族解放闘争を強化発展させるための共産主義者の任務』で、朝鮮共産主義者に提起される戦略的課題を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「こうした有利な情勢のもとで、朝鮮共産主義者に提起される重要な課題は、朝鮮人民の革命勢力を強化し、すべての力を動員して反日民族解放闘争をさらに発展させることであります」

主席は新たな戦略的課題を成功裏に遂行するための方針を示した。

まず、朝鮮革命の中枢的力量である朝鮮人民革命軍の主力部隊を国境地帯に進出させ、闘争舞台を漸次国内に拡大する方針を示した。これは、朝鮮革命の主体的力量を強化し、すべての力を動員して朝鮮人民自らの力で日本帝国主義を撃滅するためのもっとも正しい闘争方針であった。

主席は、朝鮮人民革命軍が国境地帯と国内に進出して反日闘争を展開するためには、有利な条件が整っている白頭(ペクトウ)山を中心とする国境一帯に新しい形態の遊撃根拠地を創設しなければならないと指摘した。そして、国境一帯と国内に進出して武装闘争を積極的に展開すべきであり、当面の重要な課題の一つは抗日武装隊伍を拡大強化し、とくに朝鮮人民革命軍の主力部隊を強化することであると強調した。また、朝鮮人民革命軍部隊が国境地帯に進出するからといって、中国人民の抗日武装部隊との共同闘争を弱めてはならず、人民革命軍の各部隊は抗日連合軍の名で中国の共産主義者とともに武装闘争を展開すべきであると指摘した。

主席はつぎに、反日民族統一戦線運動を全国的規模でさらに発展させる方針を示した。

反日民族統一戦線運動を新たな段階へ発展させるためには、常設的な統一戦線組織体を結成し、反日民族統一戦線運動を抗日武装闘争との緊密な連係のもとに展開すべきであると強調し、同時に共青を発展的に解散し、大衆的な青年組織としての朝鮮反日青年同盟を組織すべきであると指摘した。

主席はまた、党創立の準備活動を全国的規模で積極的に進める方針を示した。

この方針を実行するためには、朝鮮人民革命軍各部隊、および各地の朝鮮人居住地域、とくに国内の党組織を拡大し、朝鮮人民革命軍の党委員会から地方の党組織にいたるまで統一的な組織指導体系をうち立て、労働者、貧農、雇農の入党者を極力増やして、党創立の組織的根幹をかため、各地の革命組織内にまず基層党組織をつくるべきであると強調した。さらにセクト主義と日和見主義を排し、主体的な革命路線にもとづいて革命隊伍の思想的一致と行動統一を確固と保ち、各階層の人民大衆を広く結集して、党創立の強固な大衆的基盤を築くべきであると指摘した。

この報告は、新たな情勢と革命発展の要請に即して抗日武装闘争を中心とする反日民族解放闘争を全国的規模で一大高揚へと導く戦闘的な旗じるしであり、朝鮮人民自身の力で祖国解放の歴史的な偉業を早期実現する方途を明らかにした主体的な闘争綱領であった。

南湖頭会議は、朝鮮共産主義運動と反日民族解放闘争の歴史において、主体性を完全に確立した会議であった。この会議を分岐点として、朝鮮革命はチュチェの旗のもとに上昇一路をたどる新たな一大高揚期、その発展の新たな段階を迎えることになった。

主席は南湖頭会議での方針を貫徹する実践的な対策を講じるた

め、1936 年 3 月に安図県迷魂陣で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開いた。

会議では、部隊を改編してそれまでの 2 個師団から 3 個師団、1 個独立旅団に拡大することにし、新たに編制される師団と旅団の活動地域が分担された。新たに編制される朝鮮人民革命軍の主力師団は、白頭山を中心とする鴨緑（アムノク）江国境沿岸一帯で活動することにした。会議ではまた、祖国光復会創立準備委員会を設ける問題も討議された。

主席は、朝鮮人民革命軍主力部隊の拡大のための新師団の編制を、朝鮮革命の主体的路線の実行において最優先的に解決すべき要の問題とみなし、これに第一義的な関心を払った。

主席は北満州遠征に参加した遠征隊のほとんどを中国人遊撃部隊に派遣し、朝鮮人民革命軍の主力師団を新たに編制するため馬鞍山に進出した。馬鞍山地区には、「民生団」の疑いをかけられて戦闘隊伍から排除された 100 余名の人員と、「民生団」連累者という濡れ衣を着せられて冷遇されている児童団員だけが残留していた。

主席は「民生団」の容疑者全員に会い、「民生団」の嫌疑を完全に無効と宣言し、調書の束を焼却した。そして、かれら全員を新たに編制する師団に受け入れることにした。このうわさを聞いて参集してきた群小部隊と個々の愛国的青年たちをもって、1936 年 4 月に主力師団を編制した。また、朝鮮の建軍史上初の女性中隊を編制し、大切にしまっていた母の遺産である 20 元の金で馬鞍山の児童団員たちに服をつくって着せた。その後、この馬鞍山の児童団員と、西間島から訪ねてきた児童たちで少年中隊を組織し、かれらを革命の後続隊に育てることにした。

朝鮮人民革命軍の主力師団となる新師団の編制は、軍建設と朝

鮮革命の発展において大きな意義をもつ歴史的な出来事であった。

主席は南湖頭会議の方針どおり、朝鮮人民革命軍の各部隊が抗日連合軍の名で中国の共産主義者とともに抗日武装闘争を展開することによって、朝中人民の反日革命闘争を積極的に発展させるよう指導した。

抗日連合軍は中国の東北地方で活動する抗日遊撃部隊の連合軍であり、これには朝鮮人民革命軍とともに共産党系列の中国人遊撃部隊、救国軍系列の中国人反日部隊が加わっていた。

コミンテルンは朝鮮人が朝鮮革命を進めるのは 1 国 1 党制の原則に矛盾するものではないとし、朝鮮の共産主義者と朝鮮人民革命軍が抗日連合軍から分立して朝鮮人部隊を別個に編制し、独自に活動するよう勧告してきた。主席は、朝鮮人民革命軍の独自性が保たれ、中国人が連合を望んでいる状況のもとで、中国の抗日武装部隊との共同闘争を展開しながら、朝鮮国内と中国東北地方の朝鮮人集落へ行っては朝鮮人民革命軍の名で活動し、中国人集落へ行っては抗日連合軍の名で活動することにした。朝鮮人民革命軍が中国の共産主義者と共同で抗日武装闘争を展開することにしたことは、民族的利益と国際的利益を正しく結合し、朝中人民の団結した力で共同の敵日本帝国主義に抗する武装闘争をいっそう拡大強化するもっとも正当な措置であった。そしてこれは、プロレタリア国際主義の旗のもとに国際的な反帝共同戦線を実現するりっぱな模範となった。

主席は反日民族統一戦線運動を新たな段階に発展させるため、祖国光復会を創立する活動に大きな力を注いだ。1936 年 3 月下旬、朝鮮人民革命軍のすぐれた指揮幹部と人望の厚い愛国的団体の代表たちで祖国光復会創立準備委員会を組織した。そして、国内と満州

の各地に小部隊と多くの政治工作員を派遣し、広範な地域で祖国光復会の創立をめざす組織・政治活動を活発に展開させた。

主席は南湖頭から東崗にいたる、戦闘のうちつづく苦難にみちた行軍のさなかに、祖国光復会の綱領と規約、創立宣言を作成した。

主席は 1936 年 5 月 1 日から 15 日にかけて、撫松県東崗で祖国光復会創立大会を開催した。この会議での報告『反日民族統一戦線運動をさらに拡大し、全般的な朝鮮革命を新たな高揚へと導こう』で、祖国光復会創立の必要性と意義、その性格と綱領の基本的内容を明らかにし、祖国光復会の旗のもとに全民族を一つの政治的勢力として結束するための課題と、反日民族統一戦線運動において堅持すべき原則と方途を明示した。主席は会議で『祖国光復会 10 大綱領』と『祖国光復会創立宣言』『祖国光復会規約』を発表した。

『祖国光復会 10 大綱領』では、反帝反封建民主主義革命の段階で解決すべき政治、経済、社会・文化分野での基本的課題と、自主的な対外政策の基本原則を明示した。

祖国光復会 10 大綱領には、日本帝国主義を打倒して真の朝鮮人民革命政府を樹立する問題、朝鮮の独立のために戦う革命軍を組織する問題、それに産業国有化と土地改革、8 時間労働制、男女平等権、無料義務教育をはじめ民主主義的な諸施策の実施問題が規定されている。祖国光復会 10 大綱領は、反帝反封建民主主義革命の段階における労働者階級の基本的要求と各階層人民の利害を正しく反映し、民族解放と民主主義的社会変革の課題を有機的に結合した独創的な革命の綱領であり、革命の主体を強化し、全民族の総動員によって国の解放を達成することを呼びかけた全民抗争の宣言であった。

『祖国光復会創立宣言』では、祖国光復会の創立を国内外に広

く知らせ、いたるところで即刻祖国光復会の組織を結成し、「祖国光復会 10 大綱領」の旗のもとに全民族が立ち上がるようアピールした。

『祖国光復会規約』では、統一戦線体の名称と入会対象、闘争目的とその実現方途、会員の資格と入会手続き、組織の形式と構造、会員の義務と権利、組織の規律、工作任務などを規定した。会議では、祖国光復会の 10 大綱領と創立宣言、規約が全会一致で採択された。主席は全朝鮮人民の一致した意思と念願によって祖国光復会の会長に推戴された。

主席は 1936 年 5 月 5 日に祖国光復会の創立を世に宣布した。会議では祖国光復会の機関誌として『三・一月刊』を発行することを決定した。

祖国光復会は、唯一の綱領と規約、組織体系をもち、民主主義中央集権制の原則にもとづいて活動する、朝鮮における初の常設的な反日民族統一戦線組織体であり、全民族的愛国勢力にたいする領袖の指導、党の指導をゆるぎなく保障する大衆組織であり、強力な地下革命組織であった。

祖国光復会の創立は、主席の主体的な反日民族統一戦線路線の結実であり、朝鮮人民が自らの力で日本帝国主義とのたたかいをいっそう果敢に展開する意志をあらためて厳粛に宣言し、抗日武装闘争を主軸とする朝鮮革命全般を新たな高揚へと押し上げる歴史的な契機となった。

主席は抗日武装闘争を国内に拡大するため、白頭山根拠地の創設を強力に推進した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「南湖頭会議以後、われわれは武装闘争を国内へ拡大させ、わが国の革命運動を一大高揚へと導くうえで重要な役割を果たす戦略的地帯の確保に大きな力を注いできました」

白頭山一帯は守り手には有利で、攻め手には不利な天然の要害であり、朝鮮人民革命軍のよりどころとなる格好のとりでであった。白頭山は精神的意味からしても朝鮮の祖宗の山で朝鮮の象徴であり、抗日革命史の発祥地であった。そして、この一帯は住民の反日感情が強く、革命の大衆的基盤も強固な地帯であった。

主席は白頭山根拠地の創設に有利な状況をつくるため、1936 年 6 月から 8 月にかけて、老嶺戦闘、西南岔戦闘、西崗戦闘、撫松県城戦闘など数多くの戦闘を巧みに指揮して撫松一帯の敵を制圧し、大営と漫江などで大衆政治活動を進めた。

撫松地区での活動期間には、同地の党グループの責任者として地下工作任務にあたっていた古い中国人の革命戦友で国際主義戦士の張蔚華に会い、朝中人民の共同偉業のために最後まで戦うよう励ました。その後、張蔚華は朝鮮人民革命軍部隊のために数々の援護物資を調達し、敵に逮捕されると金日成主席のいる朝鮮革命の司令部の秘密を守って自決した。

主席は撫松一帯の敵を制圧した後、9 月には鴨緑江沿岸に進出して大徳水、小徳水、15 道溝東崗、13 道溝竜川里、20 道溝二終点などで連続的に大小の戦闘をおこなって敵に大きな打撃を加え、長白県一帯を完全に掌握した。

主席は敵を政治的、軍事的に制圧した後、白頭山根拠地の創設を強力に推進した。まず密営の設置を第一義的な課題とし、朝鮮革命の中心的指導拠点となる密営地の建設に力を注いだ。すぐれた軍

事・政治幹部である金周賢（キムジュヒョン）、李東学（リドンハク）、金雲信（キムウンシン）らに国内の白頭山地区に建設する密営の位置を定める任務を与えて派遣した後、1936年 9 月下旬には主力部隊のメンバーを率いて三池淵（サムジヨン）郡の小白水（ソベクス）谷に進出し、司令部の密営となる白頭山密営の建設を指導した。当時、小白水谷の密営を「白頭山 1 号密営」と呼んでいた。いまは「白頭山密営」または「白頭密営」と呼んでいる。

小白水谷に密営が設けられて以来、白頭山密営は朝鮮革命の本拠地、中心的な指導拠点となった。白頭山密営は朝鮮革命の策源地であると同時に心臓部であり、主席の中核的な作戦基地、活動基地、後方基地となった。最大限の安全と秘密を保持するため、この密営には司令部直属部署のメンバーと警護隊を含めた一部の基幹部隊だけを常駐させ、出入を厳しく制限した。小白水谷の密営は白頭山密営網の心臓部であった。

白頭山密営網の獅子峰（サジャボン）密営、熊山（コムサン）密営、仙五山（ソンオサン）密営、間白山（カンベクサン）密営、無頭峰（ムドゥボン）密営、小胭脂峰（ソヨンジボン）密営などは国内に設置された衛星密営であり、黒瞎子溝密営、地陽渓密営、二道崗密営、横山密営、鯉明水密営、富厚水密営、青峰密営、および撫松地区の各密営は西間島方面に設置された衛星密営であった。

白頭山地区の各密営はそれぞれ異なる使命と任務を遂行した。純然たる秘密兵営の役割のみでなく、裁縫所や兵器修理所、病院など後方密営の役割を果たすものもあれば、工作員の連絡所や宿営所の役割を果たすものもあった。

主席は密営網を形成する活動と同時に、政治工作員を派遣して人民を革命化し、党および革命組織を結成させた。その結果、白頭山周辺の住民地帯は形式上、敵の行政権が及ぶだけで、実際におい

ては朝鮮人民革命軍が掌握し統制する革命化された地域となった。

こうして、国内の白頭山地区と鴨緑江沿岸の山林地帯だけでなく、長白、撫松、臨江、濛江県一帯まで包括する広い地域に新しい形態の根拠地、白頭山根拠地が創設された。

白頭山根拠地は、白頭山を中心とする大山林地帯に設置された朝鮮人民革命軍の密営網と、その周辺地域の人民のなかに深く根をおろした地下革命組織網からなる半遊撃区形態の根拠地であり、敵の目に見えない革命の強力なとりでであった。

主席は白頭山根拠地を創設した後、朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員を国内各地に派遣し、軍事・政治活動に有利な森林地帯に密営や連絡所などいろいろな形式の秘密根拠地を設けさせ、それを拡大していくよう指導した。

国内に設けられた秘密根拠地は、白頭山密営に位置する革命の司令部の統一的な指導のもとに当該地域での武装闘争と党組織建設、祖国光復会運動、反日大衆闘争、全民抗争の準備などをりっぱに保障する地域的指導拠点、朝鮮人民革命軍各部隊の作戦基地、活動基地、後方基地としての役割を果たした。

主席は、党および祖国光復会の組織を全国的・全民族的規模へと拡大し、抗日武装闘争と国内革命運動の一元化を実現する活動を指導した。

白頭山根拠地に依拠して朝鮮革命を高揚させるために提起される戦略的課題は、国内に武装闘争と政治闘争を総轄して導いていく強固な策源地、秘密拠点を設ける一方、党および祖国光復会の組織網を拡大して強力な政治的力量と軍事的力量を強固に築き、抗日武装闘争と国内革命運動にたいする主席の全一的指導を実現すること

であった。

主席は国内に強力な政治的力量を築くため、全国的に党組織を拡大し、それにたいする統一的な組織指導体系を確立するよう導いた。

主席は朝鮮人民革命軍の主力師団が新しく編制され拡大されるにともない、それに合わせて部隊内の党組織を整備し、朝鮮人民革命軍党委員会をうちかため、各党組織にたいする整然とした組織指導体系を確立した。

主席は朝鮮人民革命軍の主力部隊が鴨緑江沿岸の国境地帯に進出する状況のもとでも、東満州一帯における党組織の建設と各党組織の活動を統一的に指導するため、1936 年 3 月に地域的な党指導機関である東満党工作委員会を設ける措置をとった。また、国内における党組織の建設と党創立の準備活動を統一的に指導するため、1936 年 5 月の東崗会議で国内党工作委員会を組織する方針を示し、12 月には国内の共産主義者に親書を送り、朴達（パクタル）を密営に呼んで、国内に党組織をつくる任務を与え、その方途を明示した。

主席は 1936 年 12 月末に朝鮮人民革命軍党委員会を招集し、国内の党組織建設を統一的に指導する指導機関を設ける必要性と意義、国内党工作委員会の使命と任務、組織規範と活動原則を明らかにした。会議では国内党工作委員会が組織された。国内党工作委員会は、朝鮮人民革命軍党委員会の指導のもとに、国内における革命闘争を統一的に指導し、国内の党組織建設を担当する地域的な党指導機関であった。

主席は白頭山密営を活動拠点とし、西間島をいま一つの足場として国内と満州における革命の拡大、発展をはかり、国内党組織との連係を強化すべき状況のもとで、長白地区を軍事戦略上の要衝と

みなし、1937 年 2 月に横山密営で権永壁（クォンヨンビョク）を責任者とする長白県党委員会を組織し、その傘下に区党と党グループを設ける措置をとった。長白県党委員会は、主席の示す路線と課題を真っ先に受けとめて実行する中枢的な党組織であり、満州と国内の党組織にたいする主席の指導を実現するうえで重要な役割を果たした。

主席は国内党工作委員会の機能と役割を高め、国内における党組織建設と革命運動にたいする指導をいっそう強化するため、1937 年 5 月下旬に熊山密営で国内党工作委員会第 2 回会議を開いた。主席はその演説『国内党組織を拡大強化するために』で、国内で分散して活動する共産主義者を党および各種の革命組織に受け入れ、党組織が拡大している現実的要求に即して党組織指導体系を立て直すべきことを強調した。主席は 1937 年の夏と秋に、国内党工作活動を援助する使命をになった北朝鮮政治工作隊を北部朝鮮の各地に派遣した。

共産主義革命闘士金正淑（キムジョンスク）は、桃泉里と新坡（シンパ）一帯を中心に地下政治活動を展開し、豊山（プンサン）、狼林（ランリム）、赴戦（プジョン）、新興（シンフン）、北青（プクチョン）、利原（リウォン）、端川（タンチョン）、虚川（ホチョン）など各地域に進出して党組織建設を推進する一方、各地に革命組織をつくり、共産主義者と広範な反日大衆を主席のまわりにかたく結集するため精力的に活動した。

主席は国内党組織建設のためのいま一つの措置として、1937 年 5 月下旬に朴達を責任者とし、実践闘争を通じて鍛えられた共産主義者たちで国内党グループを組織した。国内党グループは、基層党組織としての役割とともに国内党組織建設のための母体組織としての役割も遂行した。

主席は甲山（カプサン）と三水（サムス）一帯を国内党組織建設のための原種場にし、

ここで育てた優秀なオルグを他の郡と道に派遣し、かれらにそれぞれの派遣地で党組織結成の土台を構築させた。政治工作員と国内党工作委員会の積極的な活動によって、国内の広い地域で党組織が急速に拡大されていった。

主席の指導のもとに全国的規模で党組織の建設が強力に推進される過程で分散して活動していた共産主義者が組織的に結集され、党組織指導体系が確立され、朝鮮革命全般にたいする党の指導はさらに強化された。

主席の示した路線や課題は多くの場合、長白県党委員会と国内党工作委員会、東満党工作委員会を通じて西間島と北間島、および国内に伝達され、その実行状況も大方、このルートを通じて朝鮮人民革命軍党委員会に報告された。最高指導機関である朝鮮人民革命軍党委員会から基層党組織の細胞にいたるまでの整然とした党組織指導体系の確立にともない、党中央の宣言こそなかったが、朝鮮革命全般にたいする主席の全一的指導が実現し、党創立の組織的・思想的基礎づくりに画期的な転換がもたらされた。

主席は党組織建設と並行して祖国光復会の組織建設を全国的・全民族的規模で強力に推進した。東崗会議や 1936 年 9 月の朝鮮人民革命軍党委員会会議、そして 10 月に長白県黒瞎子溝密営で開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部および政治工作員会議での演説『祖国光復会の組織を急速に拡大していこう』などで、祖国光復会の組織を急速に拡大するための具体的な課題と方途を示した。主席は鴨緑江沿岸の長白一帯と国内各地に、そして朝鮮人が多く居住する満州の広い地域に祖国光復会の組織をつくり、それにたいする指導体系を確立し、広範な大衆を祖国光復会の下部組織にかたく結集

しなければならないと強調した。

主席は祖国光復会の組織を拡大するため、祖国光復会の創立直後、朝鮮人民革命軍主力部隊の全兵士、指揮官を祖国光復会の組織に受け入れ、かれらが全人民を反日民族統一戦線に結集する宣伝者、組織者となり、革命軍隊伍から選抜された政治工作員が祖国光復会の組織建設で主役を担当するよう指導した。

政治工作員の精力的な活動によって、1936 年秋の祖国光復会長白県新興村支会の結成を皮切りに、数多くの祖国光復会支会とその傘下の分会が相ついで組織された。

そして上崗区、中崗区、下崗区に祖国光復会区委員会が組織され、1937 年の初めに李悌淳（リジェスン）を責任者とする祖国光復会長白県委員会が組織された。

主席は国内での祖国光復会の組織建設を強力に推進するため、1937 年 1 月に甲山工作委員会を祖国光復会の国内傘下組織である朝鮮民族解放同盟に改編した。朝鮮民族解放同盟は祖国光復会の組織を国内各地へ拡大する一つの発進基地となり、その傘下に数十の下部組織がつくられた。祖国光復会の組織網は、北部朝鮮一帯とともに西部、中部、南部朝鮮一帯を包括する全国各地の都市と産業中心地、農村、漁村へと拡大された。そして、東満州一帯をはじめ朝鮮人が多く居住する満州の広い地域と日本の各地方にまで祖国光復会の下部組織がつくられ、急速に拡大された。

主席は祖国光復会の組織に労働者、農民とともに反日的な青年学生、知識人、小ブルジョアジー、良心的な民族資本家と宗教家など各階層の人民を広く結集するよう指導した。とくに、進歩的な天道教徒を祖国光復会の組織に結集するため、1936 年 11 月に密営で国

内の天道教代表たちに会い、祖国光復会運動の目的を説明し、この運動に積極的に参加するよう呼びかけた。こうして、1937 年の春、豊山郡内の天道教徒を網羅する祖国光復会豊山支会が結成され、ついで甲山、三水、恵山（ヘサン）、長白一帯に天道教中核メンバーによる祖国光復会の支会が組織され、数多くの天道教徒がこれに結集した。

主席は祖国光復会組織の急速な拡大にともない、それにたいする統一的な指導体系を確立する一方、当該地域の党組織からすぐれた党員を選抜して祖国光復会の各級組織の指導的ポストに派遣して、祖国光復会の各組織にたいする党の指導を強化するとともに、党組織の指導のもとに祖国光復会の各級組織が各階層の愛国勢力を結束し、かれらを抗日武装闘争の勝利へと力強く立ち上がらせる使命と役割をりっぱに果たすよう指導した。

全国的・全民族的規模で祖国光復会の組織建設が強力に推進された結果、祖国光復会は数十万の会員を擁する汎民族的な組織に拡大され、共産主義者と広範な人民が主席のまわりにかたく結集した。

主席は白頭山根拠地に依拠して、大部隊による国内進攻作戦を展開した。

1930 年代の中期、日本帝国主義は大陸侵略の準備に拍車をかけながら、朝鮮人民にたいする経済的略奪と植民地的ファッショ支配をかつてなく強化し、「内鮮一体」「同祖同根」を唱え、朝鮮人民の民族性まで抹殺しようと策動した。一方、朝鮮人民革命軍の国内進出を防ぐため、北部国境地帯の警備をいっそう強化し、膨大な兵力を繰り出して朝鮮人民革命軍にたいする大規模な「討伐」作戦をおこなった。

主席は日本帝国主義侵略者により大きな打撃を加え、人民に祖国

解放の信念を抱かせるため、大部隊による国内進攻作戦を断行することにした。1936 年 11 月から 1937 年 2 月にかけて、長白県一帯で数多くの戦闘を矢継ぎ早におこなって敵の冬期「討伐」攻勢を粉砕した。そして、長白地方に集結した敵の兵力を分散させ、国境警備陣に風穴を開ける先行作戦として、同年 3 月に主力部隊を率いて国内進出の方向とは逆の撫松地区へ向けて困難な遠征を断行した。

国内進出に有利な状況をつくりだした後、1937 年 3 月に撫松県西崗で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開いた。そして会議での演説『大部隊の国内進攻作戦によって人民に祖国解放の希望を与えよう』で、大部隊による国内進攻作戦の方針を示した。そして大部隊の国内進攻作戦によって日本帝国主義侵略者に痛撃を加え、敵の牙城に火を放ち、人民に朝鮮人民革命軍は健在であり、祖国解放の正義のたたかいで勝利しつづけていることを明白に示すべきであり、人民革命軍が存在するかぎり、朝鮮は必ず独立するということを認識させなくてはならないと強調した。

大部隊による国内進攻作戦の方針は、日本帝国主義の虐政のもとで苦しむ朝鮮人民に祖国解放の希望を与え、かれらを抗日大戦へと立ち上がらせ、抗日武装闘争を国内各地に急速に拡大する革命的な方針であった。会議では国内進攻のために朝鮮人民革命軍を三つの方面に進出させる作戦計画を示し、各部隊の任務と活動方向、活動区域を確定した。

主席は主力部隊を率いて恵山方面へ進出することにし、東崗密営で 1 か月にわたる軍事・政治訓練をほどこして、国内進攻の政治的・軍事的準備に万全を期した。また、1937 年 5 月には地陽渓台地で国内進攻のための隊伍の整備と各種の教宣活動を展開し、国

内情勢をよりくわしく把握しながらこの作戦の準備を完了した。

茂山地区に進出した部隊が敵に包囲される危機にさらされると、主席は予定をくりあげ主力部隊を率いて敵のものものしい国境警備陣を突破し、鴨緑江を渡って祖国の地に進出した。

主席は 1937 年 6 月 4 日、歴史的な普天堡戦闘を指揮した。主席の銃声を合図に、朝鮮人民革命軍の隊員たちは警察官駐在所、面事務所(町役場にあたる)をはじめ日本帝国主義の弾圧機構や統治機関を襲撃掃討して普天堡一帯を解放し、主席の作成した『布告』と『祖国光復会 10 大綱領』を町に貼り出し、各種の檄やビラをまいて力強い政治扇動をくりひろげた。主席は熱狂的に歓呼する人民の前で『祖国の解放をめざして力強くたたかおう』と題する演説をおこなって、かれらに必勝の信念を抱かせ、こぞって反日聖戦に決起するよう呼びかけた。

普天堡戦闘の意義は、何人かの日本の官憲を懲罰したことにあるのではなく、朝鮮人は死なずに生きており、日本帝国主義と戦えば勝利するという信念をもり立てたことにある。朝鮮人民革命軍の大部隊が堂々と国内に進撃し、面機関所在地の敵の統治機関を掃討したことは、日本帝国主義の植民地支配体制を根底からゆさぶり、朝鮮人民に祖国解放の希望を与えた歴史的な出来事であった。

普天堡戦闘を勝利のうちに終えた主席は、追撃してくる敵を口隅水山で掃滅し、地陽渓に撤収して盛大な軍民交歓集会を開いた。三つの方面へ進出した遠征部隊が 1 か所に集まり、人民とともにおこなった地陽渓軍民交歓集会は、軍民の政治的団結力をあまねく誇示した歴史的な集会であった。

普天堡で惨敗を喫した日本軍が朝鮮駐屯第 19 師団所属咸興第 74

連隊と満州国軍、警察隊など大兵力を繰り出して攻撃してくると、主席は6月30日に間三峰界線で大せん滅戦を指揮して敵兵1，500余名を殺傷し、その「討伐」企図を完膚なきまでに粉砕した。この戦闘は口隅水山戦闘とともに、普天堡戦闘の勝利をより強固で輝かしいものとし、朝鮮人民革命軍の白頭山地区進出後、抗日革命の全盛期を招来するうえで重要な意義をもつ歴史的な戦闘であった。

主席が自ら指揮した国内進攻作戦の勝利は、朝鮮人民革命軍の威力を天下に誇示し、日本帝国主義侵略者に甚大な政治的・軍事的敗北を与えた。

普天堡戦闘のニュースに接した国内人民と海外同胞は、金日成主席を「解放の救いの星」「民族の太陽」「偉大な軍事戦略家」「伝説的英雄」「鋼鉄の総帥」として高く仰ぎ慕うようになった。

主席は1937年7月に日本帝国主義が引き起こした中日戦争によって生じた新たな情勢に対処して武装闘争を国内各地に拡大し、これに全人民的抗争を組み合わせて敵により大きな打撃を加える闘争を展開した。

1937年7月中旬の白頭山密営での朝鮮人民革命軍主力部隊の指揮メンバー会議と、8月初旬の長白県初水灘での朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議での演説『中日戦争の勃発に対処して敵背撹乱作戦を積極的に展開しよう』で、朝鮮人民革命軍の各部隊が鴨緑江、豆満（トウマン）江沿岸一帯をはじめ広い地域で敵背撹乱作戦を積極的に展開し、国内における反日反戦闘争を強め、全人民的抗争の準備を促進して、朝鮮革命全般を新たな高揚へと導く戦略的方針を示した。

主席は1937年8月中旬の朝鮮人民革命軍指揮官・兵士大会で、白頭山密営会議と初水灘会議の決定を実行するための朝鮮人民革命

軍の戦略的課題を示し、日本帝国主義の背後をたたいて撹乱する軍事作戦を果敢に展開した。

主席は朝鮮人民革命軍の軍事活動を国境一帯と国内深くに方向づけ、鴨緑江沿岸と南満州地域で強力な敵背打撃戦を展開して、日本帝国主義侵略者に大きな打撃を与えた。

主席は国内における人民の反日反戦闘争を強化し、全民抗争の準備を促進するため、1937 年 9 月に『全朝鮮同胞へのアピール』を発表した。この 9 月アピールは全民抗争のアピールであり、各階層の全同胞を祖国の解放をめざす全民族的な大聖戦に奮起させる戦闘的旗じるしとなった。

狼林（ランリム）山脈をはじめ戦略的意義をもつ大きな山脈に全民抗争勢力の武装拠点となる秘密根拠地を強固に築いた後、主席は国内の革命運動全般にたいする指導をさらに強化し、全民抗争準備の突破口を開くため、1937 年 9 月下旬、主力部隊の一小部隊を率いて新興地区秘密根拠地に進出した。主席は新興郡佳坪（カピョン）面豊上（プンサン）里の蔘畑（サムバツ）山で朝鮮人民革命軍の政治工作員・地下革命組織責任者会議を開き、その演説『国内での革命闘争をさらに高揚させるために』で、興南（フンナム）、咸興、元山（ウォンサン）など軍需工場の集結している東海岸地区に党および祖国光復会の組織と、各種の反日大衆団体をつくって拡大することに主力を注ぎ、とくに労働者、農民を擁している労働組合と農民組合を革命的な大衆組織に拡大、強化するよう強調し、国内各地で反日抗戦を果敢に展開する課題を示した。

蔘畑山会議後、朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員を東海岸一帯をはじめ国内各地に派遣して、党および祖国光復会の組織を拡大し、半軍事組織の労働者突撃隊と生産遊撃隊を組織して全民抗争

勢力を急速に成長させ、国内各地で各種形態の反日闘争をたえまなく展開するよう指導した。また、それまでさまざまな弱点と制約をもっていた従来の労組、農組を革命的に改編する一方、各地域に新しい革命的な労組、農組を結成し、その内部に党組織をつくって、系統的な指導が及ぶようにした。こうして、朝鮮の労働運動と農民運動は、主席の指導する抗日武装闘争と密着し、革命的な大衆運動に発展するようになった。

主席は中日戦争勃発後の複雑な情勢と革命発展の要請に即して、朝鮮人民革命軍隊員と愛国的人民を政治的、思想的にしっかり準備させるため、1937 年 11 月に『朝鮮共産主義者の任務』と題する論文を執筆し、隊内機関紙『曙光（ソグァン）』に発表した。この論文で主席は、朝鮮革命の性格と課題を改めて明らかにし、朝鮮革命を成功裏に遂行するための朝鮮共産主義者の当面の任務を全面的に示して、つぎのように述べている。

「革命闘争で自主的立場を堅持すれば、自国の実情に合う革命路線と方針をうち立て、それを徹底的に擁護し貫徹していくことができ、いかなる困難や試練に出会おうとも自国の革命のためにあくまでたたかいぬくことができる」

主席は、朝鮮革命の主人は朝鮮人民であり、朝鮮の共産主義者であるので、朝鮮の共産主義者は自己の信念にもとづいて革命闘争を展開し、自らの革命勢力をうちかため、それに依拠して朝鮮革命を勝利に導くべきであると指摘した。

この論文は、朝鮮の共産主義者が堅持すべき主体的立場と戦略戦術、当面の任務と闘争課題を示した綱領的文献であり、朝鮮人民革命軍隊員と人民大衆を主体的な革命路線で武装させる真の教科書

となった。
　主席は朝鮮人民革命軍の各部隊と各地の党および祖国光復会の組織に『朝鮮共産主義者の任務』について学習させる一方、1937年 11 月下旬から翌年の 3 月下旬にかけて、濛江県馬塘溝密営で朝鮮人民革命軍の集中的な冬期軍事・政治学習を指導した。「学習も戦闘だ!」「革命家にとって学習は第一の義務である」などのスローガンを示し、全員が学習を革命的におこなうよう指導した。政治学習では『祖国光復会 10 大綱領』『朝鮮共産主義者の任務』を主な教材とし、革命における自主性の堅持、革命的信念と楽観主義、自力更生の革命精神などの問題が扱われ、軍事学習では遊撃戦法を概括した『遊撃隊動作』と『遊撃隊常識』を完全に消化させることに重点がおかれた。
　この軍事・政治学習は、朝鮮人民革命軍隊員の政治的・軍事的資質と精神的・道徳的品格をいちだんと高め、かれらをいかなる逆境にあっても動揺することなく革命の道をたたかいぬく不屈の共産主義的革命闘士に育てた密林の中の「軍事・政治大学」であった。
　主席は軍事・政治学習期間におこなわれた撫松県静安屯集落襲撃戦で倒れた一戦士を悼み、たき火のそばで夜を明かして追悼文を書いた。その一字一句は悲しみに沈んでいた隊員たちを勇気づけ、報復戦へと力強く励ました。この時期に『三・一月刊』と『曙光』、『鐘の音（チョンソリ）』など、各種の革命的出版物を発行し、根拠地と会議の場、宿営地と連絡場所などの立木や岩に数々の革命的スローガンを書き記し、朝鮮人民革命軍隊員と人民大衆を政治的、思想的に教育した。「朝鮮民族の最高元首金日成万万歳」をはじめ各種のスローガンは、隊員と人民の無言の教師となり、革命の糧となった。

主席は朝鮮人民革命軍の軍事・政治活動と隊伍の政治的・思想的準備による成果にもとづき、全国的規模で朝鮮革命を新たな高揚へと盛り上げる闘争を指導した。主席の指揮のもとに、朝鮮人民革命軍の各部隊は 1938 年の春から春期攻勢に転じて長白、臨江などの各地域で多くの戦闘を展開し、国境一帯の敵に大きな打撃を加え、全国各地で活動する各部隊と政治工作員、共産主義者と革命的人民の反日闘争を大いに励ました。

日本帝国主義が「恵山事件[14]」を機に革命勢力にたいする大々的な弾圧旋風をまき起こした事態に直面したとき、主席は朝鮮人民革命軍党委員会非常会議を開き、革命組織を保護し、破壊された革命組織を立て直す対策を講じた。また、共産主義革命闘士金正淑を大鎮坪（テジンピョン）地区に派遣して、日本帝国主義の検挙旋風に対処するための国内共産主義者の活動方向を通達させた。こうして、日本帝国主義の野獣じみた弾圧がつづく厳しい状況のもとでも、党および祖国光復会の組織はすみやかに再建、整備され、拡大されていった。

主席は全国的規模で武装闘争を活発に展開し、全民抗争の準備をさらに促進するため、1938 年 5 月上旬に白頭山密営で朝鮮人民革命軍の軍事・政治幹部、および国内で活動する政治工作員の会議を開いた。そして主力部隊の国内進出をより積極化し、破壊された革命組織を早急に再建、拡大する課題、および北朝鮮反日人民遊撃隊を組織し、間白山密営を全民抗争の中核育成基地に築く課題を示した。

1938 年 8 月には朝鮮人民革命軍主力部隊の一部のメンバーを率いて再び新興地区をはじめ北部朝鮮一帯と中部朝鮮の陽徳（ヤンドク）地区にまで進出し、この一帯の秘密根拠地に依拠して活動している朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員の活動状況、それに国内各地の実情を

具体的に把握した。それにもとづき、いたるところで日本帝国主義にたいする軍事的攻勢を強めると同時に、当該地域の特性に即して党および祖国光復会の組織を拡大し、全民抗争の準備を強力に推進する戦闘的課題を示し、その活動を精力的に指導した。

主席は主体的立場で武装闘争を中軸とする朝鮮人民の反日民族解放闘争を導く一方、コミンテルンとの関係においても自主的立場を堅持した。

コミンテルンは各国における共産主義運動の推進に少なからぬ貢献をしたが、その決定と指令のなかには個々の国の具体的実情に合わないものもあった。

主席は、毎回その指令を慎重に受けとめ、それを朝鮮革命の具体的実情と結びつけて実行しながら、国際的利益と民族的利益を整合させていった。

中日戦争勃発と前後した時期の 1936 年の春と 1937 年の夏、そして 1938 年の春に、コミンテルンは東北地方の抗日武装部隊に熱河への遠征[15]を指示してきた。熱河遠征は当時の軍事・政治情勢と遊撃戦の要求に合わない非現実的で無謀な極左冒険主義的路線であった。主席は熱河遠征が提起されるたびに、武装闘争を国内に拡大するという自主的な路線を堅持しながら、遼西と熱河方面へ進出した中国人抗日武装部隊の占めていた南満州の一部の地域の軍事的空白を埋めて猛烈な軍事・政治活動を展開することにより、朝鮮革命の高揚をもたらし、中国人民の反日闘争を大いに励ました。

抗日武装闘争が急速に拡大していた時期にあたる 1938 年の末、朝鮮革命は重大な難局に直面した。日本帝国主義は関東軍主力師団の大部分と満州国軍、それに地方武装警察隊まで繰り出して朝鮮人

民革命軍の司令部にたいする長距離追撃戦を執拗に強行する一方、「文化討伐」の美名のもとに朝鮮人民革命軍にたいする「帰順工作」を大々的にくりひろげた。また、革命組織を破壊し、共産主義者と愛国的人民を検挙、投獄、虐殺した。一方、熱河に遠征した中国人抗日武装部隊が甚大な損失をこうむったため、朝鮮人民革命軍は白頭山西南部一帯で増強された敵の大兵力とほとんど単独で戦わざるをえなくなった。

主席はこの難局を主動的に打開し、朝鮮革命をひきつづき高揚に導くため、1938 年 11 月 25 日から 10 余日間にわたって、濛江県南牌子で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開いた。この会議での演説『当面の難局を打開し、革命をひきつづき前進させよう』で、極左冒険主義的熱河遠征の本質とその重大な結果を分析、批判し、朝鮮革命をひきつづき高揚に導くためには朝鮮の共産主義者が自主的立場を堅持し、情勢を正しく判断しなければならないと指摘した。そして朝鮮人民革命軍の各部隊が速やかに白頭山を中心とする国境一帯に進出し、広い地域で軍事・政治活動をより活発に展開する課題を示した。南牌子会議では部隊を三つの方面軍と独立連隊に再編制し、その活動区域を分担した。南牌子会議は、極左冒険主義の弊害を克服し、朝鮮革命の主体性を強め、抗日武装闘争をひきつづき高揚に導くうえで歴史的な契機となった。

主席は南牌子会議後、第 2 方面軍を率いて 1938 年 12 月初に南牌子を発ち、鴨緑江沿岸の国境一帯に進出する歴史的な苦難の行軍を断行した。

南牌子から北大頂子にいたる朝鮮人民革命軍主力部隊の行軍は、苦難の度合においてそれまでの行軍などの比ではない想像を絶する

空前の試練であった。

日本侵略軍は「東辺道討伐作戦」の名のもとに、「大掃討作戦」の主要目標を朝鮮人民革命軍司令部に定め、数十万の大兵力に加えて航空隊まで動員して二重三重の包囲網を形成し、猛烈な攻撃と執拗な追撃を組み合わせて襲いかかってきた。朝鮮人民革命軍は敵の執拗な攻撃と 100 年来の酷寒と寒風のなかで食事も睡眠も取れず、休息もできず、強行軍をつづけながら敵と熾烈な戦闘をくりひろげた。

主席はこうした試練と難関を鋼鉄の意志と不屈の革命精神で克服し、行軍過程の状況に応じて大部隊活動と小部隊活動の結合、兵力の集中と分散、迅速な機動、ジグザグ戦法、、遠見戦術など多様で絶妙な遊撃戦法、臨機応変の遊撃戦術を駆使してつねに主導権を握り、兵力において比較すべくもない優勢な敵を撃滅した。

激しい戦闘に明け暮れる厳しい行軍の日々、主席は自ら陣頭に立って部隊を指揮し、いかなる苦境にあっても屈しない強靭な革命精神と自力更生、刻苦奮闘の精神、革命的楽観主義で隊員たちを教育した。また、隊員たちと苦楽をともにし、かれらを手厚く保護し、一合のはったい粉さえ辞退して隊員たちに分け与えた。このような力強い政治活動と革命的同志愛の気高い模範、慈父の愛情と配慮に励まされたすべての指揮官と隊員は、主席のまわりにかたく団結し、強い闘志と不屈の革命精神を発揮して不死鳥のごとく戦った。

抗日の女将軍金正淑は、主席の革命思想と路線を断固擁護し、主席の身辺の安全をはかって奮闘した。呉仲洽（オ ジュンフプ）の率いる第 7 連隊は、主席が健在であれば必ず勝利するという革命的信念をもって、いかなる逆境にあっても主席の命令と指示を無条件実行し、敵の包

囲攻撃にあっては司令部を装い、司令部を狙う敵の大部隊を誘引して犠牲的に戦い、朝鮮革命の司令部をりっぱに防衛した。

主席の卓越した指導によって、100 日余の苦難の行軍は勝利のうちに終結した。

この苦難の行軍は、単なる部隊移動の行軍ではなく、一つの戦役に匹敵する大規模な軍事作戦であり、苦難にみちた抗日武装闘争の縮図であった。またこの行軍は、いかなる逆境にあっても革命的信念を曲げず、指導者の思想と指導に忠実に従い、あくまで戦って勝利した真のチュチェ型の共産主義者の典型を創造した栄光に輝く路程であった。

苦難の行軍を勝利のうちに終結させることによって、日本帝国主義の狂気じみた反動攻勢と極左冒険主義者の無謀な策動の後遺症をいやし、朝鮮革命をひきつづき前進させるうえで新局面が開かれるようになった。

主席は 1939 年 4 月の初めに北大頂子で朝鮮人民革命軍幹部会議を開き、その演説『積極的な反撃戦によって日本帝国主義侵略者に連続打撃を加え、祖国に進軍しよう』で苦難の行軍を総括し、敵に息つくいとまを与えず、積極的な反撃戦に移行し、日本帝国主義侵略者にひきつづき打撃を加え、再び祖国へ進軍すべく新たな闘争方針を示した。

主席は、朝鮮人民革命軍主力部隊が茂山地区へ進攻する課題と、広範な人民大衆を祖国解放戦線に結集する課題を示した。また、茂山地区進攻作戦を終えた後、軍事・政治活動に有利な白頭山東北部で大部隊による新たな作戦を展開する課題を示した。

北大頂子会議後には朝鮮人民革命軍の主力部隊を率いて積極的な春期反撃戦に移行し、15 道溝戦闘、半截溝戦闘など多くの戦闘

において絶妙な遊撃戦法と卓越した用兵術を駆使して敵に連続打撃を加え、祖国へ進軍する万端の準備を整えた後、1939 年 5 月 18 日に鴨緑江を渡って祖国の地に進出した。青峰（チョンボン）と乾滄（コンチャン）で軍事・政治活動を展開してから、枕峰（ベゲ）で一行千里の戦術で迅速に茂山地区へ進出する大胆な行動方向を示した。そして三池淵を経て敵の敷設した 40 キロメートル余りの「甲茂警備道路」を白昼に堂々と行軍して茂浦（ムポ）に到着した。主席の指揮のもとに、朝鮮人民革命軍の各部隊は新四洞（シンサ）と新開拓（シンゲチョク）一帯で軍事・政治活動を展開した。

主席は新四洞の人民におこなった演説『祖国の解放を促進するため、反日闘争に積極的に立ち上がろう』で、全民族が反日戦線にかたく結集して反日聖戦に力強く立ち上がり、朝鮮人民革命軍を積極的に支持声援するよう訴えた。そして、5 月 23 日には大紅湍原（テホンダン）で追撃してくる敵を誘引要撃戦術で撃滅した。

茂山地区進攻作戦は、朝鮮人民革命軍の威力を改めて誇示し、朝鮮を「安定した後方」と称していた日本帝国主義侵略者に大きな政治的・軍事的打撃を加え、人民には祖国は必ず解放されるという信念と勇気を抱かせ、かれらを反日闘争へと力強く励ました。

主席は茂山地区進攻作戦後、活動舞台を白頭山東北部一帯に移し、この一帯を革命の戦略的基地にする活動を強力に推進した。

1939 年 5 月下旬、主席は安図県大溝で開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議での演説『白頭山東北部に依拠して軍事・政治活動を力強く展開するために』で、白頭山東北部で軍事・政治活動を強化して、この一帯にいま一つの強力なとりでを築く方針を示し、主力部隊の活動方式と密営の形態、地下工作方法などを具体的に示した。

会議後、主席は白頭山東北部一帯に根拠地を築くため、主力部

隊を率いて烏口江戦闘をはじめ連続的に戦闘を展開して敵を軍事的に制圧し、人民のあいだで各種の形式と方法で政治活動を活発に展開して大衆の革命化を促した。また、東満党工作委員会の役割をさらに強化する新たな措置を講じ、党および祖国光復会の組織を再建、整備し、新しい地帯に革命組織をつくってそれにたいする整然とした指導体系を確立した。これとともに、有利な山林地帯に秘密根拠地を設けた。こうして和竜、安図をはじめ東満州一帯の各地域に弾力性のある革命のとりでが築かれた。

主席は北部朝鮮一帯を革命の強力なとりでに、強固な基地にするため、朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作グループを豆満江沿岸の北部朝鮮一帯と国内深くに派遣する一方、自ら数回にわたって国内に進出し、この活動を精力的に指導した。1939 年 6 月には主力部隊のメンバーを率いて茂山郡三長（サムジャン）面三下（サムハ）洞の国師（ククサ）峰に進出し、地下革命組織責任者および政治工作員会議を開いた。この会議での演説『国内革命組織の課題について』で、北部朝鮮一帯を革命の強固な基地にし、国内各地に祖国光復会の組織をはじめ革命組織を拡大し、党創立の組織的・思想的基礎をさらにうちかためることを強調した。主席の意を受けて金正淑は、同年 6 月に茂山、延社（ヨンサ）地区に進出して延社地区党委員会を結成し、西頭水（ソドウス）水力発電所工事場、延社、新陽（シンヤン）などに党細胞と党分組をつくった。

主席は 1939 年 8 月に再び茂山、延社地区に進出し、朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議、祖国光復会組織責任者および政治工作員会議、国内党工作委員会会議などを開き、北部朝鮮一帯で朝鮮人民革命軍の小部隊、グループの軍事・政治活動を強化し、全国的規模で党および祖国光復会の組織をさらに拡大するための革命的な措置

を講じた。

主席の指導のもとに、豆満江沿岸の東満州地帯と北部朝鮮の広い地域に多くの革命組織がつくられ、秘密根拠地が設けられた結果、白頭山東北部一帯はいま一つの革命の強力なとりでとなり、日本帝国主義との最後の決戦に備える強固な戦略的基地となった。

主席はこの時期、社会主義国のソ連を武力で擁護する闘争を積極的に展開した。1938 年 7 月に日本帝国主義侵略者がソ連のハッサン湖一帯を侵攻したとき、臨江と樺甸一帯で多くの戦闘をおこなって敵の背後に打撃を加えた。1939 年 5 月に日本帝国主義が引き起こした「カルキンゴル事件[16](ノモンハン事件)」によってソ連・モンゴル連合軍が苦戦していたときには、朝鮮人民革命軍の各部隊を日本帝国主義の対ソ武力侵攻の補給路である鉄道沿線に集結させ、関東軍の兵力移動と軍需物資の輸送を阻止する戦闘を猛烈に展開した。そして、8 月初には各部隊に敵背撹乱作戦を展開する命令を下達し、安図県大沙河――大醤江戦闘など多くの戦闘を敢行させた。ソ連を武力で擁護するためにおこなった多くの戦闘で青春も生命もなげうって戦った金振(キムジン)をはじめ多数のプロレタリア国際主義戦士が輩出した。

主席は日本帝国主義が 1939 年 9 月から「東南部治安粛正特別工作」の名のもとに 20 余万の大兵力を動員し、朝鮮人民革命軍の最終的「掃滅」を目的にして開始した新たな「討伐」作戦に対処して、白頭山東北部一帯で大部隊旋回作戦を指揮した。

1939 年 10 月に安図県両江口で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を開き、『白頭山東北部の広い地域で大部隊旋回作戦を展開するために』と題する演説をおこなった。

大部隊旋回作戦は、主に密営を中心に軍事・政治活動を展開し

ていた従来の作戦とは異なり、大部隊で所定の秘密コースをたどり、広大な地域を旋回しながら一行千里の戦術、誘引、陽動作戦など多様な戦法を駆使して敵を奇襲しては姿をくらまし、敵を掃滅、弱体化させる流動作戦であった。

この大部隊旋回作戦の方針は、主動的な攻撃によって敵の新たな「討伐」作戦を粉砕し、抗日武装闘争をひきつづき発展させる積極的な方針であった。

主席は大部隊旋回作戦の第 1 段階として敦化遠征を断行した。大部隊の移動コースを擬装するため、移動方向をにわかに変更する戦術で敵を和竜、安図一帯の山と谷間に釘づけにし、数十里の強行軍で敦化の奥地に進出し、1939 年 12 月に六[illegible]松戦闘と夾信子戦闘を勝利に導いた。そしてひそかに南方に抜けて安図――撫松県境の松花江流域にある白石灘密営で 40 数日間の軍事・政治学習を指導した。

主席は 1940 年 2 月に部隊を率いて白石灘密営を発ち、大部隊旋回作戦第 2 段階の秘密コースを踏んで豆満江沿岸の国境一帯に進出し、3 月中旬に敵の「討伐」拠点の一つである大馬鹿溝を襲撃し、3 月下旬には和竜県紅旗河戦闘で勝利をおさめ、追撃してくる「前田討伐隊」を全滅させた。

紅旗河戦闘を契機に、「東南部治安粛正特別工作」の名のもとに強行された日本帝国主義の第 1 段階の「討伐」作戦は破綻し、大部隊旋回作戦は勝利のうちに終結した。

その後、主席は積極的な分散活動によって日本帝国主義の「東南部治安粛正特別工作」を最終的に撃破する闘争を勝利に導いた。

1940 年 4 月に安図県花拉子で開かれた朝鮮人民革命軍軍事・政

治幹部会議での演説『新たな情勢の要請に即して分散活動を果敢に展開しよう』で、敵の「討伐」攻勢を最終的に撃破し、朝鮮革命をひきつづき力強く発展させるために、朝鮮人民革命軍の各部隊を積極的な分散活動に移行させる新たな方針を示した。

主席は花拉子会議後、分散活動の要求に即して中隊単位で活動する小部隊を編制し、連続打撃、反復打撃、同時打撃といった多様な遊撃戦術と戦法を駆使して城市や集団村落を襲撃するようにした。こうして、山間地帯と国境地帯の敵を分散させ、敵の「討伐」を各個撃破した。

その年の夏、主席は大沙河付近で日本帝国主義のもっとも悪辣なかいらい武装集団である「新選隊」と遭遇し、絶妙な用兵術でこれを完全に掃滅した。この戦闘で、抗日の女性英雄金正淑は主席の身辺に危険が迫った瞬間、わが身をもって盾とし、主席を決死の覚悟で防衛した。

主席の指揮する 1940 年の春と夏の小部隊による分散活動は小部隊活動の試験段階であり、抗日武装闘争のつぎの段階の戦略的課題とそれを遂行するための基本的活動方式の策定において貴重な経験となった。

4

1940年8月～1945年8月

金日成主席は1940年代前半期の急変する情勢と朝鮮革命発展の要求に即して祖国解放の大事を主動的に迎える闘争を賢明に指導した。

1939年9月、ファシズム・ドイツのポーランド侵略に端を発した第2次世界大戦は急速に拡大していった。日本帝国主義は「大東亜共栄圏」の野望を遂げるため、中国大陸での侵略戦争を終えないまま、東南アジア地域に戦火を拡大することによって、国際的にも国内的にも孤立を深め、政治的、経済的、軍事的に抜きさしならぬ窮地に追い込まれていった。

日本帝国主義は戦線の拡大につれて急増する兵員と軍需物資の需要を満たせなくなったうえに、アジア諸国人民と自国人民の強力な抵抗に直面して進退両難の窮地に陥った。さらにはアジアに植民地の利権をもつアメリカ、イギリスなど帝国主義諸国との矛盾もいっそう深まっていた。

全般的情勢は日本帝国主義の滅亡が確定的で時間の問題であり、朝鮮人民が祖国解放の歴史的偉業を達成する日が近づいていることを示していた。

一方、新たな戦略的段階の任務を遂行できる主体的力量も準備

されていた。主席の指導のもとに朝鮮人民革命軍は、苦難にみちた闘争を通じて、いかなる状況にも対処できる多様な戦法と戦術を体得した強兵に、軍事的使命とともに政治的使命をも同時に遂行できる新しいタイプの特殊な革命軍に成長し、全般的朝鮮革命の遂行において確固たる指導的地位を占め、中核的な役割を果たせるようになった。当時、朝鮮人民革命軍は朝鮮の軍隊であると同時に、党であり、政権であった。また、党創立の組織的・思想的基礎がしっかり築かれ、広範な人民大衆が祖国解放戦線に結集して反日闘争に立ち上がっていた。

主席は、全般的情勢発展の推移と朝鮮革命発展の要求を科学的に洞察し、1940 年 8 月 10 日と 11 日の 2 日間、敦化県小哈爾巴嶺で朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部会議を招集し、『祖国解放の日を成功裏に迎えるために』と題する報告をおこなった。報告ではすぐる 10 年間の抗日武装闘争の過程で達成した成果と経験を総括し、急変する情勢に対処して祖国解放の大事を主動的に迎える準備を着実に整える新たな戦略的路線を示した。

主席は、祖国解放の大事を主動的に迎えるためには日本帝国主義を滅亡させる最後の決戦の準備を整え、解放された祖国に労働者階級の党と人民政権、人民の軍隊を創建し、革命をひきつづき強力に推進する準備を整えなければならないと述べた。

主席は祖国解放の大事を主動的に迎えるための戦略的課題を明らかにした。祖国解放の大事を主動的に迎えるためには、朝鮮革命の枢軸をなす朝鮮人民革命軍の力を保持、蓄積し、かれらを有能な政治・軍事幹部に育成すると同時に、人民を祖国解放の大事に対処できるよう、政治的、思想的にしっかり準備させるべきであるとした。

最後の決戦と新しい祖国の建設、この二つの課題は他国の人に肩代わりしてもらえるものではなく、朝鮮人民革命軍と朝鮮人民が遂行しなければならなかった。したがって、無謀な戦闘による損失を避け、主動的な活動によって革命力量を保持、蓄積し、人民を政治的、思想的に準備させて全民抗争に立ち上がらせることが、当時、朝鮮革命のもっとも重要な戦略的課題となっていた。

主席はこの戦略的課題を成功裏に遂行するため、大部隊の作戦から小部隊の作戦に転じる新しい方針を提示した。

この戦略的方針は、敵が朝鮮人民革命軍にたいする狂気じみた「討伐」を強行していた時期、朝鮮人民革命軍が主導権を握って敵に連続打撃を加えながら、自己の兵力を最大限に保持し、各地域で大衆政治活動を活発に展開して朝鮮人民の主体的革命力量をいっそう強化するとともに、日本帝国主義が満州での抗日遊撃部隊の活動を対ソ侵略の口実にしようとしている状況のもとで、先に勝利した革命を擁護し、全般的世界革命の発展をはかる革命的な方針であった。

主席は新しい戦略的方針を貫徹するため、朝鮮人民革命軍が小部隊による軍事活動を巧みに展開すると同時に、大衆政治工作を力強くくりひろげ、各兵士と指揮官を政治的、軍事的にしっかり準備させ、世界のすべての革命勢力との連帯を強化しなければならないと強調した。

この報告は、チュチェ思想にもとづき朝鮮人民が自力で日本帝国主義との最後の決戦を展開して祖国解放の偉業をなし遂げ、解放された祖国に新しい社会を成功裏に建設していく主体的革命力量を準備するうえで綱領的指針となった。

小哈爾巴嶺会議を契機に、抗日武装闘争は新たな戦略的段階に

移行し、朝鮮人民自身の力で祖国解放の大事を主動的に迎える準備が各分野にわたって強力に進められるようになった。

主席はこの会議以後、朝鮮人民革命軍の小部隊活動を精力的に指導した。1940 年 8 月中旬に小哈爾巴嶺で朝鮮人民革命軍の党政治幹部会議を招集し、変化した闘争戦略に即して部隊を新たに編制し、それに合わせて各部隊内の党組織と政治機関を改編する方途を明らかにした。政治幹部と軍事幹部、古参隊員と新入隊員を適切に組み合わせる原則で小部隊と工作班を編制し、相応の任務と活動区域を分担した。

そして小部隊と工作班にたいする統一的な指揮系統と連絡システムを確立し、装備も活動地域の特性と任務に応じて軽装にし、小部隊と工作班内に党細胞と党グループを組織し、その役割を高めるようにした。

主席は同年 9 月に間白山(カンベクサン)密営で朝鮮人民革命軍の小部隊および工作班の責任者会議を招集し、小部隊と工作班の任務を改めて具体的に示した。

主席は部隊を編制した後、小部隊と工作班が根城とする臨時秘密根拠地の設置に大きな力を注いだ。

小部隊と工作班に、1930 年代の後半期に白頭(ペクトウ)山地区をはじめ広い地域に設置された秘密根拠地をそのまま利用させる一方、その周辺に小部隊活動の特性に応じて新しい臨時秘密根拠地を設置するよう指示した。

この方向にしたがい小哈爾巴嶺会議以後、小部隊と工作班は朝鮮の北部から国内の奥深くにいたる全国各地の戦略的要衝と満州の広い地域に多くの臨時秘密根拠地を設置した。臨時秘密根拠地には

小部隊が利用する密営、および通信連絡、秘密会合、補給物資保管の場所などが設けられた。臨時秘密根拠地は小部隊活動の隠密性と敏活性を保障し、秘密根拠地との密接な連係が結ばれるように設けられた。

主席は 1940 年の初秋から始まった日本軍の「秋期および冬期討伐」作戦を粉砕する小部隊と工作班の軍事活動を賢明に導いた。

主席は朝鮮人民革命軍の小部隊を率いて 1940 年 8 月、安図県黄花甸子付近の沼地での戦闘を皮切りに、厳しい警戒網をくぐり抜けて敵が予想もしなかった地帯を移動しながら、安図、和竜、延吉などの広い地域と国内各地で絶妙な遊撃戦術による奇襲戦、要撃戦、破壊戦を連続展開して敵に大きな打撃を与え、小部隊作戦の模範を示した。

小部隊作戦を基本とし、これに大きな戦闘を組み合わせたため、敵は小部隊作戦に移行した朝鮮人民革命軍の戦術を察知できず右往左往した。

主席は小部隊と工作班の活動をエネルギッシュに指導する一方、かれらに食糧や衣服、医薬品を手に入れて送る慈愛にみちた配慮をめぐらした。

主席の卓抜な戦略戦術と用兵術、肉親の愛と配慮に励まされた小部隊と工作班は、国内と満州の広い地域での積極的な流動作戦によって日本帝国主義侵略者に連続打撃を与えた。こうして、東北地方全域と朝鮮北部国境地帯は小部隊と工作班の活動で色めき立った。

主席は 1940 年の秋、孟山村で会議を招集し、すべての隊員に革命勝利の確信を持していかなる試練にもうちかち、祖国の解放をめざして力強く戦っていこうと呼びかけた。この切々たる呼びかけに

感動した隊員たちは、あくまで主席と生死をともにし、革命の道をかわることなく歩んでいくことを決意した。この会議は、領袖と戦士の渾然一体、指導者と大衆の鉄のごとき統一団結を改めて誇示するとともに、革命的良心を貴び、司令官と戦士があくまで運命をともにすることが革命勝利の保証となることを朝鮮人民革命軍の隊員にいっそう深くさとらせた意義深い会議であった。

主席は、朝・中・ソ 3 国の共産主義者が国際ファシズムの「反共」連合に対抗する反帝・反ファッショ共同戦線を早急に形成すべき情勢の要求を洞察し、1940 年 12 月から翌年の 3 月中旬にかけてコミンテルンが招集したハバロフスク会議に参加した。会議には朝鮮人民革命軍と東北抗日連軍および満州の各省党委員会の責任幹部、コミンテルンとソ連側代表が参加し、新たな情勢の要求に即して朝・中・ソ 3 国の革命的武力の反日共同闘争を強化する問題を討議した。

主席は会議で、それぞれの独自性を尊重する基礎のうえで各武力の国際的連合を形成すべきであるとし、朝・中・ソ 3 国の革命の利益にも合致する共同闘争の形式と方法を探求し、同志的で私心のない態度でプロレタリア国際主義を最大限に発揮して共同戦線を実現する原則的立場を明らかにした。

ハバロフスク会議では、革命力量を保持、蓄積し、大規模な遊撃闘争から小部隊活動に移行する主席の戦略的方針が新たな情勢の要求に合致する正当な方針であることを確認し、東北抗日連軍と朝鮮人民革命軍の各部隊が兵力保持に重点をおいて小部隊活動を展開することについて真摯な討議をし、見解の一致をみた。

ハバロフスク会議は、小哈爾巴嶺会議とならんで 1940 年代前半

期の抗日武装闘争の内容と形式を確定し、朝鮮の革命家が祖国解放の確固たる信念を持し、朝鮮革命の主体的力量を強化しながら、迫りくる大事を主動的に迎え、国際的な反帝・反ファッショ連合戦線を強化する重要な契機となる歴史的な会合であった。

主席はハバロフスクに滞在するあいだ、北満州からきた朝鮮の革命家に会い、祖国解放作戦に関する構想と自力独立路線を示して真摯な討議をおこない、朝鮮革命のためにさらに力強く戦うようかれらを励ました。

金策（キムチェク）と崔庸健（チェヨンゴン）をはじめ北満州と南満州で活動していた革命闘士は、すでに 1930 年代の初めから主席を限りなく敬慕し対面を待望してきた願いが成就したことをこのうえなく喜び、主席を朝鮮革命の指導者、統一団結の中心として高く仰ぎ、祖国の解放をめざしてあくまで戦っていく決意をかためた。

主席はハバロフスク会議以後、白頭山地区と極東の臨時基地を出入りしながら、国内と東満州と南満州での小部隊活動を指導した。

主席は 1941 年 3 月、小部隊活動のため極東の基地を出発するとき、隊員たちに勧められて抗日の女性英雄金正淑（キムジョンスク）と一緒に記念写真を撮った。そして写真の裏に「他郷で春を迎え、1941 ・ 3 ・ 1 B 野営区にて」という直筆を残した。この写真は主席と金正淑にとって結婚写真ともいえる意味深いものであった。

主席は 1941 年 4 月、小部隊を率いて満州と国内に進出し、この一帯で活動している小部隊と工作班との連係を結んでかれらを統一的に指揮し、破壊された党および祖国光復会の組織をはじめ革命組織を再建し、新しい組織を結成し、地下組織網を通じて選抜された青年で武装隊伍を拡大する一方、かれらを祖国解放をめざす最後の

決戦と新しい祖国の建設に必要な幹部に育てるため精力的に活動した。そしてすべての指揮官と隊員が急変する情勢の要求に即して主体的立場を堅持し、小部隊と工作班の活動をいっそう積極的に展開するよう指導した。

主席は 1941 年 4 月、「日ソ中立条約」の締結と関連して一部の隊員と小部隊、工作班のメンバーのあいだに現れかねない思想的動揺を防ぎ、勝利の信念を抱かせるため、5 月に「われわれの力で朝鮮革命を完遂しよう！」という革命的スローガンを提示した。そして 6 月にはファシズム・ドイツの対ソ侵攻と関連して間白山密営で小部隊と政治工作班、革命組織の責任者に、新たな情勢の要求に即して主体的立場を堅持し、自分の力で朝鮮革命を完遂するための思想教育を強力に展開するよう強調した。

主席は同年 7 月、穏城（オンソン）郡タクサンゴル会議につづいて汪清県夾皮溝で朝鮮人民革命軍の小部隊責任者会議を招集した。この会議での演説『必勝の信念をもって祖国解放の偉業を成就しよう』で、国際情勢の変化と関連して現れかねない偏向を指摘し、朝鮮人民革命軍のすべての隊員が朝鮮革命の主人は朝鮮人民であるという革命的自覚と、自力で万難を排して朝鮮革命の完成を期する確固たる信念をもつべきであるとし、到来する革命的大事を主動的に迎える準備をしっかり整えるために革命勢力を準備し、朝鮮人民革命軍の小部隊、工作班の活動をさらに強化するよう強調した。

この演説は、いかなる環境のもとでも自主的立場を堅持し、朝鮮人民自身の力で祖国解放の大事を成功裏に迎えるための闘争を強化するうえで綱領的指針となった。

主席は夾皮溝会議以後、1941 年 8 月初、朝鮮人民革命軍の一小

部隊を率いて汪清——羅子溝間の道路工事場を襲撃し、労働者のあいだで政治活動をくりひろげ、各地域で活動する小部隊、工作班と広範な人民大衆に革命勝利の信念を植えつけた。

1941 年 9 月中旬、主席は再び小部隊を率いて満州と国内に進出し、各地域で活動する小部隊と工作班の活動を現地で指導しながら、かれらに必勝の信念を抱かせ、軍事・政治活動をさらに強化する課題を示した。ついで 10 月には慶源(キョンウォン)郡(現在のセッピョル郡)新乾(シンコン)里煙峰(ヨンボン)での小部隊と工作班、革命組織責任者の会議をはじめ諸会議で、敵情偵察を強化することを強調し、偵察の基本的任務と方法を具体的に示した。

主席の精力的な指導のもとに安吉(アンギル)、金一(キムイル)、柳京守(リュギョンス)、呉白竜(オベクリョン)、崔光(チェグァン)らの率いる朝鮮人民革命軍の小部隊と工作班は国内と東満州、ソ満国境一帯で軍事・政治活動と偵察活動を猛烈に展開して敵の兵員と戦闘技術機材、軍需物資の輸送に大きな打撃を与え、朝鮮人民革命軍の当面の戦闘活動と最後の決戦のための作戦計画の樹立に大いに寄与した。

共産主義革命闘士の金正淑は、1941 年 6 月に小白水(ソベクス)谷の白頭山密営に行き、白頭山を中心とする北部朝鮮一帯と長白地区の祖国光復会組織をはじめ革命組織を整備、拡大し、広範な大衆を結集する活動を進めた。

主席の指導のもとに抗日大戦の最後の勝利をめざす闘争に革命的転換がもたらされていた 1942 年 2 月 16 日、白頭山密営でパルチザンの息子——金正日(キムジョンイル)が誕生した。

主席は朝鮮革命の主体を強化するための国際的環境をつくり、国際反帝・反ファッショ勢力との連帯を強めるため、ソ・中共産主

義者とともに国際連合軍を編制した。

1942 年 7 月中旬、ソ連、中国の軍事幹部とともに朝・中・ソ武装力の連合問題を最終的に討議し、朝鮮人民革命軍と東北抗日連軍の独自性を維持するという前提のもとに、国際連合軍を創設することを決定した。主席は朝鮮人民革命軍司令官兼国際連合軍の朝鮮支隊長として活動した。

国際連合軍が編制されることによって、朝鮮人民革命軍は祖国解放の偉業とともに日本帝国主義を最終的に壊滅させる国際的義務をも遂行することになり、中国人民との共同闘争の段階から朝・中・ソ 3 国武装力の幅広い共同闘争の段階に移行することになった。

主席は朝鮮人民革命軍の活動の独自性を固守しながらも、中国とソ連の共産主義者との友好・団結を強化し、かれらの闘争を極力支持声援した。

主席は周保中、張寿籛、柴世栄、馮仲雲など東北抗日連軍の戦友との親交を深め、朝鮮人民革命軍の中核を国際連合軍の中国人部隊に多数派遣し、かれらの軍事・政治活動を極力援助するようはからった。またソ連極東軍の高位軍事・政治幹部と深い連係を保ち、かれらに朝鮮における日本帝国主義の兵力配置と統治方法、国内人民の反日闘争とその発展方向、ソ連との連合作戦の実際の可能性について随時説明した。

国際連合軍の組織とその発展のための主席の精力的な活動と懸命な努力は、革命闘争における個々の国の自主性と独自性、国際的団結と協力という二つの原則を正しく結合するりっぱな模範となった。

主席は国際連合軍の編制後、対日最終作戦を見通し、その遂行に寄与する軍事偵察活動と全民抗争の準備に重点を置き、小部隊活

動の幅と深度を拡大していった。

この時期の小部隊活動では工作班の活動を基本とし、これに比較的大きな小部隊活動を組み合わせる原則を堅持した。

この原則にしたがって軍事作戦においても工作班による活動に重点が置かれ、これに小部隊による襲撃戦と要撃戦が適切に結合され、軍事偵察活動と敵軍切り崩し工作が強化された。

主席は小部隊活動を強化する一方、朝鮮人民革命軍のすべての指揮官と隊員を政治的、軍事的に準備させる軍事・政治学習と訓練を強化するよう指導した。

主席はハバロフスク会議以後、軍事・政治訓練に有利なソ連の極東地方に訓練基地を定め、1941 年初から軍事・政治訓練を開始し、国際連合軍の編制後にはそれをいっそう強化した。

主席は祖国の解放後、新しい国づくりをするには自主独立国家建設の柱となる各分野の幹部を養成すべきだとし、軍事・政治訓練綱領における政治講義の比率を高め、朝鮮革命の主体的路線と戦略戦術で武装させる政治学習を強化する措置を講じた。

政治講義では『祖国光復会 10 大綱領』『祖国光復会創立宣言』『朝鮮共産主義者の任務』など主席の著作、および朝鮮の歴史と地理、文化についての学習を基本にしながら、哲学、政治経済学、党建設理論、それに経済管理運営に関する問題も扱った。

主席は自ら政治学習の課程案を作成し、時期ごとに政治課目担当の教員に政治学習の方向と方法を明示し、たびたび講義も受け持った。

主席は政治学習とともに軍事訓練の強化に大きな力を注いだ。

抗日戦争の経験と、独ソ戦争の経験をふまえて、朝鮮の地形と

朝鮮人の体質に合った朝鮮式の訓練を原則とし、すべての指揮官と隊員を遊撃戦法に精通させる一方、正規戦の要求に適合する現代戦の戦法を身につけさせる軍事理論学習と軍事実動訓練を猛烈におこなった。

現代戦の訓練では戦術訓練を基本とし、指揮官の戦術訓練を直接指導し、射撃、水泳、渡河、上陸作戦、スキー、無線通信、空挺隊などの訓練をこなし、落下傘訓練にもたびたび参加した。また隊員と指揮官に兵器学、地形学、衛生学、工兵学、対化学戦などの知識を習得させ、遊撃戦の訓練では襲撃戦と要撃戦に重点を置いた。

軍事・政治訓練を通じて朝鮮人民革命軍の指揮官と隊員は、政治と軍事、遊撃戦法と現代戦法、各兵種の技術を総合的に体得した政治・軍事幹部に成長していった。

主席は日本帝国主義との最後の決戦の時期が迫るにつれ、朝鮮革命の主体的力量をさらに強化し、全民抗争の準備を強力に推進する活動を賢明に指導した。

1943 年に入って全般的な国内国外情勢は朝鮮革命に有利に進展していった。スターリングラード激戦でのソ連軍の勝利は、第 2 次世界大戦の戦局を逆転させた。ファシズム・イタリアは降伏し、日本帝国主義は中国と東南アジア、太平洋戦線で守勢に立たされ、連戦連敗していた。日本の敗色が濃くなるにつれ、国内での日本帝国主義侵略者の統治体系が次第に麻痺していく反面、各階層の広範な人民の心は主席のいる白頭山にますます引きつけられていった。

主席は朝鮮革命の発展と新たな情勢の要請を洞察し、1943 年 2 月の新興(シンフン)郡西谷(ソゴク)里頭無峰(トウムボン)会議で、朝鮮人民革命軍の総攻撃と、それに呼応する全人民の蜂起、背後連合作戦によって祖国解放の歴史的

偉業を成就しようという祖国解放のための3大路線を示した。

主席は祖国解放のための総攻撃戦で主動的で中核的な役割を果たす朝鮮人民革命軍の隊伍を政治的、軍事的にいっそう強く準備させた。

1943 年 9 月に朝鮮人民革命軍政治幹部および政治教員におこなった演説『朝鮮の革命家は朝鮮をよく知るべきである』で、主席は朝鮮の革命家が責任をもって朝鮮革命を遂行するためには、祖国の歴史と地理、燦然たる文化伝統についてよく知らなければならないとし、その具体的内容と方法について、また祖国解放の大事を主動的に迎えるための闘争課題について明示した。

これにもとづき、朝鮮人民革命軍のすべての指揮官と隊員は「朝鮮の革命家は朝鮮をよく知るべきである」というスローガンをかかげて祖国についての学習を深め、朝鮮革命の戦略戦術と朝鮮の歴史と地理、文化、そして朝鮮の実情と党、国家、武力建設など新しい国づくりにおいて提起されるすべての問題について深く学習した。

朝鮮人民革命軍の全指揮官と隊員は軍事・政治訓練をさらに強力に推進し、正規の大学や軍官学校でも数年はかかる膨大な学習と訓練課程を短期間内に履修した。こうして朝鮮人民革命軍の隊伍は祖国解放の大事を迎えるための最後の決戦で主動的かつ中核的な役割を果たす鉄の革命武力に、やがて解放される祖国で新しい社会の建設を担っていくすぐれた幹部隊伍に成長した。

主席は祖国解放のための 3 大路線にしたがって全民抗争の準備を強力に推進した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「われわれは全民抗争の準備を進めるうえで、つぎのような問

題に深い関心を払いました。その一つは、国内にある秘密根拠地を全民抗争の軍事的・政治的拠点としてさらにかためながら、新たな臨時秘密根拠地を設けることであり、いま一つは、国内により多くの小部隊と工作班、政治工作員を送り込み、新たな情勢の要請に応じて全民抗争の力量を祖国解放作戦にしっかり備えさせることであり、さらにもう一つの問題は、国内の全民抗争の力量にたいする統一的指導を実現することでした」

主席は全民抗争の準備をいっそう早めるため、すでに国内に設置されていた秘密根拠地をしっかり固め、日本帝国主義との最後の決戦で戦略戦術上重要な意義をもつ全国の重要な地区にさまざまな形態と規模の臨時秘密根拠地を拡大するようにし、自ら国内の秘密根拠地と臨時秘密根拠地に出向いて半軍事組織の指揮メンバーの訓練を強化し、最後の攻撃作戦の発進基地を構築する活動を指導した。また秘密根拠地の建設を先行させながら、国内に小部隊と工作班、政治工作員をより多く派遣して全民抗争の力量をしっかり整え、最後の攻撃作戦の準備に万全を期するようにした。

主席は 1942 年 6 月の茂山(ムサン)郡豊山(プンサン)里瓶(トク)谷での地下革命組織および反日愛国団体の責任者会議と、1944 年 7 月の延社(ヨンサ)郡新章(シンジャン)里上壇山(サンダンサン)臨時秘密根拠地での全国祖国光復会組織の責任者会議で、各階層の広範な大衆を結束し、主体的革命力量をさらに拡大、強化し、すべての反日勢力を祖国解放の聖戦に総動員しようとアピールした。

主席は全民抗争のための革命組織、とくに武装組織をうちかためるため、1943 年 7 月の慶興(キョンフン)郡(現在の恩徳(ウンドク)郡)鹿野(ロクヤ)里オウン洞熊山(コムサン)での朝鮮人民革命軍小部隊、工作班および地下革命組織の責任者会議をはじめ諸会議で、自力独立の旗のもとに全民抗争をめざす労働

者、農民の武装隊をいたるところに組織し、強化する課題と方途を示し、この活動を精力的に指導した。

こうして、1942 年に城津（ソンジン）(現在の金策市)での白頭山会という秘密組織の出現につづいて、1943 年にはソウルで「金日成隊」が組織された。平壌（ピョンヤン）では主席の従弟にあたる金元柱（キムウォンジュ）をはじめ革命的青年によって祖国解放団が組織され、日鉄秘密結社と京城（キョンソン）(ソウル)地区武装蜂起準備結社、羅津（ラジン）人民武装隊などさまざまな名称の武装隊が全国各地に組織され、朝鮮人民革命軍の国内進攻に合流して武装暴動を起こす準備を進めた。

全民抗争組織を結成する動きは、日本侵略軍に強制徴集された朝鮮青年のあいだにも現れた。かれらは反日学徒兵武装隊を組織し、「目標　白頭山　金日成将軍」というスローガンをかかげて積極的に活動した。国内で共産主義運動にかかわっていろいろな組織に参与していた少なからぬ人たちも、主席の全民抗争路線を支持し、日本帝国主義との最後の決戦にのぞむ全民抗争の準備に合流した。

主席の指導のもとに全民抗争勢力は急速に成長し、1942 年、日本官憲によって発覚した国内の反日地下組織だけでも 180 余にのぼり、その人員は 50 余万に達した。

主席は国内の党組織を拡大、強化し、その役割を高め、成長した全民抗争勢力にたいする統一的な指導の実現をはかった。

主席は 1943 年 2 月の延社郡ウジョクゴルでの全国党組織責任者および党中核メンバー会議と 1944 年 7 月の羅津市於明山（オミョンサン）臨時秘密根拠地での国内党組織責任者会議などの会議で、国内各地で基層党組織を拡大し、当該単位と地域の実情に合わせて地域的党指導機関をうちかため、最後の決戦を前にした情勢の要求に即して党組織

の指導的役割を高める措置を講じた。

主席の指導のもとに重要産業地帯と戦略的要衝など国内各地で基層党組織が拡大され、平安(ピョンアン)南道地区党委員会と清津(チョンジン)地区党委員会などの地域的指導機関が組織され、それを通じて当該地域の祖国光復会組織と全民抗争組織を指導するようになった。

主席は全民抗争勢力を日本にまで拡大させた。政治工作員を派遣して、日本に結成された祖国光復会の組織と各種形態の反日組織を朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦に合流できるよう整備するとともに、新しい組織をひきつづき増やし、軍事偵察活動を強化するようにした。

主席は祖国解放の旗のもとに主義主張と党派を超越し、海外同胞の反日勢力や国内の民族運動団体との連係と合作の実現にも深い関心を払った。

日本帝国主義の滅亡の日が近づくにつれ、主席は労働者、農民、青年学生のあいだで各種形態の反日反戦闘争を力強く展開し、かれらを革命的に鍛えて全民抗争と武装暴動に備えさせるとともに、知識人にたいしても日本帝国主義の民族抹殺政策に反対し、民族の魂を守って雄々しく戦うよう導いた。

主席の指導によって、祖国解放の大事を迎えるための全人民的抗争態勢は周到に整えられていった。

1940 年代の中期にいたりファシズム・ドイツが敗北し、その同盟国であった日本が各戦線で敗戦を重ね、祖国解放をめざす最後の攻撃作戦の展開に有利な情勢が生じた。

急変する情勢の推移を洞察した主席は、1945 年 5 月、朝鮮人民革命軍の指揮メンバー会議で、自力で祖国を解放する作戦的方針を

示した。そして朝鮮人民革命軍の政治的・軍事的威力を各面から強化し、多くの政治工作員を国内に派遣し、抗争組織をしっかり準備させる一方、以前から構想し練りあげてきた最後の攻撃作戦計画を完成した。同年 6 月に国内の間白山密営で朝鮮人民革命軍の軍事・政治幹部会議を招集し、祖国解放の最後の攻撃作戦計画を発表した。この作戦計画に貫かれている戦略的意図は、朝鮮人民革命軍の積極的な攻撃作戦とそれに合わせた全民抗争、言い換えればしっかり準備された主体的革命力量の総攻撃によって日本帝国主義侵略者を撃滅し、祖国の解放を達成することであった。

主席は、間白山一帯に集結した部隊は予定のコースを経て各道に進出し、豆満（トウマン）江沿岸に集結した部隊は豆満江、鴨緑（アムノク）江沿岸と清津地区に進出させることにした。極東の訓練基地に集結している朝鮮人民革命軍の部隊は、平壌地方をはじめ各地域に空路で迅速に進出し、既設の秘密根拠地を占めて電撃的な軍事作戦を展開し、国内で活動する朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員は、抗争組織を大々的に拡大して人民を全民抗争に立ち上がらせることによって、全民族を随所で朝鮮人民革命軍の進撃に合流させることを計画した。

主席は 1945 年 7 月、ハバロフスクでソ連極東軍の高位軍事指揮官とともに、国際協約によって対日戦争に参加するソ連軍との共同作戦問題を協議し、具体的な対策を講じた。

その後モスクワでの対日作戦に関する会議に参加し、ソ連の党および軍部の高位幹部であるジュダノフとジューコフらに会い、当面の軍事・政治情勢と祖国解放後の自主独立国家建設に関する原則的立場を明らかにした。

主席は、朝鮮人民の主体的力量に依拠して日本帝国主義侵略者

を撃滅し祖国を解放する最後の攻撃作戦を指揮した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「朝鮮の解放は、ソ連軍が日本の関東軍を撃滅していた有利な状況のもとで、朝鮮人民と人民革命軍が自らの力によってなし遂げた偉大な結実です。1930 年代と 40 年代の前半期にわれわれが組織した国内の抗争組織と武装隊が、朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦計画にしたがって、国内各地に陣取っていた日本帝国主義の侵略兵力と植民地統治機構を制圧、掃討して国を解放したのでした」

主席は 1945 年 8 月 8 日、朝鮮人民革命軍各部隊に先鋒(ソンボン)郡土(ト)里と琿春県南別里、東興鎮など敵の国境要塞区域の各軍事要衝を奇襲させて、敵の防御体制に混乱を引き起こし、最後の攻撃作戦の突破口を開いた。

主席は 8 月 9 日、ソ連の対日宣戦布告と時を同じくして朝鮮人民革命軍の各部隊に祖国解放のための総攻撃命令を下した。朝鮮人民革命軍の各部隊は総攻撃に転じ、対日戦争に参加したソ連軍との緊密な連係のもとに日本侵略軍を掃討しながら怒涛のごとく進撃した。間白山密営を最後の攻撃作戦の出撃陣地とした朝鮮人民革命軍の各部隊は、隊伍を増強しながら作戦計画にしたがって進撃し、豆満江沿岸に集結した部隊は一挙に敵の国境要塞を突破して慶源、慶興（恩徳）一帯を掌握し、ひきつづき先鋒方面へと戦果を拡大して国内の広い地域を手中におさめた。そして海岸上陸部隊の先遣隊として出陣した一部の部隊は、地上部隊との緊密な共同作戦によって先鋒に上陸し、戦果を拡大しながら清津一帯へと進撃した。他の部隊は中国の金廠、東寧、穆稜、牡丹江を解放し、追撃戦を展開して関東軍に致命的な打撃を与え、豆満江の対岸に進出した。

朝鮮人民革命軍の最後の攻撃作戦に呼応して、すでに国内に派遣されて活動していた朝鮮人民革命軍の小部隊と政治工作員は、人民武装隊や武装蜂起組織、広範な人民を武装暴動へと立ち上がらせた。かれらは全国各地で日本侵略軍と憲兵、警察機関を襲撃、掃討して敵背撹乱闘争を果敢に展開し、進撃する人民革命軍を積極的に支援した。

咸鏡（ハムギョン）北道の羅津人民武装隊はソ連軍の上陸以前すでに都市を解放し、鵲峰（カチボン）武装隊は退却してくる敵を掃討し自力で会寧（ヘリョン）を解放した。清津、吉州（キルチュ）、城津（金策市）地区の武装隊は敵の敗残兵を掃討して工場を掌握し、警察機関を奇襲、掃討した。

江原（カンウォン）道の鉄原（チョルウォン）、法洞（ポプトン）地区や平安北道新義州（シンイジュ）地区の抗争組織は、警察官派出所や国境警備営所を襲撃し、道警察部と道庁を占拠し、飛行場にたむろしていた敗残兵を武装解除した。

平安南道と平壌地区では、祖国解放団を中心に構成された大規模な抗争隊伍が兵器廠を襲撃し、道庁と府庁を占拠し、黄海（ファンヘ）道の抗争組織も各地の敵を襲撃し制圧した。

わが方各部隊の猛烈な攻撃と積極的な全民抗争によって決定的打撃を受けた日本は、対日作戦開始後 1 週間目の 1945 年 8 月 15 日にあわただしく無条件降伏を宣言した。

主席は前線部隊の作戦を指揮する一方、最後の攻撃作戦計画にしたがって国内の重要地帯に降下する空挺隊を率いて飛行場へ向かったが、日本の予想外の早期降伏によって、空挺隊の作戦を中止せざるをえなかった。

主席は無条件降伏を宣言した後も抵抗をつづける日本侵略軍を完全に撃滅し、日本帝国主義の植民地統治体制をうちこわす闘争を

指導した。

日本の降伏後も、朝鮮総督府と朝鮮軍管区司令部は 1945 年 8 月 16 日に「政治運動取締要領」なるものを公布し、各地方に駐屯している管下の部隊に、朝鮮人民の解放闘争を鎮圧することを指令し、植民地統治体制を維持しようと狂奔した。

主席は朝鮮人民革命軍の各部隊と国内の抗争勢力に、抵抗をつづける日本侵略軍の敗残兵と敵の統治機構を容赦なく掃討するよう命令した。朝鮮人民革命軍の各部隊と全民抗争勢力は各地で抵抗する日本侵略軍を最終的に撃滅し、武装を解除する一方、植民地統治機構をうちこわし、党組織をつくり、地方自治機関や保安機関も設け、人民的な新秩序を確立した。

咸鏡南道と咸鏡北道を除いても、国内の抗争組織と武装隊は 8 月中旬の 1 週間のうちに 1，000 か所近くの敵統治機関を襲撃し、掃討した。

日本帝国主義の軍事支配機構は最終的に崩壊し、朝鮮人民は半世紀にわたる軍事支配のきずなから解放された。

朝鮮の解放は、15 年にわたって日本帝国主義に強力な軍事的・政治的打撃を与え、その支配体制を根底から揺さぶった朝鮮人民革命軍と、各階層を結集した全民抗争勢力の総動員によってなし遂げられたのである。

祖国解放の日を一日千秋の思いで待ち望んでいた朝鮮人民は、「金日成将軍万歳！」「朝鮮独立万歳！」を高らかに叫び、朝鮮人民革命軍を熱烈に歓迎した。

抗日武装闘争は偉大な勝利をもって終結し、祖国解放の歴史的偉業はりっぱに実現した。

抗日武装闘争の勝利は、抗日の伝説的英雄、金日成主席の賢明な指導のたまものであった。

つとに祖国と民族の運命を一身に担って祖国解放の壮途についた主席は、不滅のチュチェ思想と主体的革命路線によって朝鮮革命の進路を切り開き、類まれな軍事的英知と主体的戦法によって抗日大戦を勝利の道に導き、卓越した指導と高邁な人徳によって全民族を一つに結束して解放聖戦に奮起させ、抗日武装闘争の輝かしい勝利をもたらした。

主席は栄えある抗日武装闘争を勝利に導くことによって朝鮮民族の自主権を取りもどし、新しい社会建設の明るい道を開き、朝鮮民族の尊厳と栄誉、百折不撓の革命精神と英雄的気概を全世界にとどろかした。

主席は 20 星霜にわたる苦難にみちた抗日革命闘争を勝利に導く過程で、朝鮮革命をひきつづき力強く前進させる主体的力量をしっかり整え、朝鮮労働党と人民が末長く継承し発展させるべき輝かしい革命伝統を築いた。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「わが党の革命伝統は党と革命の歴史的根源であり、その命脈をつなぐ血筋であり、朝鮮革命偉業の完成のための確固たる資産です。金日成同志によって抗日革命闘争の炎の中で築かれたわが党の輝かしい革命伝統には、チュチェの思想、理論、方法が全面的に具現されており、不滅の闘争業績と経験が集大成されています」

栄えある抗日の革命伝統が築かれることによって、朝鮮人民はそれを全面的に継承し、チュチェの革命偉業を成功裏に前進させ、代を継いでりっぱに完成していけるようになった。

5

1945年8月～1947年2月

1945年8月、全国を揺るがす独立万歳の歓呼のなかで、平壌（ピョンヤン）とソウルの名望家たちは金日成将軍歓迎準備委員会を組織し、全人民は抗日の伝説的英雄であり解放の恩人である金日成将軍の祖国凱旋を待ち焦がれていた。

しかし、主席は祖国凱旋に先立ち、新しい祖国建設の準備に不眠不休の労苦を重ねていた。

主席は内外の情勢の推移を注視し、まず解放された朝鮮が進むべき道と新しい祖国建設の方途を示すことを第一義とした。

第2次世界大戦の終結は、ヨーロッパとアジア諸国に、民主主義にもとづく新しい社会建設の展望を開いた。

朝鮮でも全民抗争の過程で発揮された救国の熱意は、解放後、建国の熱意へと変わり、民主勢力は反動勢力を圧倒していた。ところが、ソ米両軍が国の北と南に進駐することによって、朝鮮は社会主義と資本主義の対決の場と化する恐れが生じた。

人民はひとしく新しい社会の建設を切望したが、何をどうすればよいのか、どの道を進むべきなのか皆目見当がつかなかった。新しい祖国建設の路線をどのように規定するかということは、朝鮮人

民にとって死活にかかわる問題であった。

主席は、民族の自主権を守り、新しい祖国の建設を進めるためには、革命の主体的力量を全面的に強化し、自力を発動しなければならないというゆるぎない立場と決心を持し、かねてよりあたためてきた自主的な新しい祖国建設の路線を完成するため不眠不休の労苦を重ねた。

日本帝国主義が降伏して 5 日目の 1945 年 8 月 20 日、主席は軍事・政治幹部を前にして『解放された祖国での党、国家および武力建設について』と題する演説をおこなった。この演説で、これまでの勝利にもとづいて朝鮮革命をひきつづき前進させ、反帝反封建民主主義革命を遂行し、富強な自主独立国家を建設するための建党、建国、建軍の 3 大課題を提示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「なによりもまず、朝鮮革命をゆるぎなく勝利へと導くマルクス・レーニン主義党を創立しなければなりません。これと同時に、人民政権をうち立てて革命の基本問題である権力の問題を解決すべきであり、また祖国と人民を防衛して革命の獲得物を守る人民武力を建設しなければなりません。当面のこの 3 大課題は、解放された祖国で朝鮮革命を急速に発展させるために 1 日も遅らせることのできない緊急な革命任務として提起されています」

主席の演説は、朝鮮の共産主義者と人民が主体的立場に立って新しい祖国の建設を進める道を示した灯台、党・国家・武力建設の綱領的指針となった。

主席は建党、建国、建軍の 3 大課題を実現する具体的な活動方向と方法について協議し、必要な組織・政治活動を進めた。

そして、帰国して建党・建国・建軍事業にあたる工作班を編成し、派遣地を確定した。また、数日間にわたってかれらのための講習会を開き、自ら講義を受け持った。講習会では、工作員の活動の内容と方法から各地方の風習にいたるまで、具体的な問題が扱われた。

主席は祖国凱旋の準備を整える一方、中国革命を支援することにも深い関心を払った。

1945 年 9 月 15 日、中国の東北地方に派遣する軍事・政治幹部への講話『中国人民の革命闘争を積極的に支援しよう』で、日本帝国主義の敗亡後、中国の東北地方を占拠しようとする蒋介石一味の策動によって困難な状況が生まれたいま、中国人民の革命闘争を支援することは朝鮮の共産主義者と人民の崇高な国際主義的義務であるとし、東北地方で武装隊伍の組織と民主的政権の樹立、共産党組織と大衆団体の結成を助け、民主勢力の統一戦線結成と朝中人民の団結を強めることに力を傾けるべきだと指摘した。

祖国への凱旋をひかえて短期間に新しい祖国建設の準備を終えた主席は、1945 年 9 月 19 日に元山（ウォンサン）港に上陸した。その日、朝鮮人民革命軍軍事・政治幹部と元山市共産党組織の責任幹部と対面し、『人民大衆を結集して新しい朝鮮を建設しよう』と題する講話をおこなった。この講話で、解放された朝鮮は、一部の人が主張しているように封建制度を復活させたり、ブルジョア制度を樹立する道に進んではならず、ただちに社会主義の道に進んでもならないとし、反帝反封建民主主義革命の段階で朝鮮の進むべき道は進歩的民主主義の道であり、解放された祖国に樹立すべき国家は民主主義自主独立国家であると指摘した。

翌日の 9 月 20 日、主席は咸鏡（ハムギョン）南道と咸鏡北道、鉄原（チョルウォン）地方に向

かう政治工作員たちに、新しい朝鮮の建設と共産主義者の当面の課題を示し、西海岸地区へ赴く抗日革命闘士たちとともに列車で元山を発ち、9 月 22 日の午前に平壌に到着した。

主席は、人民に祖国凱旋を告げることも、あれほど懐かしんでいた故郷万景台（マンギョンデ）への訪問も先に延ばし、建党、建国、建軍の 3 大課題を遂行するため精力的に活動した。

金日成主席は当時を回顧してつぎのように述べている。

「わたしも平壌入りした翌日から戦友たちとともに、建党、建国、建軍の 3 大課題の遂行に取り組みました。8 ・ 15 の解放後、わたしがもっとも多忙な日々を送ったのはそのころです」

主席は新しい祖国の建設のため、一方では平壌穀物加工工場や降仙（カンソン）製鋼所など工場や農村、住民地区で労働者、農民をはじめ人民に会い、他方では事務室や宿所で白頭（ペクトウ）山時代のように戦友たちと寝食をともにしながら、内外から訪ねてくる各階層の人士に会って国事を論じた。

1945 年 9 月末の南朝鮮の共産主義運動家との談話、政治工作員および平安（ピョンアン）南道共産党組織活動家協議会での演説、そして 10 月の初めに平壌労農政治学校の学生におこなった講義『進歩的民主主義について』などで、民主主義自主独立国家建設の道を重ねて示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「現段階における朝鮮革命は反帝反封建民主主義革命です。われわれはソ連式の民主主義でもなくアメリカ式の『民主主義』でもない、まさに朝鮮の実情に合った進歩的民主主義の道を進むべきです。進歩的民主主義の道、まさにこれが現下の朝鮮革命の路線であり正路であります」

主席は、進歩的民主主義は自主、連合、自由、富強、革命、平和を志向する特徴をもつとして、その具体的な内容を明示した。

主席は抗日革命闘争の時期に整えた強固な組織的・思想的準備にもとづき、速やかに党創立の偉業をなし遂げる活動にとりかかった。

革命的党を早急に創立することは、解放直後の朝鮮共産主義運動の実態からしてきわめて切実な要求となっていた。南朝鮮では祖国が解放されると、「M・L派〔17〕」「火曜派〔18〕」をはじめ分派分子が、なんの大衆的基盤もなしに陰謀的方法で「長安党」や「再建党〔19〕」なるものをつくり、「ヘゲモニー」争いに明け暮れていた。

主席は複雑をきわめる朝鮮共産主義運動の実態を洞察したうえで、抗日革命闘争の過程で鍛えられ育成された共産主義者を中核とし、国内国外の各地で活動していた共産主義者を網羅して統一的な党を創立する方針をうちだし、その実現をめざす活動を賢明に導いた。まず、各地に派遣した抗日革命闘士に、党組織を整備、拡大し、党組織のないところにはそれを新たに設けるようにさせた。一方、国内国外で活動していた多くの共産主義者と会って主体的な党創立方針について説明し、一日も早く統一的な党を創立すべきだと強調した。

そして1945年10月5日に党創立のための予備会議を開き、アメリカ帝国主義が南朝鮮を占領した状況のもとで朝鮮革命全般を主動的に推進するためには、有利な条件が整っている北朝鮮に強力な党中央指導機関として北朝鮮共産党中央組織委員会を創設すべきであるとし、「ソウル中央」を固執し北朝鮮共産党中央組織委員会の創設に反対する分派分子、地方割拠主義分子の策動を暴露、粉砕した。

こうした準備にもとづき、主席は1945年10月10日から13日

にかけて、平壌で党創立大会を開いた。

主席は、この大会での報告『わが国におけるマルクス・レーニン主義党の建設と党の当面の任務について』で、北朝鮮共産党中央組織委員会を結成することについて述べ、党の組織路線と政治路線をうちだした。

報告ではまず、党の組織的根幹をかため、党を無産階級を基盤とする強固な大衆的政党にし、党の思想、意志および行動の統一を実現し、民主主義中央集権制にもとづく革命的な規律を強めることを党の組織路線として規定した。

また、民主主義人民共和国を創建し、朝鮮を富強な民主主義自主独立国家に発展させることを党の基本的な政治課題として規定し、それを実現するための当面の課題は、民主主義的民族統一戦線を結成し、いっさいの反動分子を一掃して国の順調な民主的発展をはかり、民主主義独立国家建設の基本的土台をしっかり築き、共産党を拡大強化し、大衆団体の活動を強力に推進することであるとした。この当面の課題を遂行することによって、民主主義人民共和国の樹立を促進し、北朝鮮を富強な民主主義自主独立国家建設の強力な民主基地にすべきであると指摘した。

大会では、主席のうちだした党の組織路線と政治路線が朝鮮共産主義者の共通の政治綱領、党建設路線として採択された。

主席は大会で、党中央指導機関としての北朝鮮共産党中央組織委員会を結成し、党の創立を全世界に宣言した。これは、史上初のチュチェ型の革命的党の誕生であり、「トゥ・ドゥ」の結成にはじまる労働者階級の革命的党創立偉業の実現であった。

チュチェ型の革命的党の創立により、朝鮮人民は労働者階級の

真の前衛部隊、強力な政治的参謀部をもち、党の指導のもとに富強・自主の新しい祖国の建設を確信をもっておし進めることができるようになった。

10 月 13 日、党創立大会を締めくくった主席は、大会に参加した各道の党責任幹部を前にして『新しい朝鮮の建設と民族統一戦線について』と題する演説をおこなった。

この演説で民主主義人民共和国を建設するためには、労働者階級と農民だけでなく、民族資本家をも含むすべての愛国的民主勢力が参加する統一戦線を形成すべきであるとし、これに結集すべき対象を明らかにした。そして、この統一戦線は民主主義人民共和国を建設するための統一戦線であるため、日本帝国主義の手先との連合などありえず、日本の手先、民族反逆者は大衆的な闘争によって一掃しなければならないと強調した。また統一戦線において共産党の指導と独自性を保障する問題、団結と闘争を結びつける問題など、統一戦線運動の戦略戦術上の原則を具体的に示した。

党創立の歴史的偉業をなし遂げた主席は、1945 年 10 月 14 日、平壌公設運動場（現在の金日成競技場）で開かれた歓迎大会に臨んだ。主席は 10 余万群衆の熱狂的な歓呼にこたえ、『すべての力を新しい民主朝鮮建設のために』と題する凱旋演説をおこなった。

この演説で主席は、富強な民主主義自主独立国家建設の課題を示し、新しい民主朝鮮を建設するために民族の大団結をなし遂げるよう呼びかけてつぎのように述べている。

「朝鮮民族が新しい民主朝鮮を建設するために力を合わせるときがきました。各階層の人民はすべて愛国的熱意を発揮して新しい朝鮮の建設に奮起しなければなりません。力のある人は力を、知識の

ある人は知識を、金のある人は金をもって建国事業に積極的に貢献し、真に祖国を愛し、民族を愛し、民主を愛する全民族がかたく団結して民主主義自主独立国家を建設していかなければなりません」

崇高な愛国、愛族、愛民にもとづく民族大団結の憲章であり、建国の大綱領である主席の凱旋演説に接した人民は大きな喜びと感激にひたり、全国は新しい祖国建設への革命的熱情で沸き立った。

主席は党を創立し、人民に凱旋のあいさつをした後、故郷の万景台を訪れて祖父母をはじめ肉親と感激的な対面をした。

主席は党を創立した後、非凡な革命的展開力と賢明な指導によって、党の強化と大衆の組織的結束、そして軍建設、政権建設、民主主義民族統一戦線活動など、新しい祖国建設における困難かつ膨大な課題を同時におし進めた。

主席は、創立した党を組織的、思想的に強化し、党内に唯一的な組織・指導体系を確立することに深い関心を払った。

まず 1945 年 11 月の初めに、北朝鮮共産党中央組織委員会に機関党細胞を設けて最初の細胞会議の指導にあたり、党員の党生活を強化し全般的な党細胞の役割を高める対策を講じた。また、党機関紙として『正路（チョンロ）』[20]を創刊し、党の出版基地を築き、党の文献と各種の宣伝・教育資料を数多く出版して、党員と勤労者の思想・意識水準と政治・理論水準の向上をはかった。

そして、党の組織路線の貫徹を妨げる分派分子と地方割拠主義分子の策動を粉砕し、党活動に根本的な転換をもたらすため、1945 年 12 月に北朝鮮共産党中央組織委員会第 3 回拡大執行委員会を招集した。

会議で主席は、『北朝鮮共産党各級党組織の活動について』と題

する報告をおこない、『党の強化のために』と題する結語を述べた。

この報告と結語では、党創立大会以後の各級党組織の活動における成果と欠陥、とくに党の組織活動における欠陥が全面的に分析され、党を健全で強力なものに発展させる課題が示された。また、党勢拡大の方向を正して党の階級構成を改めること、党内の規律を強めて党の思想・意志の統一を保つこと、党と大衆との結びつきを強めること、党の幹部養成と党勢配置、唯一党員証の交付と党員の統計を正しくおこなうことなどが強調された。会議では金日成主席を首位に戴いて党中央指導機関を強化する歴史的な措置が講じられ、党中央の指示に反して党の規律に違反した分派分子に厳しい党の処罰が適用された。

この会議を機に、党活動全般にたいする主席の唯一的指導が実現し、党の組織的・思想的統一が強化され、党建設と党活動には新たな転換がもたらされた。

主席は党を組織的、思想的に強化する一方、広範な大衆を職業別、階層別に統一的な大衆団体に加入させ、党のまわりに結集した。

大衆の組織化は主権を獲得するためにも必要であるが、主権獲得後の国家建設と革命継続のためにも必要である。これは社会発展の原理であり法則である。

主席は新しい社会の建設における青年の役割と当時の複雑な青年運動の実態を分析し、それにもとづいてかれらを単一の青年組織に結集することに大きな関心を払った。

主席は各地方に結成された共青組織が青年大衆を結集し、青年運動を発展させ、新しい祖国の建設に青年を奮起させるうえで大きな役割を果たすよう指導した。

ところが共産主義思想を信奉する無産青年だけの結集体である共青をもってしては、広範な青年の結集は不可能であった。まして共青とともにさまざまな青年組織が生まれて活動する状況のもとで、各階層の青年を結集する単一の青年組織を結成しないことには、青年運動を分裂させるおそれがあった。

主席は 1945 年 10 月、共青を主動的に解散し、大衆的な青年組織としての民主青年同盟を創立し、各階層の広範な愛国青年をかたく結集するという路線をうちだした。

「愛国的青年は民主主義の旗のもとに団結せよ」というスローガンを示した主席は、民主青年同盟結成準備委員会を組織し、自らその名誉会長の任にあたった。そして、1945 年 10 月下旬には民主青年活動者大会を開き、『民主青年同盟の結成について』と題する結語で、民青の結成準備活動にかかわる具体的な課題と方途を示し、民青の組織路線をあくまで貫徹しなければならないと強調した。

主席は学生を民青に結集させることに深い関心を払い、1945 年 11 月下旬に新義州（シンイジュ）市内の各級学校の学生代表におこなった演説と、12 月の初めに、平壌市の中学生以上の学生青年大講演会でおこなった講演などで、すべての学生青年が民主青年同盟の旗のもとにかたく団結し、新しい民主祖国の建設に寄与するよう呼びかけた。そして 12 月下旬には学生同盟を民青に統合させた。

主席の指導のもとに、1945 年の末までに、全国の道、市、郡、面に民青団体が結成され、各青年団体がこれに統合された。

1946 年 1 月 17 日、主席は北朝鮮民主青年団体代表者会議を招集し、北朝鮮民主青年同盟の結成を宣した。

主席はまた、労働者、農民、女性を労働組合、農民組合、女性

同盟組織に結集し、中央組織を結成するための準備委員会を組織し、その準備を促した。それによって、1945 年 11 月に北朝鮮労働組合総連盟（職業同盟の前身）と北朝鮮民主女性同盟が、ついで北朝鮮農民組合連盟（農民同盟）が結成された。

こうして短期間内に多くの大衆団体が結成されることによって、各階層の広範な大衆が党のまわりにかたく結束された。

主席は建軍偉業の実現に大きな力を注いだ。

金日成主席はつぎのように述べている。

「朝鮮が完全な自主独立国家となるためには、国家と民族を防衛し、革命の獲得物を守る自己の強力な民族軍隊を創建しなければなりません。

自国の民族軍隊をもたない国家は、完全な自主独立国家と言えません」

新しい祖国建設に切実に求められるのは幹部であったが、主席はあえて多くの抗日革命闘士を正規武力の建設にふり向けた。

そして 1945 年 11 月に、近代的正規軍の初の軍事・政治幹部養成基地として平壌学院を創設し、それを母体として各軍種、兵種の軍事学校を設けた。また、各地に建国事業と人民の安全を守る保安隊、国境警備隊、鉄道警備隊を組織し、それにもとづいて正規軍の中核となる保安幹部訓練所を創設した。

主席は 1945 年 11 月に新義州航空協会を訪れ、新しい朝鮮の航空隊を創設する課題を示した。そして平壌と新義州、咸興（ハムフン）、清津（チョンジン）、会寧（ヘリョン）などの各地に航空協会支部を設け、それを統合して朝鮮航空協会を結成し、自ら会長の任にあたった。

主席の賢明な指導により、複雑かつ困難な情勢のなかでも、近

代的正規武力建設の準備は成功裏に推進された。

主席は人民政権建設の偉業を実現するために奮闘した。

まず、各地方に派遣した抗日革命闘士が地方人民委員会の組織活動を積極的に指導、援助し、平安南道、平安北道、咸鏡北道、咸鏡南道、黄海(ファンヘ)道などの各道に自治機関としての人民委員会または人民政治委員会を組織するよう指導した。

また、1945 年 10 月に開かれた北朝鮮共産党中央組織委員会第 1 回拡大執行委員会で、一日も早く勤労人民大衆の利益を擁護し代表する真の人民の政権を樹立することについて強調し、全朝鮮的な中央政府を直ちに樹立できない実情のもとで、中央政府の樹立をめざす活動の一環として北朝鮮に臨時の中央主権機関を創設する方針を示した。

党内に潜入した分派分子は、ソウルに組織されたブルジョア政権である「人民共和国[21]」を承認すべきだの、即刻プロレタリア独裁政権を樹立すべきだのといって、民主主義人民共和国樹立に関する党の政治路線に反対した。

主席は党の政治路線を貫徹するため、1945 年 11 月に北朝鮮共産党中央組織委員会第 2 回拡大執行委員会を招集した。そしてその会議での演説『真の人民の政府を樹立するために』で、政権の樹立と関連した分派分子の左右両翼の主張の反革命的本質と弊害を鋭く批判し、民主主義人民共和国樹立に関する党の政治路線を改めて明示し、新しい祖国建設の有利な条件が整っている北朝鮮に先に臨時の中央主権機関を創設しなければならないと強調した。

主席は人民政権建設を推進するため、各地に組織された地方人民委員会の構成と組織体系を整備、強化し、1945 年 11 月 19 日に

各道人民委員会連合会議を招集し、部門別の中央行政機関である北朝鮮行政 10 局を組織した。

地方人民委員会が整備、強化され、行政 10 局が組織されることによって、北朝鮮における中央主権機関創建の条件と可能性は熟成していった。

1945 年 12 月にモスクワで開催されたソ・米・英 3 国外相会議で朝鮮問題に関する決定が採択されたことと関連して、主席は自主的立場を堅持し、朝鮮の自主独立国家建設をめざす北と南の統一的臨時政府を樹立するため、最善の努力を尽くした。

モスクワ 3 国外相会議の決定は、朝鮮人民の民主的発展と、朝鮮の自由で統一した完全な独立国家建設を援助することを世界の人民に約束した国際的公約にひとしいものであった。

主席は、モスクワ 3 国外相会議の決定は総体的に見て、北と南にソ米両軍が進駐している実情において朝鮮の統一を一日も早く実現し、民主主義自主独立国家への発展に有利な条件を醸成するものとみなし、この決定を支持し履行する闘争へと全人民を立ち上がらせた。

1945 年 12 月 31 日、主席は北朝鮮共産党中央組織委員会の部長協議会でこの決定の真意と根本目的を明らかにし、これを支持する党の立場を公式に表明した。そして 1946 年 1 月 1 日の『新年を迎えて全国の人民に告ぐ』、それに南朝鮮共産党組織責任幹部との談話『アメリカと南朝鮮反動層の「反託」謀略[22]策動を暴露、粉砕するために』、1 月 5 日におこなった講演『モスクワ 3 国外相会議の結果と朝鮮人民の課題』をはじめ一連の演説や談話で、アメリカと南朝鮮反動層の「反託」陰謀を暴露し、モスクワ 3 国外相会議の

決定を履行する課題と方途を重ねて明示した。

1946 年の年初から 3 国外相会議の決定を支持する政党・大衆団体の共同声明が相ついで発表され、平壌とソウルをはじめ全国各地で大衆集会と示威が広範におこなわれた。

しかし南朝鮮では李承晩かいらい一味がアメリカ帝国主義の差し金のもとにモスクワ 3 国外相会議の決定に反対する「反託」運動を悪辣にくりひろげ、民族分裂の危機をつくりだした。こうして朝鮮の民族勢力は左翼と右翼、愛国と売国に分かれ、北と南、民主と反動間の対立とソ米間の緊張が激化し、統一的な民主主義臨時政府の樹立をめざす朝鮮人民の闘争に重大な難関が生じた。

主席はアメリカ帝国主義の民族分裂策動によって統一的な民主主義臨時政府の樹立が遅延している状況のもとで、統一政府の樹立を促進するため、北朝鮮に強力な中央主権機関である北朝鮮臨時人民委員会を組織する活動を積極的に推進した。

北朝鮮臨時人民委員会を創立することは、北朝鮮に強固な民主基地を築き、統一的な民主主義中央政府の樹立に有利な条件を整えるための措置であり、党の政治路線に完全に合致するものであった。

主席は 1946 年 2 月の初め、民主的政党・大衆団体の指導者たちで北朝鮮中央主権機関創設のための発起委員会を組織し、その準備を積極的に推進するよう指導した。

2 月 5 日には北朝鮮共産党中央組織委員会常務執行委員会で、北朝鮮臨時人民委員会樹立に関する具体的な問題を提示し、7 日には北朝鮮臨時人民委員会創立のための予備会議を開き、創立大会に提起する報告書と人民委員選挙に関する問題、それに北朝鮮臨時人民委員会の当面の課題を討議し決定した。こうした準備にもとづき、

主席は 1946 年 2 月 8 日、北朝鮮民主政党、大衆団体、行政局、人民委員会代表者協議会を招集した。

主席はその報告『当面する朝鮮の政治情勢と北朝鮮臨時人民委員会の組織に関して』で、北朝鮮に中央政権機関を創立する必要性と当面の課題を詳しく示し、北朝鮮臨時人民委員会組織に関する問題を討議、決定することを提議した。

協議会では労働者、農民をはじめ、各階層人民の代表によって北朝鮮中央政権機関である北朝鮮臨時人民委員会を組織した。そして北朝鮮臨時人民委員会が遂行すべき 11 か条の当面の課題を示した。

主席は 1946 年 2 月 8 日、全朝鮮人民の一致した意思と念願によって、北朝鮮臨時人民委員会の委員長に推戴された。

北朝鮮臨時人民委員会は、朝鮮における革命発展の要求と人民の意思に完全に合致する中央政権機関であり、人民自身の力によって組織され、人民の利益のために奉仕する真の人民政権機関であった。

この政権の基本的使命は、人民民主主義独裁の機能を遂行する一方、北半部において反帝反封建民主主義革命を遂行して革命的民主基地を創設し、次第に社会主義革命の段階に移る前提条件を整えることであった。

北朝鮮臨時人民委員会の樹立によって、朝鮮人民は初めて主権を掌握した国の真の主人となり、民主主義完全自主独立国家建設の強力な武器を手にすることになった。

主席は党の政治路線を具体化し、北朝鮮臨時人民委員会が遂行すべき『20 か条政綱』を発表した。

主席は人民政権を武器に民主改革を実行した。

立ち後れた植民地農業国である朝鮮の実情からして、土地改革

を反帝反封建民主主義革命の第一義的な課題とし、土地問題を朝鮮式にりっぱに解決した。

主席は封建的土地所有関係の束縛から抜け出そうという農民の世紀の念願を推しはかり、党創立後に初めて招集された北朝鮮共産党中央組織委員会第 1 回拡大執行委員会で、土地改革の基本方向を示した『土地問題に関する決定』を発表した。そして自ら大同（テドン）郡をはじめ農村各地に出向き、農民と膝を交えて農村の実態を具体的に調査、分析し、朝鮮農村の実情にかなった土地改革の原則と方途を一つひとつ確定した。一方、農民のあいだで政治活動と 3 ・ 7 制（地主対小作人の収穫配分比率）実施闘争、土地請願運動を強力に展開するようにし、かれらに土地改革の担い手としての自覚と思想的準備を備えさせた。

こうした準備にもとづき、主席は 1946 年 3 月初に開かれた北朝鮮共産党中央組織委員会第 5 回拡大執行委員会で「土地は耕作する農民に！」というスローガンをうちだし、土地改革の実施における重要な問題を全面的に明示し、3 月 5 日には『北朝鮮土地改革に関する法令』を発布した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「土地改革法令は農村における封建的土地所有関係と地主階級を一掃し、農民の個人所有にもとづく土地所有関係の確立を基本的課題として規定しています」

主席が示した無償没収、無償分配の原則にしたがって土地改革を実施し、没収した土地を国家の所有にせず勤労農民の個人所有にする土地改革方針は、朝鮮の農村に深く根づいていた封建的土地所有関係と搾取関係を一掃し、反帝反封建民主主義革命の段階におけ

る農民問題、農業問題をもっとも正しく解決する革命的な方針であった。

主席は土地改革において没収対象と基本闘争対象を正確に定めることに深く留意した。朝鮮の農村実態を具体的に調査、分析したうえで、5 ヘクタール以上の土地を所有して小作に出している者を地主と規定し、かれらがもっていた土地と住宅、役畜、農機具、果樹園、山林、灌漑施設などの財産をいっさい没収することにした。そして土地を自分の労働で耕作しているか小作に出しているかを基準にして、他人に小作に出していた土地は面積にかかわりなく全部没収することにした。

土地改革において一掃すべき基本闘争対象を地主と規定し、土地改革にもっとも切実な利害のある雇農と貧農にしっかり依拠し、中農と同盟し、富農を孤立させる階級政策を実施した。

そして優秀な党員と労働者を農村に派遣し、雇農と貧農によって農村委員会をつくり、かれら自身が労働者階級の援助のもとに土地改革の遂行を担当するようにした。これとともに「土地改革の実施に関する臨時措置法」を公布し、人民政権の独裁機能を強めて土地改革に反対する階級敵の破壊・謀略策動を徹底的に粉砕した。

主席は平安南道大同郡をはじめ各地方の農村に出向いて土地改革の実行状況を詳しく調べ、農民にあたたかい恩愛をほどこした。大同郡柴足（シジョク）面聖文（ソンムン）里を訪れた主席は、長年作男暮らしをした農民に地主の家と最上の土地を与え、手ずから門札にかれの姓名を書いて掛けてやり、標識まで記して分与された土地に打ち立てるようはからい、農民に土地の永遠の主人としてのゆるぎない信念と自負心を植え付けた。

このように主席の指導によって、土地改革はわずか 1 か月足らずの短期間内に徹底的に遂行された。

土地改革によって、100 万 325 ヘクタールに達する日本帝国主義者の所有地と親日派、民族反逆者、地主の土地が没収され、土地をもたないか、または少ししかもたない 72 万 4，522 戸の農民に分与された。

土地改革の実施によって封建的所有関係と搾取制度は永遠に一掃され、農民は土地のまっとうな主人となり、農業を速やかに発展させ人民経済全般の復興発展を促進できるようになった。農民大衆は確固と民主の側に立ち、労農同盟が強化され、農村は民主主義の根拠地に変わった。

主席は 1946 年 4 月の北朝鮮共産党中央組織委員会第 6 回拡大執行委員会で土地改革の勝利を総括し、それを強固にする措置を講じた。農村における党勢の拡大をはかり農村基盤をさらに強化する一方、1946 年 6 月には過重な雑税を一切なくし、単一の農業現物税制の実施に関する法令を発布した。そして農民銀行、消費組合などの信用・商業協同団体を設立し、農民の営農と生活上の便宜をはかった。これとあわせて「解放された朝鮮の最初の春を増産で迎え、ひとうねの土地も残さず耕そう!」というスローガンを示し、農民を農業生産へ奮起させた。

主席は重要産業の国有化も実施した。産業国有化は社会主義革命の段階で遂行すべきだとか、産業をいっさい国有化すべきだとする事大主義者、教条主義者の詭弁、それに日本帝国主義者の所有となっていた工場、企業所を敵性財産として処理しようとする一部ソビエト人の誤った主張をしりぞけ、1946 年 8 月 10 日に『産業、交

通運輸、逓信、銀行などの国有化に関する法令』を発布した。そして日本帝国主義者と買弁資本家、親日派、民族反逆者の所有となっていた産業施設を国有化の対象に規定し、徹底的に無償で没収して国有化した。また民族資本家と中小企業家の産業施設は国有化せず、その企業活動を奨励した。

重要産業の国有化により、帝国主義的搾取と従属の経済的基盤は一掃され、あらゆる社会的不幸の根源が産業分野から基本的に取り除かれ、社会主義的生産関係が発生し、民族経済を計画的に発展させうる経済的基礎が築かれた。そして労働者階級は主要生産手段の主人となり、その指導的地位がさらに強まった。

主席は経済改革を実施すると同時に、勤労者の民主主義的自由と権利を全面的に保証するため、1946 年 6 月 24 日に『北朝鮮の労働者、事務員にたいする労働法令』を、7 月 30 日には『北朝鮮男女平等権に関する法令』を発布した。そして司法・検察機関を民主化し、教育分野で日本帝国主義の悪影響を一掃し、人民的で民主的な教育制度を確立した。

教育事業、民族幹部養成の問題を新しい祖国建設のためのもっとも重要な問題の一つとし、革命の勝敗と民族の将来を左右するかなめの問題とみなした主席は、それを解決するために心血を注いだ。

主席は古くからのインテリを永遠なる同行者として信頼し、北と南に散り散りになっていた科学者、技術者、文化人を一人ひとり捜し出して集め、かれらが新しい祖国の建設で知恵と情熱を注げるようにした。同時に勤労人民出身の新しい民族幹部を自力で養成するため、1946 年 6 月に中央党学校（現在の金日成高級党学校）を、7 月には中央高級指導幹部学校(現在の人民経済大学)を創立し、ついで

10 月には金日成総合大学を創設した。また、この総合大学を母体にしていくつもの大学を設立し、さらに専門学校を早急に増設し、各大学に夜間および通信教育学部を設置し、各地に工場技術学校と夜間技術専門学校を設立する措置を講じた。

また、すべての子どもに教育をほどこせるように全国いたるところに中学校と人民学校を大衆的運動で建設させ、成人学校や成人中学校を設けて非識字者をなくし、勤労者が働きながら学べるようにした。諸般の民主主義的改革が実施される過程で、党と民主的政党、大衆団体との統一戦線はいっそう強固になった。

このような成果にもとづき 1946 年 7 月 22 日、主席は常設的な統一戦線組織である民主主義民族統一戦線中央委員会を創設して、民主主義民族統一戦線を中央から地方にいたるまで整然たる組織体系を備えた統一戦線組織にした。民主主義民族統一戦線には、共産党、新民党、民主党、天道教青友党などの 4 政党、それに北朝鮮労働組合総連盟、北朝鮮農民組合連盟、北朝鮮民主青年同盟、北朝鮮民主女性同盟、北朝鮮工業技術総連盟、北朝鮮芸術総連盟、北朝鮮記者同盟、北朝鮮仏教徒連盟、北朝鮮キリスト教連盟などの大衆団体が網羅され、600 余万に達する各階層の広範な大衆が民主主義の旗のもとに結束された。すべての民主的政党、大衆団体は民主主義民族統一戦線の旗のもとに結束し、新しい民主朝鮮の建設に邁進した。

主席は北朝鮮で共産党が強化され、民主主義革命が成功裏に推進されるにともない、勤労人民の大衆的政党を創立する活動を強力に推進した。

勤労人民の大衆的政党を結成することは、党と革命発展の合法

則的要求であった。

共和国北半部に人民政権が樹立され民主改革が実施される過程で、共産党の指導的地位は確固たるものとなり、労働者と農民、勤労インテリの同盟が強まり、新しい民主朝鮮の建設においてかれらの利害は共通のものとなった。こうした実状のもとで共産党と他の勤労者諸党が別個に存在するのは無意味であり、それは勤労大衆を分裂させる要因でもあった。南朝鮮においても民主勢力を分裂、瓦解させようとするアメリカ帝国主義と反動たちの策動がはなはだしくなっていた状況のもとで、民主的政党の合法的活動を保障し、反米救国闘争を力強く展開するためには、民主勢力の分裂を防ぎ、勤労大衆の統一団結を強化しなければならなかった。当時、共産党の当面の闘争綱領と他の勤労者諸党の綱領がおおよそ一致していたことは、勤労人民の大衆的政党の創立を可能にする確固たる基礎となった。

主席は変化した社会・階級関係と新たな情勢の要請を洞察し、1946 年 6 月に南北朝鮮共産党責任幹部協議会での演説『現段階において祖国を自主的に発展させるための諸問題について』で、共産党を他の勤労者諸党と合同して勤労人民の大衆的政党を創立する方針を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「現段階における勤労人民の大衆的政党の創立は、南北朝鮮の情勢が異なり闘争任務が相異なる状況のもとで、北朝鮮と南朝鮮で別々にすべきです。北朝鮮では共産党と新民党が合同して勤労人民の大衆的政党を創立し、南朝鮮では共産党と人民党、新民党が合同して勤労人民の大衆的政党を創立するのが望ましいと考えます」

共産党を他の勤労者党と合同して大衆的政党を建設するという主席の方針は、勤労大衆の分裂を防ぎ、革命勢力の決定的優勢を保障する革命的な方針であった。

北朝鮮での共産党と新民党の合同を成功裏に保障するため、主席は 1946 年 7 月の北朝鮮共産党中央組織委員会第 8 回拡大執行委員会で、党の名称と合同の手順および党中核の育成など、合同に関連した原則的問題を明らかにし、ついで北朝鮮共産党および朝鮮新民党中央委員会連席会議と拡大連席会議で、創立される北朝鮮労働党の綱領と規約、指導機関の細則、合同に関する宣言草案について討議、決定するようにした。

8 月初旬から両党の各級組織は拡大会議を開き、両党連席会議で採択された決定と合同宣言を通過させ、党の綱領と規約草案について討議をおこなった。両党の合同細胞会議、市、郡党および道党代表者会議が順次開かれ、8 月末までのわずか 1 か月のあいだに労働党の各級地方組織が結成された。各道党代表者会議では党創立大会に派遣する代表が選出された。

1946 年 8 月 28 日から 30 日にかけて、平壌で北朝鮮労働党創立大会が開かれた。

主席はこの大会で『勤労大衆の統一的党を創立するために』と題する報告をおこなった。

この報告で主席は、労働党の性格と基本的任務、闘争課題を明示し、労働党の創立を全世界に宣した。大会ではまた、党の綱領と規約を採択し、労働党の機関紙『労働新聞（ロドンシンムン）』と政治理論誌『勤労者（クンロジャ）』の発刊を決定した。

労働党の創立によって党の隊伍は急速に拡大され、党は勤労大

衆のあいだに深く根をおろした大衆的政党に発展した。ハンマーと鎌とペンを描いた党のマークは、労働者と農民、インテリを党の構成成分とする労働党の革命的で大衆的な性格を象徴している。

主席は南朝鮮における党の合同にも深い関心を払った。

主席は南朝鮮で 3 党の合同を破綻させようと企む敵と分派分子の策動を粉砕し、合同を早急に推進するために可能なすべての措置を講じた。とくに、1946 年 9 月に発表した著作『北朝鮮労働党の創立と南朝鮮労働党の創建問題について』で、党の合同に反対する分派分子の策動を暴露、批判し、合同を強力に推進するよう強調した。

こうして 1946 年 11 月に南朝鮮労働党が創立された。しかし、分派分子の分裂策動によって合同は形式的におこなわれただけで、南朝鮮労働党は勤労大衆の統一的党としての役割を果たすことができなかった。

主席は南朝鮮での党建設と党活動が正しい方向で進められるよう指導すると同時に、南朝鮮の革命勢力をうちかためてアメリカ帝国主義の植民地従属化政策に反対する大衆的闘争を強力に展開するよう導いた。

主席は 1946 年に発表した『米軍政と反動派の策動を粉砕し、民主勢力をうちかためよう』『8 ・ 15 解放 1 周年平壌市慶祝大会でおこなった報告』『現段階において南朝鮮労働運動に提起される課題について』などの諸著作で、南北朝鮮でそれぞれ該当地域の特性に応じて革命を推進するという地域革命に関する思想を明らかにし、南朝鮮人民の闘争課題と南朝鮮革命運動の戦略戦術的方針を提示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「南朝鮮でも北朝鮮と同様、人民が主人になって徹底した民主

改革を実施することなしには、朝鮮人民の基本的要求である民主主義的自主独立国家の創建を実現することができません」

主席は南朝鮮人民の闘争で何よりも重要なのは、アメリカにたいする幻想、外部勢力依存思想を徹底的に排撃し、正しい建国姿勢と自主的立場を堅持し、アメリカ帝国主義とそれに阿諛追従する売国奴、民族反逆者と容赦なくたたかうことであると強調した。

また、南朝鮮の革命勢力を強化するため、労働者、農民、民主人士をはじめ各階層の愛国的人民を広く結集する民主主義民族統一戦線を形成する問題、大衆闘争において左右の偏向を克服し、さまざまな闘争形態と闘争方法を適切に結合する問題などを具体的に示した。

主席はアメリカ帝国主義とその手先の弾圧をはねのけて平壌を訪れる南朝鮮の各階層の愛国的民主人士と代表たち、そして記者たちを温かく迎え、南朝鮮の革命運動を発展させるための課題を示した。平壌を訪問して南朝鮮に帰った各団体の代表や民主人士は、主席の指導を仰ぎ統一独立国家の建設をめざして力強くたたかい、記者たちは会見記や主席の略歴などを執筆、出版して、南朝鮮人民のあいだに主席の功績と偉人像を広く宣伝した。

南朝鮮の人民は主席を民族の偉大な指導者と仰ぎ、北半部における民主建設の成果に限りなく励まされ、アメリカ帝国主義の植民地従属化政策に反対する闘争に立ち上がった。

1946 年 9 月、南朝鮮の労働者は米軍政のあらゆる暴圧の即時中止、民主主義的労働法令の実施などを要求してゼネストに突入した。この闘争は 10 月に入って全人民的抗争に発展した。

主席は、共和国北半部において新しい社会の建設を成功裏に推

進する愛国的大衆運動を強力に展開するよう導いた。

まず諸般の民主改革が成功裏に遂行された新しい環境に合わせて、勤労者の古い思想意識を変革する建国思想総動員運動を指導した。

主席は 1946 年 11 月の北朝鮮臨時人民委員会第 3 回拡大委員会で、建国思想総動員運動を展開する方針を示し、12 月の党中央委員会第 14 回常務委員会と民主主義民族統一戦線中央委員会第 8 回会議で、思想意識を変革するための具体的な課題と方途を示した。

主席は、建国思想総動員運動は日本帝国主義が残したすべての退廃的な因習と生活態度を一掃し、新しい民主朝鮮の活動家としての精神と品格、道徳と戦闘力を全面的に培養し、躍動する民族的気風をつくりだす一大思想改造運動であるとして、この運動を思想闘争と思想教育の方法で進め、新しい祖国の建設をめざす人民大衆の実践闘争と密接に結びつけて進めなければならないと強調した。

主席の教えを心に受けとめたすべての党員と勤労者は、古い思想の残りかすを一掃し、新しい建国思想で武装する一方、「その日の仕事はその日のうちになし遂げよう！」というスローガンのもとに、建国思想を革命課題の遂行に具現するため刻苦勉励した。

その過程で、利己主義と腐敗と怠惰、官僚主義と無責任さ、使用人根性など古い思想の残りかすが克服され、敵対分子、異分子、出世主義者、怠慢分子が摘発、一掃され、人民大衆の建国意識と政治的自覚、愛国的熱意と革命的積極性がかつてなく高まった。

全人民的運動として展開された建国思想総動員運動は、党員と勤労者の思想意識の革命的改造において一大転換をもたらした。

主席は大自然改造と増産競争運動を強力に推進した。

大自然改造の手初めとして普通（ポトン）江改修工事を発起した主席は、

1946 年 5 月には起工式に参加してくわ入れのシャベルを取り、すべての平壌市民を奮起させた。こうして日本帝国主義者が 10 年近くの年月をかけても一部の工事しか進められなかったこの膨大な事業がわずか 55 日間で完成されるという奇跡が生まれた。

主席は日本帝国主義者によって破壊された経済を早急に復旧、発展させるため、愛国的な増産競争運動を展開するよう導いた。

1946 年 2 月の党中央組織委員会第 4 回拡大執行委員会で、工場、鉱山、農村で労働英雄運動を広く展開する課題を示し、また咸鏡南道と咸鏡北道の各地を現地指導し、労働者、農民を労働英雄運動へと奮起させた。

この労働英雄運動はまたたくまに全国の工場、企業所と農村に拡大され、1946 年末までに 822 の工場、企業所が復旧されて操業を開始し、解放後初年度の農業は大豊作をおさめた。

主席は労働英雄運動が拡大される過程で、労働者、農民のあいだで発生した各種形態の増産突撃運動と愛国的行為を広く一般化するよう導いた。

1946 年 12 月、主席は愛国的な増産運動を展開し多収穫をおさめて国家に愛国米を拠出した金済元（キムジェウォン）と黄海道載寧（チェリョン）郡の農民に感謝の手紙を送った。そして愛国米拠出運動を発起した金済元農民の美挙を新しい朝鮮の真の愛国者の模範的行為、愛国衷情の現れとして高く評価し、この模範を見習って愛国米拠出運動を活発に進めるよう全国の農民を励ました。そして 1947 年 1 月には自力更生の革命精神を発揮して破壊された数十台の機関車を修理し、輸入に頼っていた高カロリー炭が切れると、採炭突撃隊を組んで国内炭を採掘して鉄道の運行を保障した定州（チョンジュ）機関区の労働者たちに祝賀文を送って

その英雄的な行為を賞揚し、全国の鉄道部門従事者にこの模範を見習うよう呼びかけた。工業と農業をはじめ人民経済の各部門、各単位で活発に進められた労働英雄運動、愛国的な増産競争運動は、国の経済発展を強力に推進した。

主席は識字運動を活発に展開するよう指導した。

非識字者の絶対多数が農村の女性と農民であった実情にかんがみ、農閑期を利用して識字運動を強力に展開するため、1946 年 11 月下旬には北朝鮮臨時人民委員会で冬季識字運動に関する決定を採択した。

「人民文化の向上は識字から!」というスローガンを示した主席は、この運動が党と国家の指導のもとに全社会的・全人民的運動としておし進められるよう指導した。

主席はすべての里(洞)に冬季農村識字班を設け、中央から地方にいたるまで、各級人民委員会の教育責任者が識字運動を責任をもって組織的におこなう措置をとった。この運動では金日成総合大学の学生と各級学校の教員、各政党、大衆団体の優秀なメンバーが教員に任命されて活動した。

識字運動が全人民的運動として展開されて、勤労者の一般知識水準と技術・文化水準は系統的に向上し、民主的民族文化の建設を促進させることができるようになった。

建国思想総動員運動と増産競争運動、識字運動は、勤労者の自主性を束縛していた古い思想や技術、文化の後進性を一掃し、新しい民主朝鮮建設の促進に大きく貢献し、思想、技術、文化の 3 大革命の端緒となった。

主席の賢明な指導のもとに、短期間のうちに反帝反封建民主主

義革命の課題は成功裏に遂行され、新しい民主朝鮮の建設が推進されて、共和国北半部には人民民主主義制度が確立され、祖国統一の確固たる保障である革命的民主基地が創設された。こうして朝鮮革命は新たな高い段階に向けての発展が可能となった。

6

1947年2月～1950年6月

金日成主席は、共和国北半部で反帝反封建民主主義革命が完遂されるにともない、社会主義へ移行する過渡期の課題遂行へ人民大衆を奮起させた。

北半部における社会主義革命への移行は、朝鮮の社会・経済発展と革命発展の合法則的要求であった。

主席は、社会主義革命の任務遂行に合わせて政権問題を朝鮮式に解決した。

主席は、既存の政治機構をすべて打ち壊し、新しい国家機構を打ち立てる方法で社会主義政権の問題を解決すべきであるとする既成の理論と経験にとらわれず、反帝反封建民主主義革命の段階で樹立された人民政権を、民主選挙によって社会主義革命の任務を遂行する政権に発展させる方針を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「わが党は、反帝反封建民主主義革命を通じてかちとった社会的変革にもとづき、人民政権を革命発展の要求に即応してプロレタリアート独裁の機能を果たす社会主義政権に強化発展させました」

1946年9月の北朝鮮臨時人民委員会第2回拡大委員会と北朝鮮

民主主義民族統一戦線中央委員会第 5 回会議、北朝鮮労働党中央委員会第 2 回会議などで、主席は選挙の意義と朝鮮の選挙制度の特徴、その手続きと規定について詳説し、選挙を成功裏におこなうための措置を講じた。そして 10 月には平安（ピョンアン）北道の義州（イジュ）、朔州（サクジュ）、定州（チョンジュ）と平安南道の江東（カンドン）郡三登（サムドゥン）面を訪れ、選挙の準備活動を指導した。また、11 月 1 日には平壌（ピョンヤン）市民主選挙慶祝大会に参加して『歴史的な民主選挙をひかえて』と題する演説をおこない、すべての有権者がこぞって選挙に参加するよう呼びかけた。

主席の教示と実生活の体験を通じて、人民委員会こそ人民の利益を代表し擁護する政権であることを深く体得した人民は、民主選挙で人民委員会に全幅的な支持と信頼を表明した。こうして 1946 年 11 月 3 日、朝鮮における史上初めての道・市・郡人民委員会委員選挙は輝かしい勝利をおさめた。初の民主選挙の勝利を通じて朝鮮人民は、主席と人民政権のまわりにかたく結集した不敗の統一団結の威力と愛国的な熱意を余すところなく示し、自力で十分に自主独立国家を建設しうることを全世界に誇示した。

主席は民主選挙の勝利を踏まえて 1947 年 2 月、平壌で道・市・郡人民委員会大会を招集した。大会では、北朝鮮臨時人民委員会が発布した民主的諸法令を承認し、1947 年度の人民経済計画を採択し、最高主権機関である北朝鮮人民会議を創設した。

主席は北朝鮮人民会議第 1 回会議での報告『北朝鮮臨時人民委員会の活動総括について』で、革命発展の新たな要請に応じて北朝鮮臨時人民委員会は政権を北朝鮮人民会議に委譲すると発表した。

1947 年 2 月 21 日、主席は全人民の一致した意思と念願によって、北朝鮮人民委員会委員長に推戴された。主席は人民会議の委任によ

り新たな中央政権機関である北朝鮮人民委員会を創設した。

北朝鮮人民委員会は、社会主義革命と社会主義建設の強力な武器として、北半部において次第に社会主義へと移行する過渡期の任務を遂行し、労働者、農民をはじめ広範な勤労人民大衆にたいしては民主主義を実施し、ひと握りの反動分子にたいしては独裁を実施する真の人民の政権であった。

北朝鮮人民委員会の樹立後、主席は面・里(洞)人民委員会委員選挙を実施して各級地方人民委員会を新たに構成し、人民政権が中央から地方にいたるまで整然とした体系を確立するようにした。

北朝鮮人民委員会の樹立は朝鮮における社会主義への移行の歴史的転機となり、このときから朝鮮人民は資本主義から社会主義への過渡期の任務を遂行する道に入ることになった。

主席は、過渡期の初期に経済建設で一貫して堅持すべき路線と人民経済の復興発展の方向と方途を明示し、それを実現する闘争を賢明に指導した。

北半部で民主諸改革が成功裏に遂行され、新たな社会的・経済的基盤が築かれた状況のもとで、経済建設を強力に推進することは、民主基地をさらにうちかため、国の完全自主独立と富強発展をなし遂げるための重要な課題として提起された。

主席は 1947 年 2 月、『北朝鮮道・市・郡人民委員会大会を終えるにあたって』『国家の財政管理をりっぱにおこなうために』など一連の著作で、国の完全自主独立と富強発展をなし遂げるためには必ず自立的民族経済を建設して経済の自立性を保障しなければならないと指摘した。

主席は自立的民族経済建設路線にもとづき、日本帝国主義の軍事

的占領によって経済が全般的に立ち後れ、それさえもはなはだしく破壊されている実情において、経済建設の第 1 段階を復興期と規定し、この期間に破壊された経済を復興するだけでなく、工業とその他各部門で日本帝国主義支配の悪影響を一掃し、国営部門が支配的な地位を占めるようにする経済建設の基本的方向を示した。そして重要な工業部門と鉄道運輸、逓信、対外貿易および金融機関にたいする国家の直接的な計画的管理を保障し、人民経済の発展において国営部門の指導的役割をたえず強めるうえで国営部門と協同組合部門、個人経営部門を正しく結合することを経済政策の基礎とした。

主席は過渡期初期の党の経済政策と経済建設方向にもとづき、自主独立国家建設の基礎をうちかためる 1947 年度の膨大な人民経済計画の遂行へと人民大衆を立ち上がらせた。1947 年 3 月の党中央委員会第 6 回会議での結語『大衆指導方法を改善し、今年度の人民経済計画を成功裏に遂行するために』、5 月の北朝鮮人民委員会第 36 回会議での結語、10 月の党中央委員会第 10 回会議での結語など一連の著作で、初の人民経済計画を成功裏に遂行するための各級党組織と人民政権機関、大衆団体の課題を示し、その実現のための措置を講じた。

主席は、各級党組織と人民政権機関が人民経済計画の遂行に大きな力を注ぎ、幹部の責任感と経済活動の指導水準を高めるようにするとともに、勤労者団体が党と大衆を結びつけるベルトとしての役割と、生産者大衆を教育して経済建設に立ち上がらせる大衆的政治組織としての役割を果たすよう導いた。また、人民経済計画の遂行において勤労者の建国熱意と生産意欲を高めるため、建国思想総動員運動をひきつづき力強く展開するようにし、1947 年 4 月には

民主建国事業で愛国的献身性を発揮した功労者に授与する北朝鮮人民会議常任議員会の表彰状を制定する措置を講じた。

主席は人民経済の主導的部門である工業を復旧し発展させるため、1947 年 5 月の党中央委員会常務委員会で、産業部門幹部の責任感と役割を高めるための具体的な課題を示し、同年の 3 月と 7 月には黄海（ファンヘ）製鉄所、4 月には平壌製糸工場、9 月には城津（ソンジン）製鋼所を現地指導し、自力で工場、企業所を早急に復旧し、生産計画を超過遂行するようアピールした。

主席は農業生産を増大させるため、農民の本務は営農実績を上げることであるとし、4 月には江東郡の馬灘（マタン）灌漑工事を現地で指導し、6 月には美林（ミリム）平野に出向いて農民と一緒に田植えをしながら、かれらを穀物増産へと奮い立たせた。そして同年 9 月には陽徳（ヤンドク）郡隠下（ウンハ）里クジゴルの農民を訪ねて「山をひかえたところでは山を十分に利用しなければならない」とし、「黄金の山」の新しい歴史を開いた。

また、1947 年 4 月 6 日には紋繡（ムンス）峰に登って手ずから植樹し、祖国の山々に木を植えてりっぱに育てることは、人民に幸せな生活をもたらし、次代に豊かな山林資源と美しい山河を譲り渡す万年大計の自然改造事業の一つであるとし、全国各地で山林の造成を大衆的運動として展開するよう呼びかけた。

主席は 1947 年 12 月に通貨改革を実施して民族貨幣を発行する措置を講じ、自主的な財政・金融システムの確立と経済の発展、人民生活のさらなる安定と向上をはかった。

主席の指導のもとに、最初の人民経済計画はりっぱに遂行された。1947 年度の国営工業生産高計画は 102.5％と超過遂行され、穀物は前年に比べて 17 万トンの増収となった。工業生産高のうち

で国営工業が占める比率は 80.2％に達した。学校は前年に比べて 1.4 倍、学生は 1.3 倍に増え、また数多くの病院と診療所が新設され、労働者、事務員とその扶養家族に社会保険による無料治療制が実施された。

主席は最初の人民経済計画の遂行にもとづき、1947 年 9 月の党中央委員会政治委員会で、1948 年度の人民経済発展計画の作成方向を示し、1948 年 2 月の北朝鮮人民会議第 4 回会議で 1948 年度の人民経済発展計画を提示し、その実行のための闘争をおし進めた。

主席の指導のもとに 1948 年度の人民経済計画も完遂された。その結果、国営および協同団体の工業総生産高計画は 102%と超過遂行され、工業生産は前年度に比べて 50.6％増大し、また穀物収量も日本帝国主義支配時期の最高収穫年度のそれを 10.4％上回って食糧を自給自足できるようになった。

主席は過渡期の初期、大衆の意識水準を考慮して社会主義革命のスローガンを前面に押し出さず、生産関係の社会主義的改造の準備を進めた。

過渡期の初期に生産関係の社会主義的改造を部分的におこないながら、主としてその準備を進めるという方針は、社会主義革命発展の合法則的要求と朝鮮の具体的実情にたいする科学的な分析にもとづいた正当な方針であった。

主席は 1947 年 9 月の党中央委員会常務委員会での演説『生産合作社を組織することについて』で、生産合作社の組織と運営における原則的問題と具体的な方途を示した。そして、自発性の原則にもとづいて農村の家内副業にたずさわる人や手工業者で生産合作社を組織し、農村で合作社の数が増え、その経験が蓄積されしだい、都

市の手工業者で各分野の生産合作社を広く組織するよう指導した。

主席は零細漁民の生活を改善し、かれらを社会主義的に改造するため、1947 年 8 月に農林局の責任幹部に与えた指示『水産合作社を組織することについて』で、漁村に水産合作社を組織する方針を示した。そして 9 月下旬には鏡城（キョンソン）郡塩盆津（ヨムブンジン）を訪れ、漁業を協同化するための具体的な方途を示し、翌年 7 月の党中央委員会常務委員会をはじめ一連の会議で水産合作社を広範に組織するための新たな対策を講じた。

主席は生産合作社と水産合作社を組織的、経済的に強固にし、その優越性を発揮させるため、国家の指導と援助を強める種々の措置を講じた。そして合作社が急増するにともない、これにたいする独自の指導体系を確立するよう導いた。

都市と農村、漁村に組織された各形態の合作社は、小商品生産者の建国熱意を高めるとともに、かれらに社会主義的集団経営の優越性を認識させ、協同経営の運営方法を体得させた。こうして、手工業と水産業部門の協同化を全面的におし進める下地がつくられた。

主席は過渡期の初期、農民の建国熱意と土地にたいする愛着を推しはかり、土地改革の成果をかため、その生命力を発揮させることに主力を注ぎながら、将来の農業協同化の実現に必要なすべての条件を整える方向でその準備を進めるよう指導した。

農業協同化に有利な条件を整えるため、主席は富農経営の発展を制限する措置を講じる一方、農民に集団経営の優越性を認識させる実地教育をおこなうようにした。

また、農民銀行と消費組合の活動を強化して、中間搾取をなくし、農民の生活の安定、向上に寄与するようにした。そして各地に

設けられた国営農牧場を発展させ、その先駆的役割を果たすよう導いた。同時に、農村で古くから伝わる役牛の共同利用、労力互助といった協同的労働形態を広く普及し奨励して、農民が共同労働の優越性を認識し、互いに助け導き合う生活気風を確立し、共同労働になじむようにした。そして、牛馬賃耕所と農業機械賃耕所の設置、灌漑工事、化学肥料の生産、供給など農業の社会主義的改造の物質的条件を整える活動も積極的におし進めた。

主席は先を見通した資本主義的商工業の社会主義的改造の準備にあたり、私営商工業者の肯定的な側面を利用し、否定的な側面を厳しく制限する措置を講じるとともに、思想教育を強化して、かれらが崇高な愛国主義精神を持し、国と人民の利益となる活動に積極的に参加するよう導いた。

主席の指導によって、過渡期の初期に生産関係の社会主義的改造の準備は着々と進み、漸次、都市と農村で生産関係の社会主義的改造を全面的に推進しうる有利な条件が整った。

主席は正規の革命武力の建設をおし進めた。

アメリカ帝国主義者と南朝鮮のかいらい一味は 1947 年から共和国北半部にたいする武力侵攻を頻繁におこない、それは 1948 年に入って 38 度線全域でさらに強化された。

このような重大な情勢のもとで、主席は正規武力の建設を一刻も猶予できない課題として提起し、その準備を綿密に進めたうえで、1948 年 2 月の初めに北朝鮮人民委員会に民族保衛局を設け、2 月 8 日には朝鮮人民軍の閲兵式を挙行し、朝鮮人民革命軍を正規の革命武力である朝鮮人民軍に発展させた。

主席は閲兵式でおこなった演説で、正規武力である朝鮮人民軍

の特性とそれを強化するための綱領的な課題を明示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「…人民軍は民主朝鮮の正規軍としてきょう創建されますが、実際には長い歴史的根源をもつ軍隊であり、抗日遊撃闘争の革命伝統と貴重な闘争経験と不屈の愛国精神を受け継いだ光栄ある軍隊であります」

朝鮮人民軍は、抗日革命闘士を根幹として労働者、農民をはじめ勤労人民の息子、娘で組織された真の人民の軍隊であり、主席によって切り開かれたチュチェの革命偉業の完成をめざす闘争を軍事的に保障すべき崇高な使命を担っている栄えある朝鮮労働党の革命的武力である。朝鮮人民革命軍が正規の革命武力である朝鮮人民軍に発展することによって、朝鮮人民は自己の強力な民族軍隊を持ち、自力で民族の自主権と革命の獲得物をかたく守ることができるようになった。

主席は、日増しに激化するアメリカ帝国主義の民族分裂策動を阻止し、祖国の統一を実現するための積極的な救国対策を立て、北半部の革命的民主基地をうちかため、労働党を質的に強化するための新たな闘争綱領を提示するため、1948 年 3 月 27 日から 30 日にかけて北朝鮮労働党第 2 回大会を招集した。この大会でおこなった党中央委員会の活動報告で、主席は全朝鮮にわたる選挙を実施して統一的な民主政府を樹立するという朝鮮労働党の方針を重ねて明らかにし、その実現方途を明示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「統一的な民主政府を樹立するというわが党の主張は以前と変わりありません。わが党は、一般、平等、直接の選挙原則と秘密投

票の方法によって、全朝鮮にわたる最高立法機関の選挙を主張します。このようにして選挙された人民の最高立法機関は、民主的な憲法を制定し、朝鮮人民を民族的繁栄と幸福へ導く真の民主主義的人民政府を組織すべきであります。朝鮮人民自らが、このような方法によって統一政府を樹立することは、外国軍隊が撤退した条件のもとでのみ可能であります」

主席は、統一的な民主政府を樹立するためには、南北朝鮮の愛国的民主勢力と、祖国の自由と独立をめざす良心的なすべての人々との団結を強め、アメリカ帝国主義者の狡猾な植民地奴隷化政策に反対してあくまでたたかわなければならないと強調し、さしあたっては南北朝鮮の民主的諸政党、大衆団体の代表者連席会議を開いて、民主主義的統一国家の樹立を促進する具体的な計画と方策を立てるべきだとした。

ついで北半部の革命的民主基地を強化するためには、経済建設にたいする各級党組織の指導的役割を高めなければならないとし、労働党が大衆を組織し、政治的に指導する党となるばかりでなく、経済を建設し、企業を管理運営し、経済知識と技術を身につけた建設者の党となるべきだと指摘した。

また、党の質的強化を大衆的政党建設の中心問題として取り上げ、党の基層組織である細胞をうちかため、党の組織・指導活動と思想活動を改善し、反分派闘争をひきつづき強力に展開して党の統一と団結を強化する課題を示した。

主席は大会で『すべての力を民主基地の強化と祖国の統一独立のために』と題する結語を述べた。大会では主席の示した課題を実行するための決定が採択され、革命任務と党の発展水準に照らして

党の規約が改定された。

北朝鮮労働党第 2 回大会を契機に、党は質的に強化され、その指導的役割と戦闘的機能が高まり、革命基地の強化と祖国の統一をめざす朝鮮人民の闘争に新たな局面が開かれた。

第 2 回党大会以後、主席はアメリカ帝国主義と李承晩かいらい一味の「単独選挙・単独政府」策動を粉砕し、全国的範囲で統一的な自主独立国家の建設を実現する民族主体の愛国勢力を築くため、全民族の団結をなし遂げることに大きな力を傾けた。

主席は当面の救国対策と国の統一問題について討議するため、1947 年 10 月の北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会議長団会議で南北協商方案を示し、その形式で南北朝鮮政党・大衆団体代表者連席会議を開くことを発議した。そして 1948 年 1 月には南朝鮮の政党、大衆団体の指導者と個々の人士に南北協商の早期実現を促す書簡を送った。書簡では、かつて国と民族にたいし罪を犯したとしても、愛国・愛族の立場に立ってアメリカ帝国主義とその手先に反対し、統一的な民主主義自主独立国家の建設のために連北合作しようとする人なら、過去の経歴は不問に付し、手をとってともに進むことを明らかにした。

主席は南朝鮮の広範な愛国的人士を連席会議に参加させるため、使者を送って労働党の祖国統一方針と統一戦線政策について説明し、かれらに平壌への往来の道を開いた。主席の高い権威と大きな度量、正当な統一戦線政策に深く感動した南朝鮮の進歩的な政党、大衆団体はもとより、中道政治勢力や右翼勢力も南北連席会議の開催に積極的な支持を表明した。

南北協商の気運が日増した高まる情勢を踏まえて、主席は 1948

年 3 月の北朝鮮民戦中央委員会第 26 回会議で、北と南の諸政党、大衆団体代表者連席会議を 4 月に平壌で開催することを提起し、北朝鮮民戦に南朝鮮の各政党、大衆団体を連席会議に招請するという公開書簡を発表させた。そして連席会議準備委員会を設け、会議に提出する文書と南朝鮮代表の滞在期間の便宜をはかることに万全を期するようにした。

こうして 1948 年 4 月 19 日から 23 日にかけて、平壌で南北朝鮮政党・大衆団体代表者連席会議が開かれた。この会議には南北の 1,000 万余の党員と構成員を網羅する 56 の政党、大衆団体の代表 695 名が参加した。

主席は連席会議に先立って開かれた予備会議で、『南北連席会議を成功裏に保障するために』と題する演説をおこない、21 日には『北朝鮮の政治情勢』と題する政治報告をおこなった。

報告では、国の情勢を全面的に分析し、北と南の人民がかたく団結して民主主義的自主独立国家の建設に全力を尽くすよう訴えた。そして、南朝鮮での反人民的な単独選挙を破綻させ、民主的原則にもとづいて統一的中央政府を樹立して祖国の統一を達成することが当面する最大の民族的任務であるとし、国と民族の運命を憂える人は党派や宗教の所属、政治的見解のいかんをとわず、一致団結して民族あげての闘争を展開しなければならないと指摘した。主席の報告は参加者全員の支持と賛同を得た。

連席会議は、南朝鮮の単独選挙を排撃し、統一政府を樹立すべく決意をもりこんだ「朝鮮の政治情勢に関する決議」と「全朝鮮同胞に告ぐ」と題する檄文を採択した。また、南朝鮮単独選挙反対闘争委員会を組織し、南朝鮮の単独選挙を断固排撃することを決議し、

ソ米両軍の即時撤退を要求した。

南北連席会議は、主席の参加のもとに北と南の代表が祖国統一の問題について討議した歴史的な最初の大民族会議であった。

その後、主席は 4 月 30 日に南北朝鮮政党・大衆団体指導者協議会を開き、救国対策に関する「南北朝鮮諸政党・大衆団体の共同声明書」を採択するようはからい、5 月 2 日には大同江のスク島で連席会議に参加した南朝鮮の政党、大衆団体の指導者との協議会を開き、連席会議の決議を実行する実践的方途と祖国統一の展望問題を協議、確定した。スク島での協議会は、南朝鮮における単独選挙に反対し、統一的な中央政府である朝鮮民主主義人民共和国の創建について合意を見た、事実上の全朝鮮政治協商会議であった。

主席のすぐれた指導と高邁な徳性は、金九をはじめ南朝鮮のすべての政治家を深く感動させた。かれらは主席に限りない敬慕の念を表し、その指導にしたがって民族の団結と祖国統一の聖業に献身することを誓った。

連席会議とスク島会議を契機に実現された各党、各派の合作は、北と南のすべての愛国勢力が主席を民族の太陽、団結の中心として高く戴いた統一戦線であり、多くの中道勢力と一部右翼党派の指導者に思想と立場の転換、かたくなな「反共」から連共への方向転換をもたらした合作であった。

4 月南北連席会議後、北と南のすべての愛国的民主勢力は、アメリカ帝国主義者が企図する単独選挙に反対して果敢にたたかった。こうして 1948 年、南朝鮮における亡国的な 5 ・ 10 単独選挙は事実上完全に破綻した。しかしアメリカ帝国主義とその手先は「選挙」の結果をでっちあげ、親日・親米派や民族反逆者からなる反動

的なかいらい国会とかいらい政府をつくりあげた。

主席は、南朝鮮かいらい政権の出現によって民族分裂の危機が深まる重大な情勢と、政権建設の合法則的要求を洞察して、全朝鮮にわたる合法的な統一政府である朝鮮民主主義人民共和国を創建する活動をおし進めた。

主席は 1948 年 6 月に南北朝鮮政党・大衆団体指導者協議会を開き、ただちに南北総選挙を実施して全朝鮮の最高立法機関を樹立し、民主主義人民共和国憲法を施行して統一政府を樹立するという救国方案を示した。これは、アメリカ帝国主義者とその手先の民族分裂策動に大きな打撃を与え、国土の保全をはかり、祖国の統一を早めるとともに、党の政治路線に示された民主主義人民共和国の創建を実現するための積極的かつ主動的な救国対策であった。

主席は民主主義人民共和国の創建に向けて民主的で人民的な憲法の草案を作成することを提起し、それを担当する朝鮮臨時憲法制定委員会を組織した。そして、人民の意思を十分に反映し、分断された朝鮮の実情と朝鮮革命の任務を考慮して、国号を朝鮮民主主義人民共和国と制定することにし、国旗・国章制定の基本的方向と原則を明示し、細心な指導をおこなった。また憲法草案について全人民的な討議をおこなうようにし、1948 年 7 月の北朝鮮人民会議第 5 回会議で朝鮮民主主義人民共和国憲法を施行することを明らかにした。

主席は全人民を南北総選挙を成功裏に保障するたたかいに立ち上がらせた。

まず、1948 年 8 月の初めに南北朝鮮労働党連合中央指導機関を創設する措置を講じた。そうして金日成主席を首班とする南北朝鮮

労働党連合中央委員会が組織された。

また、民主主義民族統一戦線の活動を強化して、民主主義的政党・大衆団体が総選挙で共同歩調をとるようにした。

主席は 8 月下旬、平安南道江東郡勝湖（スンホ）選挙区の有権者を前にしておこなった演説『朝鮮最高人民会議の選挙をひかえて』で、すべての愛国的人民が最高人民会議代議員選挙にこぞって参加するよう呼びかけた。

1948 年 8 月 25 日、南北朝鮮総選挙は成功裏におこなわれた。

北半部では、民主的な直接選挙を合法的に実施して最高人民会議の代議員を選出し、南朝鮮では、地下で有権者の署名を進める間接的な方法でまず人民代表を選出し、かれらが海州（ヘジュ）に集まって南朝鮮人民代表者大会を開き、最高人民会議の代議員を選出した。

南北総選挙の輝かしい勝利にもとづき、主席は 1948 年 9 月 2 日から 10 日にかけて、平壌で歴史的な最高人民会議第 1 回会議を開催した。

この会議で朝鮮民主主義人民共和国憲法が採択された。

1948 年 9 月 8 日、全朝鮮人民の一致した意思と念願により、主席は朝鮮民主主義人民共和国内閣首相、国家元首に推戴された。

主席は 1948 年 9 月 9 日、朝鮮人民の統一的中央政府である朝鮮民主主義人民共和国政府を組織し、朝鮮民主主義人民共和国の創建を全世界に宣布した。そして、共和国政府の施政綱領として『朝鮮民主主義人民共和国政府の政綱』を発表した。

朝鮮民主主義人民共和国は、抗日革命闘争の時期、主席によって築かれた政権建設の輝かしい革命伝統を継承し、北南朝鮮人民の総意にもとづいて樹立された唯一の合法的国家である。共和国政権

は、労働者、農民をはじめ勤労人民の利益を代表し擁護する真の人民の政権であり、自主性に徹した朝鮮式の社会主義政権である。

金日成主席はつぎのように述べている。

「共和国の創建によって、朝鮮人民は歴史上初めて国家と社会の真の主人として自己の運命を自主的に切り開いていく尊厳ある人民となり、わが国は堂々たる自主独立国家として国際舞台に進出するようになりました」

共和国の創建によって、朝鮮人民は祖国の統一と社会主義・共産主義偉業を実現するための強力な武器を手にすることになった。

朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第 1 回会議は、民族の統一と国土の保全をなし遂げるため、ソ米両軍が朝鮮から同時に撤退することをソ連とアメリカの政府に要求した。ソ連政府はこれを受け入れ、1948 年の末までに北半部地域から自国の軍隊を完全に撤退させた。しかし、アメリカはこれを拒否し、南朝鮮のかいらい一味をそそのかしてアメリカ軍の南朝鮮継続駐屯に関する要請案なるものを提出させた。

アメリカ帝国主義者の内政干渉と民族分裂策動がつづき、南朝鮮反動層の策動が激化している情勢に対処し、主席は共和国の革命的民主基地を政治的、経済的、軍事的にうちかためる活動を賢明に指導した。

まず、党を強化し、その指導的役割を高めることに力を注いだ。

1949 年 2 月の党中央委員会第 5 回会議で、第 2 回党大会以後 9 か月間の下級党組織の活動を総括し、党の組織活動と思想教育活動を強化し、経済建設にたいする党の指導を改善するための具体的な課題を示した。

とくに党細胞と初級党組織の強化に深い関心を払い、1949 年の初めに平安南道順川(スンチョン)郡舎人(サイン)面徳山(トクサン)里の元東(ウォンドン)村と三和(サムファ)里を訪れて、党細胞会議録に目を通し、細胞総会の準備の仕方や大衆との活動方法について教える一方、党員の学習会に参加してかれらの討論に耳を傾け、知識がなければ前途を見通すことができないから学習に励むべきだと強調した。

また、主要な工場、企業所に党中央委員会のオルグ制を設け、工場党組織の戦闘的機能と役割をいちだんと高めた。

主席は人民政権を強化するため、1949 年 3 月に地方主権機関の選挙をおこなって地方政権機関を強固にする一方、堅実で有能な活動家で政権機関をかため、かれらの活動水準と能力を高める措置を講じた。

また、1949 年 6 月には全党員に党中央委員会の手紙を送り、革命的警戒心を高め、反革命分子にたいする大衆的闘争をくりひろげるとともに、人民政権の独裁的機能を強めるようにはからった。こうして党隊伍の組織的・思想的統一と純潔が保たれ、広範な人民大衆が党と人民政権のまわりに結束するようになった。

主席は共和国の経済力を強化するため、全人民を 2 か年人民経済計画(1949 年～1950 年)の遂行に立ち上がらせた。

1948 年 11 月の朝鮮民主主義人民共和国内閣第 10 回全員会議の結語と、1949 年 2 月の最高人民会議第 2 回会議での演説『2 か年人民経済計画の遂行は祖国統一の物質的保障』で、2 か年計画の中心課題と遂行方途を明らかにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「2 か年人民経済計画の中心課題は、日本帝国主義支配の後遺症

である経済の植民地的跛行性をなくし、工業と農業の技術的改造をおこない、生産の高いテンポを保ち、自立的民族経済の土台を築くことであります」

主席は 2 か年人民経済計画を成功裏に遂行するため、経済建設にたいする党の指導を強める一方、1949 年 7 月の第 4 回産業省管下の工場・企業所支配人会議や、同年 11 月の産業部門経済および職業同盟活動者大会をはじめ部門別会議で、新たな環境に応じて経済幹部の活動態度と指導方法を改善するための具体的な対策を講じた。そして多くの工場、企業所、農村を現地指導して、すべての勤労者が生産過程で自分の知恵と創意を余すところなく発揮するよう導いた。

主席の指導に励まされた全国の勤労者は人民経済計画をくりあげて完遂するため、青年作業班運動をはじめさまざまな大衆的増産競争運動を展開した。その結果、2 か年計画の工業生産目標は 1950 年上半期までにあらかた達成され、工業の植民地的跛行性が著しく克服され、工業生産は解放前の水準をはるかに上回るようになった。

文化建設分野でも大きな成果がもたらされた。解放以前には大学が 1 校もなかった北半部に 15 校の大学と各種の養成機関、技術専門学校が新設され、また全般的初等義務教育制実施の準備が整った。

さらに、主席が提唱した識字運動である「李桂山(リゲサン)運動〔23〕」が大衆的運動として展開され、1949 年 3 月にいたって朝鮮はアジアで最初の非識字者のない国となった。

主席は国防力の強化をはかった。

アメリカ帝国主義者が戦争挑発策動を本格化している重大な情勢に対処して、人民軍を政治的、軍事的に強化することに大きな力

を注いだ。
そのため各軍種・兵種の部隊を拡大、強化する一方、人民軍内に文化担当副中隊長制を設けて各部隊の文化部の役割を高めるとともに、多くの部隊、区分隊を訪ねて、軍事・政治訓練を強化し、戦闘準備に万全を期するよう指導した。
主席は国防工業の発展にも深い関心を払った。
主席のエネルギッシュな指導によって、1948 年に最初の兵器工場が創設され、同年 3 月には自動短銃が生産された。主席は朝鮮の労働者階級によってつくられた自動短銃を抗日革命闘士に授与し、かれらと記念写真をとった。主席は、1948 年 12 月と翌年 10 月におこなった談話『自動短銃の生産で達成した成果をうちかためよう』『われわれは自力で兵器を生産して武装しなければならない』など一連の著作で、軍需工業の発展をはかる綱領的課題を提示し、自力で兵器と軍事技術機材を生産、供給する対策を講じた。その結果、必要な武力装備を自力で生産、供給しうる自立的軍需工業の土台が築かれた。主席は国防事業を全人民的な事業に切り換えるため、工場、企業所、農村に人民自衛隊などの民間軍事組織をつくり、1949 年 7 月には祖国防衛後援会を組織し、軍旗基金献納運動と人民軍援護活動を大衆的な運動として展開するようにした。
主席は北半部の革命基地をうちかためる一方、北と南の統一愛国勢力を網羅する統一戦線を結成し、南半部の革命勢力を収拾、整備し、強化する活動を強力におし進めた。
主席は北と南のすべての愛国的民主勢力をより広く結集するため、1949 年の新年の辞『国土保全と祖国統一のために決起しよう』をはじめ一連の著作で、南半部の人民が共和国の旗のもとにか

たく団結し、国の完全な自主独立をかちとるための救国闘争をさらに広く展開する課題を提示し、祖国を愛し統一を願う愛国的人民、とくに北と南の進歩的なすべての政党、大衆団体を一つの民主勢力として総結集する祖国統一民主主義戦線を結成する方針を示した。この方針を支持して 5 月中旬、南朝鮮の八つの政党、大衆団体が祖国統一民主主義戦線の結成を北朝鮮民主主義民族統一戦線中央委員会に連名で提議してきた。

主席は党中央委員会政治委員会で祖国統一民主主義戦線の結成に関する問題を討議し、民戦にその準備を推進させるとともに、6 月中旬の党中央委員会第 6 回会議での報告『祖国統一民主主義戦線の結成について』で、祖国戦線の性格と闘争目標、課題を明示し、祖国統一民主主義戦線の結成と活動の指導指針をもたらした。

主席の指導と北南朝鮮の民主的政党、大衆団体の共同の努力によって、1949 年 6 月下旬、平壌で祖国統一民主主義戦線結成大会が開かれた。大会では、北南朝鮮の 70 余の愛国的政党、大衆団体を網羅する祖国統一民主主義戦線を正式に結成した。また、祖国統一民主主義戦線の綱領と全朝鮮人民に送る祖国の平和的統一に関する宣言書が採択された。

主席は、南朝鮮で労働党が全面的に破壊され、合法活動の可能性が失われた状況のもとで、南半部の党活動を収拾し、南北の労働党に対する統一的指導を強化するため、1949 年 6 月 30 日に南北朝鮮労働党中央委員会連合総会を開き、北朝鮮労働党と南朝鮮労働党を単一の朝鮮労働党に合同する措置を講じた。

この会議で主席は『南北朝鮮の労働党を朝鮮労働党に合同することについて』と題する報告をおこない、結語を述べた。そして、

主席は朝鮮労働党中央委員会委員長に推戴された。

朝鮮民主主義人民共和国の創建後、統一独立国家建設の明るい展望が開かれていた 1949 年 9 月 22 日、主席のもっとも親しい革命戦友であり領袖決死擁護の鑑である共産主義革命闘士、金正淑（キムジョンスク）が 32 歳を一期として夭逝した。これは朝鮮民族と人民にとって最大の喪失であり、朝鮮革命にとって重大な損失であった。

主席は、祖国の解放と朝鮮革命の勝利のためにすべてをささげた金正淑の革命的生涯を回顧し、つぎのように述べている。

「金正淑は他界しましたが、彼女が祖国と人民に残した貴い業績は末長く輝くことでしょう」

主席は世界革命の発展にも深い関心を払い、中国人民の革命闘争を積極的に支援し、国際民主陣営との連帯を強めるため精力的に活動した。

新しい祖国建設の時期、国情が困難をきわめていたにもかかわらず、主席はプロレタリア国際主義の旗を高くかかげ、中国革命に私心のない支援を与えた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「われわれは抗日武装闘争の時期に中国人民と共同戦線を形成し、長期にわたり共同闘争を展開しました。解放後も、アメリカ軍が南朝鮮を占領し、国土が南北に分断されて情勢が複雑をきわめ、新しい祖国の建設で幾多の困難に直面しましたが、中国人民の革命闘争を援助するため、できるかぎりのことをしました」

アメリカ帝国主義の後押しで蒋介石一味が全面攻撃をかけ、中国革命が重大な試練にさらされていたとき、主席は崇高な国際主義的道義にもとづいて中国人民の革命闘争を積極的に援助した。

主席は1945年11月と1946年、1947年の初めと夏など数回にわたって中国の丹東と朝鮮の平壌、南陽（ナムヤン）で、毛沢東主席の特使や中国の軍区司令員、東北民主連軍の代表などに会い、革命勝利への確信を持つよう励まし、東北解放作戦に関する問題に貴重な助言を与え、戦局を逆転させる重要な措置を講じた。

また、建軍偉業を遂行する困難な状況のもとでも、日本侵略軍からろ獲した 10 万余挺の兵器と大量の火薬、弾薬、食糧、軍服、医薬品などの軍需物資を送るとともに、砲兵連隊と工兵部隊を派遣して中国人民とともにたたかうようにした。そして、中国側が兵力と戦略物資を東北地方の任意の地帯に移動できるように、朝鮮の北部地域と海上、鉄道、道路を戦略的ルートとして利用させた。

主席が派遣した朝鮮人民革命軍出身の優秀な軍事・政治幹部と約 25 万の朝鮮青年は東北解放戦闘に参加して、長春、吉林、四平、錦州、瀋陽などの解放戦闘で無比の英雄主義と犠牲的精神を発揮し、さらに中国関内と海南島を解放する戦闘にも参加し、血を流して戦った。

毛沢東主席と周恩来総理は、中国革命が試練にさらされていたとき物心両面にわたる援助を与えたことにたいし、主席に重ねて謝意を表し、中国の 5 星紅旗には朝鮮の共産主義者の赤い血がにじんでいると述べた。

主席は、第 2 次世界大戦後、新たに形成された国際民主陣営を強化し、国際民主団体との連帯を強めることに深い関心を払った。

主席は 1947 年 4 月、朝鮮を訪問した最初の外国代表団である世界労働組合連盟代表団と会見し、国際労働運動を分裂させようとする帝国主義者と反動勢力の陰謀を粉砕し、国際労働運動の統一と団結をさらに強めるべきだと指摘した。

また、朝鮮の各大衆団体が国際民主団体に加盟するようにはからい、1947 年 7 月の世界青年祭典、1948 年 6 月の国際労働青年大会など種々の国際会議や行事に代表団を派遣し、平和と民主主義、民族の独立と社会主義をめざしてたたかう世界各国人民との友好、団結をはかった。

主席は共和国創建後、自主性の原則にもとづいて民主陣営諸国と外交関係を結び、友好・協力関係を発展させるよう指導した。

主席の対外活動方針にしたがって、共和国政府は 1948 年 10 月に当時のソビエト社会主義共和国連邦と人民民主主義国家であるモンゴル、ポーランド、チェコスロバキア、ルーマニア、ユーゴスラビア、11 月にはハンガリー、ブルガリア、翌年 5 月にはアルバニア、10 月には中華人民共和国、11 月にはドイツ民主共和国と大使級の外交関係を結び、1950 年 1 月にはベトナム民主共和国と外交関係を樹立した。

1949 年 2 月から 4 月にかけて、主席は共和国政府代表団を率いてソ連を訪問し、両国人民間の友好・協力関係と国際民主陣営の強化のためにエネルギッシュな対外活動をおこなった。

第 2 次世界大戦後、帝国主義の頭目となったアメリカの世界制覇の野望を打ち砕いて平和を守るため、主席は 1949 年 12 月の朝鮮労働党中央委員会第 2 回総会での結語をはじめ一連の著作で、アメリカ帝国主義を世界反動勢力の元凶、もっとも悪辣かつ狡猾な侵略者と規定し、アメリカ帝国主義にたいして断固たる立場を堅持する革命的な反米闘争戦略を示した。また最高人民会議と共和国政府、大衆団体の声明やアピール、国際団体への手紙、世界平和擁護大会をはじめ国際会議の演壇を通じて、アメリカ帝国主義の侵略的

本性と、いたるところで進められているかれらの戦争策動を暴露した。こうして世界の革命的人民がアメリカへの幻想を捨てて革命的警戒心を高め、反米的立場を堅持するようにした。

主席は朝鮮におけるアメリカ帝国主義の戦争挑発策動を破綻させ、祖国の自主的平和統一を達成するため、最善の努力を払った。

アメリカ帝国主義者とその手先である南朝鮮のかいらい一味は、1949 年に入って「北伐軍事戦略計画図」を作成し、共和国北半部にたいする侵略戦争の準備を進めた。

アメリカ帝国主義者と南朝鮮かいらい一味の戦争挑発策動に対処して、主席は 1949 年 2 月と 5 月に内務省警備局第 3 警備旅団長と旅団の幹部たちに与えた指示『敵の武力挑発策動を徹底的に粉砕しよう』『寸土といえども敵に渡すな』で、警備隊が共和国北半部に侵攻する敵を撃滅し、仮借なく懲罰を加えるよう強調した。また、1949 年 8 月には祖国統一民主主義戦線中央委員会常務委員会、8 月と 10 月には朝鮮労働党中央委員会政治委員会を招集し、敵の 38 度線以北地域への侵入とその蛮行を暴露する活動を強力に展開するとともに、祖国の平和的統一のためにいっそうの努力を傾けるべきだと指摘した。

1950 年に入ってアメリカ帝国主義侵略者の戦争挑発策動はエスカレートした。

主席は 1950 年 1 月、共和国の全人民に送った新年の辞と『南朝鮮の現情勢と祖国戦線の当面の課題』『祖国統一の大業をめざし、すべての愛国的民主勢力を結集しよう』などの著作で、共和国の旗を高くかかげ、祖国の独立と自由を侵害するアメリカ帝国主義者と李承晩一味に抗する民族あげての闘争を果敢に展開するようアピー

ルした。

主席は緊迫した情勢にてらして、戦争を避け、何としても祖国の平和的統一を実現するための新たな救国対策をつぎつぎとうちだした。

主席の発議によって開かれた1950年6月7日の祖国統一民主主義戦線中央委員会拡大会議では、同年の8月15日を契機に民主的原則にもとづく南北総選挙を実施し、統一的な最高立法機関を創設することを提案する「平和的祖国統一方策推進に関するアピール」を採択し、それを南朝鮮のすべての民主的政党・大衆団体と各界の人士に伝えるため祖国戦線の代表3名を派遣した。しかし敵は、かれらを逮捕、拘禁するという許すまじき蛮行を働いた。

主席は6月15日の朝鮮労働党中央委員会政治委員会での結語『わが党の平和的祖国統一方案を実現するために』で、李承晩一味が南北総選挙を通じて祖国を統一しようという正当な提案を受けつけない状況のもとで、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議と南朝鮮「国会」を単一の全朝鮮的立法機関として連合する方法で祖国の統一を実現しようという新たな方案を示すようはからった。こうして「平和的祖国統一推進に関して」と題する最高人民会議の決定が採択された。一触即発の情勢が生じていた1950年6月22日、主席は各道内務部長におこなった演説で、アメリカ帝国主義者と李承晩かいらい一味があくまで戦争をしかけるならば断固たる反撃を加えるであろうと警告した。

しかしアメリカ帝国主義者と南朝鮮かいらい一味は、共和国政府の愛国愛族の公明正大な祖国統一方案をことごとく拒否し、たび重なる警告にもかかわらず、ついに犯罪的な侵略戦争を引き起こした。

7

1950年6月～1953年7月

百戦百勝の鋼鉄の総帥であり、卓越した軍事戦略家である金日成主席は、祖国解放戦争（朝鮮戦争）を輝かしい勝利に導いた。

南朝鮮を占領した当初から侵略戦争の準備を進めながら38度線一帯で武装挑発策動をエスカレートしてきたアメリカ帝国主義は、南朝鮮かいらい一味をそそのかして1950年6月25日、不意に共和国北半部にたいする全面的な武力侵攻を開始した。そのため、朝鮮人民の平和的建設は中断され、祖国と人民は厳しい試練に見舞われた。

この重大な事態に関連して6月25日、主席は内閣非常会議を招集し、敵の侵攻を挫折させ、即時決定的な反撃に移る断固たる措置を講じた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「われわれは祖国の独立と民族の自由と栄誉を守るため断固として敵と戦うべきであります。敵の野蛮な侵略戦争にたいし、正義の解放戦争をもってこたえなければなりません。

人民軍は敵の侵攻を粉砕し、即時断固たる反撃に転じて武力侵略者を掃滅しなければなりません」

主席の命令一下、人民軍将兵は共和国北半部に侵入した敵を撃退し、即時全戦線にわたって反撃に転じ、全人民はアメリカ帝国主義とその手先の武力侵攻に抗する聖戦に一丸となって奮い立った。

アメリカ帝国主義とその手先の武力侵攻に抗する朝鮮人民の戦争は、祖国の自由と独立、民族の自主権を守り、南朝鮮人民をアメリカ帝国主義の植民地支配から解放する正義の祖国解放戦争、民族解放戦争であり、人民の敵との厳しい階級闘争であった。それはまた、アメリカ帝国主義を頭目とする世界反動派の連合勢力に反対し、社会主義諸国の安全と世界の平和を守るための激烈な反帝・反米闘争であった。

主席は前線と後方のすべての重荷を一身に担い、全朝鮮人民を戦争勝利をめざす闘争に立ち上がらせた。6 月 26 日の放送演説『すべての力を戦争勝利のために』で、朝鮮人民が遂行する戦争の正義の性格を明らかにし、全人民と人民軍将兵にアメリカ帝国主義とその手先を掃討する聖戦にこぞって立ち上がるよう呼びかけ、戦争勝利のための戦闘的課題を示した。

主席は遅滞なく国の総力を戦争勝利に向けて総動員する政治的・経済的・軍事的対策を講じた。

まず、1950 年 6 月 26 日の党中央委員会政治委員会で、国の権力をいっさい統一的に掌握し、人的・物的資源を戦争勝利に振り向けるため、国家の最高指導機関として朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会を組織した。この会議で主席は朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会委員長に推戴された。

6 月 27 日の党中央委員会政治委員会で、戦時の環境に合わせて党活動を改編し、党組織と党員の役割を高めるために党中央委員会

の手紙を採択し、国家活動全般を至急戦時体制に切り換え、すべてを戦争勝利に総動員するため戦時状態を宣する措置をとった。また同日、朝鮮労働党、北朝鮮民主党、北朝鮮天道教青友党の各道委員会委員長連席会議を招集し、祖国解放戦争勝利のための各政党の課題を提示した。

主席は戦争に必要な人的・物的需要を最大限に動員するため全国に戦時動員令を宣布し、経済全般を戦時体制に改編した。そして、前線の勝利のために、人民軍の指揮系統を戦時に適応して切り換え、戦闘力を強化し、後方を強固にするための重要な措置を講じた。

こうして、戦争開始後のごく短期間に国のすべての力を戦争勝利のために機動的に動員できる戦時体制が確立され、全党、全民、全軍が一つの強力な戦闘隊伍に結束された。重要工場地区では労働者連隊が組織されて前線に出動し、青年学生も先をあらそって人民軍への入隊を志願した。

主席は戦争の勝利をめざす戦略的方針を提示し、それを貫徹するたたかいを賢明に導いた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「われわれは、アメリカ帝国主義が朝鮮戦線に侵略兵力を大々的に投入する前に迅速な機動と連続的な打撃によって敵を徹底的に掃討し、共和国南半部を完全に解放しなければなりません。これが、現段階におけるわが党の戦略的方針であります」

この戦略的方針は、新たな情勢と彼我の力関係、敵の弱点に対する正確な分析、評価にもとづくものであり、前線での主導権を握って短期間に戦争の勝利をかちとるための賢明な方針であった。

主席は全戦線にわたって人民軍部隊を強力な反撃戦に移行させ

る一方、主要打撃方向を戦線西部に定め、ソウル解放作戦の指揮にあたった。

主席の卓抜な作戦方針にしたがって敵の不意の侵攻を粉砕して反撃に転じた人民軍は、戦争の主導権を握って急速に進撃し、敵の基本集団を掃滅し、戦争開始 3 日目に敵の根城であるソウルを解放し、ついで敵の防御地帯を突破して大田（テジョン）方面へと進撃した。これは、主席の即時反撃に関する主体的な戦法によるものであった。

1950 年 7 月 4 日、主席は朝鮮人民軍最高司令官に推戴された。

主席は戦線の急速な拡大に合わせて金策（キムチェク）を前線司令官とする前線司令部を設け、各軍部隊に軍事委員を派遣して南進する前線連合部隊の指揮を円滑に保障した。

英雄的な人民軍の猛烈な進撃によって窮地に陥ったアメリカは不法にも「国連軍」を編成し、自国の侵略兵力と追随国の兵力を朝鮮戦線に大々的に投入した。

主席はこの大規模な兵力増強策動と関連し、1950 年 7 月 8 日の放送演説『アメリカ帝国主義者の武力侵略を断固撃退せよ』と、7 月 9 日の党中央委員会政治委員会での演説で、国連の看板を盗用して朝鮮侵略戦争を拡大しているアメリカ帝国主義の凶悪な策動と野蛮な本性を赤裸々にあばきだし、全人民軍将兵にアメリカ帝国主義侵略者を徹底的に撃滅するようアピールした。

人民軍将兵は主席の戦闘的な呼びかけに熱烈に呼応し、進撃速度をいっそう高めて戦果を拡大していった。

主席は大田地域で敵の大集団を包囲、せん滅する大胆な構想を練り、7 月中旬にはソウルに位置していた前線司令部に出向いてこの作戦を指揮した。

主席の霊妙な指揮のもとに錦(クム)江を迅速に突破した人民軍連合部隊は、各軍種、兵種部隊間の緊密な共同作戦のもとに強力な正面攻撃と側面および背後打撃、敏捷な機動と迂回、要撃と襲撃など多様な戦闘形式と方法を適用し、いわゆる「常勝師団」と自称していたアメリカ侵略軍第 24 歩兵師団を完全に包囲、せん滅し、敵の臨時「首都」となっていた大田を解放した。

連続的な攻撃作戦の勝利のために主席は 1950 年 8 月初旬、砲煙たちこめる火線をついて最前線にあたる忠清(チュンチョン)北道忠州(チュンジュ)南方の水(ス)安堡(アンボ)まで出向き、朝鮮人民軍前線司令部のメンバーおよび前線連合部隊の指揮官、文化活動家の会議を開き、人民軍部隊の進撃速度を加速する軍事行動方向を示し、人民軍指揮官と兵士を激励した。

主席の卓抜な作戦方針にしたがい、人民軍前線連合部隊は敵に息つく暇を与えず、歩兵、砲兵間の共同作戦と山岳戦、夜間戦を巧みにくりひろげ、連続的な打撃と大胆な機動作戦によって敵を包囲せん滅しつつ破竹の勢いで南下し、敵を朝鮮東南端の狭い地域に追い込んだ。

こうして、戦争開始後わずか 1 か月半のあいだに、南朝鮮かいらい軍の基本兵力とアメリカ帝国主義侵略軍の主力を撃滅し、南半部地域の 90%以上と南半部全人口の 92%以上を解放した。

主席は解放された南半部地域における社会経済的改革の実施を賢明に導いた。

主席は数回にわたる党中央委員会政治委員会と軍事委員会で、南半部地域の解放にともない党組織と大衆団体、人民政権機関を組織し、土地改革をはじめ民主諸改革を実施し、人民生活を安定させる課題と方途を示し、これを成功裏に遂行するために多くの幹部と

政治工作員を解放された南半部地域に派遣した。

また、前線指揮の多忙をきわめるなかにあっても、1950 年の 7 月中旬と 7 月末～8 月初、8 月中旬、自らソウルに出向いて解放された南半部地域における民主諸改革の遂行状況と人民の生活状況をくわしく把握し、具体的な対策を立てた。

解放された南半部の人民は、新しい人民民主主義制度下で新しい生活を営む喜びにあふれ、主席のまわりにかたく結集し、南下する人民軍を各面から支援した。南半部の数多くの愛国的青年学生は、人民義勇軍に志願入隊し、敵撃滅の聖戦に奮い立った。その数は、南半部が解放されてわずか数週間のあいだに実に 40 余万名に達した。

このころ、アメリカ帝国主義の侵略戦争に便乗した日本軍国主義者の朝鮮戦争加担策動が露骨化した。主席は 1950 年 8 月末の党中央委員会政治委員会で、日本領土をアメリカ帝国主義侵略軍の完全な軍事戦略基地として委ね、朝鮮侵略戦争に必要な軍需物資の生産と輸送を担当し、自国の兵員まで戦争に直接参加させている日本反動支配層の犯罪的な策動を厳しく断罪し、それを暴露、粉砕する闘争を強力に展開すべきであると強調した。

1950 年 9 月中旬に入って軍事情勢は急変した。

壊滅に瀕したアメリカ帝国主義は、太平洋方面に配備していた陸・海・空軍の全部と地中海艦隊の一部、それに「国連軍」の看板のもとにイギリスをはじめ追随諸国の軍隊まで動員し、数十万の大兵力を朝鮮戦線に投入した。アメリカ帝国主義は、増強された兵力をもって洛東（ラクトン）江界線で「総攻勢」を強行する一方、1，000 余機の航空機、数百隻の艦船と 5 万余の大兵力を動員して仁川（インチョン）上陸作戦を強行した。

月尾島（ウォルミ）の守備にあたっていた勇士をはじめ人民軍将兵は、比ぶべきもない優勢な敵の攻勢を撃退するため英雄的に戦った。しかし、彼我間のはなはだしい兵力の差のため、前線の形成は味方に不利になった。

急変する軍事情勢に対処して主席は、1950 年 9 月 17 日の党中央委員会政治委員会で、敵の必死の攻勢を阻止し、敵に決定的な打撃を与える対策を立てた。主席は当面の情勢を主動的に打開するため、戦争第 2 段階の戦略的方針をつぎのように示した。

「現段階におけるわが党の戦略的方針は、敵の進攻速度を最大限に遅らせ、時間をかせいで人民軍の主力部隊を救出し、新しい後続部隊で強力な反撃集団を編制し、計画的な後退を組織することであります」

主席は 1950 年 9 月 27 日、道党委員長協議会を開き、一時的な戦略的後退を保障するための党組織の課題を示し、10 月 11 日の放送演説『祖国の寸土を血潮をもって死守しよう』で、全人民と人民軍将兵に祖国の寸土をも死守し、敵に新たな決定的打撃を加える力を準備し、アメリカ帝国主義とその手先を朝鮮の領土から完全に撃退するよう呼びかけた。

全人民と人民軍将兵は、主席の戦略的構想を実現するたたかいで無比の英雄主義と献身性を発揮した。仁川―ソウル地区と 38 度線一帯の防衛者たちは、敵の進攻を遅らせるために決死の覚悟で戦い、洛東江界線に進出していた人民軍主力部隊は、連合部隊の単位で機動防御戦を展開しながら険しい山なみを越え、短時日内に一時的な戦略的後退の任務を成功裏に遂行した。労働者と農民は生産設備を安全地帯に疎開させ、戦時生産をつづけながら一台の車両、一台の

機関車、一粒の米でも敵の手に渡すまいと、犠牲的にたたかった。

主席は一時的な戦略的後退の厳しい時期、玉泉(オクチョン)、香山(ヒャンサン)、雲山(ウンサン)、昌城(チャンソン)、碧潼(ピョクトン)、雩時(ウシ)、楚山(チョサン)を経て高山鎮(コサンジン)にいたる道々で、『金日成将軍の歌』を勇ましく歌いながら最高司令部を訪ねて行軍してくる人民軍兵士に会い、また金日成将軍にしたがってこそ前途が開かれて戦争で勝利することができると言って江原(カンウォン)道から後退してくる農民の話を聞き、かれらに必勝の信念を抱かせ、自らも大いに力づけられた。

アメリカ帝国主義侵略軍は共和国北半部の一時的占領地域で天人とも許すまじき野獣的蛮行をはたらいた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「かつてエンゲルスは、イギリスの軍隊をもっとも野蛮な軍隊であるといった。第 2 次世界大戦の時期、ファシスト・ドイツの軍隊はその野獣性においてイギリスの軍隊をしのいだ。人間の頭脳では、あの当時ヒトラーの悪党一味がはたらいた蛮行より悪辣で恐ろしい蛮行を想像することはできなかった。しかし、朝鮮でヤンキーはヒトラー一味をはるかにしのいだ」

アメリカ帝国主義侵略軍はいたるところで罪のない朝鮮人民を手当たり次第に虐殺した。信川(シンチョン)郡でだけでも 3 万 5，000 余名の人民が無残に殺された。アメリカ帝国主義は打倒された搾取階級の残存分子と反動分子をそそのかし、この蛮行に積極的に参加させた。敵の野獣的蛮行は、アメリカ帝国主義にたいしてはいささかの幻想も抱いてはならず、階級の敵とは妥協せずにたたかわなければならないということを教えている。

アメリカ帝国主義侵略軍の虐殺蛮行も、階級の敵の蠢動も決し

て、主席のまわりにかたく団結した朝鮮人民を屈服させることはできなかった。

主席の教えどおり、被占領地域の党員と人民は人民遊撃隊を組織し、いたるところで敵に打撃を与え、かれらを恐怖と不安におののかせた。

主席は一時的な戦略的後退を指揮する一方、後方の奥深くに反撃の発進基地を整え、後退してきた人民軍部隊の隊伍を整備し、新たに部隊を編制し、各軍種、兵種の部隊を近代的な戦闘技術機材で装備させ、強力な反撃集団を整えた。

反撃の準備を進める一方、正規軍の大連合部隊で敵中に強力な第 2 戦線を敷く大胆かつ独創的な戦略を示し、第 2 戦線部隊を編成して 1950 年 10 月中旬から中部朝鮮の広範な地域で敵背闘争を猛烈にくりひろげるようにした。

共和国北半部の全地域を一気に占領しようとしたアメリカ帝国主義の企図は完全に打ち砕かれた。

1950 年 10 月下旬から戦争は第 3 段階に入った。この時期、中国人民は「抗米援朝保家衛国」の旗のもとに義勇軍を編成し、朝鮮戦線に派遣した。

主席は新たな反撃の準備にもとづき、敵の攻撃を挫折させ、その兵員を大量にせん滅しながら、敵を 38 度線以南に駆逐し、さらに味方の戦力を整備、強化し、敵の戦力をたえまなく掃滅、弱化させ、戦争の最終的勝利をかちとる準備を整える戦略的方針を示した。

1950 年 10 月下旬、敵と至近距離の雲山郡富興(プフン)里と古城(コソン)里にまで出向き、雲山地域に侵入した敵軍にたいする強力な反打撃戦を指揮し、10 月末の朝鮮人民軍最高司令部将校・将官会議と 11 月初の党

中央委員会政治委員会で、新たな反撃の準備を完全に整えるための具体的な課題と方途を示した。

主席は 11 月 25 日、全戦線にわたって「クリスマス総攻勢」の挙に出た敵に決定的な反撃を開始することをわが軍部隊に命令した。この戦略的方針にしたがい、わが軍連合部隊は敵中第 2 戦線との協同による総反撃戦をくりひろげ、米第 8 軍司令官を含めた大量の敵兵員を包囲、掃滅し、多数の戦闘技術機材をろ獲、もしくは破壊した。

人民軍部隊は敗走する敵を猛烈に追撃し、1950 年 12 月末までに共和国北半部の被占領地域を完全に解放し、38 度線以南地域へ戦果を拡大していった。

アメリカ帝国主義はその惨敗を挽回するために狂奔し、新たな軍事的冒険を企図した。そのため、戦争はさらに激烈化し、長期性をおびるようになった。

戦争の長期化と関連して主席は、1950 年 12 月に党中央委員会第 3 回総会を招集し、『現情勢と当面の任務』と題する報告をおこなった。報告では軍事分野において主体性を確立し、革命的規律を強化して党の統一団結を保障し、前線と後方をさらにうちかため、自力更生の革命精神を強く発揮すべき課題が示された。

主席の報告は、全党に鉄のような革命的規律を確立し、党の統一団結を守り、軍隊と後方をさらに強化して前線での新たな勝利をかちとるうえで大きな意義を有した。

総会後、主席は党、国家機関および軍隊内での革命的規律の確立と、党の統一と戦闘力の強化に努めた。そして、後方を復旧、整備し、政治的、思想的にかためる一方、零落した人民生活を安定さ

せる対策を立てた。とくに軍事分野における主体性の固守に大きな力を入れ、1951 年 1 月に朝鮮人民軍の指揮官・政治幹部におこなった講話『われわれの戦法で戦うべきである』で、外国の戦法を適用して戦争の過程で重大な弊害をまねいた教条主義的傾向を厳しく批判し、作戦と戦闘において朝鮮の実情に合う戦法を活用し、敵にせん滅的な打撃を加える方向と方途を明示した。

人民軍部隊は同年 1 月末から 6 月初にかけての作戦期間、朝鮮式の戦術と戦法によりたえまない消耗戦と強力な反打撃戦、敵背撹乱作戦などを敢行し、敵に大きな軍事的・政治的打撃を与えた。1951 年 6 月にいたり前線は基本的に 38 度線付近に固着し、戦争は第 4 段階に入った。

主席は新たな情勢に対処して、強力な防御陣をはり、積極的な陣地防御戦を展開して確保した界線を堅持し、敵にたえまない打撃を加える一方、時間をかせいで人民軍の戦闘力をいっそう強化し、後方をさらにうちかためることによって、戦争の最終的勝利に必要ないっさいの条件を整える戦略的方針を示した。

主席は積極的な陣地防御戦を展開するため、すでに確保した界線の陣地を坑道化し、それに依拠して軍事活動を進める新たな坑道戦法をうちだした。坑道戦法は敵の野蛮な爆撃や砲撃から兵員と戦闘技術機材を確固と守り、攻撃と防御を結合して敵を無力にし、より多くの敵を掃討する効果的な戦法であり、苛烈な戦闘の状況下でも戦闘員に十分な休息と学習、文化生活を保障しながら戦闘準備を円滑に整え、戦闘力のさらなる強化をはかるすぐれた戦法であった。

主席は坑道戦法とともに、1950 年 12 月に朝鮮人民軍最高司令官命令『飛行機狩り組を組織することについて』の下達についで、

1951 年に『戦車襲撃班活動をさらに強化することについて』『迫撃砲を広く利用することについて』『戦車襲撃班の組織と訓練の実施について』『狙撃兵班の組織について』『移動砲兵中隊（迫撃砲兵小隊）、独立重機班、敵中破壊班の組織と狙撃兵活動の強化について』など、最高司令官命令や訓令を下達し、飛行機狩り組活動をはじめ幾多の主体的戦法をあみだし、それを積極的に活用して敵をたえまなく掃滅するようにした。

主席は 1951 年 6 月下旬、共和国英雄および模範戦闘員に会い、前線で戦っている戦闘員の英雄的偉勲を高く評価し、かれらの健康状態、生活状況を一つひとつ確かめて肉親の愛情と配慮をめぐらし、「アメリカ帝国主義侵略者を掃滅せよ！」という文字入りの自動短銃を贈った。

この大いなる愛情と信頼に励まされた人民軍将兵は坑道をつくってそれに依拠し、主体的戦法による積極的な陣地防御戦をおこなって敵に相次ぐせん滅的な打撃を与えた。

相次ぐ惨敗によって日ましに深まる政治的・軍事的危機に直面したアメリカ帝国主義は、停戦会談を申し入れてきた。かれらは停戦会談の幕裏で時間をかせぎ新たな攻勢を準備する一方、前線で達成できなかった侵略的野望を会談の場で実現しようとする下心を隠し、朝鮮戦争の終結と平和を望んでいるかのように装って、低落した「威信」を挽回し、同盟国間の矛盾を解消し、世界の人民を欺き、朝鮮にたいする侵略的野望をひた隠しに隠そうと企てた。これは事実上、かれらの屈服を意味し、敗戦を公式に認めたも同然であった。

主席は、1951 年 6 月末の党中央委員会政治委員会での結語『アメリカ帝国主義の停戦会談提議にたいするわが党と共和国政府の立

場』と、7 月初の停戦会談にのぞむ朝鮮側の代表との談話『停戦会談の方向について』で、停戦を可とするが戦争続行も可とする立場に立って停戦会談をおこない、これと関連してアメリカ帝国主義にたいする幻想を抱くことなく自分の力をさらに強化し、敵にひきつづき軍事的打撃を加えて、停戦会談幕裏での敵の侵略的企図を徹底的に粉砕しなければならないと述べた。

停戦会談で朝鮮側は、アメリカ帝国主義の不当な主張にたいし原則的かつ断固たる立場を堅持した。

アメリカ帝国主義は停戦会談で陰険な目的が達成できなくなると、停戦会談を一方的に破綻させ、1951 年に大規模な「夏季および秋季攻勢」（8 月中旬～11 月中旬）を強行した。アメリカ帝国主義は地上攻撃と海岸上陸作戦を組み合わせ、全戦線にわたって一大攻勢を企てる一方、原子兵器の使用も辞さないと脅迫し、朝鮮側に軍事的圧力を加えて「栄誉ある停戦」にもちこもうと妄想した。

かれらは戦線西部で一大攻撃戦に出るかのように見せかけながら、ひそかに戦線東部に大兵力を増強し、大規模な「夏季攻勢」を開始した。かれらの陰険な企図をいち早く看破した主席は、戦線西部の防御部隊の一部をすばやく東部に機動させ、霊妙な戦略戦術によって敵の企図を粉砕した。

「夏季攻勢」で惨敗を喫したアメリカ侵略軍は、その教訓を汲もうとせず、再度「秋季攻勢」の挙に出た。主席はこの「秋季攻勢」にたいしても、敵の主要攻撃方向は戦線西部ではなく東部であることを看破し、大規模な攻撃が見込まれる 1211 高地一帯に坑道化された防御地帯を形成する対応策を講じる一方、敵の上陸企図に対処して予備部隊を編制し、東海岸の防備をいっそうかためる措置

をとった。

1951 年 9 月下旬、主席は砲煙弾雨をついて 1211 高地の防衛者を訪ね、敵の攻勢を撃破するための綱領的な課題を提示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「われわれが 1211 高地の防衛に大きな意義を認めているのは、この高地を守ることによって、全戦線の戦況をわが方に有利に変えることができるからです。諸君は 1211 高地の寸土をも敵の手に渡さず、この高地を生命を賭して防衛しなければなりません」

前線視察から帰った主席は、深夜に崔賢(チェヒョン)軍団長を電話口に呼び、戦闘員はすべてかけがえのない貴重な宝である、夜はもう冷えこみはじめたようだから温かいご飯と汁を給食し、寝床もよく整えて風邪を引かせないように心を配らなければならないと指示した。

主席の前線視察とあつい肉親の情に限りなく励まされた 1211 高地の英雄的防衛者は、日に 3 万～4 万発の砲弾と爆弾で岩が砕け、数十回におよぶ「波状攻撃」で息つく暇もない苛烈な戦況のもとでも、無比の犠牲的精神と集団的英雄主義を遺憾なく発揮して敵を大量殺傷した。

李寿福(リスボク)英雄をはじめ人民軍の勇士は、祖国すなわち最高司令官金日成将軍であるという鉄のごとき信念を持し、一つしかない祖国のために二つとない生命をためらうことなくささげ、わが胸で敵のトーチカの銃眼をふさいで部隊の進撃路を開き、切断された通信線を両の手で連結し、手榴弾の束をかかえて敵陣におどり込み、肉弾となって祖国の寸土を血潮をもって守りぬいた。敵をして周辺の高地と谷を「ハートブレイク・ヒル」「トラップ・バレー」と言わしめた 1211 高地防衛戦闘は、主席の創造した坑道戦など主体的戦法

の威力と朝鮮人民軍の政治的・思想的優越性を世界にあまねく誇示した。

「夏季および秋季攻勢」で決定的な惨敗を喫したアメリカは再び停戦会談の場に現れ、軍事境界線の確定と非武装地帯の設置にかんする朝鮮側の正当な提案を受け入れざるをえなくなった。

主席は前線における勝利を強固にし、祖国解放戦争の最終的勝利を早めるため、人民軍をさらに強化することに全力を傾注した。

主席は戦争勝利における政治的・思想的要因に決定的な意義を付与し、人民軍内における党の政治活動の改善、強化をはかった。

金日成主席はつぎのように述べている。

「戦争の運命を決する決定的要因は武器や軍隊の数量上の優位にあるのではなく、戦争に参加する軍人と人民の精神的・道徳的準備状態にあります」

戦争の初期から人民軍にたいする党の指導を強化し、軍隊内の政治活動の強化に深い関心を払い、1950 年 10 月には人民軍内に党組織と政治機関を設ける画期的な措置をとった。

主席は戦争の長期化と関連して、1952 年 7 月の党中央委員会政治委員会での結語『人民軍内の党の政治活動を強化するための諸課題について』など一連の著作で、軍隊内の党組織と政治機関の役割をいっそう高め、党の政治活動を朝鮮の実情と軍人の心理的特性、部隊の戦闘任務に合わせて着実におこなう方向と方途を具体的に示し、人民軍を政治的、思想的にさらにうちかためる活動を賢明に導いた。

主席は人民軍を軍事技術的に強化するため、将校の養成および再教育をおこなって指揮官の資質と指揮能力を高め、現代戦の特性に

合わせて人民軍の装備を改善し、血潮をもってかちとった時間を利用して部隊の戦闘訓練を強化する措置を講じた。その結果、1952 年には全将校の 45%が再教育を受け、数多くの軍事指揮官が新たに養成され、各歩兵師団の火力は前年に比べ 160%に増大し、空軍が強化されてアメリカの「空軍の優勢」を撃破できるようになった。

人民軍の基層組織で基本戦闘単位である中隊の強化を重要な課題とした主席は、1951 年 10 月に模範中隊運動を発起し、すべての部隊がこの運動を広く展開するようにした。こうして、中隊が質的に強化され、人民軍部隊の戦闘力はかつてなく強まった。

主席は 1952 年 12 月におこなった演説『人民軍を強化しよう』で、戦争の本質と性格、戦争の根源、革命戦争における勝利の要因に関する独創的な理論を提示し、人民軍軍人をチュチェの戦争理論と戦法で武装させた。

1952 年に入り、アメリカは朝鮮戦線の侵略兵力を増強し、国際法によって禁止されている細菌・化学兵器まで使って「絞殺作戦」や「金化(キムファ)攻勢」などを相ついで強行したが、そのつど人民軍部隊の主体的戦法による強力な防御戦と反撃戦に直面して敗北を重ねた。

主席は党と政権機関を強化しその役割を高める活動を精力的に指導した。

戦時の環境に合わせて党をさらに拡大、強化するため、主席は1951 年 11 月に党中央委員会第 4 回総会を招集し、報告『党組織の組織活動におけるいくつかの欠陥について』と結語『党の組織活動の改善について』で、党の組織活動における関門主義、懲罰主義、官僚主義など極左的偏向を克服して党の隊伍を拡大し、党内に自覚的規律を確立し、統一戦線活動を強化し、幹部の活動方法と作風を

改善する課題を示した。そして総会での決定実行に全党的な力を注ぐよう指導した。

その結果、党勢拡大で関門主義が克服され、前線と後方で献身的に戦った軍人と労働者、農民や勤労インテリの先進分子が入党し、党は 100 万以上の党員を擁するようになった。そして多数の党細胞の中核が育成され、適用を誤った党の処罰が解消または是正されて、党活動において党員の積極性が高まり、自覚的規律が強まった。統一戦線活動も改善されて、党への各階層人民の支持と信頼はさらに強まり、広範な大衆が党のまわりにかたく団結するようになった。

主席は人民政権の機能と役割を高め、党と大衆とのつながりを強める活動を強力に推進した。

1952 年の 2 月と 6 月におこなった演説『現段階における地方政権機関の任務と役割』『人民政権の強化は祖国解放戦争勝利の重要な保障』で、戦時の条件に合わせて人民政権の機能と役割を高める課題と方途を示し、とくに政権機関の活動家のあいだで官僚主義との闘争を強力に展開するよう強調した。主席は政権機関の活動家のあいだで官僚主義的活動作風を排撃する思想教育と思想闘争を強力に展開する措置を講ずる一方、活動家の政治・実務水準と指導能力を向上させる積極的な対策を講じた。また、人民政権の機能と役割を高めるため郡を細分化し、面を廃止し、里を強化する方向で地方行政システムを改編する措置をとった。

主席は戦争の最終的勝利を早めるため、後方の強化に大きな力を注いだ。

まず戦時生産と前線への輸送の円滑な保障に第一義的な関心を払った。「党のすぐれた力量を農村へ!」というスローガンのもと

に多くの指導メンバーを農村に派遣し、「食糧のためのたたかいは祖国のためのたたかいであり、前線の勝利を保障するたたかいである」という戦闘的スローガンをうちだし、あらゆる条件と可能性を利用して軍需品と生活必需品の生産を増やし、前線への輸送を迅速に保障する対策を立てた。

主席は戦争勝利のための活動全般を指導する多忙な日々にも、戦時生産のため多くの工場、農村を現地指導した。その過程で楽(ラク)元(ウォン)機械製作所鋳鉄職場の党細胞の女性党員が、戦争で勝利さえすれば復興建設は問題にならないといった言葉から、そして龍川(リョンチョン)郡下長(ハジャン)里の女性党員たちがオルガンを弾きながら楽しく歌をうたう楽天的な姿から大きな励ましを受け、労働者、農民を戦時生産闘争へ奮起させた。

労働者と農民は、敵の爆撃と蛮行によって、すべてが焼け落ち破壊された困難な状況のもとでも、「すべてを前線へ!」というスローガンをかかげて、大衆的な増産・超過輸送運動を強力にくりひろげ、前線で必要とする軍需物資と食糧をそのつど円滑に生産、提供した。高城(コソン)郡南江(ナムガン)村の女性たちをはじめ前線地区の人民は、砲煙弾雨をついて砲弾や弾薬を戦場の高地に運搬した。

主席は戦火たけなわの日々にも人民生活の安定に大きな関心を払った。労働者、技術者、事務員の食糧と生活必需品の供給基準を引き上げ、商品価格を系統的に引き下げ、1952 年 11 月には全般的無料治療制の実施に関する内閣決定を採択する措置を講じた。そして、愛国烈士の遺族や戦傷栄誉軍人、人民軍留守家族への社会的な援護活動を広範に組織し、各地に遺児学院、遺児保育院、戦傷栄誉軍人学校などを設け、戦災民救護委員会を組織して戦災民に被服や

食糧を供給し、戦災孤児のために初等学院と愛育院を設置するようはからった。

困難をきわめた戦時中、主席はいつも人民と苦楽をともにし、「人民が粟飯を食べるときは、われわれも粟飯を食べなくてはなりません」と言って、質素な生活をつねとした。

主席の温かい愛情と配慮により、朝鮮ではあの厳しい戦時中に餓死したり凍死する者も、街をさまよう戦災孤児も見当たらなかった。

主席は生死を決する戦争のさなかに、勝利の明日を見通して戦後の復興建設と社会主義建設の準備を強力に推進した。

作戦台の前で戦後の復興建設を構想しながら、破壊された工場、企業所の実態調査、そして平壌(ピョンヤン)市をはじめ都市や工場、農村の復興建設計画およびその設計の作成に綿密に取り組むよう指導した。1951 年 1 月には平壌市の復興建設方向を示して復興建設総計画図を作成させ、翌年 5 月には平壌市復興建設に関する内閣決定の採択をはかりその準備を推進した。

主席は戦後の社会主義的工業化の実現に必要な強力な機械工業基地を創設するため、1951 年 10 月に熙川(ヒチョン)に新設する機械工場の敷地を定め、12 月からはその着工にとりかかるようにし、ついで亀城(クソン)、徳川(トクチョン)地区にも近代的な機械工場を建設するようはからった。そして、農業の社会主義的改造に寄与する大規模な国営農場、牧場と農業機械賃耕所を各地に設け、役牛共同利用班、労力互助班といった共同労働組織形態を大いに普及、発展させるようにした。また、国の資源調査と大自然改造事業の準備を将来を見通して手配し具体的に指導した。

主席は戦後の復興建設と社会主義建設に必要な民族幹部を養成

するため、各地の大学を再び開校させ、1951 年 8 月には大学卒業生と大学生を前線から呼びもどす大胆な措置を講じた。翌年の 4 月には金日成総合大学を、6 月には中央党学校(現在の金日成高級党学校)と金策工業大学(現在の金策工業総合大学)などいくつもの大学と幹部養成機関を訪ねて民族幹部養成の方向を示し、教授活動での難問を解決した。

1952 年 4 月には科学者大会を招集し、科学研究の方向と科学者の任務を明示し、同年 12 月には科学院を創設し、科学者の研究活動と生活のすみずみまで深い関心を払った。主席は戦時における文学・芸術の任務と作家、芸術家の活動方向を明示し、思想性、芸術性の高い、戦闘的でアピール性に富んだ文学、映画、演劇、美術作品や戦時歌謡を数多く創作させ、さらに芸術サークル公演と軍勤務者芸術祭典、移動映写班などを組織して戦う人民軍軍人と人民を力強く鼓舞した。

主席はアメリカ帝国主義侵略者を国際舞台で徹底的に孤立させ、世界の革命的人民との国際的連帯を強める対外活動を積極的にくりひろげるよう指導した。労働党と共和国政府、大衆団体をして、朝鮮でのアメリカ侵略軍の野獣じみた集団的虐殺や細菌戦、化学戦の真相をさまざまな形式と方法で暴露するようにした。その結果、アメリカ帝国主義は朝鮮戦争を引き起こした侵略者、戦犯であるという事実が天下にあばきだされ、世界各国人民の憎しみと糾弾の的となった。

また、社会主義・人民民主主義諸国との多方面にわたる友好・協力関係を発展させ、国際的な反米・反戦闘争において世界のすべての革命勢力と歩調を合わせる活動を通じて、朝鮮人民の正義の偉

業にたいする世界の進歩的な人民の支持声援と国際的連帯をいっそう強めた。

主席は戦争の最終的勝利をめざす戦いを賢明に指導した。

前線でも惨敗を重ね、停戦会談の場でも守勢に立たされたアメリカ帝国主義侵略者は、「交渉より行動が第一」だとして新たな大規模な攻勢を準備した。

新たな情勢は、敵のこの軍事的攻勢を粉砕し、戦争の最終的勝利を達成するための決定的な対策を求めていた。

主席はなによりもまず革命の参謀部である党を強化するため、1952 年 12 月の党中央委員会第 5 回総会での報告『党の組織的・思想的強化はわれわれの勝利の基礎』で、労働党を組織的、思想的に強化する綱領的な課題を提示した。

まず、党員の党性鍛練を党建設の根本問題の一つとし、それを科学的に解明した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「党性を強めるということは、個々の労働党員が党に限りなく忠実で、党活動に積極的であり、革命の利益と党の利益を第一の生命とみなして個人の利益をこれに服従させ、いつどこで、どのような状況のもとでも党の利益と党の原則をかたく守り、いっさいの反党的、反革命的な思想と妥協することなくたたかい、党の組織生活を忠実におこない、党の規律を厳格に守り、党と大衆との結びつきをたえず強めることを意味します」

主席は、党性を強めるためには、個人の利益を革命の利益に服従させないいっさいの自由主義的傾向との闘争を根気よくくりひろげ、党員の党生活、とくに批判と自己批判を強めなければならない

と強調した。そして党員の党性鍛練を、セクト主義に反対し、党の統一団結を固守する闘争と密接に結びつけて進め、党の統一団結を妨げる分派分子の策動に警戒心を高めて厳格に監視し、セクト主義との闘争を強力に進めることを全党に呼びかけた。また、党の思想活動において教条主義、形式主義、民族虚無主義を克服し、朝鮮の具体的現実と朝鮮革命の実践的要求に合わせて党の思想教育をおこなう課題を提示した。

労働党第 5 回総会の文献討議を全党的な思想闘争として強力に進める過程で、党員の党性はかつてなく高まり、党の戦闘力はいちだんと強まり、セクト主義をはじめあらゆる反党的な傾向が克服され、党内に長らく潜入していた朴憲永（パクホンヨン）、李承燁（リスンヨプ）スパイ一味の反党的・反革命的陰謀と罪状があばきだされた。

主席は、党の組織的・思想的強化をはかる一方、アメリカ侵略軍の大規模な攻勢を予見して、1952 年 12 月の下旬、朝鮮人民軍高級将校会議で人民軍を強化する課題を提示し、ついで最高司令官命令『陣地防御の強化について』を下達した。

1953 年に入り、アメリカ侵略軍は朝鮮の東西両海岸に上陸して前線と後方を断ち切り、基本戦線の攻撃とあいまって人民軍の主力部隊を「包囲掃滅」せんとする野望のもとに、冒険的な「新攻勢」の準備をいっそう急いだ。

主席は 1953 年 1 月の軍事委員会第 53 回会議での結語『アメリカ帝国主義の「新攻勢」を粉砕する対策を立てるために』で、全人民と人民軍を政治的、思想的に動員し、前線と海岸の防御陣地を早急に構築し、平壌地区防御司令部を設け、人民自衛隊の訓練を強める具体的な課題を示した。そして、党中央委員会の手紙を送り、す

べての党組織と党員を敵の「新攻勢」粉砕のための決死の戦いに立ち上がらせた。また 2 月下旬には自ら東海岸の海岸防御部隊の将兵と軍需工場の労働者をはじめ前線の勇士と後方の人民を訪ねて「血の最後の一滴までささげて祖国の寸土を守り抜こう!」「ともに敵せん滅の決戦へ!」というスローガンのもとに、最後の決戦にひとしく奮起するよう万全の準備を整えさせた。

主席は同年 1 月の末、アメリカ侵略軍が「新攻勢」の序幕として強行した鉄原（チョルウォン）西方の丁字形高地への大規模な攻撃作戦を、臨機応変の大胆な作戦指揮によって完全に粉砕した。

アメリカ侵略軍は、朝鮮人民と人民軍の不敗の気概と威力に恐れをなし、最後の期待をかけて長いあいだ準備してきた「新攻勢」を中途で放棄せざるをえなかった。

主席は戦争の主導権を確固と握り、1953 年の 5 月中旬から 7 月下旬までの期間、3 回にわたる強力な打撃戦を指揮した。

人民軍部隊はこの打撃戦で、351 高地攻撃戦闘をはじめ 1，800 余回にわたる大小の戦闘をくりひろげて敵にせん滅的な打撃を与え、343 平方キロメートルの広い地域を解放した。

アメリカ帝国主義侵略者は、ぬきさしならぬ窮地に陥った。敵は 3 年間の朝鮮戦争で 40 万 5，490 余名のアメリカ侵略軍を含めて 156 万 7，120 余名の兵力を失い、1 万 2，220 余機の航空機、560 余隻の艦船、3，250 余台の戦車と装甲車、1 万 3，350 余台の自動車、7，690 余門の各種火砲、92 万 5，150 余挺の狙撃兵器を消失または撃破された。

英雄的な朝鮮人民と人民軍によってとりかえしのつかない軍事的・政治的・道徳的敗北をこうむったアメリカ帝国主義者はついに、

朝鮮人民の前に膝を屈し、停戦協定に署名せざるをえなくなった。

1953 年 7 月 27 日、アメリカ帝国主義侵略者に抗する朝鮮人民の正義の祖国解放戦争は偉大な勝利をもって終結した。この日、首都平壌の夜空には戦勝を祝う花火が打ち上げられた。

朝鮮人民がアメリカ帝国主義侵略軍をはじめ 16 か国の武力侵攻者と南朝鮮かいらい軍など 200 余万に達する膨大な兵力を相手どっての力に余る戦いで輝かしい勝利をおさめることができたのは、ひとえに主席の卓抜な洗練された指導があったからである。

主席の賢明な指導のもとに朝鮮人民と人民軍は祖国解放戦争で勝利することにより、朝鮮民主主義人民共和国を守りぬき、民族の自主権と革命の獲得物を誇らしく守り、英雄朝鮮の尊厳と栄誉を世界にとどろかせた。また社会主義・人民民主主義諸国の安全と世界平和を守る偉業に大きく寄与し、アメリカ帝国主義の「強大さ」の神話を打ち砕き、かれらに下がり坂を歩ませる端緒を開いた。

主席は祖国解放戦争を輝かしい勝利に導き、党と革命、祖国と人民、時代と歴史に貢献した不滅の業績により、1953 年 2 月 7 日に朝鮮民主主義人民共和国元帥称号を、7 月 28 日には朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を受けた。

主席はアジアの「盟主」をもって任じていた強盗日本帝国主義を打倒し、世界「最強」を誇っていたアメリカ帝国主義を打ち破ることによって、一代で 2 回の革命戦争を輝かしい勝利に導いた天才的な軍事戦略家、百戦百勝の鋼鉄の総帥として、万民の厚い信頼と尊敬を受けるようになった。

8

1953年7月～1960年12月

金日成主席は、全党と全人民を戦後の人民経済復興建設と社会主義基礎建設に立ち上がらせた。

祖国解放戦争で勝利した朝鮮人民には、敵の新たな戦争挑発策動に対処して緊張態勢を保ち国防力を強化する一方、破壊された人民経済を復興して零落した人民生活の安定、向上をはかり、共和国北半部の革命基地を政治的、経済的、軍事的にうちかためるべき重大かつ困難な任務が提起された。

戦争によってすべてが破壊され灰燼（かいじん）に帰したため、なにからどう復興し建設すべきか、皆目見当がつかないほど国情は困難をきわめ、難関が重畳していた。アメリカ帝国主義者は、朝鮮は100年たっても再起できないだろうとうそぶき、朝鮮に同情する友人たちさえ憂慮を抱いた。

主席は、人民と領土があり、党と人民政権がある以上、いかに戦禍がひどく国情が困難であっても、新しい生活を築くことができるという確信を持って、戦後の復興建設を強力に推進した。

1953年7月28日、全朝鮮人民に送る放送演説で「すべてを民主基地の強化をめざす戦後の人民経済復興発展のために!」という戦

闘的スローガンを示し、戦勝を祝う平壌（ピョンヤン）市民大会に参加したその足で江南（カンナム）窯業工場を現地指導し、7 月 29 日には平壌紡織工場と黄海（ファンヘ）製鉄所、8 月 3 日には降仙（カンソン）製鋼所と南浦（ナムポ）地区の工場、企業所を訪ね、労働者、技術者たちと復興建設の方途について協議し、復興建設においても朝鮮人の気概を示すべきであると励ました。

同年 8 月 5 日の党中央委員会第 6 回総会での報告『すべてを戦後の人民経済復興発展のために』で、戦後の人民経済復興発展の基本方向とその遂行方途を示し、戦後の経済建設の基本路線をうちだした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「われわれは、戦後の経済建設において、重工業の優先的な復興発展を保障しながら、同時に軽工業と農業を発展させる方向へ進まなければなりません。そうすることによってわが国の経済の土台を強化し、人民生活を速やかに改善することができるのです」

戦後の経済建設の基本路線は、人民生活を安定、向上させ、社会主義の物質的・技術的土台を速やかに築くべき朝鮮の経済発展の合法則的要求と現実的可能性を正しく見積もった唯一の正当な路線であり、拡大再生産をりっぱに実現して経済をたえず速いテンポで発展させる創造的な路線であり、自力更生、刻苦奮闘の革命精神にもとづいて国の自立的民族経済を速やかに建設するという党の確固不動の立場を明らかにした革命的な路線であった。

主席は、膨大な戦後の人民経済復興建設を三つの基本的段階、すなわち半年ないし 1 年間の全般的な復興建設のための準備段階、人民経済の各部門を戦前の水準に回復させる 3 か年計画の遂行段階、そして社会主義的工業化の基礎を築く 5 か年計画の遂行段階

に分けて進めるべきであるとし、各段階の目標と方向を明示した。

主席は戦後の復興建設を賢明に指導した。

まず復興建設を成功裏に進めるための政治的・経済的諸対策を講じた。

主席はなによりも党を強化し、大衆の底知れない力を汲み上げることが復興建設の成果をもたらすカギとみなし、全党的に党中央委員会第 5 回総会の文献の再討議をおこなって党隊伍の純潔を保ち、党員の党性を鍛えるとともに、政治・思想活動を強化して党員と勤労者が復興建設において自力更生、刻苦奮闘の革命精神を強く発揮するよう導いた。

また、1953 年 8 月には全国戦闘英雄大会を開催し、全人民と人民軍戦士たちがアメリカ帝国主義を打ち破ったその気勢、その気迫で復興建設において英雄的偉勲を立てるよう激励した。ついで同年 10 月の祖国統一民主主義戦線咸鏡(ハムギョン)南道活動者会議および 12 月の党中央委員会第 7 回総会では、戦後の新たな環境に応じて統一戦線活動を改善する対策を講じ、各階層の大衆を党のまわりにいっそうかたく団結させ、復興建設に立ち上がらせた。

そして戦時の経済システムを戦後の新たな情勢の要求に即して改編し、有能な活動家を経済建設分野に派遣するとともに、多くの人民軍軍人を除隊させて人民経済の各部門に送る措置を講じた。一方、多くの工場、企業所、農村、建設現場、教育・文化機関をつぎつぎと現地指導し、復興建設に立ち上がった勤労者と軍人、青年学生を励ました。

主席の呼びかけに応えて、全人民は困苦欠乏に耐え、富強な祖国を建設するための復興建設で愛国的献身性を余すところなく発揮

した。降仙製鋼所をはじめ多くの工場、企業所の労働者は停戦後わずか数週間で生産施設を復旧して生産を開始し、鉄道部門の労働者は数日のうちに幹線の列車を運行させた。

全般的な復興建設の準備段階の課題はわずか 5 か月のあいだにりっぱに遂行され、1954 年からは 3 か年人民経済計画の遂行に着手できるようになった。主席は 1953 年 10 月の経済部門責任幹部協議会で、3 か年人民経済計画(1954～1956)の作成で提起される中心的かつ原則的な諸問題について述べた。

3 か年計画の基本課題は、戦争によって破壊された経済を早急に復興し、人民経済各部門を戦前の水準に回復させることであった。これは単なる原状回復ではなく、工業の植民地的跛行性をなくし、国の工業化を実現するための条件を整える方向で復興することを見込んだきわめて膨大な計画であった。

主席は 3 か年計画を成功裏に遂行するため、1954 年 3 月の党中央委員会総会で、戦後の新たな環境に応じて人民経済にたいする指導・管理と幹部の活動方法を改善し、党組織が多くの力を農村に傾けていた戦時とは違って人民経済の主導的部門である産業部門に関心を払い、経済建設にたいする党の指導を強化するよう強調した。また、数回の閣議と人民経済部門別会議を開いて、人民経済計画遂行のための具体的な課題と方途を示した。

主席は 3 か年計画の遂行にあたって、とくに戦後の経済建設の基本路線を貫くよう導いた。朝鮮労働党の経済建設基本路線に反対する反党分派分子の妨害策動を粉砕して、重工業の復興に主力を注ぎ、既存工場の復旧、改造、拡張工事と新しい工場の建設を正しく組み合わせるとともに、重工業のための重工業でなく、軽工業と農

業の発展、人民生活の向上に必要な重工業の建設に力を集中する措置をとった。

1954 年 6 月には黄海製鉄所を訪れ、この製鉄所を戦後の経済建設における「1211 高地」にみなして先鋒に立たせ、ついで 7 月には金策(キムチェク)製鉄所と城津(ソンジン)製鋼所を訪れ、将来を見通しての復旧建設方向、それに鉄鋼材増産の課題とその遂行方途を示した。また、翌年の 11 月には降仙製鋼所を現地指導し、当地の労働者たちが 3 か年計画の遂行で先頭に立つよう励ました。

こうして、短期間のうちに黄海製鉄所の第 1 号平炉と大型条鋼圧延職場、降仙製鋼所の分塊圧延職場、金策製鉄所の第 1 号コークス炉などが復旧され操業を開始した。

主席は機械製作工業基地の創設に大きな意義を付与した。1954 年 4 月の熙川(ヒチョン)機械工場と熙川自動車部品工場の幹部および労働者協議会で、機械製作工業を発展させる課題を示し、ついで亀城(クソン)、北中(プクチュン)、楽元(ラクウォン)などの機械工場と建設現場を訪れ、各種の機械生産基地をバランスよく建設するよう指導した。

また軽工業と農業を同時に発展させるため、平壌紡織工場、亀城紡織工場、新義州(シンイジュ)紡織工場、清津(チョンジン)紡績工場など大規模な軽工業部門の工場を復旧または新設し、各地に食品工場と日用品工場を建設し、軽工業の土台を築くようにした。これと同時に、破壊された農業を早急に復旧し、平南(ピョンナム)灌漑の第 1 段階工事をおこなって灌漑面積を増やし、農業機械と化学肥料の生産基地を復旧、拡張するようはからった。

そして、戦後の復興建設の困難な状況のもとでも、人民の生活を安定、向上させるため、国家資金で学校と住宅を建てるようにし、

数回にわたって商品価格の引き下げと労働者、事務員の賃金大幅引き上げの措置を講じた。

主席は、戦後の経済建設と並行して、都市と農村において生産関係を社会主義的に改造する社会主義革命を強力に推進した。

社会主義革命の時期には、搾取と抑圧を一掃し、人民大衆の社会的・政治的自主性を実現する問題、それに社会改造の問題が全面に提起されるようになる。

主席は戦後の時期を農業協同化の最適な時期とみなし、農業の社会主義的改造を本格的におし進めた。

主席は、停戦直後の 1953 年 8 月に招集された党中央委員会第 6 回総会で、農業協同化の課題を示した。

主席は既存の公式や外国の経験にこだわることなく、国の実情に即して朝鮮式に、農業の技術的改造に先立って経営形態を社会主義的に改造する独創的な方針をうちだした。

そして、チュチェ思想の根本原理にもとづき、農業協同化の実現における決定的条件は農業が現代技術で装備されているかどうかにあるのではなく、農業協同化が農民自身の生活上の要求となっているかどうか、それを遂行する主体的力量が準備されているかどうかにあるということを新たに解明した。

主席は、農業協同化運動において自発性の原則を厳守し、実物教育によって農民を教育し、党と国家の指導と支援を強化するようはかるうとともに、貧農に依拠し、中農との同盟を強化しながら、富農を制限して徐々に改造する階級政策を実施した。また、協同組合の形態と規模、生産手段の統合方式なども農民の思想・意識水準と経済状態に応じて定めた。

そして、1954 年を農業協同化運動の経験的段階の期間とし、手始めに協同化をもっとも積極的に支持する貧農と農村の中核分子によって各郡にいくつかの農業協同組合を組織させた。

一方、1953 年 12 月の農業生産合作社、前線共同作業隊活動家協議会での演説『農業協同組合の組織、運営におけるいくつかの問題について』、1954 年 2 月の平安南道内農業協同組合管理委員長協議会での演説『実験的に組織した農業協同組合をりっぱに管理運営するために』をはじめ多くの演説で、協同組合を組織、強化し、その管理運営を改善するための具体的な方向と課題を明示した。

主席は停戦後はじめて迎える自分の誕生日にも、中和（チュンファ）郡三井（サムジョン）里に出向いて組合員たちと語らい、協同組合の優越性を高く発揮させる具体的な方途を示した。

主席の細心な指導によって、農業協同組合は初年度からその優越性を顕著にあらわし、単位面積あたりの穀物収量は個人農経営に比べて 10～50％も多く、現金収入は 2～7 倍に達した。

1954 年 11 月の党中央委員会総会での結語『今後の農業発展をめざすわが党の政策について』で、農業協同化運動の経験的段階における成果を総括し、協同化を大衆的運動として力強く展開する課題を示した。そして、この総会の決定を実行するための各道党委員会総会の開催を提起し、12 月末の党中央委員会政治委員会でその状況を総括し、農業協同化を大衆的運動に発展させるべく決定書を下達する措置をとった。

こうして、農業協同化運動は経験的段階での成果を踏まえて、1955 年から大衆的段階に入った。

主席は協同化運動の大衆的段階において、事を急いで自発的原

則に反し、行政的方法で協同化のテンポを速めたり、いちがいに高い形態や大規模な組合を組織しようとする偏向、それに一部の農民のあいだにあらわれた否定的傾向をそのつど是正させた。そして、農業協同化運動に反対する階級の敵との闘争を強力に展開するよう導いた。

また、急激に増加する農業協同組合を政治的思想的に、経済的技術的に強化し、その管理運営を改善するために種々の革命的な措置を講じ、その活動を現地で指導した。農業協同化を推進する期間、平安南道の農業部門だけでも 100 回以上の現地指導をおこない、1955 年 11 月には順安(スンアン)郡元和(ウォンファ)協同組合を訪れ、「わたしもここの組合員です」と述べ、一緒に農業をりっぱに営んで組合を発展させようと組合員たちを励ました。

一方、「米はすなわち社会主義である」というスローガンをうちだし、農業協同化の生命力を十分に発揮させて穀物生産の増大を促した。

農業協同化運動は速いテンポで推進され、1956 年末には全農家の 80.9%が協同組合に加入した。

主席は農業の協同化とともに、都市の手工業と資本主義的商工業の社会主義的改造を強力に推進した。

主席は戦前から部分的に実施してきた手工業協同化の経験を踏まえて、戦後に手工業者による生産協同組合を広範に組織し、物質的・技術的・財政的支援を強めて組合の強化をはかった。その結果、戦後、手工業の社会主義的改造は急速に推進され、1956 年にはほぼ完了するにいたった。

戦争の被害によって資本主義的商工業者が手工業者と大差ない

境遇に置かれた状況下で、主席は戦後、かれらを収奪せずに社会主義的に改造するという独創的な方針をうちだした。

自発性の原則にもとづいて、資本主義的商工業者が自分の意思によって生産協同組合、販売協同組合、生産・販売協同組合などの協同経営に参加するように導いた。そして、経営形態の改造と人間改造を密接に結びつけて、すべての商工業者を社会主義的勤労者に改造し、かれらを社会主義・共産主義社会に導いていく政策を実施した。こうして、資本主義的商工業の社会主義的改造も成功裏に推進された。

主席は社会主義革命と社会主義建設にたいする強い確信のもとに、修正主義者と大国主義者、事大主義者、教条主義者の妨害策動をはねのけ、1955 年 4 月に、朝鮮革命の性格と任務に関するテーゼ『すべての力を祖国の統一独立と共和国北半部における社会主義建設のために』を発表した。

テーゼには、北と南のまったく異なる政治情勢、複雑な社会・経済関係と階級関係の科学的分析にもとづき、朝鮮革命全般の性格と基本任務が明確に規定されており、革命の全国的勝利のために共和国北半部で社会主義革命と社会主義建設を強力に推進することが明らかにされ、社会主義基礎建設のための党の任務と課題が示されている。

金日成主席はつぎのように述べている。

「社会主義へ進む過渡期の現段階でわが党の果たすべき基本任務は、労働者と農民の同盟を強化しながら、戦後人民経済の復興発展のための闘争でかちとった成果を踏まえて、社会主義の基礎を建設することである」

テーゼは、都市と農村において小商品経済形態と資本主義的経済形態を改造して社会主義的生産関係の全一的支配を確立し、国の生産力を発展させて社会主義的工業化の基礎を築くことを、社会主義基礎建設の総体的課題として規定している。

北半部における社会主義革命と社会主義建設が深刻な階級闘争をともなう状況のもとで、主席は党員と勤労者の階級意識を高め、かれらを思想的に鍛え、人民大衆を党のまわりに結集することに深い関心を払った。

1955 年 4 月の党中央委員会総会でおこなった報告『党員にたいする階級的教育を強化することについて』『官僚主義をなくすために』と、結語『社会主義革命の現段階における党および国家活動のいくつかの問題について』で、主席は党内の階級的教育の必要性と意義、その基本方向と方途を明らかにするとともに、官僚主義をなくして党活動の方法と作風を改善し、党と大衆との結びつきを強化する課題を示した。また、党内に残っているセクト主義的要素について指摘し、分派分子や個人英雄主義者によって党の隊伍が弱化させられないようにし、党の統一団結を強化するために強くたたかうよう強調した。

主席は 4 月総会の文献の浸透と討議を進めるようにし、労働者と農民、人民軍軍人、新しい世代の青年学生の階級的教育を強化し、かれらを階級的に自覚させることに大きな力を注ぎ、また官僚主義を克服するための思想教育とともに全党的な思想闘争を強力に展開するよう指導した。その結果、社会主義建設で人民大衆の革命的熱意と創造的積極性が大いに発揮されるようになった。

主席は事大主義、教条主義を排し、主体性を確立するための断

固たる措置を講じた。

外国のものをうのみにし、機械的にまねることが習性となっていた事大主義者、教条主義者、分派分子は戦後、労働党の新しい独創的な路線や方針を頭ごなしにあげつらって反対し、外国のものばかり押し立てようとした。時を同じくして、大国主義者は朝鮮にワルシャワ条約機構とコメコンに加盟するよう圧力をかけ、その指図に従わせようと策動した。

主席は思想活動における主体性の確立に第一義的な意義を付与し、1955 年 12 月に党の宣伝扇動活動家におこなった演説『思想活動において教条主義と形式主義を一掃し、主体性を確立するために』で、労働党の思想活動において主体性を確立する綱領的課題を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「わが党の思想活動における主体とはなんでしょうか。われわれは何をしているのでしょうか。われわれは、どこかよその国の革命をおこなっているのではなく、まさに朝鮮革命をおこなっているのです。この朝鮮革命こそ、わが党の思想活動の主体なのです。したがってすべての思想活動は、必ず朝鮮革命の利益に服従させなければなりません」

主席は、思想活動で主体性を確立するためには、民族虚無主義的傾向をなくし、朝鮮の歴史と地理、風俗をよく知り、朝鮮人民の闘争の歴史と労働党の革命伝統を深く研究し、それを広く宣伝しなければならないと述べた。また、外国のものを仰ぎ見る事大主義的傾向をなくして自国のものを誠実に研究し、労働党の路線と政策に精通し、それによって党員と勤労者を教育するよう強調した。同時

に、マルクス・レーニン主義と外国の経験を教条主義的に取り入れるのではなく、朝鮮の具体的な条件と実情に即して創造的に適用すべきであると指摘した。

1955 年は、事大主義、教条主義を排して主体性を確立するための労働党の一貫した闘争において一つの転機となった。このときから、教条主義に反対する労働党の闘争は現代修正主義に反対する闘争と結びつくようになった。

その後、主席は 1956 年 2 月の党中央委員会常務委員会で、党の思想活動の形式と内容を全面的に改善し、党員と勤労者をチュチェ思想で武装させる対策を講じ、同年 1 月と 3 月には民族文化・芸術を主体的に発展させる方針と方途を示した。

思想分野において主体性を確立する闘争が力強く展開された結果、党員と勤労者の思想生活と思考方式にはいちじるしい変化が起こった。

主席は思想分野で主体性を確立するとともに、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を終始一貫つらぬいた。

戦後の人民経済の復興が最終段階に入り、生産関係の社会主義的改造において決定的な勝利がもたらされていた時期に、主席は党と人民に新たな闘争綱領を示すため、1956 年 4 月 23 日から 29 日にかけて朝鮮労働党第 3 回大会を招集した。

主席は大会でおこなった党中央委員会の活動報告で、総括期間の党の活動における成果と経験を総括し、党と人民を新たな勝利に向けて立ち上がらせる綱領的な課題を示した。

まず、朝鮮労働党の自主的で原則的な対外政策を改めて明らか

にし、社会主義基礎建設の綱領を短期間で完成するための人民経済発展 5 か年計画（1957～1961）の目標をうちだした。また、国家社会制度を強化する課題と、祖国の自主的統一を実現する具体的な方案を示した。そして、党のさらなる強化発展のためにセクト主義を排して党の統一団結を固守し、党の組織活動を改善し思想活動で主体性を確立する課題を提示した。

大会では、党建設と革命発展の要求に即して党の規約が改正され、宣言「祖国の平和的統一のために」が採択された。そして、全党員と人民の一致した意思と念願によって、主席は再び朝鮮労働党中央委員会委員長に推戴された。

第 3 回党大会を契機に、朝鮮労働党は新たな発展段階に入り、革命と建設はいっそう強力に推進された。

第 3 回党大会以後、主席は党の統一団結の強化に第一義的な関心を向けた。アメリカ帝国主義と南朝鮮かいらい一味の「反共」「北進」騒ぎと大国主義者の圧力が強まり、種々の経済的難関のため革命の前に困難かつ複雑な情勢が生じると、党内で機会をうかがっていた反党・反革命分派分子が頭をもたげてきた。

主席は 1956 年 8 月の党中央委員会総会で、正面切って党を攻撃した反党・反革命分派分子を暴露、粉砕する断固たる措置を講じた。

総会では、社会主義諸国を歴訪した政府代表団の活動総括と党の当面の課題に関する問題、人民保健医療事業の改善問題が討議されたのだが、反党・反革命分派分子は、議題とまったく関係のない問題をもちだして党を攻撃した。抗日革命闘士をはじめ参会者は、かれらの無謀な挑戦に決定的な打撃を加えた。総会で暴露、粉砕された分派は単なる分派ではなく、アメリカ帝国主義と結託して党と

政府を転覆しようとした極悪な反党・反革命分子であった。

主席は総会で、今後、党内の分派活動を無条件禁止し、それがどんな口実のもとに進められようとも、またいかにささいなことであっても、断固粉砕しなければならないと強調した。

歴史の教訓は、分派分子の汚らわしい分派的習性は終生直らず、しまいには党と革命を裏切り、反革命の道に走ることを示している。

主席は後日、自分は反党・反革命分派分子のために髪が白くなったと述懐している。

8 月総会以後、主席は反分派闘争で堅持すべき原則と方途を明示し、セクト主義に反対する党内闘争を強力に展開するよう導いた。

降仙の労働者たちは主席に、分派分子らを電気炉に投げこんでやるから自分たちのところに送ってもらいたいと言い、台城（テソン）の一老女は、「なんといってもわたしたちが勝つにきまっているし、分派分子らは勝てません。心配なさらないでください。わたしたちは首相さまを支持します」と述べた。それは全人民の鉄の意志であり信念であった。反分派闘争を通じて党の隊伍はいっそう純潔になり、党と革命隊伍の統一団結は確固不動のものとなった。

主席は党の隊伍をうちかため、全人民を党のまわりにかたく結集して内外の敵の攻勢に決定的な反撃を加える一方、主な力を社会主義経済建設に注ぐようにした。

主席は 1956 年 12 月の党中央委員会総会において社会主義建設で革命的大高揚を起こすための革命的方針を示し、「増産し節約して 5 か年計画を期限前に超過完遂しよう！」という戦闘的なスローガンをうちだした。そして総会後、人民大衆の中に入って、かれらを社会主義建設の大高揚へと奮い立たせた。

1956 年 12 月末には降仙製鋼所に出向いて幹部および模範労働者協議会を招集し、労働者たちに党中央委員会 12 月総会の基本精神と内外の情勢、困難な国情について話し、われわれは労働者階級と人民のほかに頼るものはないと大きな信頼と期待を寄せた。そして、現状において鋼材を計画外に 1 万トンだけ増産すれば国が一息つけると述べ、増産の余地を探し出す方途を示した。1957 年 1 月初には黄海製鉄所を訪れ、ついで各地の工場、企業所、農村、建設現場、水産事業所などを現地指導し、勤労者をチョンリマ（千里馬）の大進軍へと導いた。また、同年 4 月と 10 月に党中央委員会総会を開き、立ち遅れている水産部門と建設部門をもり立てる対策を講じた。

主席の示した「チョンリマを駆る勢いで前進しよう！」というスローガンのもとに、労働者階級と勤労者は自力更生、刻苦奮闘の革命精神を発揮して内部の潜在力を極力見つけ出し、最大限の増産と節約によって社会主義建設の各部門で世人を驚嘆させる奇跡と革新を起こした。

降仙製鋼所の労働者は鋼鉄によって主席を擁護しようという一念で公称能力を突破し、6 万トン能力の分塊圧延機で 12 万トンの鋼片を生産する奇跡的な成果をあげた。降仙に上がった大高揚ののろしはまたたく間に全国に波及した。金策製鉄所の労働者は 19 万トン能力の設備で 27 万トンの銑鉄を生産し、黄海製鉄所の労働者は 1 年足らずのあいだに自分の力と技術で大型溶鉱炉を建設した。

こうして、1957 年度の工業生産は前年に比べて 144％という飛躍的なテンポで成長し、穀物生産計画は 112％と超過遂行された。

革命的大高揚の過程で、敵の「反共」攻勢や「北進」騒ぎも、反党・反革命分派分子の陰謀もことごとく粉砕され、修正主義者、

大国主義者も口をつぐまざるをえなくなった。逆境が順境に変じ、禍が福となり、社会主義建設の大高揚のなかでチョンリマ運動が開始されたのである。

歴史的な党中央委員会 12 月総会を契機にはじまったチョンリマ運動は、勤労人民大衆の革命的熱意と創造力を余すところなく発揮させ、経済と文化、思想と道徳の各分野で古きを一掃して新しいものを創造し、社会主義建設を最大限に促進する全人民的な運動であった。チョンリマ運動は社会主義建設における労働党の総路線となった。

主席は、社会主義経済建設で新たな高揚が起こっていた 1958 年 3 月に朝鮮労働党代表者会議を招集した。会議では、人民経済発展第 1 次 5 か年計画に関する問題、党の統一と団結をさらに強化する問題などが討議された。

この会議での結語『第 1 次 5 か年計画を成功裏に遂行するために』で、主席は第 3 回党大会が規定した 5 か年計画の基本方向にもとづいて人民経済各部門の課題を具体的に示し、セクト主義との闘争を総括し、党の統一団結をさらに強化する綱領的課題を提示した。そして、党の統一と団結を強化するために、セクト主義とともにその温床である地方主義、家族主義を根絶し、修正主義との闘争を強力に展開しなければならないと述べた。また、党員の党生活と思想教育を強化し、セクト主義との闘争で全党が党中央を擁護し、その指導に忠実に従うべくいっそう努力するよう強調した。

主席は、セクト主義に反対し、社会主義建設で革命的高揚を起こすために奮闘するとともに、分派事大主義者によって扶植された官僚主義、形式主義の古い枠を打破し、党活動に新たな革命的転換

をもたらすよう指導した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「党活動は、1955 年 4 月総会、第 3 回党大会、とくに 1956 年の反分派闘争以後に大きな転換をもたらしました」

官僚主義、形式主義の古い枠を打破するため、主席はなによりも党活動家をチュチェの党活動原理で武装させることに関心を払った。

1957 年 7 月に道・市・郡党活動家と党オルグにおこなった演説『党組織を強化し、党の経済政策を貫くために』と、翌年の 3 月に道・市・郡党委員長および人民委員会委員長におこなった演説『党活動の改善について』をはじめ一連の著作で、党活動の基本は対人活動であるとし、党組織の党内活動と行政・経済活動にたいする指導を強化し、党活動家の行政的、命令的な統制の方法、天下り式方法を一掃し、説得と教育を基本的方法とすることを強調するとともに、党活動の本質と基本内容、方法など党活動の理論を新たに提示した。

主席はチュチェの党活動理論を深化発展させるとともに、それに見合った党活動体系の立て直しをはかった。

主席は、党中央委員会から初級党組織にいたるまでの各級党組織と党活動家が党の意図と政策をよく知り、無条件に実行する革命的規律を打ち立てた。そして、党内各部署の位置と基本的任務を明確に規定し、すべての部署がそれぞれの位置と職能に即して党組織と幹部、党員との活動をおこなう体系と、新しい幹部事業体系を確立した。また、革命と建設に対する党の指導を決定的に強化するため、党委員会を当該単位の最高指導機関として位置づけ、国家・経済・文化機関や勤労者団体など、あらゆる機関と組織が例外なく当

該党委員会の集団指導のもとですべての活動をおこなう体系を打ち立てた。

革命的な活動方法の確立に深い関心を払っていた主席は、活動家の官僚主義的活動方法を克服し、革命的活動方法を確立するよう指導した。従来の党の点検という通称を党の集中指導と改め、指導メンバーが以前のように欠点の摘出にあたるのではなく、大衆自身が自らの欠点を見つけて是正するように助け、教えるようにさせた。これは新しい下部指導方法の創出であった。

主席は人民軍内の党の政治活動を改善することにも深い関心を払った。1958 年 3 月の党中央委員会総会における結語『人民軍内における党の政治活動を強化するための課題』で、人民軍内における党の政治活動の方向を明示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「今日、われわれが示す人民軍内における党の政治活動の方向は二つです。一つは政治生活、党生活を強化することであり、他の一つは思想教育活動を強化することです。これがこのたびの総会の基本精神です」

主席は、人民軍内における党の政治活動を強化するため、人民軍全般に党委員会制を設けて各級の党委員会を組織し、その党委員会が政治機関の活動と幹部の党生活にたいする指導と統制の機能を果たすべきであるとした。そしてすべての軍人に、人民軍は労働党の軍隊であり、抗日武装闘争の革命伝統を継承した革命的武力であることを正しく認識させ、軍人を社会主義的愛国主義の思想で武装させなければならないと強調した。主席の結語は、人民軍内で分派の余毒を一掃し、党の政治活動を改善するうえで綱領的指針となった。

主席は党活動を改善する一方、人民政権をさらに強化しその機能と役割を高めることに大きな力を注いだ。

1957 年 8 月の第 2 期最高人民会議代議員選挙での輝かしい勝利は、難局を打開して朝鮮革命を一大高揚へと導いた主席への限りない尊敬と信頼のあらわれであり、人民政権を強化するうえで歴史的な契機となった。金日成主席は、最高人民会議第 2 期第 1 回会議で再び朝鮮民主主義人民共和国の内閣首相に推戴された。

1957 年 7 月と 9 月に発表した著作『新しい環境にふさわしく郡人民委員会の活動を改善するために』と『社会主義建設における人民政権の当面の課題について』をはじめ諸著作で、人民委員会の活動体系と活動方法を改め、社会主義建設を促進するための人民政権機関の当面の課題を明示した。

これによって、人民政権の経済組織者、文化教育者としての役割が高まり、人民委員会の活動体系が個人経営を指導していた体系から社会主義的集団経営を指導する体系に改編され、地方の人民委員会の計画化事業が強化された。

主席は革命の前進を阻もうとする階級敵の反革命的策動を粉砕し、とくに人民政権の独裁の機能を強化する措置を講じた。

1957 年 5 月の党中央委員会常務委員会で、主席は反革命分子との闘争を強化することに関する決定の採択をはかる一方、それを実行する活動を強力に展開するよう指導した。主席は、反革命との闘争で敵味方を正しく判別し、あくまでも現行犯とたたかい、反革命との闘争を日常的な政治闘争、大衆的闘争として展開するよう導いた。

反革命との闘争において司法・検察・内務機関の役割を高めることに深い関心を払っていた主席は、1958 年 3 月の内務部門活動

者会議でおこなった演説と、4 月の全国司法・検察部門活動家会議でおこなった演説『わが党の司法政策を貫くために』で、法の階級的性格を否定する反党・反革命分派分子の修正主義的詭弁の不当性と弊害をあばき、司法・検察・内務機関が独裁の機能を強化すべきであると述べた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「一部の人は、共和国の人民民主主義独裁はプロレタリアート独裁ではなく、プロレタリアート独裁とブルジョア独裁の中間の、ある種の中間独裁であるかのように考えており、あるいはまた、共和国政府が統一戦線に基礎をおいているということから、あたかも人民政権がプロレタリアート独裁の範ちゅうには属さないかのように誤解しています。これは正しくありません。現在の共和国の人民民主主義政権はプロレタリアート独裁政権の範ちゅうに属します。われわれはいま社会主義を建設しています。社会主義を建設する政権は本質的にプロレタリアート独裁とならざるをえません」

主席は、法は社会主義を擁護する武器となるべきであるとし、法律執行機関のすべての活動家は党の指導に誠実に従い、労働党の司法政策に依拠して反革命分子との闘争を強化しなければならないと強調した。

これが実行されることによって、共和国の人民政権は社会主義建設の強力な武器としてさらに強化され、反革命との闘争を積極的に展開して階級敵の策動を摘発、粉砕し、社会主義革命と社会主義建設を成功裏に前進させることができた。

主席は全人民を党のまわりにかたく結集し、革命の基盤をさらにかためる一方、都市と農村における社会主義的改造を完成する活

動を賢明に指導した。

第 3 回党大会以後、農業協同化運動は完成段階に入った。主席はそれまでの協同化の成果をより強固にするとともに、まだ組合に加入していない都市周辺と山間地帯、新解放地区の個人農を、かれらの具体的実情と境遇に応じて種々の方法で協同経営にもれなく参加させるようにした。

こうして、朝鮮における農業協同化は 1958 年 8 月に成功裏に完遂された。これは農村における偉大な革命であった。

農業の社会主義的改造が完成すると、主席は協同組合を里単位に統合して、より先進的で強固な社会主義的協同経営に発展させた。

主席の指導によって、個人手工業と資本主義的商工業の社会主義的改造も、農業協同化の完成と前後して完了した。その結果、生産関係の社会主義的改造が 4、5 年という短期間にりっぱになし遂げられ、共和国北半部には搾取と抑圧のないもっとも先進的な人民大衆中心の朝鮮式社会主義制度が樹立された。朝鮮の社会主義は朝鮮人民自身が選択し、自らの手で建設したものであるため、人民の生活に深く根を下ろすようになった。

朝鮮における社会主義革命と社会主義建設を勝利に導き、人民大衆の自主性の実現において不滅の功績を残したことにより、主席は 1958 年 9 月に朝鮮民主主義人民共和国労働英雄の称号を受けた。

主席は『朝鮮民主主義人民共和国創建 10 周年記念慶祝大会でおこなった報告』と『わが国における社会主義的農業協同化の勝利と農業の今後の発展について』をはじめ諸著作で、社会主義制度が樹立された後にも旧社会の遺物は長いあいだ存続するので、勤労人民大衆を古い思想と文化、自然の束縛から完全に解放するためには革

命をつづけなければならないという思想を新たに示した。

そして、勤労人民大衆の自主性が完全に実現した共産主義社会を建設するためには、物質的要塞と思想的要塞をともに占領しなければならないとし、思想、技術、文化の 3 大革命を社会主義社会における革命の基本内容、共産主義を建設するまで進めるべき継続革命の課題と規定し、それを遂行するための具体的な方途を示した。

主席が示した社会主義下における継続革命に関する理論は、社会主義制度樹立後の革命に関する左右の日和見主義理論を打破し、社会主義・共産主義建設をもっとも正しい道に導く綱領的指針となった。

生産関係の社会主義的改造が完成した状況のもとで、主席は社会主義的工業化の基礎を一日も早く築くために、社会主義建設をさらなる大高揚に導き、人民経済の技術改造を強力に推進した。

社会主義的工業化の基礎構築は、きわめて複雑な状況下で進められた。大国主義者は機械工業を軸とする重工業を創設するという朝鮮労働党の路線に難癖をつけ、事大主義者がこれに同調した。かてて加えて消極性と保守主義、技術神秘主義が前進運動を妨げた。

主席は、自力で自立的工業を創設するという主体的立場を堅持した。1958 年におこなった演説『市・郡人民委員会の当面の課題について』『社会主義建設における消極性と保守主義に反対して』『社会主義建設の新たな高揚のための問題』などで、消極性と保守主義、技術神秘主義を打破し、大胆に着想し大胆に実践して社会主義建設の高揚を堅持し、人民経済の技術改造を促進する課題を提示した。また、党中央委員会 9 月総会では、駆けるチョンリマに拍車をかけて社会主義建設の大高揚をさらに高めることを訴える党中

央委員会の手紙を全党員に送る措置をとった。そして「鉄と機械は工業の王者！」というスローガンのもとに、工業化と技術革命で決定的意義をもつ冶金工業と機械製作工業の発展に革命的転換をもたらす措置を講じた。

9 月総会以後、主席は冶金工業の発展のために製鉄所と製鋼所を現地指導して、鉄鋼生産の方向と生産正常化の方途を示し、具体的な対策を立てた。また機械製作工業の急速な発展のために岐陽（キヤン）、徳川（トクチョン）、竜城（リョンソン）、北中（プクチュン）、楽元（ラクウォン）の各工場と西平壌（ソピョンヤン）鉄道工場の労働者を訪ね、抗日遊撃隊員の自力更生の革命精神と胆力をもって、自力でトラクターやトラックをはじめ大型機械と設備を作るよう厚い信頼を寄せた。

主席の構想と意図を体して、冶金工業部門の労働者、技術者は鉄鋼生産基地を拡大強化し、鉄鋼材の生産を増やすために奮闘した。機械工業部門の労働者は設計図も専門の生産設備もなく、すべてが不足する困難な状況のもとで、消極分子や保守主義者、技術神秘主義者、大国主義者たちの妨害策動をはねのけ、自力更生の革命精神を発揮して、1958 年 11 月に朝鮮ではじめての千里馬（チョンリマ）号トラクターと勝利（スンリ）58 トラック、千里馬号掘削機を生産し、12 月には赤い星（プルグンビョル）58 ブルドーザーを、翌年の 9 月と 10 月には 8 メートルターニングミルと 3，000 トンプレスを製作する奇跡的な成果をあげた。

1959 年 3 月、鏡城（キョンソン）郡の亜麻工場を現地指導したさい、当工場の労働者が工作機械を自力で製作し使用していることを知った主席は、これを重視し、同年 5 月の党中央委員会常務委員会拡大会議で「工作機械の子産み運動」を提唱した。そうして、わずか 1 年のあいだに全国的に計画外に 1 万 3，000 余台の工作機械が生産された。

主席は建設部門で革新を起こすため、1958 年 2 月に平壌市建設部門活動者会議を開いて建設部門の具体的な課題を示し、各建設現場を訪ねて隘路となっている問題の解決策を講じた。また電力工業を速やかに発展させるため、同年の 6 月には水豊（スプン）発電所を、8 月には将子江（チャンジャガン）発電所と雲峰（ウンボン）発電所の建設現場を現地指導し、自力で各地に多くの発電所を建設すべく革命的対策を講じた。化学工業の急速な発展に深い関心を払っていた主席はビナロン工場の建設を発起し、現地に出向いて建設を促進する方途を示した。

主席の賢明な指導によって、大規模の発電所と中小規模の発電所が各地に建設され、14 分間に 1 世帯分の住宅を組み立てる「平壌速度」が創造された。また青年建設者は、3、4 年を要する海州（ヘジュ）―下聖（ハソン）間の 80 余キロメートルの広軌鉄道敷設工事を 75 日間で完成させる偉勲を立てた。

主席は軽工業のさらなる発展のために、1958 年 6 月の党中央委員会総会で大規模な中央直轄工業と中小規模の地方経営工業を並進させる独創的な方針を示し、大衆的運動で各市、郡に一つ以上の地方産業工場を建設するよう導いた。その結果、わずか 3 か月のあいだに 1，000 余、1 年後には 2，000 余の地方産業工場が建設され、一般消費物資の需要をみたせるようになった。

主席は農業の技術改造のために、水利化を先行させながら機械化、電化、化学化を実現する方針を示し、それを強力に推進した。とくに「すべての力を 100 万ヘクタールの灌漑面積拡張へ！」という戦闘的スローガンをうちだし、人民あげての運動で畑地灌漑システムを確立し、水田灌漑面積を拡張した結果、水利化は短期間のうちに基本的に完成された。

主席の賢明な指導によって、人民経済の各部門で世人を驚嘆させる奇跡と革新がつぎつぎと起こり、経済は飛躍的な発展を遂げ、人民経済の技術改造が強力に推進された。

主席は社会主義建設の大高揚をさらに高め、人民経済の技術改造を推し進める一方、党員と勤労者の思想教育に深い関心を払った。

革命隊伍をかため、革命と建設を成功裏に遂行するために、主席は労働党の革命伝統を継承、発展させ、党員と勤労者のあいだで革命伝統教育を強化するようはからった。

1958 年に発表した『朝鮮人民軍は抗日武装闘争の継承者である』『両江(リャンガン)道党組織の任務』『軍人にたいする共産主義教育と革命伝統教育を強化することについて』をはじめ一連の著作で、革命伝統を継承、発展させるための原則的問題を明らかにし、革命伝統教育を強化する課題を示した。

主席は、われわれが継承すべき唯一の伝統は抗日遊撃隊の革命伝統であり、その基本的内容はチュチェの思想体系と共産主義的革命精神、貴い革命業績と豊かな闘争経験、革命的活動方法と人民的活動作風であるとした。また、党員と勤労者に革命伝統に盛られている革命思想と闘争精神を深く体得させ、革命伝統教育を革命の実践と密接に結びつけて着実におこなうべきであると指摘した。

党員と勤労者を労働党の革命伝統で武装させるため、主席は 1958 年 5 月に普天堡(ポチョンボ)、三池淵(サムジヨン)をはじめ両江道内の革命戦跡地と革命史跡地を訪ねて、革命伝統教育を強化する具体的な方針を示し、同年 11 月には党中央委員会常務委員会で、革命伝統教育を強化する積極的な対策を講じた。

主席は、全党に革命伝統教育体系を確立し、革命戦跡地踏査団

を現地に派遣して抗日革命闘争期の貴重な史料と遺物を全面的に発掘、収集、整理させる一方、革命戦跡地や革命史跡地、革命博物館、革命事績館、「朝鮮労働党歴史研究室」などを革命伝統教育の拠点としてりっぱに整備するよう導いた。また、抗日革命闘争参加者の回想記と抗日革命闘争期の経験を収録した図書を大々的に出版し、革命伝統をテーマにした文学・芸術作品を広く創作、普及するようはからった。

社会主義制度が樹立され、社会主義建設が本格的に推進されるにともない、主席は党員と勤労者にたいする共産主義教育を強化するようにした。

主席は 1958 年 11 月におこなった演説『共産主義教育について』をはじめ諸著作で、共産主義教育を強化するための原則的問題について明示した。

主席は、勤労者の共産主義教育で重要なのは資本主義にたいする社会主義・共産主義の優越性と、新しいものは必ず勝利し、古いものは滅びるという真理を認識させることであり、集団主義の精神、社会主義的愛国主義とプロレタリア国際主義の精神、労働を愛する精神、継続革命の思想、継続革新と継続前進の精神で武装させることであると指摘した。また、共産主義教育の基本は階級的教育であるとし、共産主義教育を強化するための具体的な課題と方途を示した。

そして、共産主義教育を党への忠実性教育、党政策教育、革命伝統教育と密接に結びつけておこない、模範的事実による感化教育を基本方法とし、それを生産現場を拠点にして進めるよう指導した。

人間改造を促進し、社会主義建設のテンポをさらに速めるため、主席はチョンリマ運動をより組織化されたチョンリマ作業班運動に

発展させ、1959 年 2 月には降仙製鋼所の労働者を訪ね、チョンリマ作業班運動の最初ののろしをあげさせた。

主席は思想革命をチョンリマ作業班運動の第一の課題として示し、この運動を通して、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という共産主義的スローガンのもとに、一人が十人、十人が百人、百人が千人、千人が一万人を教育する方法で人々を教育、改造し、互いに助け導きあいながら生産で集団的革新を起こすよう導いた。

こうして、チョンリマ作業班運動はすべての勤労者を共産主義的人間に教育、改造するわれわれの時代の偉大な共産主義の学校、大衆的な思想改造運動となり、人民経済の発展を促す大衆的革新運動となった。

主席は文化建設を社会主義建設の基本的課題として提示し、科学、教育、保健医療、文学・芸術の発展に新たな転換をもたらすよう導いた。

主席の講じた革命的な措置によって、教育部門では 1956 年に全般的初等義務教育制が、1958 年には全般的中等義務教育制が実施され、1959 年からは各級学校の授業料が完全に廃止され、徹底した全般的無料教育が保障されるようになった。また、重要な工場に働きながら学ぶ工場大学、工場高等技術学校が設立された。保健医療分野の急速な進歩、主体的なビナロンの開発をはじめ科学研究活動でのめざましい成果がもたらされ、チョンリマの時代にふさわしい革命的な文学・芸術が開花した。

主席は、共和国北半部において社会主義経済形態の全一的な支配が確立し、生産の規模が比べようもなく拡大し、大衆の政治的熱

意が大いに高まった新しい環境の要求に即して、党と国家・経済機関の活動体系と活動方法を改善し完成するよう導いた。

1959 年 12 月の党中央委員会総会で、新しい環境に応じて活動体系と活動方法を根本的に改善する課題を示した主席は、この問題を解決するために 1960 年 2 月、青山（チョンサン）里と江西（カンソ）郡に赴き、15 日間にわたって現地指導をおこなった。

青山里における主席の指導は家庭訪問から始まった。里の活動全般は組合員の家庭生活にそのまま反映されるからである。主席は年老いた夫婦が住んでいる家を訪ねて生活の隅々まで目を配り、ある女性作業班長の家を訪ねては台所用品や家財道具を調べ、暮らし向きについて細やかに尋ねた。

家庭訪問を通じて組合の実態を把握した主席は、末端幹部や組合員たちとの協議会や話し合いを通じて里党委員会と管理委員会の活動を深く理解し、また郡党委員会の活動をつぶさに把握するため 60 余名の党・行政活動家や中核党員と話し合った。

この過程で主席は、党活動と経済活動における欠陥と懸案を見きわめ、こうした傾向が青山里と江西郡だけでなく、ほかの里や郡にもある共通の欠陥であることを確認した。そして、それにもとづいて青山里党総会と江西郡党委員会総会を開くことにし、会議の準備や進め方を一つひとつ指導した。

青山里党総会での演説『社会主義農業の正しい運営のために』と江西郡党委員会総会での演説『新しい環境に応じて郡党組織の活動方法を改善するために』、党中央委員会常務委員会拡大会議での演説『江西郡党活動の指導を通じて得た教訓について』で、主席は社会主義農業を正しく管理運営し、党と国家・経済機関の活動体系

と活動方法を根本的に改善するうえで提起されるすべての問題に全面的な解明を与えた。

主席が青山里と江西郡を現地指導する過程で新しい革命的な活動体系、活動方法を確立し、自らその手本を示すことによって、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法が創始された。

チョンサンリ精神、チョンサンリ方法は、チュチェ思想と革命的大衆路線にもとづく朝鮮労働党の伝統的な活動方法である抗日遊撃隊式活動方法を社会主義建設の新しい現実に即して具体化し発展させた、科学的かつ共産主義的な大衆指導思想であり、方法である。

チョンサンリ精神は、人民大衆の利益を擁護し、かれらの力に依拠するという朝鮮労働党の革命的大衆路線の基本的要求を具現した大衆指導思想である。チョンサンリ方法は、上部が下部を助け、すべての活動において政治活動を優先させ、現地に行って実情を深く把握し、問題解決の正しい方途を見いだし、活動のキーポイントをつかみ、それに力を集中し、一般指導と個別指導を正しく結びつける科学的で革命的な大衆指導方法である。

チョンサンリ精神、チョンサンリ方法が創始されることによって、チュチェの指導方法がさらに発展し完成され、労働者階級の党が大衆にたいする革命的指導を保障し、社会主義・共産主義を成功裏に建設する強力な武器がもたらされた。

主席はチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を全国に一般化する活動をおし進めた。チョンサンリ精神、チョンサンリ方法が具現された結果、党と国家、経済の各分野で上部が下部を助ける革命的な活動体系、活動方法、活動気風が全面的に確立し、党活動が徹底した対人活動に切りかえられ、党の路線と政策が大衆のあいだに深

く浸透し、よりりっぱに実行されるようになった。また、大衆との活動においても新たな転換がもたらされ、勤労者の教育、改造が大衆自身の活動となり、全党的、大衆的な思想改造運動に発展した。

主席は勝湖（スンホ）区域梨峴（リヒョン）里党総会での演説『党活動の中心はすべての人を教育、改造し、団結させることである』で、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法が一般化される過程で対人活動でおさめた成果は、数百万トンの米より貴重なものであり、なにものにも代えがたいものであると強調した。

チョンサンリ精神、チョンサンリ方法が実践に移される過程で、党の指導的役割がさらに高まり、革命隊伍がいちだんと強化され、その結果として社会主義建設の大高揚とチョンリマ運動は大いに盛り上がった。

主席の賢明な指導によって、社会主義建設の大高揚とチョンリマ運動の熱気のなかで5か年人民経済計画はりっぱに完遂された。

5か年計画が完遂された結果、共和国北半部では社会主義基礎建設の歴史的課題が成功裏に遂行された。共和国は社会主義的生産関係と自立的民族経済の強固な基盤をもつ社会主義工業・農業国となり、全人民の政治的・思想的統一が新たな社会主義的基盤のうえでさらに強まり、国家社会制度がいちだんと強化された。

主席は、共和国北半部における戦後の復興建設と社会主義基礎建設を強力に推進する一方、南朝鮮革命と祖国の自主的統一をめざす闘争を賢明に導いた。

主席は戦後の南朝鮮革命の性格と原動力、対象を明確に規定し、南朝鮮革命を発展させる方向と方途を示すとともに、祖国の自主的平和統一のための正当かつ合理的な方案をうちだした。

南朝鮮の革命家と人民は主席が示した闘争方針を指導指針とし、あらゆる難関と障害を乗り越えてアメリカ帝国主義とその手先に抗して力強くたたかい、1960 年 4 月には全人民的な蜂起によって李承晩かいらい政権を打倒した。4 月人民蜂起は戦後、南朝鮮人民が反米救国闘争でおさめた初の勝利であり、アメリカ帝国主義の植民地支配に大きな打撃を与えた。

主席は祖国統一のたたかいを推し進めながら、海外同胞運動、とくに在日朝鮮人運動の発展に大きな関心を払った。

主席は戦後、在日朝鮮人は祖国と自民族、自国の革命のためにたたかうべきであるとする主体的な路線転換方針を貫徹するために力を注ぎ、1955 年 5 月に自分たちの真の組織である在日本朝鮮人総聯合会(総聯)を結成するようにした。朝鮮民主主義人民共和国の尊厳ある海外公民団体であり、チュチェ型の初の海外同胞組織である総聯の結成は、海外同胞運動に関する主席の思想と指導のたまものであり、在日朝鮮人運動と在日同胞の生活に根本的転換をもたらした歴史的な出来事であった。

主席は総聯の活動に深い関心を払い、『総聯の愛国運動路線は正当な路線である』と『総聯の活動で堅持すべきいくつかの問題について』をはじめ多くの演説や談話、書簡などで、総聯の強化発展のための明確な方向と方途を示した。

主席は総聯組織を組織的、思想的にかためる一方、すべての在日同胞が民主主義的民族権利と尊厳を守るため力強くたたかうよう導いた。

主席は在日同胞子弟の民族教育は民族性を守る重要な事業であるとして、第 1 次 5 か年計画初年度の課題を遂行するため全国が

勤倹節約に努めていた 1957 年 4 月に、以後毎年莫大な教育援助費と奨学金を送るという同胞愛的措置を講じた。また 1960 年 1 月に発表した著作『在日朝鮮人の教育事業の方向について』で総聯の民族教育が進むべき道を明示した。

主席は主動的かつ積極的な外交活動を展開し、1959 年 12 月に在日朝鮮公民の帰国を実現させ、帰国同胞が社会主義祖国で幸せな生活を営めるようあらゆる条件を整えた。

主席は朝鮮の革命と建設を勝利に導く一方、国際共産主義運動と世界革命の発展のため精力的に活動した。

1957 年に発表した『偉大な 10 月の思想は勝利をおさめている』『社会主義諸国の親善と団結』『社会主義陣営の統一と国際共産主義運動の新たな段階』などの諸著作で、帝国主義に反対し、国際共産主義運動の団結を強めるための原則的問題を明らかにした。

主席はアメリカ帝国主義を世界革命の主な闘争対象、世界反動の元凶と規定し、反米闘争の戦略を示すとともに、反修正主義の旗を高くかかげて、労働者階級の革命思想の純潔を守り、自主性の原則にもとづいて国際共産主義運動の統一団結を実現するために奮闘努力した。

主席は、1956 年 6 月から 7 月にかけて東欧諸国とモンゴルを歴訪して、修正主義に反対し、社会主義勢力と国際共産主義運動の統一団結を強化するための対外活動を積極的に展開した。また、1957 年 11 月にモスクワで開かれた社会主義諸国の共産党・労働者党代表者会議に参加し、国際共産主義運動と世界革命の発展のため精力的に活動した。

主席は、帝国主義の侵略に抗する南ベトナム、ラオス、コンゴ

人民の闘争と、民族の独立をめざす植民地、半植民地諸国人民の解放闘争、新社会の建設に立ち上がった新興諸国人民の闘争をあらゆる面から支持声援した。

朝鮮は、1960 年末にいたって 40 余の新興独立国と経済関係を結び、70 余か国と文化交流をおこなうようになった。

9

1961 年 1 月～1970 年 11 月

金日成主席は社会主義の基礎建設の課題が繰り上げて遂行された成果にもとづき、社会主義を全面的に建設する雄大な 7 か年計画の基本的方向と任務を明示し、その初年度にあたる 1961 年度の人民経済計画遂行へと全人民を立ち上がらせた。

1961 年 3 月の朝鮮労働党中央委員会総会では、同年の 9 月に第 4 回党大会を招集することを決定した。このニュースに接した全党員と勤労者は、党大会への勤労の贈物を準備する運動をくりひろげ、ビナロン工場と黄海（ファンヘ）製鉄所第 2 号溶鉱炉の操業、「赤旗（プルグンギ）」1 号電気機関車の生産、人民経済の発展において大きな意義をもつ新しい大型機械と精密機械の製作など、数々の奇跡と革新を起こした。

主席は党大会の準備に多くの時間を割き、全国各地の工場、企業所、農村を現地指導しながら、新しく構想した路線と政策の科学性を再三確認し、新しい展望計画の細部も一つひとつ確定した。

1961 年 9 月 11 日から 18 日にかけて第 4 回党大会が開催された。主席は大会で党中央委員会の活動報告をおこなった。報告では総括期間における革命と建設の誇らしい勝利を総括し、社会主義を全面的に建設するための課題を提示し、人民経済発展第 1 次 7 か年計

画(1961～1967)の雄大な課題を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「7 か年計画の基本的課題は、勝利した社会主義制度に依拠して全面的な技術改造と文化革命を遂行し、人民生活を画期的に向上させることであります」

主席は社会主義的工業化を実現して人民経済の各部門を現代技術で装備し、人民の物質・文化生活水準を決定的に向上させて社会主義の高峰をきわめることを強調した。

そして、南朝鮮革命を勝利に導く革命的党を組織し、アメリカ帝国主義を駆逐し南朝鮮社会の民主的発展をはかる課題と、祖国の自主的平和統一を実現するために南朝鮮で反米救国統一戦線を結成し、南朝鮮の愛国的民主勢力と北朝鮮の社会主義勢力との団結をなし遂げる課題を示した。

また、党を組織的、思想的に強化し、その指導的役割をさらに高める綱領的課題を示しながら、とくに修正主義、セクト主義、地方主義、家族主義に反対し、党の思想・意志の統一を固守することにより、全党員と党組織が党中央委員会とひとしく思考し行動し、いかに困難な環境にあっても党中央委員会と運命をともにすべきであると強調した。

さらに国際関係においては、反帝反米闘争を強力に展開し、社会主義諸国との統一団結を強め、被抑圧人民の民族解放闘争を積極的に支持し、修正主義と教条主義に反対する両戦線での闘争をつづけるという朝鮮労働党の自主的で原則的な対外政策をあらためて明らかにした。

大会では再び金日成主席を朝鮮労働党中央委員会委員長に推戴

した。

大会では第 1 次 7 か年計画について討議、決定し、祖国の自主的平和統一を促進すべく宣言を採択し、党と革命発展の新たな要請に即して党規約の一部を修正、補足した。

主席は党大会の決定実行へと全党と全人民を立ち上がらせる一方、社会主義制度の本質に合う新しい経済管理システムの確立に第一義的な力を注いだ。

社会主義社会本来の要求に合わせて経済の指導、管理を改善することは、共和国に先進的な大規模の社会主義的経営形態の全一的支配が確立された新しい環境のもとでのさし迫った要求であり、国際的にも解決が待たれる切実な問題であった。しかし、社会主義経済をどのように管理運営するかという問題については誰も正解を与えておらず、モデルとすべき経験もなかった。この課題は、主席によるチュチェの経済管理システムの創出によってはじめて解決された。

1961 年の末に開かれた党中央委員会第 4 期第 2 回拡大総会で、主席はチョンサンリ(青山里)精神、チョンサンリ方法を具現して人民経済の指導、管理を根本的に改善する綱領的課題を示し、新しい経済管理システムを確立するため、10 余日にわたって大安(テアン)電機工場を現地指導した。まず発電機職場をはじめ各職場を見てまわり、工場の全般的実態を総合的に調べ、職場長や多くの労働者と話し合った。ついで労働者の寮や食堂、家庭までこまかく見てまわったうえで、工場の党および行政活動家の協議会を開き、工場の管理運営状況をさらに深く調べた。それにとどまらず、この工場の現地指導過程で発見した工場管理運営上の欠陥が全般的な現象かどうかを確認するため、平壌(ピョンヤン)紡織工場と機械工業総局の事業を相互連関のな

かで調査し、分析した。

1961 年 12 月中旬の党中央委員会政治委員会拡大会議で、大安電機工場での指導状況を総括し、それまで練り上げてきた構想にもとづき、新しい工業管理システムを確立する課題をうちだした。そして、大安電機工場党委員会拡大会議で、資本主義的残滓の多かった従来の支配人唯一管理制とは根本的に異なる新しい工業管理システムである工場党委員会の集団指導システム、統一的かつ集中的な生産指導システム、上部から下部へ供給する資材供給システム、整然たる給養システムを確立するという革命的な措置を講じた。

1962 年 11 月の大安電機工場党委員会拡大会議での演説『テアン(大安)の事業体系をいっそう発展させるために』をはじめ諸著作で、テアンの事業体系の本質と優越性を全面的に明らかにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「テアンの事業体系とは一言でいって、経済管理にわが党の革命的大衆路線を具現した事業体系であります」

テアンの事業体系は、工場、企業所が党委員会の集団指導のもとですべての経営活動をおこない、政治活動を優先させ、生産者大衆を奮起させて提起された経済課題を遂行するとともに、上部が責任をもって下部を援助し、経済を科学的に、合理的に管理運営する、社会主義制度の本質に合ったもっともすぐれた経済管理システムである。

主席によって創出されたテアンの事業体系は、党の唯一的指導と革命的大衆路線を結合し、人民大衆に国家と社会の主人としての責任と役割を果たさせる事業体系であり、社会主義国家活動の根本原理を具現している。テアンの事業体系は社会主義経済の指導、管

理システムとしてのみでなく、社会主義社会全般を管理運営していく政治方式としても意義がある。

主席はテアンの事業体系の要求を具現して、社会主義農業経営制度が確立された新たな環境に合わせて、新しい農業指導システムを確立した。

1961 年 12 月の党中央委員会政治委員会拡大会議で、新しい工業管理システムとともに新しい農業指導システムを確立する課題を示した後、そのモデルケースをつくるため平安南道粛川郡の現地指導にあたった。ここで郡内の農業部門の実態を全面的に調べ、郡人民委員会から農業指導の機能を分離し、専門の農業指導機関としての郡協同農場経営委員会を新設し、この委員会が協同農場を指導する機能と農業にたいする物質的・技術的援助を実現する機能を直接果たすようにさせた。そして粛川郡に設けた郡協同農場経営委員会を全国の市、郡に一般化する一方、道と中央にいたるまで、整然たる社会主義農業指導システムを確立する措置をとった。

主席は新しい農業指導システムの効力を発揮させるための具体的な指導をおこない、1962 年 11 月の平安南道内の党および農業部門の活動家協議会での演説『郡協同農場経営委員会をいっそう強化発展させるために』をはじめ諸著作で、新しい農業指導システムの優越性を大いに発揮させる課題を示した。

郡協同農場経営委員会を基本とする新しい農業指導システムは、チョンサンリ精神とチョンサンリ方法、それにテアンの事業体系の要求を農業分野に具現したすぐれた社会主義農業指導システムである。これは農業を行政的方法でなく企業的方法で指導し、全人民的所有と協同的所有を有機的に結合し、協同経営にたいする国家的指

導と援助を各面から強めるシステムである。

新しい農業指導システムを確立した後、主席は農業にたいする指導、管理をひきつづき改善するよう指導し、その後、分組管理制を実施して、新しい農業指導システムの優越性が生産および労働組織の基層単位にいたるまで十分にあらわれるようにした。

主席は新しい社会主義的経済指導システムが全面的に確立されるにともない、社会主義経済本来の要求に即して計画の一元化・細部化システムを確立した。これによって計画化に新たな転換がもたらされ、社会主義経済管理システムはさらに完備された。

テアンの事業体系を基本とする新しい経済管理システムの確立は、社会主義・共産主義経済管理の新しい紀元を開いた歴史的な出来事であった。

主席は党活動にチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を具現する闘争を指導した。

1962 年の初めに黄海南道内の党組織を現地で指導し党活動の実態を全面的に調査したうえで、3 月に招集した党中央委員会第 4 期第 3 回拡大総会での結語『党の組織活動と思想活動の改善について』で、党活動にチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を具現する具体的な方途を示した。

結語では、すべての党組織が党の内部活動に力を入れるよう強調し、党活動は党の隊伍をうちかため、その戦闘的機能を十分に発揮させる活動であり、党活動の基本は党員の党生活を正しく指導することであるとした。そして党員の党生活を正しく指導するためには、党細胞と党委員会の機能と役割を高め、党の組織部、宣伝部はもちろん、経済部署もすべて当該部門で対人活動を正しくおこない、

幹部と大衆を党政策の実行に立ち上がらせるべきであるとした。また、党組織は行政・経済活動にたいする党の指導を行政式、命令式、号令式にではなく、党的方法、政治的方法でおこなうべきであることを強調した。

この拡大総会での主席の結語は、党活動において行政的な方法を克服し、チョンサンリ精神、チョンサンリ方法をりっぱに具現していく道を明示した綱領的指針であった。党活動にチョンサンリ精神、チョンサンリ方法を具現する闘争が強力に進められることによって、全党に党生活指導体系と党活動体系が確立され、党活動が徹底した対人活動となり、活動家の指導方法と活動作風が改善された。

主席は、革命的大衆路線を革命と建設の各分野に具現する過程でかつてなく高揚した人民大衆の革命的熱意を 7 か年計画の遂行へと動員した。主席の指導のもとに第 1 次 7 か年計画を遂行する闘争が力強くくりひろげられた結果、新展望計画の最初の 2 年間に社会主義経済建設では大きな成果が達成され、第 4 回党大会で示された社会主義の高峰をきわめる課題をりっぱに遂行できる確固たる展望が開かれた。

こうした時期に、内外の情勢はさらに先鋭化し緊張してきた。アメリカ帝国主義者は反キューバのカリブ海の危機をつくりだし、ベトナムでの侵略戦争を拡大し、南朝鮮で新たな戦争準備に狂奔しながら共和国北半部にたいする侵略策動をさらに強化した。

主席は日ましに激化するアメリカ帝国主義の戦争挑発策動に対処して、1962 年 12 月の党中央委員会第 4 期第 5 回総会で、経済建設と国防建設を並進させる新たな戦略的方針をうちだした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「…わが党は、すでに 1962 年に開かれた党中央委員会第 4 期第 5 回総会で経済建設と国防建設を並進させる方針をうちだし、経済建設を組み替えるとともに、国防力をいちだんと強化する一連の重要な対策を立てました」

この総会で「片手には銃を、片手には鎌とハンマーを!」という戦闘的スローガンを示し、全人民が党の新たな戦略的方針の貫徹をめざして奮起するよう呼びかけた。

総会後、主席は国防建設に大きな力を注いだ。1963 年 2 月の人民軍部隊政治担当副連隊長以上の幹部および地元の党、政権機関の活動家におこなった演説をはじめ一連の演説で、階級的政治教育を強化する課題と方途を示し、軍隊と人民を政治的、思想的にしっかり準備させるよう強調した。

主席は主体的な軍事路線を貫徹する活動に拍車をかけた。人民軍の幹部化、現代化のために軍隊内での戦闘・政治訓練を強化し、兵士から将官にいたるすべての軍人が一等級以上の軍務を担当できるよう準備させていった。そしてすべての軍人が近代的な兵器と戦闘技術機材で武装し、主体的戦法と近代的軍事科学と軍事技術を十分に体得するようにし、これと同時に、朝鮮の実情と工業発展水準に合わせて兵器をさらに現代化するよう導いた。

1963 年の 2 月、最前線に位置する大徳(テドク)山の人民軍区分隊を現地で指導し、「一当百」の戦闘的スローガンを示して、すべての軍人が政治的、軍事的に万端の準備を整えるよう導いた。

主席は全民武装化と全国要塞化のために、全人民が軍事を誠実に学び、現代戦に必要な軍事知識と戦法に習熟するようにし、全国各地に強固な防衛施設を構築する措置をとった。主席の指導により、

朝鮮は敵のいかなる侵略も断固撃退し、祖国の安全をゆるぎなく守り通せる難攻不落の要塞となった。

主席は国防建設と同時に経済建設をひきつづき力強く推進した。

まず社会主義的工業化をおし進めながら、重工業建設に大きな力を注いだ。基幹重工業のうち部分的に完備されていない部門と生産工程を新たに補充し、既存の設備と生産面積の利用率を高めることに力を集中した。そして重工業をいっそう整備、補強し、その生産能力を向上させ、原料基地と動力基地を強化し、既存の機械工場を十分整備して、軽工業と農業、水産業の発展に必要な機械設備をそのつど生産、供給できるようにした。また基本建設を正常化し、交通運輸部門をもり立てるよう指導した。

そして 7 か年計画に見込まれている国の工業化と全面的技術改造の要求に合わせて、科学技術の発展にも深い関心を払った。1963 年 3 月の科学者・技術者大会での演説、同年 12 月の党中央委員会科学・教育部の幹部たちとの談話をはじめ諸著作で、国の科学技術を高い段階に引き上げる明確な道を示した。そして、科学・教育機関で科学者、技術者をより多く養成し、機械工学、無線工学、電子工学など国の経済発展にとって切実に必要な科学技術を全面的に発展させるよう指導した。

主席は社会主義経済建設を強力に推進しながら、白米の飯に肉汁を食べ、絹の服を着て瓦ぶきの家に住みたいという人民の宿望をかなえるため、人民生活の向上に深い関心を払った。

1963 年 9 月の党中央委員会第 4 期第 7 回総会で人民生活を画期的に向上させる措置をとった。そして社会主義建設の成果は人民の裕福な生活にあらわれなくてはならないとして、人民生活の向上に

全党的、全国家的な力を注ぐよう強調した。まず畑を田に変えて米の生産を増大させ、人民に食肉とタマゴを十分に供給するため、全国各地に数多くの養鶏工場、養豚工場を建て、水産業を発展させて漁獲量を増やすよう指導した。また軽工業部門の工場を増設して服地をはじめ一般消費財の生産を増やし、住宅をより多く建設する措置を講じた。さらに党中央委員会常務委員会北青（プクチョン）拡大会議と地方の党および経済活動家昌城（チャンソン）連席会議の決定を実行して果樹栽培業を発展させ、山間地帯の住民の生活向上をはかるよう指導した。

主席は経済建設と国防建設を並進させながら、社会主義下での農村問題の正しい解決のために心血を注いだ。社会主義農村問題を正しく解決することは、社会主義を全面的に建設する段階に入った朝鮮における社会発展のさし迫った要求であり、国際的にも社会主義・共産主義偉業の固守、発展のために必ず解決すべき原則的かつ重要な問題であった。

1964 年 2 月に不朽の著作『わが国における社会主義農村問題に関するテーゼ』を発表し、社会主義下における農村問題の本質と内容、その最終的解決のための基本原則と方途を全面的に解明した。テーゼでは、社会主義下での農民問題と農業問題は、農村に樹立された社会主義制度をたえず強化する基礎のうえで農業生産力を高度に発展させ、農民の生活を豊かにし、搾取社会の遺物である農村の後進性をなくし、都市と農村の差を漸次なくすことであることを明らかにした。

主席は社会主義下における農村問題を成功裏に解決するための基本原則を明示した。

「第一に、農村で技術革命と文化革命、思想革命を徹底して遂

行すべきであり、

第二に、農民にたいする労働者階級の指導、農業にたいする工業の援助、農村にたいする都市の支援を全面的に強めるべきであり、

第三に、農業の指導と管理をたえず工業の先進的な企業管理の水準に接近させ、全人民的所有と協同的所有の結びつきを強め、協同的所有をたえず全人民的所有に接近させるべきである」

テーゼには、社会主義制度の樹立後、農村で続行すべき革命の中心的内容と、都市と農村の差をなくす基本的方途、そして協同的所有と全人民的所有を有機的に結合させる基本的方向が明示されている。また、社会主義農村建設における地域的拠点に関する思想を示すと同時に、農村にたいする統一的指導の単位と拠点が備えるべき条件をあげ、朝鮮では郡が農村事業と地方の全般的事業を直接的、統一的、総合的に指導する地域的単位、拠点になることを明らかにした。

この社会主義農村テーゼは、社会主義下で農村問題を最終的に解決し、社会主義の完全な勝利を達成する道を示した不朽の文献であり、社会主義農村建設の偉大な綱領である。

主席は農村テーゼを発表した後、その実践に向けて活動をおし進めた。農村を政治的、思想的に強化するために農村の党組織をうちかため、農民のあいだで思想革命を強化してかれらを革命化、労働者階級化し、農村の階級的基盤をさらにかためることに努めた。そして農村を物質的、技術的に強化するため、1964 年 3 月の最高人民会議第 3 期第 3 回会議で、1964 年から 1966 年のあいだに農業現物税を年次別に完全に廃止し、農村の基本建設と住宅建設を国家資金でおこない、重要な生産設備と農業機械を国家の負担で農村に

提供するという歴史的な法令を採択する措置をとった。同時に農村での技術革命を促進して水利化、機械化、電化、化学化を速やかに完成させ、文化革命を強力に推進させた。

主席は社会主義制度の確立と社会主義建設の深化に合わせて、勤労者団体の活動を改善し、その役割を高めることに深い関心を払った。

1964 年 6 月の党中央委員会第 4 期第 9 回総会での結語『勤労者団体の活動を改善、強化するために』、1968 年 10 月の職業同盟、農業勤労者同盟、社会主義労働青年同盟、女性同盟中央委員会の活動家におこなった演説『勤労者団体の役割をいっそう高めるために』などの諸著作で、社会主義下での勤労者団体の活動について全面的かつ深奥な解明をした。革命と建設が深まるにつれて勤労者団体の役割をさらに高めるべきであるとし、社会主義社会における勤労者団体の性格と使命、重要な任務を新たに明示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「…勤労者団体は広範な大衆にたいする思想教育団体であり、党の外郭団体であります」

勤労者団体は完全な思想教育団体であることが明らかにされることにより、党の外郭団体であり、党と大衆を結びつけるベルトとしての使命と、人民大衆が政権と生産手段の完全な主人となった社会主義社会の特性に合わせて勤労者団体の性格が科学的に規定された。

主席は、社会主義社会における勤労者団体のもっとも重要な任務は、勤労者を革命化、労働者階級化することであることを明らかにし、現実発展の要請に合わせて勤労者団体の組織形式と活動システムを改善し、勤労者団体がその使命と役割を果たすよう指導した。

1964 年 5 月の民青第 5 回大会で、変化した現実の要請に合わせて民主青年同盟を社会主義労働青年同盟に改編し、この大会での演説『社会主義労働青年同盟の任務について』で、同盟の各級組織をうちかため、同盟員の組織生活を強化し、青年のあいだで政治・思想活動を活発にくりひろげ、政治、経済、文化の各分野で同盟と青年の役割をさらに高める課題を示した。

主席は党中央委員会第 4 期第 9 回総会で、従来、職業同盟が工場側と団体契約を結び、企業管理を監督、統制する機能を果たしていた古い枠をうちこわし、完全な思想教育団体としての役割を遂行するようにし、これに適応する新しい活動システムを確立した。そして、すべての農民が社会主義的勤労者になった現実に即して、個人農当時の農民組織であった農民同盟とは異なる新しい農業勤労者同盟を組織する革命的措置を講じた。こうして 1965 年 3 月に農民同盟は解体し、農業勤労者の新たな社会主義的大衆政治組織である農業勤労者同盟が創立された。また女性同盟を組織的に強化し、その活動を改善する対策も立てられた。

勤労者団体の活動が改善され、その役割が高まることによって、広範な大衆を主席のまわりにかたく結集し、革命と建設において大衆の革命的熱意と創造的積極性をさらに強く発揮させることができるようになった。

主席は、社会主義建設が全面的に推進されるようになった新たな現実の要請に合わせて、幹部の党性、労働者階級性、人民性の向上と、活動方法と活動作風の改善に大きな力を注いだ。1964 年 12 月の党中央委員会第 4 期第 10 回総会で、幹部の党性、労働者階級性、人民性を高め、かれらの思想的観点と活動態度を正す方向と方

途を示した。

幹部の党性、労働者階級性、人民性を高めるために、党生活、とくに細胞生活にかれらを誠実に参加させることに深い関心を払った。1965 年 1 月と 2 月には金属・化学工業省や高等教育省など各省、局の党総会の指導にあたり、幹部の党生活を決定的に強化する革命的措置をとり、同年 3 月から 1 年間、金属・化学工業省鉄鋼管理局の党細胞に所属して革命的党生活の模範を示した。そして全党的な思想闘争によって、幹部のあいだにあらわれていた党性、労働者階級性、人民性に欠けた行為を徹底的に克服するよう導いた。これとともに、幹部をともなって黄海製鉄所をはじめ多くの工場、企業所を現地指導しながら、中心の環に力を集中する活動方法をはじめ下部指導で守るべき原則と方法を実践的模範によって具体的に示した。

その結果、党性、労働者階級性、人民性を高める運動が全党的にくりひろげられ、幹部の思想的観点と活動態度、活動方法と活動作風には新たな転換がもたらされた。

主席は社会主義的民族文化の建設を強力に推進した。

まず民族語の発展に大きな意義を付与し、1964 年 1 月と 1966 年 5 月の言語学者との談話『朝鮮語を発展させるうえでのいくつかの問題』『朝鮮語の民族的特性を正しく生かすことについて』で、朝鮮人民が自国のりっぱな言葉と文字を愛し誇りとし、朝鮮語を正確に使うようにするだけでなく、朝鮮の固有語を基本にして整理し発展させることについて、また民族的特性を生かすと同時に世界の言語発展の共通の方向を考慮することについても指摘した。

文学・芸術の発展にも深い関心を払い、1964 年 11 月に文学・芸

術部門の活動家におこなった演説『革命的な文学・芸術の創作について』で、社会主義的文学・芸術を開花させる綱領的な課題を示し、同年 12 月には朝鮮劇映画撮影所に出向いて党中央委員会政治委員会拡大会議を開き、革命教育、階級的教育に役立つ革命的な映画を多くつくる方向と方途を示した。

主席は人民教育事業の発展のために、1964 年 3 月に全国勤労者学校および勤労者中学校模範講師会議に参加し、成人教育を強化して勤労者の一般知識水準と技術・文化水準を高める課題を示し、1967 年度から全般的 9 年制技術義務教育を実施して、すべての青少年を全面的に発達した社会主義・共産主義建設の頼もしい担い手に育成できるようにした。

主席は 1960 年代中期の複雑な国際情勢を正確に分析、評価し、党の対内対外活動方針を提示するため、1966 年 10 月に朝鮮労働党代表者会議を招集した。この会議での報告『現情勢とわが党の任務』で、国際情勢と国際共産主義運動の内部状況を詳しく分析し、朝鮮革命と世界革命を発展させる科学的な道を明示した。

主席は世界革命の基本戦略を示した。

「こんにち世界革命の基本戦略は、アメリカ帝国主義に主なほこ先を向けることであります」

これは、世界の革命的人民の共同闘争によってアメリカ帝国主義の侵略と戦争策動を決定的に粉砕するすぐれた戦略であった。

主席は左右の日和見主義を克服し、社会主義諸国の統一と国際共産主義運動の団結をなし遂げるため、左右の日和見主義に反対する両戦線でたたかいながらも、その闘争において左右の誤りを犯してはならず、共産党・労働者党間の意見の相違はあくまでも団結の

念願から発して思想闘争の方法で解決すべきであるとした。そして国際共産主義運動の団結をなし遂げるために反帝共同行動と反帝統一戦線を実現し、共産党・労働者党は自主性を堅持すべきであると強調した。

主席は朝鮮での社会主義建設の促進と革命基地の強化においてもっとも重要な問題は革命隊伍を政治的、思想的にうちかためることであるとし、そのためには人民大衆の統一団結を強化する活動と敵対分子の陰謀を粉砕する階級闘争を正しく結合し、全社会の革命化、労働者階級化を実現しなければならないと指摘した。

この報告は、朝鮮革命と世界革命、国際共産主義運動発展の前途を明示し、労働者階級の革命理論を新たな思想的・理論的財宝によってさらに発展させた。党代表者会議は革命隊伍を政治的、思想的にうちかため、新たな情勢の要請に合わせて社会主義建設の全般的事業を改編し、国防建設をいっそう促進する措置を講じた。会議では第 1 次 7 か年計画を 3 年間繰り延べることが決定された。

党代表者会議についで開催された党中央委員会第 4 期第 14 回総会では、全党と全人民の一致した意思と念願によって、金日成主席が朝鮮労働党中央委員会の総書記に推戴された。

主席は党代表者会議以後、党と革命隊伍の強化に大きな力を注ぎながら、党員と勤労者のあいだで党の唯一思想体系を確立する活動を強力に推進した。党の唯一思想体系を確立することは、労働者階級の党が恒久的に堅持すべき重大な活動である。これは当時、朝鮮労働党の内部に発生したブルジョア分子、修正主義分子の蠢動と関連して、いっそうさし迫った要求となっていた。

主席は 1967 年 5 月に招集した党中央委員会第 4 期第 15 回総会

で、ブルジョア分子、修正主義分子の策動を暴露、粉砕する断固たる措置をとり、党の唯一思想体系を確立する課題と方途を明示した。この総会は、主席を中心とする党の統一団結をさらに強め、全党の思想と指導の唯一性を確固と保障するうえで一大転機となった。

この総会での結語をはじめ諸著作で、主席は党の唯一思想体系の確立において提起される原則的な諸問題について前面的に解明した。党の唯一思想体系を確立するということは、一つの革命思想、領袖の革命思想で全党を武装させ、領袖を中心に全党がかたく統一団結し、領袖の唯一的指導のもとに革命事業を進めることを意味する。党内に領袖の思想に反する他の思想が存在したり、領袖を中心とする統一団結が保たれず、領袖の指導が確固と実現されないなら、そうした党は事実上一つの党とはいえない。

主席は党の唯一思想体系を確立するためには、党員と勤労者にたいするチュチェ思想教育を強化して、領袖の思想以外にはいかなる思想も認めないという確たる信念をもたせ、党の路線と政策を断固擁護し、無条件に実践する革命的気風をうち立て、全党、全国、全軍が領袖の唯一的指導のもとにひとしく行動する強い組織規律を確立すべきであると強調した。

この党の唯一思想体系確立に関する思想は、労働者階級の党建設理論の発展において画期的意義をもつ独創的な思想であり、党の統一と団結を各面から強化し、革命と建設にたいする党の指導を保障するうえで、労働者階級の党が堅持すべき強力な思想的・理論的武器である。

主席はこの総会後、党の唯一思想体系を確立する全党的な闘争をまき起こした。ブルジョア分子、修正主義分子が及ぼした思想的

毒素を取り除く闘争は行政的方法ではなく、思想教育と思想闘争の方法で、革命任務遂行の実践活動と密接に結びつけておこない、たとえ過ちを犯した者であっても反党分子との組織的な結託がなかったなら教育し改造する原則を厳守して、この闘争が偏向を犯さずに進められるようにした。

主席は党員と勤労者を朝鮮労働党の革命思想、チュチェ思想で武装させ、党への忠実性で教育することを党の思想教育活動の最優位におき、唯一思想教育を強化する積極的な対策を立てた。

主席は人民軍内での党の唯一思想体系の確立に深い関心を払い、1969 年 1 月の人民軍党委員会第 4 期第 4 回拡大総会で、軍閥官僚主義を排除する断固たる措置をとり、その毒素を完全に取り除き、軍人を党の唯一思想で武装させる活動において軍隊内の党組織と政治機関の機能と役割を高めるよう指導した。

党の唯一思想体系を確立する闘争が強力に進められた結果、ブルジョア分子、修正主義分子の及ぼした思想的毒素が取り除かれ、全党に主席の革命思想が全一的に支配するようになり、唯一思想体系にもとづく党の統一団結が新たな高い段階でなし遂げられた。

主席は革命隊伍をうちかためるため、全社会の革命化、労働者階級化を強力に推進した。1966 年 10 月と翌年の 2 月および 6 月におこなった演説『党活動において形式主義と官僚主義をなくし、活動家を革命化することについて』『農民を革命化し、農業部門において党代表者会議の決定を貫徹するために』『インテリは党と労働者階級と人民に忠実な革命家となるべきである』など一連の演説で、幹部と勤労者を革命化するため、かれらのあいだで学習と組織生活を強化し、革命実践を通じてたえず鍛え、労働者階級の革命化を確

固と優先させながら、農民とインテリを革命化、労働者階級化するための具体的な課題と方途をあらためて提示した。そして全社会の革命化、労働者階級化を成功裏に促進するため、これを大衆自身の事業、全社会的な事業とするよう指導した。これと同時に、学校教育を改善し、文学・芸術の役割を決定的に高めることによって、教育と文学・芸術が人々の革命化、労働者階級化によりよく寄与できるようにした。その結果、全社会の革命化、労働者階級化が推進され、朝鮮人民の思想的・精神的品格に根本的な変化が起こり、革命隊伍はいっそう強固になった。

主席は革命と建設を推進する一方、社会主義・共産主義建設における理論的・実践的諸問題に正しい解答を与えるためにエネルギッシュな思想・理論活動をおこなった。

1967 年 5 月に発表した『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』をはじめ一連の著作で、資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題、社会主義の完全な勝利と最終的勝利に関する問題について全面的かつ深奥な科学的・理論的解明を与えた。

主席は過渡期の境界に関する問題を、われわれの時代の現実的条件と朝鮮の実践的経験にもとづいて解明した。すなわち社会主義建設を深めて中産階級を完全に獲得したとき、労働者階級と農民の差をなくして無階級社会を建設したとき、資本主義から社会主義への過渡期の任務が遂行されるのであるとした。そして過渡期が終わった後も、共産主義の高い段階に入るためには革命と建設をひきつづき推進し、共産主義の思想的要塞と物質的要塞を占領しなければならないとした。

主席はプロレタリアート独裁の問題に関して深奥な理論的解明をおこない、その存続期間を明らかにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「プロレタリアート独裁が過渡期の全期間に存在すべきことはいうまでもなく、過渡期が終わったのちも、それは共産主義の高い段階にいたるまで必ず継続されなければなりません」

主席は過渡期とプロレタリアート独裁との相互関係についても科学的に解明した。社会主義社会においては敵対分子を鎮圧する階級闘争の形式とともに、思想革命を主な内容とする階級闘争の基本形式があることを明らかにし、社会主義国家は独裁と民主主義、階級闘争と人民大衆の統一団結の強化を正しく結合させるべきであるとした。

主席は完全に勝利した社会主義社会の表徴とそれを実現するための課題を明示した。敵対階級の蠢動があり、古い思想の浸食作用がつづき、都市と農村の差、労働者階級と農民の階級的差が残存し、国の工業化が完全に実現されず、社会主義の物質的・技術的土台が強固に築かれていない社会は、まだ完全に勝利した社会主義社会とはいえないとした。そして、社会主義の完全な勝利を達成するためには、階級の敵にたいする独裁を強化し、思想革命を徹底的に遂行して全社会を革命化、労働者階級化し、農村問題を最終的に解決し、協同的所有を全人民的所有の水準にまで引き上げ、社会主義経済建設を強力に推進しなければならないとした。

主席は、社会主義の最終的勝利は外部からの帝国主義者の侵略と資本主義復活の企図が最終的になくなったときに達成されることを明らかにし、社会主義の最終的勝利を達成するためには自らの主

体的革命勢力を各面から強化するとともに、世界における社会主義革命の他の部隊の積極的な支援を受けなければならず、全世界の労働者階級および被抑圧人民との真の国際主義的連帯を強めなければならないとした。

この過渡期とプロレタリアート独裁の問題に関する理論、社会主義の完全な勝利と最終的勝利に関する理論の明示は、社会主義・共産主義建設の路程と武器、世界革命発展の合法則性に関する問題など、それまで予測と仮説の域にとどまっていた共産主義革命理論を科学的基礎のうえにのせ、労働者階級の革命思想と理論を発展、完成させた不滅の功績と言える。

主席は、経済建設と国防建設の各分野で新たな革命的大高揚を起こすよう導いた。

新たな革命的大高揚の火を点ずるため、1967 年 6 月に咸鏡（ハムギョン）南道咸興（ハムフン）市の竜城（リョンソン）機械工場を訪れ、工場党委員会の拡大会議を指導しながら、経済建設と国防建設の並進路線を貫徹し、社会主義的工業化を完成するためには緊張した動員態勢を堅持し、1957 年にチョンリマ運動を起こしたときのように再び革命的大高揚を起こさなければならないとし、竜城の労働者がこの運動の先頭に立つべきであると大きな信頼を寄せた。また、同年の 6 月末から 7 月初にかけて党中央委員会第 4 期第 16 回総会を招集し、経済建設と国防建設を並進させる革命的路線を貫徹するためには幹部と勤労者が心がまえを新たにし、すべての部門で消極性と保守主義、立ち後れと停滞を徹底的に排撃し、以前の数十倍の努力を傾けて新たな革命的高揚を起こさなければならないと指摘した。

主席は新たな革命的大高揚を起こすため、勤労者の思想的自覚

を促し、労働行政を改善し、とくに青年の力を最大限に発揮させ、チョンリマ作業班運動を深化させることに大きな関心を払った。1968 年 4 月には全国青年総動員大会を招集し、血気さかんで勇敢な青年が経済建設と国防建設の各部門で先鋒となるよう励ました。そして 5 月には第 2 回全国チョンリマ作業班運動先駆者大会を開き、チョンリマ作業班運動の中心的課題は対人活動と設備、資材にたいする活動、書籍にたいする活動を正しくおこなうこと、すなわち思想革命、技術革命、文化革命を正しく進めることであるとし、この運動をさらに発展させる課題を示した。

こうして朝鮮人民は国防建設に大きな力を注ぎながらも、1967 年には前年に比べ工業総生産高は 17%、穀物生産は洪水による甚大な被害にもかかわらず 16%の増加という奇跡的成果をあげることができた。

国防建設においても大きな成果が達成され、アメリカ帝国主義のいかなる軍事的挑発もことごとく粉砕し、祖国の安全と革命の獲得物を確固と守り通せる国防力が構築された。

1968 年、アメリカの武装情報収集艦プエブロ号が朝鮮の領海に侵入してスパイ行為を働き、英雄的朝鮮人民軍海軍によって拿捕されると、アメリカ帝国主義は「報復」を云々してまさに戦端を開かんばかりの騒ぎを演じた。主席はこれにたいし、朝鮮人民と人民軍は敵の「報復」には報復で、全面戦争には全面戦争でこたえるであろうという断固たる立場を表明した。この強硬にして断固たる立場に恐れをなしたアメリカ帝国主義侵略者は膝を屈し、その侵犯行為について謝罪せざるをえなかった。朝鮮人民軍はその後も、大型偵察機ＥＣ－121 事件などアメリカ帝国主義の朝鮮にたいするスパ

イ・破壊行為が発生するたびに断固たる懲罰を加えた。これは、経済建設と国防建設の並進路線の貫徹によってもたらされた輝かしい勝利であり、その正当性と生命力の一大示威であった。

社会主義経済建設と国防建設の各分野で新たな革命的大高揚が起きていた 1967 年 12 月に招集された最高人民会議第 4 期第 1 回会議で、主席は共和国政府の政綱として『国家活動のすべての分野で自主、自立、自衛の革命精神をいっそう徹底的に具現しよう』を発表した。この 10 大政綱はチュチェ思想を共和国政府の対内対外政策にりっぱに具現した国家活動の指針であり、朝鮮革命の前途を示す綱領的な文献であった。

主席は経済建設と国防建設の並進路線の貫徹において革命的大高揚をひきつづき堅持するよう指導する一方、豊富な実践的経験にもとづき、不眠不休の思索と探求によって社会主義経済建設における理論的諸問題、とくに社会主義経済制度の優越性とそれを正しく発揮させるうえでの重要な問題を独創的に解明した。

1969 年 3 月、『社会主義経済のいくつかの理論的問題について』と題する著作で、社会主義・共産主義建設において緊要な経済理論上の問題を科学的に解明した。

まず、社会主義社会における経済の規模と生産発展のテンポとの相関関係を明らかにし、社会主義社会は、資本主義社会では想像も及ばないほどの速いテンポで経済をたえまなく発展させる無限の可能性をもっており、社会主義建設が進み、経済的土台が強化されるにつれて、その可能性はますます大きくなると指摘した。

主席は、社会主義社会において生産力の発展を促進する決定的要因は人々の革命的熱意の高揚にあることを、朝鮮における社会主

義経済建設の実践的経験にもとづいて論証した。

つぎに、社会主義社会で商品生産がおこなわれる条件と、生産手段が商品である場合と商品でない場合を明確に示し、国営企業所のあいだでやりとりされる生産手段は商品的形態をとり、価値法則も形態的に作用することを理論的に解明した。そして、社会主義社会での生産手段の生産と流通分野における価値形態と商業的形態を正しく利用する方途、商品生産と流通分野において価値法則を正しく適用する問題などについても新たに解明した。

また、社会主義社会に農民市場が存在する根拠とそれをなくす方途を全面的に示し、商品流通の凋落と社会主義商業から供給制への移行の問題を新たに提起し、その合法則的過程を科学的に解明した。

この著作は、社会主義政治経済学の根本問題と社会主義社会の経済的特性およびその発展法則を解明することによって、社会主義・共産主義経済建設に関する理論をさらに完成させた歴史的文献である。

主席は第 1 次 7 か年計画の遂行と社会主義的工業化の実現をめざす闘争をひきつづき推進した。

1969 年 12 月の党中央委員会第 4 期第 20 回拡大総会で、1970 年 11 月に第 5 回党大会を招集することを提案し、この大会に向けて第 1 次 7 か年計画を完遂するようアピールした。これにこたえて全党員と勤労者は英雄的な闘争をくりひろげて、新たなチョンリマ速度—「降仙(カンソン)速度」を創出し、「青山(チョンサン)里の人たちの仕事ぶり」を発揮して、人民経済の各分野で新たな奇跡と革新を起こした。革命的大高揚のなかで工業化の歴史的課題がりっぱに遂行され、第 1 次 7 か年計画は成功裏に完遂された。こうして朝鮮は近代的工業

と発達した農業を有する強力な社会主義工業国になった。

1957 年～1970 年の工業化の全期間にわたって、工業生産は年平均 19.1％の速いテンポで成長した。これにともない、工業および農業総生産高に占める工業の比率は 1956 年の 34％から 1969 年には 74％に高まった。主体的な工業化路線の貫徹によって、人民経済の各部門は現代技術の基礎の上に確固と位置づけられるようになった。

主席は共和国北半部での社会主義建設を推進すると同時に、南朝鮮革命と祖国統一のために心血を注いだ。

1960 年代に入って急変する南朝鮮の情勢と革命発展の要求を深く洞察した主席は、1964 年 2 月の党中央委員会第 4 期第 8 回総会で、アメリカ帝国主義を追い出して国の統一と革命の全国的勝利を達成するためには、主体的革命勢力である北半部の革命勢力と南朝鮮の革命勢力をうちかため、国際革命勢力との連帯を強化しなければならないとした。とくに、南朝鮮の革命勢力を強化するためには、革命の主力部隊として革命に参与できる基本階級を結束し、労働者階級の革命的党を建設し、各階層の広範な大衆を統一戦線にかたく結集し、政治、経済、文化、軍事の各面で反革命勢力を最大限に弱体化させなければならないと指摘した。

この革命的党創立方針にのっとって南朝鮮の革命家は地下革命組織をつくり、党の指導中核を育てたうえで、1964 年 3 月にソウルで統一革命党創立準備委員会を結成した。党創立準備委員会は、実際の闘争で鍛えられた革命家を中心に、ソウル市党委員会をはじめ地下党組織を結成して党の隊伍をたえず拡大するとともに、各級党組織のメンバーを金日成主席の革命思想、チュチェ思想で武装さ

せることに力を注いだ。党組織は党の大衆的基盤をうちかためるため、広範な大衆の意識化を促す活動を強め、党の外郭団体として合法、非合法の団体を組織して広範な大衆を党のまわりに結集させ、各種形態の大衆闘争を通じて革命勢力をたえず成長させていった。

南朝鮮の革命家はこうした準備にもとづいて 1969 年 8 月に統一革命党中央委員会を結成し、党の創立を世に宣言した。チュチェ思想を指導理念とする統一革命党の創立は、南朝鮮での革命的党建設に関する主席の賢明な方針の実現であり、南朝鮮の革命家と人民の多年にわたる血みどろの闘争の結実であった。

主席は海外同胞運動、とくに在日朝鮮人運動の発展に深い関心を払った。

1960 年代に入って、日本の反動当局は在日同胞にたいする差別政策をさらに強め、弾圧と同化の二面政策を悪らつに実施した。

主席は 1962 年 1 月の総聯議長への書簡をはじめ一連の著作で、在日朝鮮人運動の進路を明示した。在日同胞のあいだにチュチェ思想体系を確立し、総聯隊伍の統一団結を強化し、総聯の活動をより組織的に展開するとともに、在日同胞にたいする社会主義的愛国主義教育を強化して、かれらがチュチェ朝鮮の海外公民としての高い誇りと自負を抱き、社会主義祖国の尊厳を守り、民主主義的民族権利を断固擁護し、祖国の自主的平和統一をめざして力強くたたかうようにすべきであると指摘した。

主席は在日朝鮮人運動を弾圧しようとする日本反動当局の策動を暴露、糾弾する措置をとる一方、1963 年 10 月には「朝鮮民主主義人民共和国国籍法」の発布によって在日同胞に共和国公民としての地位を法的に保障した。

主席の賢明な指導のもとに、総聯は「日本永住権申請」や南朝鮮「国籍」の取得強要などの策動をはねのけ、共和国の公民権を固守するとともに、日本当局の各種悪法制定策動を排撃し、朝鮮人を捜し出す運動を活発に展開し、在日朝鮮人運動を新たな高い段階へと発展させた。

主席は、国際舞台において革命と反革命間の対立と闘争が日増しに激化していく情勢の要請を深く洞察し、国際共産主義運動の統一団結の強化と世界革命の発展のためにエネルギッシュに活動した。

1966 年の党代表者会議での報告と、1967 年の 8 月、そして翌年の 10 月に発表した『反帝反米闘争を強化しよう』『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国人民の偉大な反帝革命偉業は必勝不敗である』など一連の著作で、左右の日和見主義に反対して国際共産主義運動と社会主義諸国の統一団結を実現し、反帝反米闘争と植民地民族解放運動を高揚させる科学的な戦略戦術上の方針を全面的に明示した。

主席は社会主義諸国と共産党・労働者党の友好・協力関係の発展に第一義的意義を付与し、社会主義諸国との友好・協力および相互援助に関する条約をはじめ諸協定を締結し、相互の交流と接触を強めて共同歩調をとることに努めた。そしてプロレタリア国際主義の原則にもとづき、アメリカ帝国主義と対峙して困難な闘争をつづけているキューバとベトナム、それにアラブ諸国人民の闘争を積極的に支持声援した。

また反帝反米闘争におけるジャーナリズムの役割に大きな意義を付与し、1969 年 9 月に平壌で開催された「アメリカ帝国主義の侵略に反対してたたかう全世界ジャーナリストの任務に関する国際

会議」に臨席し、反帝反米闘争において世界の進歩的ジャーナリストに課された任務を示した。

主席は新興諸国との政治的・経済的・文化的連係を強化する対外活動方針を提示し、自らインドネシアを訪問してバンドン会議 10 周年記念行事に参加し、新興諸国との戦闘的団結と友好・協力関係の発展に転機をもたらした。

主席のエネルギッシュな対外活動によって朝鮮労働党と共和国の国際的地位はさらに高まり、朝鮮革命に有利な国際的環境がつくりだされた。

10

1970 年 11 月～1980 年 10 月

金日成主席は、社会主義の完全な勝利と朝鮮革命の全国的勝利を早めるたたかいへと全党、全人民を奮起させた。

主席は 1970 年 11 月 2 日から 13 日にかけて朝鮮労働党第 5 回大会を指導した。大会での党中央委員会活動報告で主席は、総括期間に革命と建設で達成した輝かしい成果を全面的に総括し、思想、技術、文化の 3 大革命を強力に推進し、社会主義制度をいちだんと発展させ、社会主義の完全な勝利を早めるための新たな闘争課題を示し、6 か年人民経済計画(1971～1976 年)の基本的課題を明らかにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「社会主義経済建設分野における 6 か年計画の基本的課題は、工業化の成果を強化発展させ、技術革命を新たな高い段階に前進させて、社会主義の物質的・技術的土台をいっそう強固にし、人民経済のすべての部門で勤労者を骨のおれる労働から解放することであります」

主席は工業の主体性をさらに強化し、農業を高度に集約化することを骨子とする 6 か年計画の部門別の中心的課題を示した。

主席は、搾取と抑圧から解放された勤労者を骨のおれる労働からも解放するため、人民経済のすべての部門で、技術革新運動を広範に展開し、重労働と軽労働の差、農業労働と工業労働の差を著しく縮め、女性を家事の重い負担から解放する 3 大技術革命の課題を新たにうちだした。

3 大技術革命の課題は社会主義的工業化が実現したのちに遂行すべき新しい高い段階の技術革命課題であり、社会主義の完全な勝利をめざす社会主義経済建設の戦略的課題である。

文化革命をおし進めるためには帝国主義の文化的浸透を完全に封じ、復古主義的傾向を克服することによって、教育、科学、文学・芸術をはじめ社会主義文化建設のすべての部門を健全な土台のうえで急速に発展させなければならないと指摘した。

思想革命を優先させ、全社会の革命化、労働者階級化をひきつづき深化させるためには、勤労者のあいだで思想教育活動をさらに強化し、かれらを教育し改造する活動を革命実践と密接に結びつけ、革命的組織生活を強化し、すべての分野で新しい社会主義的生活様式を全面的に確立しなければならないと強調した。

国防力をさらに強化するためには党の軍事路線を堅持し、国防で自衛の原則を貫かなければならないと指摘した。

人民生活を向上させるためのもっとも重要な課題は、労働者と農民の生活水準の格差、都市と農村住民の生活条件の格差を速やかになくすことであるとし、そのためには郡を整備してその役割を高め、農村でのバス運行と水道化、農村診療所の病院化を実現しなければならないと指摘した。

主席は南朝鮮革命の勝利と祖国の統一を早め、国際革命勢力と

の団結を強化する綱領的課題を明示した。

主席は党を組織的、思想的に強化し、その指導的役割を高めるために党の唯一思想体系を確立し、それにもとづいて党の隊伍の思想・意志の統一を強めることを党活動の総体的課題として規定し、党活動の基本である対人活動を正しくおこなうよう強調した。また社会主義経済建設にたいする党の政治的指導を強め、各級人民委員会と人民軍、社会安全機関、司法・検察機関にたいする党の指導を強化するよう指摘した。

大会は人民経済発展 6 か年計画について討議、決定し、発展する現実の要請に即して党規約の一部を修正、補足した。

大会は主席を朝鮮労働党中央委員会総書記に再選した。

朝鮮労働党第 5 回大会は、チュチェ思想の全面的勝利と社会主義的工業化の輝かしい勝利を総括した誇らしい勝利者の大会であり、主席を中心とする全党、全人民の不動の統一団結を誇示した団結の大会であった。

主席は第 5 回党大会後、3 大技術革命をりっぱに遂行し、6 か年計画のすべての目標を早期達成するたたかいをおし進めた。

まず、6 か年計画の中心的課題である 3 大技術革命の突破口を開くため、工作機械の生産に力を集中する措置を講じ、1971 年 2 月には熙川（ヒチョン）工作機械工場を現地指導し、技術革新運動を強力にくりひろげて翌年の 4 月までに 1 万台の工作機械を生産する課題を与えた。そして 9 月と 10 月には亀城（クソン）と熙川の労働者たちを訪ね、工作機械の生産で一大革新を起こすよう励まし、11 月の朝鮮労働党中央委員会第 5 期第 3 回総会で、3 大技術革命遂行における機械工業部門の課題を具体的に示した。

主席が点じた新技術革新の炎のなかで熙川、亀城、万景台の工作機械工場をはじめ全国の機械工業部門の労働者は 1 年余りで 3 万台の工作機械を生産する革新を起こした。こうして 3 大技術革命の遂行を可能にする確固たる展望が開かれた。

主席は工作機械の生産で飛躍を遂げるよう導く一方、人民経済のすべての部門、すべての単位で 3 大技術革命を強力に推進し、6 か年計画の遂行をめざして奮闘するよう励ました。こうして 3，000 余の工場、企業所が 6 か年計画の 2 年分の課題をくりあげて完遂し、多くの工場、企業所が 6 か年計画末の予定生産水準を突破した。

主席は社会主義経済建設をおし進める一方、全社会の政治的・思想的統一を強化することに深い関心を払った。

1971 年 8 月の朝鮮労働党中央委員会政治委員会、9 月の平安北道党委員会、黄海南道党委員会拡大総会その他の多くの会議で、革命隊伍をうちかため全社会の政治的・思想的統一をいちだんと強化する綱領的課題を示した。

主席のまわりに全人民がいつにもましてかたく団結し、社会主義建設で革命的大高揚が起きていた 1972 年 4 月、朝鮮労働党と人民は、主席の生誕 60 周年を民族最大の慶事として意義深く迎えた。

主席は生誕 60 周年に際して、朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を受けた。

1972 年 4 月 15 日、主席は祝賀宴での演説『革命的団結はすべての勝利の保障である』で、革命と建設で勝利をおさめたのはもっぱら全人民が党のまわりにかたく結集し、力強くたたかってきたからであるとし、革命的同志愛にもとづいて全党、全人民がかたく団結するよう強調した。

主席は気高い革命的徳義心から、先に世を去った抗日革命烈士を永生の丘によみがえらせるようにはからった。

主席は生誕 60 周年を迎えて計画された自身に関するいっさいの企画は厳しく禁じながらも、祖国の解放と人民の自由、幸福のために貴い生涯をささげた革命戦士の革命業績を末長く輝かせるため、革命烈士陵の建立を構想した。

1972 年 4 月のある日、大城(テソン)山の峰々を長時間めぐり歩き、繁栄する首都の姿が一望のもとに見渡せる朱雀(チュジャク)峰に革命烈士陵の敷地を定めた。そして党中央委員会政治委員会で、大城山に革命烈士陵を建立し、烈士陵に革命烈士の胸像を建てることを提起した。そして抗日革命烈士の一人ひとりに思いをめぐらしながら、かれらの姓名と生年月日、革命に投じた年と世を去った日などを紙面に書き記した。一枚の写真も残せなかった抗日革命烈士にたいしてもその容貌や性格上の特徴を記憶をたどりながら説明し、かれらの姿が生き生きと再生されるよう、こまやかに配慮した。

革命烈士にたいする主席の気高い革命的信義と革命的同志愛によって、1975 年 10 月、大城山革命烈士陵はりっぱに建立された。

革命と建設のすべての分野でチュチェ思想を具現するためのたたかいが力強くくりひろげられ、世界の革命的人民のあいだでチュチェ思想に学ぼうとする志向と熱望がいつにもまして高まる実情にかんがみて、主席は 1972 年 9 月、『毎日新聞』記者の質問にたいする回答『わが党のチュチェ思想と共和国政府の対内対外政策のいくつかの問題について』と、朝鮮労働党創立 30 周年記念大会でおこなった報告など一連の著作で、チュチェ思想について全面的に解明し、チュチェ思想の本質を定立した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「チュチェ思想とは、一口にいって、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設をおし進める力もまた人民大衆にあるという思想であります。言いかえれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力も自分自身にあるという思想であります」

主席は世界における人間の地位と役割を哲学の根本問題として新たに提起し、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を独創的に解明した。

チュチェ思想はすべての問題を人間を中心にすえて考え、人間に奉仕し、勤労人民大衆が革命と建設で主人としての態度をとることを要求すると指摘した。そしてチュチェ思想を革命と建設に具現するためには、思想における主体、政治における自主、経済における自立、国防における自衛の原則を堅持しなければならないと強調した。

主席はチュチェ思想の原理にもとづいて革命理論と指導方法についても全面的に解明した。

主席は社会主義革命と社会主義建設で達成した成果を法的に固着させ、社会主義社会の各分野の諸原則を法的に規制し、社会主義の完全な勝利と祖国の自主的統一を達成するたたかいを法的に裏付けるために、新しい型の社会主義憲法を制定する措置を講じた。

主席は『朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法』を起草し、1972 年 12 月の最高人民会議第 5 期第 1 回会議でその採択をはかった。そして最高人民会議での演説『わが国の社会主義制度をいっそう強化しよう』で、新憲法の基本的内容と特徴、新憲法の制定発布

の意義を全面的に説き明かした。

社会主義憲法では、社会主義社会における政治・経済・文化分野の諸原則と集団主義的原則にもとづく公民の権利と義務、国家機関の構成と任務、および活動原則を新しく規制した。

最高人民会議第5期第1回会議(1972年12月28日)で金日成党総書記は朝鮮民主主義人民共和国主席に推戴された。

主席は党、そして発展する革命の合法則的要請と国際共産主義運動の経験と教訓にもとづき、革命偉業の継承問題の解決に多大の関心を払った。

労働者階級の領袖の歴史的使命は、人民大衆の自主偉業を切り開き前進させるだけでなく、革命の代を継ぐ組織的・思想的基礎と指導体系を確立することにある。

主席はなによりも政治的領袖の後継者問題の正しい解決をはかった。

金日成主席はつぎのように述べている。

「党の偉業継承において基本となるのは、政治的領袖の後継者問題を正しく解決することです」

革命偉業の継承で、後継者の問題は政治的領袖の地位と役割を継承する問題であり、ここでの原則的問題は、なによりも後継者を正しく立てることである。労働者階級の党は、先代領袖の思想と指導に限りなく忠実で、全社会を政治的に指導しうる品格と資質を備えた傑出した指導者を領袖の後継者に立てなければならない。

主席は久しい前から、将来を見通して後継者問題の解決に腐心した。

金正日将軍は早くからつねに主席のそば近くにいて主席の革命

思想と卓抜な指導力、高邁な共産主義的徳性をそっくりそのまま身につけ、長年主席を補佐してきた。党中央委員会で活動するようになってからは党と革命、祖国と人民の前に不滅の業績をつみあげた。

1974 年 2 月の党中央委員会第 5 期第 8 回総会は、金正日将軍を党中央委員会政治委員会委員に推し、主席の後継者として推戴した。これは、チュチェの革命偉業を継承し、完成するための確固とした保証を取りつけた歴史的な出来事であった。

主席は第 5 回党大会で示した思想、技術、文化の 3 大革命の深化、発展に大きな力を注いだ。

幹部たちの指導水準が 3 大革命を深化させるべき現実的要求に追いつけないでいる実態を見きわめた主席は、指導を下部に接近させ、下部の活動家に政治的、思想的および科学技術的な援助を与えるため、新しい形式の革命指導方法、3 大革命グループ運動を発起した。

1972 年の秋、党組織から選んだ優秀な活動家とインテリ大学生で指導グループを編成して軽工業部門の工場に送り、3 大革命の指導能力をテストした主席は、1973 年 2 月の党中央委員会政治委員会拡大会議で、3 大革命グループを組織し工場、企業所、協同農場など人民経済各部門に派遣する措置を講じた。

3 大革命グループ運動が強力にくりひろげられた結果、革命グループが赴いたところはいずれも 3 大革命の炎が勢いよく燃え上がり、人間改造活動、技術改造活動、文化建設活動で革新が起こった。

主席は 1973 年 2 月の党中央委員会部長協議会で、思想・技術・文化革命を力強く展開し、社会主義建設を促す全人民的大衆運動として、3 大革命赤旗獲得運動をくりひろげる構想をうちだした。

3 大革命赤旗獲得運動の高まりのなかで、思想、技術、文化の 3 大革命は大きな成果をおさめ、全社会をチュチェ思想化する歴史的偉業も積極的におし進められていった。

主席は全社会のチュチェ思想化が前面におし出された新しい歴史的環境の要請に即して、全党のチュチェ思想化を実現するため党を強化し、党活動に新たな転換がもたらされるよう指導した。

1974 年 7 月、『党活動をいっそう強化することについて』と題する著作で、党活動に新たな転換をもたらす基本的な方向と方途を明らかにした。

主席は、党を不敗の革命隊伍にかためることはすべての党組織の基本的任務であり、主要な課題であるとし、そのためには幹部陣容をしっかりかため、すべての党員を革命の精鋭分子に育て、全党の幹部化、精鋭化をはからなければならないと述べた。また、党の唯一思想にもとづく全党の統一団結を実現し、とくに全党が党中央の唯一的指導のもとに行動をとる厳格な組織規律をうち立てなければならないと強調した。そして、党の隊伍と組織を強化する鍵である党員の組織生活を強める方途を具体的に示した。

主席は党の大衆路線を貫き、各階層の大衆を党のまわりにかたく結集し、大衆との活動体系を確立するよう指摘した。同時に社会主義建設にたいする党の指導をいちだんと強化し、党の活動方法と活動作風を改善するよう強調した。

この著作は、党活動を改善し、党の戦闘力と指導的役割を高め、全党と全社会のチュチェ思想化を強力に促す有力な思想的・理論的武器となった。

主席は党活動に新たな転換をもたらすため、党活動の中心を党

の唯一思想体系と唯一的指導体制の確立におき、この活動を着実におし進めるよう指導した。

主席は全社会のチュチェ思想化の要求に即して、社会主義経済建設に拍車をかけ、6 か年計画を早期遂行するたたかいを正しく指導した。

1974 年 2 月の党中央委員会第 5 期第 8 回総会で、社会主義建設で新たな高揚を起こすための社会主義大建設を強力におし進める方針を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「全党、全人民が総力をあげて社会主義大建設のたたかいを力強くくりひろげ、来年までに 6 か年計画のすべての生産目標を繰り上げて達成し、そのあとひきつづき社会主義経済建設の 10 大展望目標をめざして総進軍すべきであります」

主席は社会主義大建設の方針を貫くためには、すべての部門、すべての単位が新しいチョンリマ速度で総進軍し、当面は基本建設、工業、農業、輸送、水産の五つの部門に力を集中すべきであると指摘した。

主席の提議により、総会は党員と勤労者を社会主義大建設へ奮い立たせるため、全党員に送る手紙を採択した。また税制を全廃し、商品価格を大幅に引き下げる歴史的措置を講じた。こうして、朝鮮人民は社会主義祖国で暮らす大きな誇りと自負を抱いて、社会主義大建設により積極的に取り組むようになった。

総会後、主席は全国工業大会、全国農業大会など人民経済の部門別大会および協議会を開き、6 か年計画を繰り上げて遂行するための方向と方途を示す一方、平壌（ピョンヤン）市をはじめ平安南北道、咸鏡（ハムギョン）南

北道、慈江(チャガン)道など全国各地を訪れて、党員と勤労者を新たな飛躍と革新へと励まし、社会主義大建設を輝かしい勝利に導いた。

主席は社会主義大建設の最初の年である 1974 年度の人民経済計画を完遂する総突撃戦へと全党、全人民を奮起させた。

1975 年 2 月の党中央委員会第 5 期第 10 回総会で、党創立 30 周年を迎え、6 か年計画の主要目標を繰り上げて達成するため、五つの部門にひきつづき力を集中し、とくに技術革命を強力に推進する課題を示し、その遂行をめざすたたかいを積極的にくりひろげるよう指導した。

主席は農業戦線を社会主義経済建設の主要戦線の一つとし、農業生産で新たな高揚を起こすよう導いた。1973 年 1 月の党中央委員会政治委員会をはじめ一連の会議で、農業第一主義へと進む革命的方針を示し、自ら農業戦線の司令官となって農業の指導に当たり、朝鮮の実情に即したチュチェ農法を創造した。

主席は農業科学院と文徳(ムンドク)郡、粛川(スクチョン)郡、安岳(アンアク)郡、信川(シンチョン)郡、載寧(チェリョン)郡その他多くの郡の協同農場を現地指導し、チュチェ農法に依拠しさえすれば農業生産で高い収穫が得られることを実証した。

主席はチュチェ農法を貫くため、農業部門の幹部と勤労者のあいだに残っている官僚主義、主観主義、経験主義、形式主義を根絶する思想教育と思想闘争を強化する一方、チュチェ農法の普及宣伝活動を広くおこない、また農村技術革命を極力促し、農村にたいする支援と援助を強化する措置を講じた。

1976 年 10 月の党中央委員会第 5 期第 12 回総会で、畑地灌漑の完成、段々畑づくり、耕地整理と土壌改良、治山治水、海面干拓を内容とする自然改造 5 大方針をうちだし、そのたたかいを力強く

おし進めた。こうして朝鮮ではひきつづく寒冷前線による異常気象現象を克服し、農業生産で新たな高揚を起こす確固とした土台が築かれた。

主席の正しい指導のもとに、工業をはじめ人民経済のすべての部門では6か年計画を完遂する誇らしい成果が達成された。

主席は社会主義の完全な勝利を早め、全社会のチュチェ思想化偉業を実現するため、革命と建設の強力な武器である人民政権の強化に深い関心を払った。

1977年12月の最高人民会議第6期第1回会議での演説『人民政権をいっそう強化しよう』で、主席はチュチェの政権建設理論を体系化し、人民政権を強化する方途を明示した。

主席は、国家主権は政治的支配権であり、人々の地位と役割を規定する基本的要因であるとし、主権に関する問題は革命の基本問題であると指摘した。そして社会主義国家の活動の基本方式は社会主義的民主主義であることを明らかにし、それを円滑に実施するための課題を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「この世に真の民主主義はただ一つしかなく、それは勤労人民大衆のための民主主義、社会主義的民主主義です」

社会主義的民主主義を円滑に実施するためには、勤労人民大衆を人民政権の活動に広く参加させ、国家政治生活におけるかれらの役割をたえず高め、社会主義経済・文化建設をりっぱにおこなって、いちだんと高い物質・文化生活を実質的に保障しなければならないとし、人民大衆の利益を侵害し、社会主義的民主主義の破壊を企てる帝国主義者とその手先の敵対行為、それに幹部のあいだに現れて

いる官僚主義に反対して積極的にたたかわなければならないと強調した。

主席は人民政権を強化するために、政権機関活動家の陣容を党と革命に忠実な人たちでしっかりかため、政権機関の主権的機能を強化し、すべての国家・経済機関がチョンサンリ(青山里)精神、チョンサンリ方法の要求どおり活動するようにした。また人民政権機関が国の経済管理と人民生活の責任ある戸主として、経済・文化建設にたいする指導と人民の物質・文化生活を高める活動を責任をもっておこない、社会主義順法生活指導委員会の役割を高め、国家の法秩序を確立するよう指導した。

主席は社会主義の完全な勝利を早めるため、社会主義経済建設をひきつづき強力に推進した。

最高人民会議第 6 期第 1 回会議は第 2 次 7 か年計画(1978 年～1984 年)を採択し、公布した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「第 2 次 7 か年計画の基本課題は、人民経済の主体化、現代化、科学化を促進し、社会主義の経済的土台をさらに強化し、人民生活をいちだんと向上させることです」

人民経済の主体化、現代化、科学化は共産主義の物質的要塞を占領するために社会主義・共産主義経済建設で一貫して守るべき戦略的路線である。

第 2 次 7 か年計画は社会主義の自立的民族経済の威力をいちだんと強化するための雄大な経済建設綱領であり、社会主義の完全な勝利を早めるための青写真であった。

主席は第 2 次 7 か年計画を遂行するためには、なによりも思想、

技術、文化の 3 大革命をひきつづき推進して、生産と建設でたえず高揚と革新を起こし、既存の強力な経済的土台をさらに完備し、現代技術で装備しなければならないとして「自力更生の革命精神をさらに高く発揮しよう!」という革命的スローガンをうちだし、自らの力、自らの技術、自らの資源で経済建設を力強くおし進めるよう指導した。そして、1978 年 1 月の党中央委員会第 5 期第 16 回総会で、全党員に党中央委員会の手紙を送る措置を講じた。また人民経済の各部門別会議を指導し、多くの工場と企業所、協同農場を現地指導して、党員と勤労者を新展望計画の遂行へと奮い立たせた。

1979 年 10 月、人民経済各部門の活動を現地指導するなかで、党と革命、祖国と人民のために献身してきた隠れた英雄たちを探し出し、かれらの模範を見習う運動を力強くくりひろげるようにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「隠れた英雄の模範を見習う運動は、わが党の模範による感化教育方針を具現した大衆的な思想改造運動です」

隠れた英雄の模範を見習う運動は、社会の全構成員を党と革命に限りなく忠実なチュチェ型の共産主義的革命家に改造する共産主義的思想改造運動であり、主体的な科学技術の発展を強力に推進する大衆的技術改造運動であり、労働党の主体的な活動方法を具現するための大衆運動である。

主席は社会主義経済建設を力強くおし進める一方、社会主義文化の開花発展に大きな力を注いだ。

教育事業に第一義的な意義を付与した主席は、1972 年 9 月から実験的に実施してきた全般的 11 年制義務教育を 1975 年 9 月から国の全域で実施するようにし、1976 年 4 月には、朝鮮民主主義人

民共和国幼児保育・教育法を制定し、すべての子どもを国家と社会の負担で養育する制度を法的に固着させた。そして、高等教育網を拡大し、働きながら学ぶ高等教育体系をいっそう発展させた結果、6 か年計画期間に技術者、専門家の数は 100 万名に達し、国の民族幹部問題が円滑に解決できるようになった。

主席は教育事業で達成した成果にもとづいて、1975 年 10 月の朝鮮労働党創立 30 周年記念大会での報告で、全社会のインテリ化方針を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「文化革命で達成すべきもっとも重要な目標は、全社会のインテリ化を実現することです。全社会をインテリ化するということは、社会の全構成員を労働者階級化したうえで、かれらを大学卒業程度の文化・技術水準をもつ、全面的に発達した共産主義的人間に育てることを意味します」

全社会のインテリ化方針は、社会主義・共産主義建設の合法則的要求を反映したもっとも科学的な方針であり、社会の全構成員を全面的に発達した真のチュチェ型の共産主義的革命家に育成するもっとも革命的な方針である。

教育事業を社会主義偉業の遂行に合わせてさらに発展させるため、主席は 1977 年 9 月の朝鮮労働党中央委員会第 5 期第 14 回総会で『社会主義教育に関するテーゼ』を発表した。

教育テーゼで、社会主義教育の目的は人々を自主性と創造性をもった共産主義的革命人材に育成することにあるとし、社会主義教育学の基本原理を定立した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「社会主義教育学の基本原理は人びとを革命化、労働者階級化、共産主義化することである。つまり人びとを共産主義的革命思想で武装させ、そのうえで深い科学知識と壮健な体力をもたせることである」

主席は、社会主義教育学の基本原理を正しく具現するためには、教育事業で党性、労働者階級性を具現し、主体性を確立し、教育と革命実践を結びつけ、党と国家が責任をもって教育事業をおこなう原則を堅持しなければならないと指摘した。そして政治・思想教育と科学技術教育、体育を社会主義教育の内容と規定した。また社会主義教育の方法で重要なことは開発授業をおこない、理論教育と実践教育、教育と生産労働を結合し、組織生活と社会政治活動を強化し、それを授業と正しく結びつけ、学校教育と社会教育を結合し、就学前教育と学校教育、成人教育を並進させることであると強調した。ついで朝鮮における社会主義教育制度の本質と優越性を明らかにし、それを発展させる課題を示した。

この社会主義教育テーゼは、チュチェ思想にもとづき社会主義教育で提起されるすべての理論的・実践的問題に科学的解答を与え、全一的に体系化した社会主義教育学の全書であり、偉大な共産主義的教育綱領であった。

主席は教育テーゼを徹底的に貫くため、1978 年 10 月に全国教育者大会を開催し、ここで教育事業の具体的課題を示し、必要な措置を講じた。

国の科学技術を世界的な水準に引き上げるため、主席は 1972 年 12 月の自然科学部門活動家協議会での演説『わが国の科学技術を発展させるためのいくつかの課題』をはじめ一連の著作で、世界の

先進科学技術と科学研究活動で達成された成果を生産に取り入れて社会主義経済建設を促し、人民生活の向上に緊要な科学技術的問題を解決することに力を入れる課題と方途を示した。

主席は主体的な立場で科学研究活動を強化するための措置を講じ、それを貫くために科学者、技術者の研究チームを生産現場に送り、懸案の科学技術上の問題を解決するようはからった。こうして主体的な冶金法の発明をはじめ新しい科学技術上の問題が数多く解決された。

主席は社会主義文学・芸術発展の基本的方向を明示した。

主席は文学・芸術分野で党の唯一思想体系を確立し、党性、労働者階級性、人民性の原則を徹底的に貫き、思想性と芸術性が高く、人々の革命的世界観の確立に寄与する革命的文学・芸術作品をいっそう多く創作すべきであると指摘した。

社会主義文学・芸術を発展させるための主席の思想と方針は、金正日将軍の精力的な指導のもとにりっぱに具現され、映画、歌劇、演劇、小説など文学・芸術のすべての部門で全面的に開花し、朝鮮にチュチェ芸術の大全盛期をもたらした。

主席は、社会主義的生活文化と生産文化を確立し、人民保健医療事業を改善する措置を講じた。

社会主義的生活文化と生産文化の確立のために、全国のテレビ化を実現し、近代的な文化施設を数多く建設して、人民の文化的需要を円滑にみたすようはからった。そして農村のバス運行、水道化を実現し、労働者と農民の生活条件の格差を縮め、農民の生活上の便宜をいちだんと高い水準ではかり、すべての部門で生産文化と社会主義的生活様式を確立するよう指導した。

1971 年 4 月の党中央委員会第 5 期第 2 回拡大総会で、保健医療事業を改善する決定的な対策を講じ、1980 年 4 月には、朝鮮民主主義人民共和国人民保健医療法を制定して、もっともすぐれた朝鮮の保健医療制度と保健医療事業で達成した成果を法的にかため、より発展させる道を開いた。

主席は人民軍を党の指導に限りなく忠実な不敗の革命武力に強化するために尽力した。

まず、チュチェの革命偉業継承の要求に即して、人民軍内での党の唯一的指導体制の確立に力を注いだ。

数回の党中央委員会常務委員会と人民軍党委員会第 6 期第 20 回拡大総会で、主席は人民軍内に党の唯一的指導体制、金正日将軍の唯一的指導体系を確立するための綱領的な指針を与えた。こうして人民軍内に金正日将軍の唯一的指導のもとにすべての活動を進める整然とした体系と秩序が確立され、人民軍内の幹部陣容は金正日将軍に忠実な活動家によってしっかりとかためられた。

つぎに人民軍の政治的・軍事的威力の強化に力を注いだ。

人民軍内における党の政治活動を強化するため、主席は 1977 年 11 月の朝鮮人民軍第 7 回扇動員大会での演説『政治活動をりっぱにおこなって人民軍の威力をさらに強めよう』、それに 1979 年の朝鮮人民軍社労青活動家大会での演説をはじめ一連の演説で、軍内における宣伝扇動活動の方向と、党および青年同盟組織を強化する課題を示した。

主席は人民軍の軍事技術的強化をはかって、1975 年 2 月の党中央委員会第 5 期第 10 回総会での結語と、同年 12 月の朝鮮人民軍第 570 軍部隊の軍人への教示で、すべての軍人が強靭な革命精神、

絶妙な戦術、強健な体力、百発百中の射撃術を身につけ、軍内に鉄の軍事規律を確立する 5 大訓練方針を示し、それを貫徹するよう導いた。そして軍勤務者が軍務生活で守るべき 10 大順守事項を示し、人民軍内に自覚的で革命的な軍務生活気風が確立されるようにした。

また人民軍の細胞であり基本戦闘単位である中隊を強化するため、1973 年 10 月の朝鮮人民軍の中隊長、中隊政治指導員大会での演説『人民軍の中隊を強化しよう』、1979 年 10 月の朝鮮人民軍特務長講習終了式での演説『特務長の位置と任務について』、その他の著作で、人民軍中隊の位置と任務を明らかにし、中隊指揮メンバーと士官の役割を高める具体的な課題と方途を示した。

こうして、人民軍を政治的、思想的に、軍事技術的に強化する活動に新たな転換がもたらされた。

主席は祖国統一の 3 大原則と 5 大方針をうちだし、祖国の自主的平和統一への道を主動的に切り開いた。

主席は 1971 年 8 月 6 日におこなった演説『アメリカ帝国主義に反対するアジアの革命的人民の共同闘争は必ず勝利するであろう』で、幅の広い新しい協商方針をうちだし、南朝鮮の民主共和党を含むすべての政党、大衆団体および個別的人士といつでも接触する用意があることを明らかにした。こうして、1971 年 9 月から北南赤十字社団体の予備会談が開かれ、またこれとは別途に北と南の高位級政治会談がおこなわれた。

主席は 1972 年 5 月、北と南の高位級政治会談に参加した南朝鮮側代表との談話で、祖国統一の 3 大原則を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「わたしは、わが国の統一問題は必ず外部勢力の干渉を受けることなく自主的に、民族の大団結をはかる原則にもとづき、平和的方法で解決すべきだと認めます」

祖国統一の 3 大原則は全民族の自主的な要求と根本的な利益を反映し、北と南が共同で確認し、その履行を内外におごそかに宣言した民族共同の統一綱領であり、祖国統一の大憲章である。

この祖国統一の 3 大原則にもとづいて、1972 年 7 月 4 日に歴史的な南北共同声明が発表された。自主、平和統一、民族大団結の 3 大原則を基本内容とする南北共同声明の発表は、主席がうちだした北南協商方針の輝かしい勝利であり、これを契機に全国的な規模で祖国統一の気運が急激に高まり、祖国統一の前途に有利な局面が開かれた。

主席は、1972 年 7 月の党中央委員会第 5 期第 4 回総会をはじめ多くの機会に、祖国統一の 3 大原則を履行するための合理的かつ現実的方案を示した。

しかし、南朝鮮当局者は 1973 年 6 月、その仮面を脱ぎ捨て「国連同時加盟」を骨子とする「特別声明」を発表して民族の分裂を固定させ、永久化する「二つの朝鮮」政策を公然とかかげた。こうして、せっかく成立した北南対話は決裂状態に陥り、民族の永久分裂の危機がかもしだされた。

主席は 1973 年 6 月におこなった演説『民族の分裂を防ぎ祖国を統一しよう』で、祖国統一の 5 大方針をうちだした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「われわれが提起した祖国統一の 5 大方針は、北と南の軍事的対峙状態の解消と緊張の緩和、北と南の多面的な合作と交流の実現、

北と南の各階層人民と諸政党、大衆団体の代表からなる大民族会議の招集、高麗（コリョ）連邦共和国の単一国号による南北連邦制の実施、高麗連邦共和国の単一国号による国連加盟をその内容としています」

祖国統一の 5 大方針は祖国統一の 3 大原則の要求を全面的に具現した公明正大で合理的な方針であり、アメリカ帝国主義者と南朝鮮かいらい一味の永久分裂策動を粉砕し、全民族の団結した力で国の統一を成就するためのもっとも正しい方針であった。

主席は祖国統一の 5 大方針を貫くため、民族大団結の原則によって国と民族を愛する内外の全同胞を祖国統一偉業の実現へと奮起させる積極的な措置を講じた。そして、1974 年 3 月には、最高人民会議第 5 期第 3 回会議で朝鮮とアメリカのあいだで平和協定を締結しようという主動的な提案をおこなった。

朝鮮労働党は祖国統一に有利な国際的環境をつくりだすため積極的に努力した。その結果、国際舞台では朝鮮人民の祖国統一を支持する連帯運動が強化され、1973 年の国連第 28 回総会では「国連韓国統一復興委員団」を解体する決議が、1975 年の国連第 30 回総会では「国連軍司令部」を解体して南朝鮮からすべての外国軍隊を撤退させ、停戦協定を平和協定にかえることを要求する朝鮮側の決議案が採択された。

南朝鮮の青年学生と人民は、反ファッショ民主化闘争を強力にくりひろげ、そうしたなかで、1980 年 5 月に光州（クァンジュ）で大衆的な人民蜂起が起きた。光州人民蜂起は反米自主化と平和統一をめざす南朝鮮人民のたたかいにおいて重要な転機となった。

主席は総聯のチュチェ思想化方針をうちだし、その実現をめざすたたかいを正しく指導した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「総聯をチュチェ思想で一色化するということは、すべての総聯活動家と在日朝鮮公民をチュチェ型の血のみが流れる真の革命家にし、チュチェ思想を唯一の指導指針として、それを総聯の組織建設と愛国活動に全面的に具現していくことを意味します」

総聯のチュチェ思想化方針は、在日朝鮮人運動の熟成した要求を反映した戦略的方針であり、総聯のチュチェ思想化は総聯の組織建設と愛国活動においてチュチェ思想を具現するたたかいの新しい高い段階であった。

主席は 1975 年 5 月の総聯結成 20 周年に際しての祝賀文、1976 年 5 月の『総聯組織をさらに強化しよう』、1977 年 9 月の『総聯の支部と分会を強化し、各階層大衆との活動を活発にするために』をはじめ総聯幹部との数回にわたる談話で、総聯がチュチェ思想化の要求に即して各級組織を頼もしいチュチェ型の愛国組織にうちかため、各階層の同胞を総聯のまわりにかたく結集し、思想教育の内容を深めて、大衆教育方法を改善するよう指摘した。

主席の意を体して、総聯は 1977 年 9 月の第 11 回全体大会で総聯のチュチェ思想化を総聯活動の総体的綱領としておごそかに宣言し、支部と分会を強化する活動、在日同胞との活動を活発にくりひろげていった。

主席は総聯の民主主義的民族教育事業を在日朝鮮人運動の生命線としてたえず発展させ、愛国運動が代々しっかり受け継がれるようにし、総聯の幹部と同胞が祖国の社会主義建設に積極的に寄与し、国の自主的平和統一につくすよう導いた。

主席は自主性の旗のもとに反帝革命勢力を強化し、帝国主義、

支配主義に反対するたたかいを力強くくりひろげるよう導いた。

主席は自主性を擁護する世界人民の団結のために社会主義諸国との統一団結の強化に第一義的な関心を払う一方、われわれの時代の強力な反帝自主勢力である非同盟運動の発展に大きな力を入れた。

1974 年 5 月の党中央委員会政治委員会拡大会議で、朝鮮が非同盟運動に正式に加盟する方針を示し、そのための活動を積極的にくりひろげた。こうして、1975 年 8 月に朝鮮は非同盟運動に正式に加盟した。

主席は同年 12 月、著作『非同盟運動は現代の強大な反帝革命勢力である』で、非同盟運動の地位と役割、およびこの運動の重要課題を明示した。そして非同盟運動が帝国主義者の分裂離間策によって四分五裂する危機にあった 1979 年 7 月に、朝鮮労働党中央委員会政治委員会・朝鮮民主主義人民共和国中央人民委員会合同会議の報道をとおして、非同盟諸国は自主性を堅持し、帝国主義者の分裂離間策に団結の戦略で対抗し、紛争問題を団結志向の協商方式で解決すべきだとする原則的立場を明らかにした。

こうして、同年 9 月、キューバの首都ハバナで開かれた第 6 回非同盟諸国首脳会議が成功裏に進められ、朝鮮は非同盟運動調整委員会のメンバーとなった。

朝鮮は 1970 年代、66 か国の新興諸国と新たに国家関係を結び、100 余か国と政治、経済、文化の各分野にわたる協力を拡大させた。

主席は 1978 年 9 月の『チュチェ思想の旗を高くかかげ、社会主義建設をさらに促進しよう』をはじめ一連の著作で、世界人民の革命闘争の根本的目的は自主性の擁護にあるとし、そのために集中すべき共通の闘争対象を明らかにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「支配主義は自主性を志向する現代のすう勢に逆行する反革命的な潮流であり、世界の革命的人民の共通の闘争対象であります」

主席は自主性を擁護する世界の人民は団結せよというスローガンをうちだし、他国の自主性をじゅうりんし、他民族と人民を抑圧し、統制する支配主義に反対するたたかいを力強く展開するようにし、民族の独立を強固にし、国の自主的発展と、自主化された新しい世界の建設をめざす世界の革命的人民の闘争を積極的に支持声援するようはからった。

主席の革命思想、チュチェ思想は、その真理性と不滅の生命力によって、世界に急速に普及されていった。

1969 年 4 月、マリで最初の「金日成同志著作研究グループ」が結成されたのを皮切りに、1970 年代末までに 60 余か国で 800 余のチュチェ思想研究グループがさまざまな名称で結成された。チュチェ思想研究グループは地域別、大陸別の組織に発展し、1978 年 4 月には、東京で国際的な常設機関として「チュチェ思想国際研究所」が設立された。そして、大陸ないし世界的な規模でチュチェ思想国際討論会が盛大に催された。

主席は朝鮮革命と世界革命の発展において大きな転換がもたらされていた時期の 1979 年 12 月、党中央委員会第 5 期第 19 回総会で、翌年 10 月の第 6 回党大会開催の決定をはかり、1980 年 1 月に「朝鮮労働党第 6 回大会を高い政治的熱意と輝かしい勤労の成果で迎えよう!」という戦闘的スローガンをうちだした。ついで 6 月には、党中央委員会のスローガンを発表して、党大会を前にして全国を高揚した政治的雰囲気で沸き立たせた。主席は、第 6 回党大

会に先立って、1980 年に 100 日間戦闘(7 月 1 日～10 月 8 日)を力強くくりひろげ、生産と建設で革命的高揚を起こすようはからった。こうして第 2 次 7 か年計画の 3 年分の課題が同年 9 月末までに完遂されるという誇らしい成果が達成された。

主席の正しい指導のもとに、社会主義建設のすべての分野で輝かしい勝利を遂げ、全社会のチュチェ思想化を全面的に促す強固な土台が築かれた。

11

1980 年 10 月～1989 年 12 月

金日成主席は全社会のチュチェ思想化を強く促し、社会主義の完全な勝利をおさめるうえで決定的な転換をもたらすために、全党と全人民を新たなたたかいへと奮い立たせた。

党と革命の発展において新たな歴史的転換がもたらされていた時期の 1980 年 10 月 10 日から 14 日にかけて朝鮮労働党第 6 回大会が開催された。主席は党中央委員会の活動報告で、第 5 回党大会以降 10 年間の革命と建設で達成した輝かしい勝利と業績を全面的に総括し、党と人民に新たな闘争綱領を示した。

主席は全社会のチュチェ思想化を朝鮮革命の総体的任務と規定した。

金日成主席はづきのように述べている。

「全社会のチュチェ思想化は、朝鮮革命の総体的任務であります。勤労人民大衆の自主性を実現するための労働者階級の革命偉業は、全社会をチュチェ思想化することによってはじめて最終的に完成されます」

主席は、全社会をチュチェ思想化するためには自主的立場と創造的立場を堅持し、思想、技術、文化の 3 大革命路線を貫徹しな

ければならないとし、そのためには社会の全構成員を革命化、労働者階級化、インテリ化し、人民経済を主体化、現代化、科学化すべきであると述べ、その課題を示した。

主席は、1980 年代における社会主義経済建設の基本的課題は、完全に勝利した社会主義社会に適応する物質的・技術的土台を築き、人民の物質・文化生活を画期的に向上させることであるとし、社会主義経済建設の 10 大展望目標とそれを達成するための人民経済の部門別課題を具体的に示した。

主席は、祖国統一の 3 大原則にもとづいて高麗(コリョ)民主連邦共和国を創立する新たな統一方案を示した。高麗民主連邦共和国は、北と南がともに相手側に現存する思想と体制をそのまま容認する基礎のうえで、双方が同等に参加する民族統一政府を組織し、そのもとで北と南が同等の権限と義務を担い、それぞれ地域自治制を実施する連邦形式の統一国家である。

主席は連邦国家創立に関する諸問題をはじめ、政治、経済、文化、軍事、人民生活、対外関係などで実施すべき 10 大施政方針を示し、高麗民主連邦共和国は自主、民主、中立、非同盟、平和愛好の国家になるであろうとせん明した。

主席は反帝自主勢力の団結を強化し、世界革命を発展させるうえで提起される重要な問題と朝鮮労働党の自主的な対外政策をうちだした。

そして総括期間党活動でおさめた主な成果は、チュチェの革命偉業を最後までなし遂げ、朝鮮労働党を永久にチュチェの党として発展させる強固な組織的・思想的基礎が築かれたことであるとし、全社会のチュチェ思想化の要求に即して党活動をさらに強化する課

題を示した。

主席は、党の唯一思想体系の確立を党建設の基本路線とし、これをひきつづき強力に推進するとともに、対人活動を強めて党隊列と革命隊伍をうちかため、党の栄えある革命伝統をりっぱに継承し発展させ、革命と建設にたいする党の指導を強化し、党活動方法をたえず改善すべきであると指摘した。

大会は全党員と人民の一致した意思と念願をこめて、主席を朝鮮労働党中央委員会総書記に推戴した。また、全社会のチュチェ思想化の要求に合わせて、朝鮮労働党を永久にチュチェの革命的党として発展させるための新規約を採択した。

朝鮮労働党第 6 回大会は偉大なチュチェ思想の全面的な勝利と党の不敗の威力を誇示した勝利の大会、金正日将軍を党の首位にいただきチュチェの革命偉業完成の確固とした保証を取りつけた栄光に輝く大会として、党と革命の発展において大きな歴史的意義を有するものであった。

大会後、主席は社会主義建設の雄大な綱領を実現するため、全党と全人民を 80 年代の総進軍運動へと奮い立たせた。

主席は 1981 年の新年の辞で、「朝鮮労働党第 6 回大会の決定実行をめざして総進軍しよう!」という戦闘的なスローガンをうちだし、その後の諸著作で、社会主義建設の各分野で総進軍運動を力強く進める方針を示した。

総進軍運動方針は、社会主義建設をより高い段階へ飛躍させる革命的な方針であった。

社会主義建設の総進軍運動を力強く展開するため、主席は 1981 年の年初から党中央委員会政治局・中央人民委員会・政務院合同会

議、党中央委員会総会、道党執行委員会、そして人民経済の部門別大会や協議会を指導し、新展望目標を達成するための課題と方途を具体的に示した。また同年の 5 月には南浦（ナムポ）、6 月には清津（チョンジン）市と咸鏡（ハムギョン）北道、8 月には咸鏡南道、10 月には平安（ピョンアン）北道を現地指導し、総進軍運動に取り組んでいる幹部や党員、勤労者の闘争を力強く励ました。こうして、第 6 回党大会決定実行のための初年度のたたかいはりっぱな成果をおさめた。

社会主義建設の各分野において大高揚がもたらされていた 1982 年 4 月、朝鮮労働党と朝鮮人民は主席の生誕 70 周年を民族最大の慶事として意義深く迎えた。

主席は生誕 70 周年に際して朝鮮民主主義人民共和国英雄称号を受けた。

世界の革命的人民も、主席の生誕 70 周年を人類共同の大慶事として記念した。

朝鮮労働党中央委員会と朝鮮民主主義人民共和国政府が共催した宴会での演説『革命家の一生はたたかいに始まり、たたかいに終わらなくてはならない』で、主席はチュチェの革命偉業をあくまで完成させるためには、革命闘争を中途半端にすることなくたたかいをつづけなければならないと指摘した。そして、全社会のチュチェ思想化を実現するためのたたかいにおいて勝利の鍵は革命隊伍の思想、意志の統一と団結を確固と保障することにあると述べ、革命隊伍の統一と団結はチュチェ思想にもとづき、党中央委員会を中心とした統一団結、崇高な革命的信義と信念によってかためられた統一団結でなければならないと強調した。

主席は 1982 年 10 月に全国青年活動者会議を、11 月にはチョン

リマ運動先駆者大会を指導し、新しい進軍速度、「80 年代の速度」の創造運動を力強くくりひろげるよう励まし、社会主義建設の各分野に新たな革命的高揚期をもたらした。

主席は第 2 次 7 か年計画を繰り上げて完遂し、社会主義経済建設の 10 大展望目標を達成するための対策を一つひとつ立て、そのたたかいを陣頭で指揮した。

穀物生産目標を達成するために、1981 年 10 月の党中央委員会第 6 期第 4 回総会で、30 万ヘクタールの海面干拓と 20 万ヘクタールの新しい土地開墾、それに干拓地の用水問題を解決するための西海（ソヘ）閘門と泰川（テチョン）発電所の建設を内容とする 4 大自然改造課題を示し、全党、全軍、全人民をその遂行へと立ち上がらせた。そして、西海閘門の建設現場を視察し、閘門の位置設定をはじめ設計、施工にいたる具体的な指導をおこない、人民軍将兵と建設者を英雄的な偉勲へと奮い起こした。こうして、大同（テドン）江河口 8 キロメートルの外海をせき止める世界屈指の西海閘門建設工事はわずか 5 年という短期間に、自国の設備、資材、技術によってりっぱに竣工した。

主席は 4 大自然改造事業を積極的に推進する一方、1982 年 1 月の党中央委員会政治局拡大会議で、農村基盤をかためるため農村に 3 大革命グループと青年農村支援隊を派遣する措置を講じた。そして同年 5 月の農業部門関係幹部協議会と 12 月の党中央委員会政治局会議で、農村技術革命の促進および農業生産増大の課題を示し、トラクター、トラック、苗取り機、田植え機、稲刈り機、移動式脱穀機など近代的な農業機械を大々的に生産、供給するようはからった。

水産物の生産目標を達成するため、主席は 1980 年 12 月の党中央委員会政治局拡大会議で、冬期の漁獲と加工に力を入れるようそ

の課題を示し、政治局の委員、委員候補を各水産事業所に派遣し、自らも新浦(シンポ)水産事業所を訪れて水産業の実態を詳細に確かめたあと、現地で党中央委員会政治局拡大会議を開き、漁獲と加工に革命的な転換をもたらす対策を講じた。そして、1981 年 3 月の党中央委員会政治局・中央人民委員会・政務院合同会議と、翌年 2 月の党中央委員会政治局拡大会議で、水産業を発展させるための具体的な課題を示した。

主席は鋼鉄、非鉄金属、石炭の生産目標を達成するためのたたかいに大きな力を注いだ。

1981 年 6 月の咸鏡北道党委員会・清津市党委員会合同拡大総会と、1982 年 8 月、咸興(ハムフン)での党中央委員会第 6 期第 6 回総会、そして同年 9 月の朝鮮民主主義人民共和国政務院常務会議などの会議で鋼鉄、非鉄金属、石炭の生産目標を達成する課題と方途を具体的に示し、非鉄金属および石炭の生産目標を達成するうえで大きな役割を果たしている剣徳(コムドク)工業総合企業所と安州(アンジュ)地区炭鉱連合企業所を国家経済の生命線として規定し、ここに力を集中するようはからった。

こうして、剣徳工業総合企業所に 1，000 万トン能力の第 3 選鉱場がわずか 1 年間でりっぱに建設されたのをはじめ、冶金工場、炭鉱、鉱山などが大々的に拡充された。

主席は国家経済の発展と人民生活の向上で重要な意義をもつ化学製品と織物の生産目標を達成するたたかいを力強く導いた。

1982 年 2 月の化学工業部門責任幹部協議会での演説、1983 年 3 月の軽工業部門幹部協議会での演説、そして 6 月の党中央委員会第 6 期第 7 回総会での結語で、化学製品と織物の生産目標を達成するための明確な課題と方途を示し、化学繊維と化学肥料、合成樹

脂、合成ゴムの生産を決定的に高め、軽工業の発展に大きな転換をもたらすようはからった。

1983 年 11 月の党中央委員会第 6 期第 8 回総会では、電力生産目標を達成するための革命的な対策を立て、大規模の水力および火力発電所とならんで中小規模の水力発電所を大々的に建設する措置を講じ、さらにセメント生産目標を達成するための革命的な措置も講じた。

1983 年 8 月の経済部門責任幹部協議会で、第 2 次 7 か年計画の最後の年である 1984 年に、順川（スンチョン）、安州、清津、南浦、咸興などの 5 地区の基本戦線に力を集中し、総突撃戦を展開するよう呼びかけた。

主席の正しい指導のもとに、社会主義経済建設の新展望目標を達成するための総進軍運動が力強く展開され、第 2 次 7 か年計画は成功裏に遂行された。

主席は第 2 次 7 か年計画の遂行でおさめた誇らしい成果にもとづいて、1985 年と 86 年を調整期とし、人民経済の先行部門である石炭、電力、鉄道運輸と金属工業を速やかに発展させる措置を講じ、また「1985 年 6 月工作機械子生み運動」を力強くくりひろげるよう導いた。その結果、1 万トンプレス、大型酸素分離機など機械工業の発展と技術革命の遂行で重要な意義をもつ大型設備を自力で生産できるようになった。

主席は社会主義経済建設の新展望目標の達成をめざす総進軍運動を推進する一方、社会主義の完全な勝利をめざすたたかいで人民政権の機能と役割を全面的に高めることに深い関心を向けた。

1982 年 4 月の朝鮮労働党中央委員会・朝鮮民主主義人民共和国

最高人民会議合同会議での施政演説『全社会のチュチェ思想化をめざす人民政権の任務』と、朝鮮民主主義人民共和国創建 35 周年祝賀宴での演説『共和国政権は真の人民の政権であり、人民大衆の統一団結の旗じるしである』など一連の著作で、社会主義・共産主義建設期の人民政権に関する理論を新たに展開した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「共産主義は人民政権に 3 大革命をプラスしたものであります。人民政権をたえず強化し、その機能と役割を強めて思想、技術、文化の 3 大革命を完遂すれば、人民大衆の自主性が完全に実現した共産主義の楽園が建設されます」

人民政権は勤労人民大衆の自主性を実現する共産主義社会建設の強力な武器であり、思想、技術、文化の 3 大革命はその根本的な方途である。人民政権を強化し、その機能と役割をたえず高めながら思想、技術、文化の 3 大革命を完遂するのは、社会主義・共産主義建設で堅持すべき朝鮮労働党の総路線である。

主席は社会主義・共産主義建設期の人民政権は、勤労人民大衆の自主的権利の代表者、創造的能力の組織者、人民生活に責任をもつ戸主、勤労人民の自主的で創造的な生活の保護者であるとし、人民政権を強化しその機能と役割を高めるためには、国家活動のすべての分野でチュチェ思想をりっぱに具現し、大衆路線を貫き、社会に対する統一的指導を強め、3 大革命を力強くおし進めなければならないと指摘した。

1982 年 2 月と、1986 年 11 月の最高人民会議第 7 期、第 8 期代議員選挙を通して、共和国政権をさらにうちかためた。

人民政権機関の活動を改善するため、主席は人民政権機関にた

いする党の指導、政策的指導を正しくおこなうことに第一義的な関心を払い、国家の指導管理体系を社会主義社会発展の要請に即してひきつづき完成させていくことに深い関心を払った。とくに人民政権機関がその活動において社会主義的民主主義を根本原則、基本方式とし、階級路線と大衆路線を貫き、社会主義順法生活ならびに国家行政規律を強化し、国の経済をりっぱに管理していくようにした。

こうして朝鮮の社会主義政治制度は全社会のチュチェ思想化の要求に即して、より強固なものになった。

主席は経済建設で社会主義的原則を守り、主体的な社会主義経済管理体系を堅持することに深い関心を払った。

社会主義経済建設で社会主義的原則を堅持することは、80 年代に一部の社会主義国が経済管理に資本主義的な企業管理方法を導入して修正主義、改良主義の道を進みはじめたことと関連した重要な要求であった。

主席は 1981 年 4 月の党中央委員会第 6 期第 3 回総会での結語『テアンの事業体系をりっぱに貫徹して工場の管理運営を改善しよう』と、1984 年 12 月に発表した『主体的な経済管理体系と方法を貫徹しよう』など一連の著作で、社会主義的方法に資本主義的方法をとりまぜた、どっちつかずの方法で社会主義経済を管理運営しては断じてならないと述べ、社会主義経済管理の基本原則を全面的に具現したテアン(大安)の事業体系をはじめ主体的な経済管理体系を堅持しりっぱに運用するための課題を示した。

社会主義経済の指導と管理で堅持すべき基本原則は、政治的指導と経済的・技術的指導、国家の統一的指導と各単位の創意性、民主主義と唯一的指揮、政治的刺激と物質的刺激を正しく結合するこ

とであるとし、主体的な経済管理体系をりっぱに運用するためには、テアンの事業体系の核心である党委員会の集団指導を強化し、経済幹部の責任感と役割を高め、経済組織と生産指導を正しくおこない、企業管理を正規化、規範化しなければならないと指摘した。

主席は主体的な社会主義経済管理体系を守り運用するたたかいを、全党的な一大政治闘争、厳しい思想闘争としてくりひろげ、経済管理で社会主義的原則と朝鮮式のすぐれた経済管理体系を守り運用する革命的気風を確立した。

朝鮮式社会主義経済管理体系を終始一貫運用するため、発展する現実の要請に合わせて、テアンの事業体系にもとづき工業の指導と管理を改善する措置を講じ、社会主義農業の運営で個人主義的管理方法のささいな要素も厳しく取り締まり、集団主義的な管理運営原則を堅持するよう導いた。

主席の正しい指導により、主体的な経済管理体系がりっぱに運用されて、国の社会主義経済制度はより強固になり、社会主義経済建設にひきつづき高揚がもたらされた。

主席は全社会のチュチェ思想化を促進すべき党と革命発展の要求に即して、朝鮮労働党をチュチェの革命的党としていっそう強化し、発展させるよう指導した。

主席は党の唯一思想体系の確立を党建設の基本路線として堅持し、発展する現実の要請に即してこれをさらに強力に推進していった。

朝鮮労働党の唯一思想体系はチュチェの思想体系であり、この確立において核心をなすのは幹部と党員が党への忠実性をゆるぎない信念とすることであるとし、チュチェ思想教育と忠実性教育を強化するようにした。そして、幹部と党員を党の反分派闘争経験で武

装させる活動をたえず強化し、党の統一と団結をむしばむささいな要素も即時克服するようにした。

主席は党の唯一思想体系の確立とならんで、金正日将軍の指導体系の確立に深い関心を払った。

金日成主席はつぎのように述べている。

「党の基礎構築と指導体系の確立をりっぱにおこなってこそ、党の戦闘力と指導力を高め、党隊伍の政治的・思想的統一と純潔を守り、革命と建設を勝利に導くことができます。したがって労働者階級の党は、党建設においてこれを重要な問題として掌握していくべきです」

主席は 1983 年 12 月の党中央委員会政治局会議、翌年 3 月の政務院責任幹部との談話、1985 年 5 月および 11 月の党中央委員会責任幹部への教示など折りあるごとに、金正日将軍は白頭(ペクトウ)山型の偉人、不世出の哲学者、偉大な思想家・理論家、卓越した政治家、指導の巨匠、創造と建設の英才、文武両道の多才多能な才子、天下無敵の総帥、崇高な仁徳を備えた人民の指導者であり、領袖とその偉業に忠実な忠誠心と孝心の最高化身であるとたたえ、自分の思想はとりもなおさず金正日将軍の思想であり、自分の指導はとりもなおさず金正日将軍の指導であり、自分の人格はとりもなおさず金正日将軍の人格であり、自分の風格はとりもなおさず金正日将軍の風格であると述べている。

そして現代は金正日時代であるとし、全党と全人民を金正日将軍のまわりにかたく結集して、金正日将軍の思想と路線、方針を貫徹しなければならないと強調した。

主席の教示は全党、全軍、全人民が金正日将軍の唯一的指導に

あくまでも忠実にしたがってチュチェの革命偉業を継承、完成するうえでの綱領的な指針となった。

広範な人民大衆を金正日将軍のまわりに結束するため、主席は1981 年 10 月の社会主義労働青年同盟第 7 回大会での演説『青年はチュチェの革命偉業の頼もしい継承者になろう』と、11 月の職業総同盟第 6 回大会での演説『労働者階級は全社会のチュチェ思想化をめざす闘争で中核部隊となろう』などの演説で、勤労者団体の役割をいっそう高め、それらにたいする党の指導を強化する対策を講じた。

主席はチュチェ型の革命的党の建設、チュチェの革命偉業の継承、完成の根本的な保証である党の革命伝統を断固擁護し、それをりっぱに継承、発展させていくようにした。

1982 年 10 月に大城（テソン）山革命烈士陵を革命伝統教育の大殿堂として拡充する措置を講じ、1985 年 10 月には完成した革命烈士陵に「抗日革命烈士たちの崇高な革命精神はわが党と人民の心に永遠に生きつづけるであろう」という親筆を記念碑に金文字で刻むようはからい、祖国の自由と独立をめざして生涯をささげた抗日革命烈士の偉勲を末長く輝かせるようにした。

そして 1986 年 8 月に両江（リャンガン）道三池淵（サムジヨン）郡の小白（ソベクス）水谷を訪れて、抗日武装闘争期の朝鮮革命の心臓部であった白頭山密営を探し出してりっぱに復元するよう、その方向を示し、1988 年 7 月には白頭山革命戦跡地建設総計画模型を前にして、白頭山地区を大露天博物館としてよりりっぱに整備するよう重要な指示をおこなった。また同年 8 月には復元した白頭山密営を二度も訪れ、革命的スローガンの記された樹木〔24〕をはじめ革命の遺跡遺物を極力探し出して保存管

理をりっぱにおこない、革命の事績を通しての革命伝統教育を強化するよう教えた。

主席は党と人民の一致した念願を汲んで金正日将軍の生家の後ろの峰に「正日峰」の文字を刻むようはからった。

主席は党活動をさらに発展させ、党建設の歴史的経験で幹部と党員を武装させるため、1986 年 5 月に古典的著作『朝鮮労働党建設の歴史的経験』を発表した。

この著作で、党建設の歴史的経験を全面的に総括し、チュチェの党建設理論を集大成して労働者階級の党の革命的性格を固守し、強化するうえでの理論的・実践的問題を科学的に解明した。

またチュチェ型の革命的党としての朝鮮労働党の本質的特徴と基本的使命を明らかにし、党が一貫して守ってきた党建設の根本原理と基本原則を明らかにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「対人活動を基本とし、全社会にたいする政治的指導を実現することは、労働者階級の党建設の根本原理であります。(中略)

わが党が党建設で堅持している基本原則は、第一に党内に唯一思想体系を確立することであり、第二に党が大衆と混然一体となることであり、第三に党建設において継承性を保つことであります」

主席は、党の偉業は共産主義の実現後も継続するという歴史的必然性を明らかにし、社会主義・共産主義社会の導き手としての党を将来を見通して建設するためには、党の偉業を代々継承しなければならず、ここで基本となるのは政治的領袖の後継者問題を正しく解決することであると指摘した。そして、全党をチュチェ思想化し、

社会主義・共産主義社会本来の要求に即して党建設の思想と理論をさらに発展させ、完成していくべきであると説いた。

主席は社会主義の完全な勝利を早めるたたかいをいっそう力強くおし進めていった。

社会主義の完全な勝利を早める課題を示すため、朝鮮式社会主義の生命力と世界における社会主義運動の推移を科学的に分析し、1986 年 12 月の最高人民会議第 8 期第 1 回会議で『社会主義の完全な勝利のために』と題する施政演説をおこなった。

主席はこの演説で、社会主義・共産主義建設の合法則的路程を科学的に解明し、社会主義の完全な勝利を達成するうえでの基本的な問題は、人間と社会関係を労働者階級の姿に改造して階級的差をなくし、無階級社会を実現することであると述べ、そのためには党が示した社会主義農村問題に関するテーゼを貫徹し、協同的所有を全人民的所有に変えて生産手段にたいする全人民的所有の全一的支配を確立しなければならないと強調した。

主席は経済建設を力強くおし進めることは社会主義の完全な勝利のための重要な課題であるとし、第 3 次 7 か年計画(1987〜1993)の展望課題とその遂行方途を示した。

主席は全党、全人民を第 3 次 7 か年計画の遂行へと奮起させた。この計画の困難かつ膨大な課題を遂行するために、すべての党員と勤労者が自力更生の革命精神と朝鮮式に生きていく革命的気風を高めるよう導いた。

1987 年 1 月初旬、経済部門責任幹部との談話で、「自力更生、刻苦奮闘の革命精神をさらに強く発揮し、第 3 次 7 か年計画の高い目標をくりあげて達成しよう!」という戦闘的なスローガンを示

した。また、3 月の化学工業部門責任幹部協議会での演説では、徹頭徹尾朝鮮式に生きていくよう強調した。

主席は、上部から提供してもらえればそれにこしたことはなく、提供してもらえなくてもやり遂げるという覚悟で、内部の潜在力を最大限に動員する一方、事大主義、敗北主義などあらゆる不健全な思想とたたかい、チュチェ思想とその具現である党の路線と政策への確固とした信念を抱き、それをあくまで貫く革命的気風を確立するよう指導した。

主席は第 3 次 7 か年計画を遂行するための重要対象の建設に力を集中し、社会主義経済建設を積極的に推進するようはからった。

1987 年 7 月に第 3 次 7 か年計画を繰り上げて遂行するための総動員大会を招集し、1988 年 2 月には党中央委員会政治局会議で、共和国の創建 40 周年を前にして 200 日間戦闘をくりひろげることを提唱し、全党員に党中央委員会の手紙を送り、党中央委員会のスローガンを発表するようにした。

主席は自ら 200 日間戦闘中央指揮部の最高司令官となり、1988 年 4 月に光復（クァンボク）通りの建設現場をはじめ、多くの重要対象の建設を現地で指導し、社会主義建設の各分野で新たな高揚を起こしていった。

主席と金正日将軍が陣頭で指揮する 200 日間戦闘の過程で、平壌（ピョンヤン）市をはじめ全国各地に、大記念碑的建造物が相ついで建造され、第 3 次 7 か年計画の遂行で決定的な意義をもつ動力基地、冶金基地、化学工業基地の建設が力強くおし進められ、240 余キロの北部鉄道工事が竣工したのをはじめ、膨大な規模の重要対象建設が成功裏に進められた。

主席は 200 日間戦闘で勝利した意気込みをゆるめることなく、

いま一度 200 日間戦闘をくりひろげようと呼びかけた。

主席は第 3 次 7 か年計画期間、採掘工業、電力工業、冶金工業とともに社会主義経済建設と技術革命の新たな段階の要請に即して、機械工業と電子・自動化工業を発展させるため、1988 年 11 月の党中央委員会第 6 期第 14 回総会で、工作機械工業と電子・自動化工業を速やかに発展させる方向と方途を示した。

主席は近代的な工作機械生産基地と電子・自動化工業基地を強固に築き、数値制御工作機械とロボットを量産し、集積回路とコンピューターなどの各種の電子要素とオートメ化用計器・機具の生産を画期的に増やすようはからった。

主席は社会主義農村テーゼの早期実現を、社会主義の完全な勝利の鍵とみなし、1986 年 12 月の最高人民会議第 8 期第 1 回会議と翌年の中央人民委員会、最高人民会議第 8 期第 2 回会議などの会議で、農村で思想革命、文化革命、技術革命を促進する課題を示した。

主席は農村での思想革命、文化革命の遂行に大きな力を入れ、農民のあいだで思想教育、組織生活、成人教育、それに科学技術知識の普及活動を強化し、3 大革命赤旗獲得運動をはじめ大衆運動を積極的にくりひろげ、農業勤労者の革命化、労働者階級化、インテリ化を促すようはからった。

主席は 1987 年 10 月、経済部門責任幹部との談話『社会主義農村テーゼに示された技術革命の課題をりっぱに実現するために』で、農業の水利化、電化をより高い水準で円滑に実現し、総合的機械化と化学化を完成する課題と方途を具体的に示し、その実現をめざすたたかいに力強く取り組むよう導いた。

主席は農村技術革命を 2 段階に分け、第 1 段階では平野の多い

道に力を集中して先に終え、第 2 段階では山間地帯の道に力を注いで完成する措置を講じた。

そして、水利化を積極的に進める一方、中小規模の発電所を大々的に建設し、農業生産における電力の利用範囲を広げ、電化の成果をかためていくようにした。

主席は、社会主義建設の進捗にともなって高まる人民の要求にこたえ、食・衣・住問題を円滑に解決してかれらの全般的生活水準をいちだんと高めることを目標とし、農業第一主義、軽工業第一主義、水産第一主義の方針をうちだし、食の問題と一般消費物資の生産に画期的な転換がもたらされるようにした。

主席は人民の生活問題の解決で基本となるのは食の問題であるとし、衣・食・住という用語を食・衣・住と改め、「米すなわち共産主義である」というスローガンのもと、穀物の生産に全国すべての力を集中させるようにした。

主席は、人民に白米のご飯と肉汁を供しようと、畜産業と水産業の発展に大きな意義を付与し、この部門を自ら担当し指導した。

主席は、党の軽工業革命の方針を貫き、一般消費物資にたいする人民の需要を円滑にみたすため、1989 年 6 月の党中央委員会第 6 期第 16 回総会での結語『幹部の革命性、党性、労働者階級性、人民性を高めて党の軽工業革命方針を貫こう』をはじめ一連の著作で、軽工業をいちだんと発展させる具体的な方途を示し、そのたたかいを力強くおし進めた。

主席は軽工業の原料を提供する化学工業の発展に力を入れ、1987 年 3 月の化学工業部門責任幹部協議会など一連の会議で、化学繊維生産基地をしっかり築き、樹脂と紙類、塩の生産を増やして

中小化学工業を発展させる対策を講じた。また住宅問題を円滑に解決して人民により文化的な生活条件を提供するため、祥原（サンウォン）セメント連合企業所とシリカリチートれんが工場をはじめ大規模な近代的建材生産基地を造成し、都市と農村に近代的な住宅と文化・厚生施設を大々的に建設するようはからった。

金日成主席と金正日将軍の遠大な首都建設構想と精力的な指導により、平壌市には近代的な蒼光（チャングァン）通り、文繍（ムンス）通り、安商宅（アンサンテク）通り、光復通り、青春（チョンチュン）通りが建設され、万景台（マンギョンデ）学生少年宮殿、メーデースタジアム、アイススケート・リンク、ヘルス・センター蒼光院などの文化・スポーツ施設が数多く立てられた。

創造と建設をつねに人民と結びつけて指導し、軍隊も人民軍、政権も人民政権、病院も人民病院、記念碑的建造物にも人民の名を冠するようはからった主席は、平壌市の中心に現代的な図書館を立て、その名も人民大学習堂と命名した。

主席は人民の福祉増進のため、1985 年 10 月、『共産主義的施策をさらに発展させるために』と題する著作で、朝鮮で実施されている各種の人民的かつ共産主義的な施策は社会主義国だからといって、また金持ちの国だからといって実施できるものではなく、もっぱら人民大衆を重んじ、かれらの運命を全面的に責任をもって見守る朝鮮労働党と国家のみが実施できるのだとし、もっともすぐれた共産主義的施策をさらに発展させ、人民により豊かで文化的な生活を享受させなければならないと強調した。

人民に変わることなく施す主席の温情と配慮により、朝鮮では帝国主義の反共和国孤立圧殺策動による苦しい国情のなかでも、食糧供給制、全般的無料教育制、全般的無料治療制、幼児保育・教育

制、国家の負担による住宅建設と社会保険制、社会保障制など各種の共産主義的施策が着実に実施されるようになった。

主席は科学・教育・保健医療事業に新たな転換をもたらす措置を講じた。

科学技術の発展をはかって、主席は 1982 年 2 月の科学技術部門従事者協議会での演説『科学技術研究活動をわが国の実情に即して進めるために』と、1983 年 3 月に科学院の科学者におこなった演説『科学研究活動に新たな転換をもたらすために』などの演説で、主体的な立場に立って人民経済の主体化、現代化、科学化を推進し、社会主義経済建設の新展望目標を達成し、人民生活を向上させるうえで緊切な科学技術上の問題を解決すべきであるとする、科学技術研究の基本的な方向と方途を明らかにし、現地指導を通して科学技術研究上のネックを一つひとつ解決していった。

主席は 1988 年 3 月の党中央委員会第 6 期第 13 回総会で、現代科学の世界的発展すう勢と現実的要求に即して、電子工学、生物学、熱工学など各分野の科学技術を速やかに発展させなければならないと強調した。そして科学技術の発展に革命的転換をもたらすために、科学技術発展 3 か年計画(1988～1990)を設定し、電子工学、生物学、熱工学の発展に力を集中するよう指導した。

教育事業に新たな転換をもたらすため、主席は 11 年制義務教育の質を高めることに第一義的な関心を払い、人民学校、高等中学校の児童・生徒の年齢と知能水準に応じて教育の内容と方法を改善し、党の人民的教育施策が生んだモデル学校、平壌第 1 高等中学校のような学校をもっと多く設けるようにした。また高等教育事業の強化にひきつづき大きな力を入れ、20 代、30 代の博士、学士(マスタ

ー)をはじめ有能な科学者、技術者、専門家をより多く養成するために教育事業を改善し、大学の養成規模を拡大し、各種の単科大学と高等専門学校を新設するようはからった。また、働きながら学ぶ高等教育体系をいっそう発展させるため、工場大学、農場大学、漁場大学などを多く設け、それらをりっぱに運営し、テレビ放送大学を新設する措置を講じた。

主席は全社会インテリ化の重要な拠点である人民大学習堂と全国の図書館を効果的に運営して社会教育を強化し、「全党、全民、全軍が学習しよう!」というスローガンのもとに、全社会に革命的学習気風を確立するようにした。

こうして社会主義教育制度はいちだんと発展し、その優越性と生命力が高度に発揮され、やがて実施される高等義務教育の準備が大きく進捗した。

主席は人民保健医療事業を発展させるために党の予防医学方針を貫き、人民病院と診療所を充実させ、高麗医学を極力発展させ、医療活動を改善して人民の無病長寿をはかるようにした。

主席は社会主義建設を力強くおし進める一方、チュチェの革命偉業を武力で保障するために、人民軍をチュチェの党の軍隊、無敵の革命武力として強化、発展させることに腐心した。

主席は 1982 年 4 月に発表した古典的著作『チュチェの革命偉業を武力をもってしっかり保障しよう』をはじめ一連の著作で、全軍のチュチェ思想化が前面にうちだされた新たな高い段階の要請に即して、朝鮮労働党の偉業、チュチェの革命偉業の頼もしい防衛者である人民軍をいちだんと強化する綱領的な課題と方途を示した。

すべての軍人を真のチュチェ型の共産主義的革命家に育てあげ、

軍の事業と軍事活動のすべての分野にチュチェ思想をりっぱに具現して全軍をチュチェ思想化することを人民軍の総体的課題とし、「全軍をチュチェ思想化しよう!」というスローガンのもとに人民軍を政治的、思想的に、軍事技術的にいっそう強化しなければならないと強調した。

主席は全軍に党の唯一思想体系と金正日将軍の軍指導体系を確立する活動を強力に推進した。

1982 年 6 月の党中央軍事委員会で、金正日将軍が人民軍を党的に指導しているが、軍事的にも直接指導するようにすべきだとし、人民軍の全般的活動を金正日将軍に集中させるようにと述べた。そして、1985 年 9 月の朝鮮人民軍指揮官および政治幹部大会や 1988 年 2 月の人民軍責任幹部への指示をはじめさまざまな機会に、全軍が金正日将軍の命令、指示に絶対服従し、一糸乱れず行動する革命的な軍指導体系を確立するよう強調した。

主席は全軍幹部化、全軍現代化の方針を貫くことに大きな力を注いだ。

人民軍軍人の戦闘・政治訓練を強化し、すべての軍人を現代兵器と戦闘技術機材に精通し、朝鮮の実状に即した主体的な戦法を体得し、豊富な戦闘経験をつんだ精悍な強兵に鍛えあげるよう導いた。これとともに、現代戦の要求に即して軍事科学と軍事技術を速やかに発展させ、人民軍の技術装備をたえず改善するよう指導した。

全軍に金正日将軍の軍指導体系が確立し、軍の戦闘力が強化された結果、人民軍はアメリカ帝国主義とその手先の侵略と戦争策動を粉砕し、社会主義偉業、チュチェの革命偉業を武力でしっかり支えることができるようになった。

主席はチュチェの革命の旗、革命の赤旗をいっそう高くかかげ、社会主義の道を確信をもって進むよう人民を導いた。

1980 年代の中期以降、社会主義諸国にたいする帝国主義者の強硬な圧殺策動と執拗な「平和的移行戦略」、そして社会主義の背信者たちの策動によって、一部の社会主義国ではマルクス・レーニン主義が現代社会民主主義に修正され、「改革」「改編」が路線化、政策化され、社会主義を放棄する道へと進むようになった。

主席は千里の先を見透す英知をもって、錯雑した環境のなかでも社会主義の旗をいっそう高くかかげて進む確固とした決心と意志を改めて表明した。

1986 年 12 月の最高人民会議第 8 期第 1 回会議を前にして、主席は社会主義の完全な勝利のための綱領をうちだすことになった趣旨について語り、一部の社会主義国が社会主義の原則に根本的に背く修正主義、改良主義の道を進んでいる実情を指摘し、われわれは革命の赤旗をかかげたとき、卑怯者去らば去れ、われらは赤旗守ると誓ったように、革命の旗をひきつづき高くかかげ、社会主義の完全な勝利をめざして力強くたたかうべきであると強調した。

他の国々が革命の赤旗を捨て去る道を選んでいるとき、「卑怯者去らば去れ、われらは赤旗守る」という思想を強調したことは、革命的信念と必勝の象徴であり、闘争と前進の旗であるチュチェの赤旗を高だかとひるがえし、あくまでも社会主義の偉業を完成しようとする朝鮮労働党と人民の不変の信念と意志を内外に厳粛に宣言するものであった。

主席の赤旗精神に励まされた朝鮮人民は、革命の赤旗をいっそう高くかかげ、社会主義の完全な勝利に向けて勇壮な進軍をつづけた。

この意気高らかな進軍のなかで、主席は修正主義、改良主義と断固としてたたかい、朝鮮式に生きる闘争気風をうち立てていくよう幹部と人民を導いた。

1987 年 3 月、ある分野の責任幹部協議会で、修正主義、改良主義を排撃し、朝鮮の方式で生きていくためにはチュチェ思想で武装し、事大主義に反対してたたかい、自力更生、刻苦奮闘の革命精神をもって働かなければならないと強調して、つぎのように述べた。

「幹部は決して他の国が実施している修正主義、改良主義の政策に目を向けず、ひたすらわが党の路線と政策を信念とし、それを最後まで貫徹していかなければなりません」

1988 年 3 月と 9 月に発表した古典的著作『チュチェの革命の旗を固守し、社会主義建設を力強くおし進めるために』『チュチェの革命の旗を高くかかげ、社会主義・共産主義偉業を最後までなしとげよう』で、朝鮮労働党の社会主義・共産主義建設路線とその正しさを論証し、以後情勢がいかに変化しても、党の路線と政策をゆるぎなく擁護、貫徹し、自らが選んだ社会主義の道をひきつづき力強く前進するよう再び強調した。

主席は 1989 年 5 月の中央人民委員会第 8 期第 26 回会議での演説と、6 月の党中央委員会第 6 期第 16 回総会での結語で、われわれには改革すべきことも改編すべきこともないとし、すべての幹部が党の路線と政策の正しさを確信し、全社会のチュチェ思想化の旗をひきつづき高くかかげて進み、党の指導を強化する革命的原則を堅持し、チョンサンリ(青山里)方法とテアンの事業体系をりっぱに具現するよう指摘した。そして、他の国で実施している改革・改編政策に好奇の目を向けたり汚染されてはならないとし、外部から党

のチュチェ思想に反するいかなる異質の思想や風潮も浸透させないように、蚊帳をしっかり張るよう強調した。

80 年代後半期、朝鮮労働党と人民は「われわれの方式で生きよう!」というスローガンのもとに、いかなる狂風にも動揺することなく、チュチェの革命の旗、革命の赤旗をしっかりと守った。こうして朝鮮の社会主義はさらに強固になり、朝鮮人民の心の奥深くに根を張っていった。

主席は全社会をチュチェ思想化する朝鮮革命の総体的任務に即して、総聯のチュチェ思想化をさらに深め、発展させるよう導いた。

主席は総聯第 12 回、第 13 回、第 14 回、第 15 回全体会議に送った祝賀文と、1985 年 5 月の総聯中央常任委員会議長あての祝電『在日本朝鮮人総聯合会結成 30 周年に際して』など一連の著作で、チュチェ思想化の方針をひきつづき基本としてとらえ、組織内にチュチェの思想体系を確立し、総聯組織を朝鮮労働党の指導に忠実な愛国的組織として強化し、発展させる課題と方途を明示した。

総聯のチュチェ思想化を深めるため、在日本朝鮮人運動の中核的力量であり、同胞大衆の教育者、職業的な愛国闘士である総聯の幹部陣容をりっぱに整え、かれらとの活動に第一義的な力を注ぐようにした。また、総聯の世代交替が進んでいる現状に即して、在日青少年、若い世代が祖国の貴さをはっきりと知り、祖国と党に代々忠誠を尽くし、在日朝鮮人運動をしっかりと受け継いでいくよう導いた。そして、総聯の基本大衆である商工人との活動に力を入れ、かれらが愛国事業の主人としての役割を果たし、総聯の大衆的地盤をかためるよう導いた。

主席は総聯の民主主義的教育事業にひきつづき深い関心を払い、

1986年4月の朝鮮大学校創立30周年に際しての祝賀文をはじめ一連の著作で、民族教育を全同胞の事業にならしめる課題を示した。

主席の正しい指導と深い配慮のもとで、総聯のチュチェ思想化は力強くおし進められ、愛国事業が深められて、在日朝鮮人運動はより高い段階へと発展した。

主席は高麗民主連邦共和国を創立する方法で祖国を統一するために心血を注ぎ、労苦を尽くした。

高麗民主連邦共和国創立方案の実現をはかって、全民族の大団結をなし遂げることに大きな力を注ぎ、民族統一促進大会の招集をはじめさまざまな対策と提案を相ついでうちだし、北と南、海外の全同胞が思想と理念、党派と政見の違いをのりこえて、祖国統一の旗のもとに一つの民族大統一戦線に結集するよう導いた。

主席は崇高な愛国愛族の理念から発して、1984年9月に南朝鮮の水害被災民に5万石の米と10万トンのセメント、50万メートルの織物と多量の医薬品を救済物資として贈る同胞愛的措置を講じた。

主席は1989年、南朝鮮の「全国民族民主運動連合」(「全民連」)顧問の文益煥(ムンイクファン)牧師と「全国大学生代表者協議会」(「全大協」)代表の林秀卿(リムスギョン)を温かく引見して、かれらの愛国的壮挙を高く評価し、統一使節として民族の前におし立てた。

南朝鮮の水害被災民にたいする救済物資の伝達と統一使節の平壌訪問を機に、北と南、海外の同胞は主席を統一の救世主としていっそう深く敬慕し、民族の和解と団結、統一への熱望はいちだんと高まった。

主席が示した祖国統一方案を熱烈に支持して、南朝鮮人民は自主、民主、統一をめざすたたかいをさらに強力に展開し、統一革命

党は 1985 年 7 月に党の名称を「韓国民族民主戦線」(「韓民戦」)と改め、南朝鮮人民の反米自主化、反ファッショ民主化闘争における指導的役割をいちだんと強めた。

1980 年代に入り、高麗民主連邦共和国創立方案の実現をめざすたたかいは、朝鮮の北と南、海外同胞、ひいては国際的な規模で力強く展開され、祖国統一の早期実現に有利な局面が開かれた。

主席は反帝自主の旗を高くかかげ、全世界の自主化の実現をめざして精力的に活動した。

国際舞台で革命勢力と反革命勢力、反帝自主勢力と支配勢力間のたたかいがいちだんと先鋭化していた 1982 年 4 月、主席は党中央委員会・最高人民会議合同会議での施政演説をはじめ諸著作で、全世界の自主化を実現する方針を示した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「世界の進歩的人民は、自主性の時代的潮流をいっそう力強くおし進めることによって、全世界の自主化を実現しなければなりません」

自主化された世界は、いっさいの支配主義と植民地主義が一掃された世界であり、すべての国、すべての民族の自主権が完全に実現した世界である。

主席は全世界の自主化を実現する主体は自主性を擁護する世界の人民であり、主たる闘争対象はアメリカを頭目とする帝国主義勢力だとし、全世界の自主化を実現するためには、すべての国、すべての民族が自主性を堅持し、帝国主義者の支配と従属に反対し、自主性にもとづく平等な国際秩序を樹立し、侵略と戦争政策に反対して世界の平和と安全を守り、帝国主義者の分裂離間策動を粉砕して

反帝自主勢力の団結を強化しなければならないと強調した。

主席は全世界の自主化を実現するうえで社会主義勢力の団結を強化することに第一義的な関心を払った。

1982 年 9 月と 1984 年 11 月、1987 年 5 月に中華人民共和国を、1984 年 5 月～7 月に旧ソ連をはじめ東欧社会主義諸国を、1988 年 6 月～7 月に旧モンゴル人民共和国を訪れ、社会主義国間の団結と友好・協力関係を発展させ、社会主義の原則を固守するために精力的な活動を展開した。

またプロレタリア国際主義の原則を堅持し、社会主義を堅持しているキューバ人民のたたかいを積極的に支持声援した。そして 1989 年 6 月、帝国主義者と反動勢力が反中国キャンペーンをくりひろげていたとき、特使を派遣して中国共産党と老革命家を激励した。

主席は反帝自主化運動である非同盟運動の拡大発展に大きな力を注いだ。

1981 年 12 月のユーゴスラビア・タンユグ通信社代表団の質問にたいする回答と、1986 年の党中央委員会政治局・中央人民委員会合同会議での結語『非同盟運動の強化発展のために』など一連の著作で、帝国主義者の分裂・瓦解・争奪策動を粉砕し、非同盟運動を発展させるために、非同盟諸国が自主性の原則と反帝自主の理念を忠実に守り、意見の相違や紛争問題をあくまでも団結の原則に立って協商の方法で解決すること、南南協力を実現し公正な新国際秩序を確立することなど非同盟運動で堅持すべき原則的問題を明らかにし、非同盟運動を拡大発展させるために全力を尽くした。

主席は非同盟諸国、発展途上諸国間の政治、経済、文化の各分野にわたる南南協力を発展させるため、1981 年 8 月に食糧および

農業増産に関する非同盟およびその他発展途上諸国の討論会を、1983 年 9 月には第 1 回非同盟諸国およびその他発展途上諸国の教育・文化相会議を、1987 年 6 月には南南協力に関する非同盟諸国閣僚級特別会議など諸国際会議を朝鮮で開催するようはからった。そしてそれらの会議での演説、『非同盟諸国と発展途上諸国は自力更生して農業問題を解決しよう』『新興諸国の民族文化を発展させるために』『南南協力を拡大発展させよう』で、非同盟諸国と新興諸国人民の新社会建設のたたかいで指針となる原則的問題を明らかにした。また、アフリカ諸国に農業科学研究所や試験農場を設け、工業と民族文化、建設分野で私心のない援助と協力をおこなった。

主席はアメリカを頭目とする帝国主義者の侵略と戦争政策に反対し、世界の平和と安全を守るたたかいを力強くくりひろげるよう導いた。

1983 年 7 月と 1986 年 9 月に発表した『帝国主義の侵略と戦争策動を粉砕し、平和と独立を守ろう』『戦争を防止し、平和を守ることは人類に課された焦眉の課題』など一連の著作で、世界の人民はアメリカを頭目とする帝国主義者の核軍拡競争と核戦争策動を阻止、破綻させ、外国にある侵略的軍事基地と侵略軍を撤退させ、すべての軍事ブロックを解体させ、世界各地に非核地帯、平和地帯を創設し、それを拡大し、帝国主義との原則的なたたかいをくりひろげるべきだと強調した。

また 1989 年 7 月に反帝連帯、平和と親善の理念のもとにおこなわれる第 13 回世界青年学生祭典を朝鮮で催すようはからい、開幕式での演説で、われわれの時代の青年の使命と自主時代の前進を力強く促すための世界青年学生の闘争課題を示した。

世界 5 大陸の 180 余か国から来た青年学生代表と 60 余の国際および地域機構代表、国家元首と多くの名誉ゲストの参加のもと、アジアで初めて開催された世界青年学生祭典は、朝鮮革命への国際的連帯と反帝自主勢力の団結をいっそう強化し、全世界の自主化を強力に推進するうえで重要な契機となった。

12

1990 年 1 月～1994 年 7 月

1980 年代末～1990 年代初、人民大衆の自主偉業、社会主義偉業は重大な挑戦に直面した。帝国主義者の反社会主義策動と社会主義の背信者たちによって、ソ連と東欧諸国の社会主義が相ついで崩壊し、資本主義が復活するという異常事態が発生した。これを奇貨として帝国主義者と反動勢力は「社会主義の終末」をうんぬんし、社会主義のとりでである朝鮮民主主義人民共和国の孤立、圧殺をはかって狂奔した。

金日成主席は、帝国主義者と反動勢力の狂気の反社会主義・反共和国策動を粉砕して社会主義の偉業を守り、より輝かせるために腐心し、精力的な活動をくりひろげた。

主席は 90 年代の初年にあたる 1990 年 1 月 1 日の新年の辞で、帝国主義者は愚かにも歴史の流れを逆転させようと執拗に策動しているが、人類が社会主義の道にそって進むのは不変の真理であり、歴史の発展法則であるとおごそかに宣言した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「社会主義への道は前人未踏の道であるため、前進途上で不測の出来事にぶつかることもあり、紆余曲折をへることもあります。社

会主義を建設する方法も、変化する現実に即応してたえず改善され、完成されなければなりません。しかし、人類が社会主義の道に進まなければならないという歴史の真理は変わるものではありません」

主席は、歴史の主体である人民大衆はいかなることがあろうとも帝国主義に反対し、社会主義に進まなければならないという根本原則から逸脱してはならないとし、帝国主義者の策動に対処して反帝・自主の原則、社会主義の原則をかたく守り、不屈の闘志と信念をもって社会主義偉業の勝利をめざし最後までたたかわなければならないと強調した。

社会主義の原則を堅持し、社会主義建設の歴史的偉業をりっぱに遂行する鍵は、社会主義制度の優越性を高度に発揮させることにあった。

主席は 1990 年 5 月の最高人民会議第 9 期第 1 回会議での施政演説『わが国の社会主義の優越性をさらに強く発揮させよう』で、チュチェ思想を具現している人民大衆中心の朝鮮式社会主義の本質的特性と優越性を明らかにし、それを全面的に発揮させる課題と方途を示した。

主席は社会主義・共産主義偉業を完成するためには人民政権を強化し、その機能と役割をたえず高め、思想、技術、文化の 3 大革命を力強くおし進めるという朝鮮労働党の総路線をひきつづき堅持し、社会主義建設を強力に推進し、社会主義・共産主義建設の基本的な戦略的目標である思想的要塞と物質的要塞を占領しなければならないと指摘した。

主席は思想的要塞の占領に第一義的な力を注ぎ、社会の全構成員の革命化、労働者階級化、インテリ化を積極的におし進め、かれ

らを労働者階級化されたインテリ、インテリ化された労働者階級にする人間改造の基本的方向とその具体的な実現方途を明示した。そして朝鮮式社会主義の威力と不抜さの源泉、社会主義偉業を最後までなし遂げるための確固とした裏付けは革命の主体を強化することにあるとし、ここでの基本は党を強化し、党と大衆との血縁的なつながりを強めることであると強調した。

そして物質的要塞を占領するためには社会主義経済建設を強力におし進めなければならないとし、朝鮮労働党の基本戦略である人民経済の主体化、現代化、科学化の路線を堅持し、貫徹しなければならないと指摘した。

国家活動では社会主義的民主主義をりっぱに具現しなければならないとし、社会主義的民主主義を円滑に実現し、社会主義制度の優越性を高度に発揮させるためには、党の指導を確固と保持し、官僚主義、主観主義を一掃し、革命的大衆路線を貫かなければならないと強調した。

そして社会主義はもっぱら社会主義の原則と社会主義的方法によってのみ建設しうるとし、社会主義建設で提起される問題はすべて社会主義的原理にもとづき、社会主義の優越性を発揮させる原則で、そして人民大衆の底知れない創造力を引き出す方法で解決すべきであると指摘した。

この施政演説は社会主義・共産主義建設に関する労働者階級の革命理論をいちだんと発展させ、完成させた不朽の古典的文献であり、人民大衆の自主偉業、社会主義偉業を擁護し、完成するたたかいにおいて指導指針、戦闘的旗じるしとなった。

主席は、社会主義を固守し、チュチェの革命偉業をりっぱに継

承し、完成させるために、全党、全軍、全人民を金正日将軍のまわりにかたく団結させ、その指導に忠実にしたがうよう導いた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「人民大衆中心のわが国の社会主義を固守し、チュチェの革命偉業をりっぱに完成するためには、全党と全人民が金正日同志のまわりにかたく団結し、その指導に忠実にしたがわなければなりません」

金正日将軍は久しい前から党と国家、軍の活動全般を正しく指導し、不滅の業績を積んできた。

その偉大さを体験を通して実感していた朝鮮人民と人民軍将兵は、金正日将軍を党と革命の首位にいただき、その思想と指導に忠実にしたがって主席が開いたチュチェの革命偉業をあくまで完成しようという燃えるような決意にみちていた。

主席は党と人民の一致した意思と念願を洞察し、金正日将軍に国家と革命武力の重責を一つひとつ委ね、朝鮮革命の首位につかせる措置を講じた。

こうして、金正日将軍は全党、全軍、全人民の組織的な意思と一致した念願によって、1991 年 12 月 24 日の党中央委員会第 6 期第 19 回総会で朝鮮人民軍最高司令官に推戴され、1992 年 4 月 20 日には朝鮮民主主義人民共和国元帥の称号を授与された。そして 1993 年 4 月 9 日には、朝鮮民主主義人民共和国国防委員会委員長に推戴された。

金正日将軍を朝鮮革命の首位にいただいてその指導体系をより徹底的にうち立て、チュチェの革命偉業、社会主義偉業遂行のゆるぎない土台を確立したことは、チュチェ革命偉業の遂行における主席のもっとも卓抜な業績である。

主席は全党と全人民が金正日将軍の偉大さを強く体得し、絶対的な崇拝心を抱くよう導いた。

主席は朝鮮人民の切なる念願と意思を反映して、1992 年 2 月初、金正日将軍の誕生日にあたる 2 月 16 日を民族最大の祝日とすることを決定した中央人民委員会の政令を裁可し、毎年 2 月 16 日をもっとも意義深く迎えることを伝統化するようにした。

主席は 1992 年 3 月と 1993 年 1 月および 3 月に、抗日革命闘士、革命家遺児との談話『社会主義偉業の継承、完成のために』で、文武忠孝を兼ね備えた金正日将軍の偉大さと、時代と革命の前に積みあげた不滅の業績を全面的に説き明かし、人民の胸に将軍への崇拝心をいっそう強く植えつけた。

主席は全人民が金正日将軍の指導に忠実にしたがうよう、階層別の大会を開催する措置を講じた。1992 年 10 月に全国烈士遺族大会を、1993 年 7 月には全国老兵大会の開催措置を講じて、参戦老兵と革命烈士の遺族が金正日将軍の指導に忠実にしたがううえで中核的役割を果たすようにした。また、1992 年 12 月には朝鮮知識人大会を開催して、すべての知識人が朝鮮労働党の永遠なる同行者、忠実な援助者、りっぱな助言者、党政策の熱烈な擁護者、徹底した貫徹者となり、知識と技術をもって金正日将軍の指導に忠実にしたがい、朝鮮式社会主義を断固として擁護し、いっそう輝かせるために先頭に立つよう導いた。

また、1993 年 2 月の社会主義労働青年同盟第 8 回大会に送った書簡『青年は党の指導に忠実にしたがい、チュチェの革命偉業をりっぱに完成させよう』で、新しい世代の青年が金正日将軍の指導に代々忠実にしたがっていくよう激励した。

金日成主席は党中央委員会総書記であり、国家主席であったが、党中央委員会組織担当書記が党活動を総轄している以上、組織担当書記から任務の分担を受け、組織担当書記にその実行状況を報告するのは党員の義務であるとし、何事であれ金正日将軍に報告していっさいの活動をおこなう模範を示した。

主席は総聯が金正日将軍の指導に忠実にしたがってすべての愛国活動を推進していくよう導いた。

1992 年 2 月、金正日将軍誕生 50 周年慶祝在日本朝鮮人祝賀団との談話『総聯の活動について』をはじめとする総聯の諸代表団との談話、各大会に送った祝賀文、祝電などで、総聯はいかなる狂風が吹きつけようと金正日将軍の指導に忠実でなければならないと指摘した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「総聯の活動家と在日同胞は、わたしに忠誠を尽くす心で金正日同志に忠実にしたがい、かれの意図どおりにすべての愛国事業を進めなければなりません」

主席はすべての総聯の活動家と在日同胞が金正日将軍の指導に忠実にしたがい、日本の反動層の破壊・謀略策動を粉砕して総聯組織を死守し、社会主義祖国への確たる信念を抱いて社会主義建設と祖国統一のたたかいに奮い立ち、総聯の愛国精神を代々受け継いでいくよう懇切に導いた。

主席は金正日将軍を中心とする党と革命隊伍の一心団結をいちだんと強め、社会主義の主体をゆるぎなくかためていくよう導いた。

金日成主席はつぎのように述べている。

「金正日同志の指導に忠実にしたがうためには、党と革命隊伍

の一心団結をひきつづき強化しなければなりません」

主席は、一心団結は朝鮮労働党の革命哲学、革命における天下の大本であり、唯一の中心、指導者を中心とする一心団結であるとし、金正日将軍を中心にして一心団結するとき、その威力は原爆よりも強力であり、帝国主義者のいかなる反社会主義攻勢も断固として粉砕し、社会主義を固守し輝かせることができると指摘した。

主席は革命の主体を強化するうえで基本となる党を強化し、その指導的役割をいちだんと高めるようにした。

金日成主席はつぎのように述べている。

「革命的党をぬきにしては、革命の強力な主体について考えることができず、党の指導をぬきにしては社会主義の優越性とその勝利について考えることができません」

党を弱体化し党の指導的役割を骨抜きにすれば、人民大衆は組織的、思想的に瓦解し、闘争の目標と方向を失って混乱に陥り、結局は革命と建設を台無しにしてしまうということは、国際共産主義運動史の深刻な教訓である。

1990 年 10 月、主席は党創立 45 周年慶祝宴会での演説で、朝鮮労働党を組織的、思想的にかたく統一団結し、不敗の戦闘力を備えた革命的な党に強化、発展させるための原則的諸問題を示し、すべての党組織と党員が党中央委員会の指導に忠実にしたがわなければならないと強調した。

主席は党の末端基層組織であり党生活の拠点である細胞の強化に重要な意義を付与し、1992 年 9 月の咸鏡（ハムギョン）北道党委員会拡大総会で、発展する現実の要請に即して党細胞を強化する課題を示し、党活動をさらに改善し、その指導的役割を高めるよう導いた。

主席は党の強化とならんで、党と大衆との血縁的なつながりを強めることに深い関心を向けた。

1992 年 12 月の、党および行政・経済機関の幹部との談話『幹部は真の人民の忠僕になろう』をはじめ一連の著作で、すべての幹部が広範な大衆を党のまわりに結集し、人民の福祉増進をはかって献身奮闘すべきであると指摘した。

そして、党と大衆との血縁的なつながりを強めるためには、すべての幹部が権柄と官僚主義をなくして人民のなかに深く入り、かれらと生死、苦楽をともにし、その声に耳を傾け、かれらが悩んでいる問題を即座に解決するようにし、人民に向けた愛と配慮がよりよく及ぶようはからった。

金日成主席と金正日将軍の指導のもとに、社会主義偉業の主体は、領袖、党、大衆が混然一体となった不敗のものにかためられた。

朝鮮人民は 1992 年 4 月、チュチェの革命偉業、社会主義偉業を継承、完成するたたかいで新たな転換期を迎えていた歴史的環境のなかで、金日成主席の生誕 80 周年を民族の慶事として意義深く迎えた。

金正日将軍の指導のもとに、この意義深い日を迎えて全国各地に主席の革命事績記念碑が建立され、首都平壌（ピョンヤン）市では 5 万世帯の住宅が建設され、第 2 段階の路面電車が開通した。また、平壌―開城（ケソン）間道路をはじめ万年大計の記念碑的建造物、それに新しい工場、企業所が数多く建設された。

主席の生誕 80 周年慶祝行事は世界的な規模で国際的な大政治祝典として進められ、130 余の国から 420 余の代表団、各界人士、芸術家が平壌を訪れて主席の万年長寿を願った。そして国際的な大芸

術祭典である第 10 回 4 月の春親善芸術祭が前例のない規模で盛況裏に催された。

主席はチュチェの革命偉業と建軍偉業、反帝自主偉業の遂行で果たした不滅の業績によって、朝鮮民主主義人民共和国大元帥の称号を受けた。

主席は生誕 80 周年宴会での演説『人民大衆の役割を高めることは自主偉業の勝利の保障』で、自分の 80 年の生涯は人民の愛と信頼につつまれ、人民の息子として人民に尽くしてきた闘争の生涯であったとし、今後も人民の愛と信頼のなかで人民に最後まで尽くすであろうと、熱をこめて語った。

主席は、自分の生涯は祖国と民族に尽くした生涯であり、人民とともにたたかってきた生涯であったとし、人民大衆の自主偉業の遂行で指針となる貴重な革命の真理と、勝利をもって前進してきた朝鮮革命の実践的な経験を次代に伝えることが自らの崇高な責務であるとみなし、自身の輝かしい生涯を総括した回顧録『世紀とともに』の執筆に心血を注いだ。

そこには、不滅の革命業績と貴重な闘争経験、革命偉業への限りない忠実性と人民への熱愛、万人をひとしく包容して革命の道に導いてきた広い度量と包容力、卓絶した指導芸術と指導方法など、主席の思想、指導、徳望が集大成されている。

回顧録は革命家の生活と闘争で指針とすべき真理、そして経験と教訓を示したこのうえなく貴重な革命の教科書であり、それゆえに巨大な感化力をもって人々の心をとらえた。

主席は社会主義の偉業を守り、輝かせるため、社会主義の思想的陣地を強化することに大きな力をふり向けた。

社会主義は思想を掌握すれば勝利し、思想を手放せば滅亡するということは、歴史によって実証された真理である。

主席は古典的著作『わが国の社会主義はチュチェの社会主義である』をはじめ一連の著作で、社会主義の主体と社会主義社会の基本的政治方式、社会主義偉業の最終的勝利の決定的な裏付けである指導の継承問題をはじめ、社会主義に関する思想・理論をいちだんと発展させた。

主席は党員と勤労者を社会主義思想で武装させる教育活動をいっそう強化するようはからった。すべての党員と勤労者のあいだで、チュチェ思想の原理教育を忠実性教育および党政策教育と密接に結びつけておこない、チュチェの革命的世界観を確立し、社会主義社会の本質と優越性、社会主義の勝利の歴史的必然性を深く認識させ、かれらが社会主義への確固とした信念をもって、その勝利に向けて献身奮闘するよう導いた。

主席は革命伝統教育に重要な意義を付与し、1991 年 8 月に両江(リャンガン)道の恵山(ヘサン)、三池淵(サムジヨン)、普天堡(ポチョンボ)、葡坪(ポピョン)などの地区を訪れて、革命戦跡地、革命史跡地をりっぱに整備し、それを通じて革命伝統教育を強化するよう綱領的指針を与えた。また 1993 年 7 月には朝鮮革命博物館を視察して、革命事績の資料を改めて考証し、博物館の参観組織に力を入れ、革命伝統をもって人々を武装させる大衆教育活動を強化するよう強調した。

主席は、党員と勤労者にたいする階級的教育をいちだんと強化し、社会主義社会の基礎である集団主義思想で武装させる教育を共産主義道徳教育と密接に結びつけて進めるようにした。また、1993 年 12 月には全国共産主義美風先駆者大会を開催し、社会全般

に集団主義的生命観にもとづく共産主義的美風をより広く花咲かせる重要な契機とならしめた。

主席は社会主義思想に反するいっさいの非社会主義的傾向を克服し、帝国主義の思想・文化が国内に浸透できないように強固な思想的防御陣をはりめぐらすようにした。

1992 年 9 月の咸鏡北道党委員会拡大総会で、党を組織的、思想的に強化するうえで提起される問題を明らかにし、咸鏡北道は地理的に資本主義が復活した国と接しており、世界的な関心の的となっている羅先地区をひかえているだけに、他の地域より資本主義思想の浸透を余計受けるおそれがあるとして、道内の党員と勤労者をチュチェ思想で武装させて資本主義の病菌に冒されないようにするよう強調した。

主席は、朝鮮式社会主義を武力によって守るため、国防力の中核勢力であり、チュチェの革命偉業遂行の主力である人民軍をいっそう強化するよう導いた。

1991 年 12 月、古典的著作『人民軍中隊政治指導員の任務について』をはじめ一連の著作で、すべての軍人を一当百のつわものに鍛えあげ、全軍を革命化して人民軍を不敗の革命武力に強化する課題と方途を示した。

主席は全軍に金正日最高司令官の指導体系をいっそう強固にうち立てるよう強調した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「わたしは、全人民軍将兵が、金正日最高司令官の命令をわたしの命令と同じくみなし、その命令に絶対服従し、最高司令官の指導に忠実にしたがうよう期待します」

主席はおりあるごとに幹部たちに、白頭山（ペクトウ）型の将軍である金正日将軍は卓絶した思想と並はずれた頭脳、非凡な英知と知略、強い信念と意志、無比の胆力と気骨、燃えるような情熱と人徳など、将軍としてのぬきんでた気質を最高の境地で総合的に身につけた不世出の名将であると述べている。

主席は 1992 年と 1993 年のあいだだけでも、朝鮮人民軍指揮官・政治幹部大会をはじめ 10 余回の大会を開催し、全軍が金正日最高司令官の指導に忠実にしたがうようにする転機とならしめた。

主席は、1990 年 2 月の党中央軍事委員会とその他さまざまな機会に、人民軍内における政治・思想教育の基本的方向を明示し、翌年 12 月の朝鮮人民軍中隊政治指導員大会での演説では、将兵一致、軍民一致、党員と青年同盟員一致の美風を高く発揚するという独創的な軍建設思想を示した。

主席は人民軍の戦闘訓練をいっそう強化し、砲兵と通信を現代化し、全般的装備の機動力と打撃力を高める措置を講じた。

人民軍中隊の強化に深い関心を払っていた主席は、1991 年に朝鮮人民軍中隊長大会、中隊政治指導員大会、下士官長大会を、1992 年には中隊社労青初級団体委員長大会を開催し、中隊の戦闘力を強めるための綱領的指針を与えた。

主席の建軍偉業は金正日将軍の先軍革命指導によってりっぱに継承され、朝鮮人民軍は無敵の革命武力としてよりたくましく成長した。

主席は社会主義の優越性をより高度に発揮させるため、社会主義経済建設を強力に推進した。

社会主義市場の消滅と、帝国主義者と反動勢力による悪辣な経済

封鎖によって経済的難局に直面した困難な状況のもとで、主席は1990年1月初に党中央委員会第6期第17回総会を招集し、第3次7か年計画の経済成長テンポを調整して経済の規模を縮小し、どのような環境のもとでも自力で生きていけるよう国の経済的自立性をさらに強化する方向で、経済構造を完備する一方、対外貿易の方向を転換する革命的な措置を講じた。

主席は総会での結語『増産と節約運動を強力に展開し、社会主義建設で大高揚を起こそう』で、おり重なる障害の前で動揺することなく、自力更生、刻苦奮闘の革命精神を高度に発揮し、社会主義建設でいま一度革命的大高揚を起こそうと呼びかけた。

主席は変化した新たな環境に即して社会主義経済建設で高揚を起こすため、1990年5月の中央人民委員会第9期第1回会議および政務院第9期第1回会議での演説、そして4月の経済学者たちとの談話などで、政務院をはじめ行政・経済機関の機能と役割を高め、社会主義経済の本性に即してチュチェの社会主義経済管理原則と方法を貫き、経済の指導管理を改善する方向と方途を示した。

第3次7か年計画を成功裏に遂行するため、主席は全国生産革新者大会、全国農業大会、全国電力工業部門活動者会議などの部門別大会、活動者会議、協議会を相ついで指導した。

他方、困難かつ複雑な課題が持ちあがるたびに、いつも人民のなかに入って協議し、かれらの力に頼って問題を解決してきた主席は、80の高齢にもかかわらず、人民大衆の力を引き出して当面の経済的難局を打開すべく労働者、農民を訪ねて現地指導の道をたゆみなく歩みつづけた。

主席は、1991年に咸鏡南道を3度も訪れ、咸興（ハムフン）市6月1日電気

器具総合工場、興南（フンナム）肥料連合企業所、竜城（リョンソン）機械連合総局などを現地指導した。また同年 8 月末と 9 月初には咸鏡北道の茂山（ムサン）鉱山連合企業所、農業科学院鏡城（キョンソン）分院試験場、会寧（ヘリョン）食料連合会社、穏城（オンソン）郡王在山（ワンジェサン）協同農場、鏡城郡一郷（イルヒャン）協同農場など道内の工場、企業所、協同農場を現地指導した。

主席の正しい指導のもとに、すべての党員と勤労者はおり重なる難関や試練のなかでも、「党が決心すればわれわれは実行する!」というスローガンをかかげて、90 年代の速度創造運動を力強くくりひろげ、第 3 次 7 か年計画をりっぱに遂行した。

主席は 1993 年 12 月の党中央委員会第 6 期第 21 回総会で第 3 次 7 か年計画の遂行状況を総括し、結語『当面の社会主義経済建設の方向について』で、農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義へと進み、人民経済の先行部門である石炭工業、電力工業、鉄道運輸を確固と先行させ、金属工業をひきつづき発展させるという新たな経済戦略をうちだした。

主席は党の新経済戦略を貫くために、「自力更生、刻苦奮闘の革命精神をもって社会主義総進軍を力強く促そう!」という革命的スローガンを示し、最高人民会議第 9 期第 7 回会議で、社会主義経済建設の調整期(1994 年～1996 年)の課題を成功裏に遂行するための決定を採択するようにはからった。

主席は社会主義農村問題の最終的解決をめざす事業を積極的に推進した。

1990 年 6 月におこなった演説『社会主義農村問題に関するテーゼを確実に実行しよう』で、確信をもって社会主義農村テーゼの示す道にそって力強く前進するよう呼びかけた。

主席は、農村における思想革命、文化革命、技術革命を強力に推進する一方、農村の水利化を高い水準で完成するため、大同江（テドン）と礼成江（レソン）、鴨緑江（アムノク）と大寧江（テリョン）を一つの大灌漑網で連結する 800 キロの水路をはりめぐらせる膨大な工事を 1990 年までに完工させた。こうして、西部地域の穀倉地帯には灌漑水がみちあふれる一大変革がもたらされた。

主席は 1993 年 8 月に白川（ペチョン）、延安（ヨンアン）、青丹（チョンダン）各郡の協同農場を現地指導し、農民を穀物増産へと奮い立たせる一方、農村の機械化をはかって多くのトラクターとトラックを送りこんだ。

社会主義農村テーゼ発表後 30 年間の成果と社会主義農村建設が新たな発展段階に入った現実的要請を見きわめた主席は、1994 年 2 月の全国農業大会に送った書簡『社会主義農村テーゼの旗のもと農村問題の最終的解決のために』で、社会主義農村問題を最終的に解決する方向と方途を示した。

協同的所有を全人民的所有に移す事業を郡を単位にしておし進めるという主席の方針を実現するたたかいが力強く展開されていくなかで、1994 年に平安（ピョンアン）南道粛川（スクチョン）郡と平壌市万景台（マンギョンデ）区域の協同農場を全人民的所有に移す事業が成功裏に遂行された。

主席は社会主義文化建設のすべての部門を速やかに発展させるよう指導した。

主席は『社会主義教育に関するテーゼ』発表 15 周年を迎えて、教育部門で発展する現実の要請に即して教育の内容と方法を改善し、その質的水準を高め、次代の教育と民族幹部の養成に大きな前進をもたらすよう導いた。

社会主義教育テーゼを実行する過程を通して、共和国は 170 余

万のインテリ大集団を擁するにいたり、国の教育は全社会のインテリ化をめざす高い水準に到達した。

科学技術を最短期間に一段と高い水準に引き上げるため、主席は1993 年に科学研究機関にたいする国家の統一的指導機能を果たす国家科学院を新設し、科学研究活動を人民経済の主体化、現代化、科学化の実現へと積極的に指向させ、科学技術を世界的水準に引き上げるための科学技術上の問題をりっぱに解決していけるようにした。

主席は社会主義文学・芸術とスポーツの発展にも深い関心を向けた。

1993 年 2 月、主席は文学・芸術部門で長年活動し功労を立てた人士たちを招き、党の文芸方針をよりりっぱに貫くため積極的に努めるようねんごろに励ました。そして、スポーツの発展をはかって体育を強化し、国防スポーツと大衆スポーツに力を入れる一方、国際試合で優勝し共和国旗をひるがえした選手を高く評価し、おし立てるようはからった。主席は苦しい国情のもとでも無料治療制をひきつづき実施し、党の予防医療方針をより徹底的に貫くよう導いた。

そして、民族文化遺産を継承し、さらに発展させて民族の悠久性を輝かせ、主体的立場から民族史を定立し体系化するよう細心の指導をおこなった。

1992 年 5 月初、開城市の成均(ソンギュン)館を視察した主席は、1，000 余年の歴史を誇る高等教育の伝統を生かして、現地に軽工業総合大学の高麗(コリョ)成均館を設立するようはからった。

また、1993 年 1 月には日本帝国主義の民族文化抹殺策動によってねじまげられた檀君(タングン)と古朝鮮の歴史からまず正すべきだとして、江東(カンドン)郡にある檀君陵の発掘を発起し、その具体的な方向と方途を示

した。

こうして、1993 年 2 月に檀君の遺骨と遺物が発掘され、最新式の年代測定器具によって、それが 5，011 年前のものであることが科学的に証明された。神話的存在としてのみ伝えられてきた檀君が実在の人物であったことが確認され、檀君が平壌を国都とし朝鮮民族最初の国家をうち立てたことが証明された結果、平壌は朝鮮民族の発祥地であり、檀君は朝鮮の始祖であることが解明された。

1993 年 9 月、主席は現地に赴いて江東郡大朴（テバク）山の麓に檀君陵の敷地を定め、檀君陵の建立と関連して 47 回もの貴重な教示をおこなった。

檀君陵の建立は金正日将軍の細心の指導によって、1994 年 10 月初に後世に永遠に輝く国宝、労働党時代の大記念碑的建造物として、最高の水準でりっぱに完工した。

主席は高句麗（コグリョ）の建国始祖東明（トンミョン）王陵と高麗の太祖王建（ワンゴン）の陵もりっぱに改築し、それらの王陵に親筆の碑銘を刻した碑石を立てるようはからった。

一方、かつて民族排外主義的、事大主義的な史家によってはなはだしくねじまげられた朝鮮の古代および中世の歴史を、主体的な原則と方法論にもとづいて新たに解明し、体系化するよう導いた。

こうして、朝鮮の原始社会の全貌が明らかにされて、古朝鮮中心の古代史と高句麗中心の中世史の体系が確立され、古朝鮮―高句麗―渤海（パルヘ）―高麗とつづく、朝鮮民族の伝統にもとづいた古代史、中世史の体系が全面的に定立した。

1993 年 12 月の最高人民会議第 9 期第 6 回会議で、主席は民族文化遺産を正しく継承し発展させる事業の改善問題を議題にのせ、翌

年 4 月の最高人民会議第 9 期第 7 回会議では、朝鮮民主主義人民共和国文化遺物保護法を採択し、民族文化遺産を保存、管理し、正しく継承し発展させる法律的裏付けを確立するようはからった。

主体的立場から民族文化遺産を継承し、発展させる措置を講じた主席のはからいによって、朝鮮は 5，000 年の悠久な歴史を誇る東方の先進文明国として、朝鮮民族は檀君を始祖とする単一民族として誇れるようになった。

主席は全民族の大団結によって祖国統一の転換的局面を開くたたかいを精力的に指導した。

祖国の統一を一日も早く成就しようという民族の切願を反映して、主席は 1990 年 1 月 1 日の『新年の辞』と、5 月の最高人民会議第 9 期第 1 回会議で、1990 年代を歴史的な祖国統一の年代にしようと呼びかけ、1990 年 8 月と 1991 年 8 月にそれぞれ発表した著作『全民族が団結して祖国の統一を促進しよう』『わが民族の大団結をなし遂げよう』で、祖国統一の歴史的偉業を実現するためには、一にも二にも三にも朝鮮民族の大団結をなし遂げなければならないと強調した。

主席は、北と南、海外同胞のあいだの接触と往来を活発にし、対話を発展させ、北と南、海外のすべての政党、団体と組織、各階層同胞の組織的な連合を実現する措置を講じた。

1990 年 8 月、国内外統一運動団体の代表と各階層人士の参加のもと、国の分断後 45 年目に初めて挙行された白頭山頂における汎民族大会の開幕と、白頭―漢拏（ハンナ）大行進発向式、板門店（パンムンジョム）における第 1 回汎民族大会などは、民族の大団結によって祖国の統一を成就するたたかいにおいて一つの転換点となった。

こうして北と南、海外では同胞間の各種の接触と交流、統一行事が盛んにおこなわれ、1990 年 11 月には、愛国的な統一運動組織である祖国統一汎民族連合(「汎民連」)が、ついで 1992 年 8 月には、祖国統一汎民族青年学生連合(「汎青学連」)が結成された。これは祖国統一の主体的勢力を強化し、統一運動を拡大し発展させるうえで画期的な意義のある出来事であった。

1992 年 8 月、主席は第 3 回汎民族大会に参加した海外同胞との談話『全民族の団結の力で祖国の統一を自主的に実現しよう』をはじめ諸著作で、海外同胞が思想と理念、政見と信教、居住地域と所属にかかわりなく、朝鮮民族の誇りと自負を抱いて愛国、愛族、愛民の理念のもとに民族の団結をなし遂げ、祖国統一の偉業を実現するたたかいに特色ある寄与をするよう呼びかけた。

主席は民族の団結と統一の気運が高まっていくなかで、南朝鮮に抑留されている非転向長期囚の送還を実現するためにできるかぎりの対策と措置を講じた。その結果、1993 年 3 月に信念と意志の化身、非転向長期囚李仁模(リ イン モ)が祖国の懐に抱かれたのであった。

主席は、北南間の軍事的対決を解消し平和を保障する実際的な対策を立て、南朝鮮かいらい一味の国連単独加盟策動を粉砕するたたかいを積極的に進めるよう指導した。こうして、1991 年 9 月の国連第 46 回総会で共和国の国連加盟が決定され、同年 12 月の第 5 回北南高位級会談では、「北南間の和解と不可侵および協力、交流に関する合意書」が採択され、ついで「朝鮮半島の非核化に関する共同宣言」が発表された。

これは、7・4 北南共同声明発表後における最初の民族的合意文書の発表であり、国の平和と統一を実現するうえで一つの里程標と

なる画期的な出来事であった。

内外の分裂主義勢力の悪辣な反共和国策動によって再び緊張が激化し、祖国統一の前途に重大な難関が生じた時期の 1993 年 4 月、主席は最高人民会議第 9 期第 5 回会議で、民族団結の政治綱領であり、祖国統一の大憲章である『祖国統一のための全民族大団結 10 大綱領』を発表した。

金日成主席はつぎのように述べている。

「民族の運命を憂える人であれば、北と南、海外をとわず、共産主義者と民族主義者、無産者と有産者、無神論者と有神論者をとわず、あらゆる違いを超越してまず一つの民族として団結し、祖国統一の道をともに切り開いていくべきである」

主席は 10 大綱領で、全民族の大団結によって自主、平和、中立の民族統一国家を創立する民族大団結の総体的目標と、民族愛と民族自主精神にもとづいて団結すべきであるとする民族大団結の理念的基礎、共存、共栄、共利をはかり、祖国統一偉業にすべてを服従させる団結の根本原則を独創的に示した。そしていっさいの政争を中止し、北と南が互いに信頼し団結する問題、主義主張にかかわりなく祖国統一の道をともに手をとり合って進み、個人または団体所有のすべての財貨を保護し、それを民族の大団結に利用する問題、接触、往来、対話を通じて全民族が互いに理解し信頼し、団結する問題、民族の大団結と祖国統一の偉業に貢献した人を高く評価する問題など、民族大団結の実践的方途を全面的に明示した。

主席は全民族大団結 10 大綱領の旗のもとに祖国統一の転換的局面を開くため、朝鮮の分断に直接責任のあるアメリカとの会談を成功に導いて、アメリカから朝鮮の自主的平和統一支持の保証を取り

つけるとともに、北南最高位級会談を実現させるため精力的に活動した。

主席の重大措置によって、1994 年 6 月に板門店で歴史的な北南最高位級会談のための予備接触がおこなわれ、北南最高位級会談を平壌で 7 月 25 日から 27 日にかけて開催する合意書が採択された。

主席は反帝自主の旗、社会主義の旗をさらに高くかかげ、世界革命の前進のため積極的に活動した。

帝国主義者は冷戦の終結と平和時代の到来について喧伝し、社会主義を完全に抹殺し、世界的な規模で支配権を確立しようと傲慢にふるまった。

主席は帝国主義者の支配主義的策動に対処して、世界の革命的人民がかたく団結し、自主的な新世界の建設をめざして力強くたたかうよう力を尽くした。

1991 年 4 月に平壌で開催された列国議会同盟第 85 回総会での演説『自由で平和な新しい世界のために』で、帝国主義の侵略と専横を防ぎ、平和を守るために、すべての国と民族が自主性を堅持し、力の政策に抗して、国際的な共同闘争を力強くくりひろげるよう呼びかけた。

1991 年 4 月の『毎日新聞』編集局長の質問にたいする回答および他の著作で、アジアの人民がアジアの問題を解決するために帝国主義者の専横と干渉をこれ以上許してはならず、自主的立場を堅持し、自主的で繁栄する新しいアジアの建設をめざして、互いに緊密に協力すべきであると強調した。

アジアと世界の平和と安全をはかり、反帝自主勢力の団結を強化するため、主席は 1991 年 10 月(4 日～13 日)に中華人民共和国を

公式訪問した。

主席は金正日将軍が留守を預っているがゆえに、帝国主義者と反動勢力が社会主義のとりでである朝鮮民主主義人民共和国の孤立、圧殺に総力を集中していたもっとも厳しい情勢のもとでも安心して、世界の耳目を集めながら、外交慣例上まれな 10 日間の外国訪問をおこなったのである。

主席は社会主義運動再建のための闘争を精力的に指導した。

1991 年 7 月のポルトガル共産党書記長との談話、翌年 4 月の『ワシントン・タイムズ』記者団の質問にたいする回答とその他の機会に、社会主義運動再建の指針を示した。

主席は、一部の国で社会主義が挫折した主因は社会主義の基本原則を守らなかったことにあるとし、社会主義建設で堅持すべき基本原則は自主性を守り、人民大衆が国家と社会の主人の地位を占め、主人としての役割を果たすようにすることであると強調した。そして、東欧の社会主義諸国が崩壊したのはその国の指導者たちが事大主義、大国崇拝主義をこととし、官僚主義をはなはだしくはびこらせて人民から離脱したからであると指摘した。

主席は、社会主義運動を再建するためには共産主義者と革命家が敗北主義に陥ることなく社会主義の勝利を確信し、社会主義の道を力強く前進することにあると強調した。

1992 年 4 月、主席の生誕 80 周年を祝って平壌を訪問した各国の共産党、労働者党および進歩的政党の代表は、社会主義運動を再建し社会主義偉業を勝利のうちに前進させるためには共同の闘争綱領がなければならないと痛感し、革命的諸政党の平壌会合を持ち、「社会主義偉業を擁護し前進させよう」という歴史的な平壌宣言を

採択した。

平壌宣言の採択によって、社会主義偉業の後退過程と混乱に終止符が打たれ、世界の社会主義偉業は隊伍を収拾して帝国主義者と反動勢力に反撃を加えながら、新たな力強い進軍を開始した。

世界の革命的な政党と人民は平壌宣言を「新共産党宣言」「国際共産主義運動の再出発を知らせる歴史的な文書」「革命的政党の進むべき行動方向を規定した指導指針」として高く評価した。この宣言には当時 70 の政党が競って署名したが、その数は年とともに急速に増加している。

主席は、平壌宣言の旗のもとに社会主義運動を再建し前進させるうえで朝鮮がとりでとしての役割をはたし、社会主義をめざす進歩的人民のたたかいを誠心誠意援助するようはからった。

主席は世界の進歩的人民の自主的志向と、急変する国際情勢を洞察し、非同盟運動をひきつづき発展させるよう正しく導いた。

1992 年 9 月のインドネシアの『メディア・インドネシア』新聞社責任主筆の質問にたいする回答および他の著作で、冷戦の終結は決して非同盟運動の地位と役割の喪失を意味するものではないとして、反帝自主、反戦平和の旗を高くかかげて非同盟運動を固守し、発展させていくための原則的諸問題を解明した。

また、非同盟運動をいっそう発展させるためには、この運動の統一団結を実現し、非同盟諸国が帝国主義、支配主義、人種主義を排撃し、国連をはじめ国際舞台で共同の戦略をもち、歩調を合わせていくべきだと指摘した。そして、政治、経済、文化の各分野にわたって緊密に協力し、旧国際秩序をうちこわし、公正な新国際秩序を確立し、南南協力を拡大発展させるため積極的に努力すべきだと

強調した。

主席は非同盟諸国首脳会議などの重要な会議や非同盟諸国に特使や代表団を送り、非同盟運動をいちだんと発展させるうえで朝鮮が大きな役割を果たすようにした。

また、非同盟情報にも深い関心をよせ、1993 年 6 月に平壌で開かれた第 4 回非同盟諸国情報相会議での演説『非同盟情報は諸国人民の自主偉業に寄与すべきである』で、非同盟情報における原則的な諸問題を全面的に解明した。

主席は偉大な生涯の最後の年である 1994 年にも、チュチェ革命偉業の完成と世界自主化偉業の勝利のために、革命活動を精力的にくりひろげた。

主席は例年どおり、1994 年の新年も、親しく国の王様として誰よりも愛している学生少年たちとともに迎えた。

新しい世代をりっぱに育て、導くのが自身の次代観であるとし、毎年、子どもたちと一緒に迎春の夕べを送るのを楽中の楽、年初の要務、国事としている主席は、迎春公演を観覧するため、党、国家の幹部とともに平壌体育館を訪れた。

主席は、学習と組織生活で模範を示した子どもたち、スポーツ、芸術など各分野で豊かな才能を示している子どもたちから万年長寿を願う新年の挨拶を受け、かれらと一緒に記念写真を撮った。そして、元旦を指折り数えながら熱心に準備してきた、子どもたちの幸せにみちた公演を観覧し、かれらの前途を祝福した。

主席はこの年、心臓病を患い、目の手術までうけて安静療養を必要としていた。医師の強い制止にもかかわらず、超人的な精力をもってたゆみなく革命活動をくりひろげ、やがての事態を予想でも

していたかのように、すべての部門の活動を一つひとつ手落ちなく締めくくっていった。

主席は歴史的な新年の辞を述べたあと、2 月と 3 月には全国農業大会、全党細胞書記大会、全国石炭工業部門活動家大会を、ついで朝鮮少年団第 5 回大会やその他の諸大会を開くようはからい、参会者に書簡や祝賀文を送り、すべての党員、勤労者、青少年学生が金正日将軍のまわりに一心団結し、社会主義偉業の勝利に向けて力強くたたかうよう激励した。

また自身の疲労をものともせず、抗日革命闘士や南朝鮮の革命家、革命家の遺児、国内はもとより海外にいる抗日革命縁故者ともいちいち会って記念写真を撮り、かれらがみな金正日将軍にいっそう忠実にしたがい、革命を最後までやり遂げるよう願った。とりわけ金正日将軍をいただくうえで革命の第一世代である抗日革命闘士が誰よりも模範を示さなければならず、また革命家の遺児たちも父母のあとを継ぎ革命をしっかり受け継いでいかなければならないと強調した。

主席は 4 月 25 日、チュチェの革命偉業遂行の主力であり、革命の柱である朝鮮人民軍の創建記念日を迎えて人民軍の指揮メンバーを接見し、全軍が金正日最高司令官の指導に忠実にしたがって、祖国を統一し、チュチェの革命偉業を完成するよう、綱領的な教示をおこなった。そして、5 月には総聯のさる責任幹部に会い、信念をもって病気の治療に専念するようにと温かく力づけ、熱い温情と配慮をめぐらした。

また社会主義祖国の隆盛繁栄と、人民のより幸せな生活のため、農村のあぜ道をたゆみなく歩み、6 月には蒸し暑い日差しにもめげ

ず、温泉（オンチョン）郡金塘（クムタン）協同農場と平壌市大城（テソン）区域の協同農場を現地指導した。

主席は経済建設に革命的な転換をもたらすため、7 月 5 日と 6 日の両日、経済部門の責任幹部協議会を開いた。

この協議会での結語『社会主義経済建設に新たな革命的転換をもたらすために』で、帝国主義者と反動勢力の反共和国策動と共和国圧殺・制裁策動を粉砕して、人民大衆中心の朝鮮式社会主義をさらに輝かせるため、社会主義経済建設で新たな高揚を起こすべく部門別の課題と方途を明示した。

この歴史的な結語は、帝国主義者のいかなる経済封鎖にもいささかも揺らぐことなく社会主義経済建設を強力に促すことを可能にする経済建設綱領であり、主席の最後の遺訓となった。

主席は民族至上の課題である祖国統一と全世界の自主化偉業の実現をめざして、この年の 4 月に世界各国の元国家元首および政府首班、政治家の平壌訪問団メンバーを接見し、またキューバのプレンサ・ラティーナ通信社社長、『ワシントン・タイムズ』記者団、CNN テレビ記者団、NHK 記者団の各質問に回答を与えた。そして 6 月の 1 か月だけでも、キューバの女性法律家、ベルギー労働党中央委員会委員長など 18 の外国代表団および人士を接見した。

主席は 6 月 16 日と 17 日の両日、平壌を訪れた元米大統領カーターと会ってアメリカの「特別査察」と「制裁」問題に言及し、アメリカは朝鮮の「核問題」を国連に持ち込んで朝鮮に制裁を加えると言っているが、われわれは制裁を恐れない、われわれはこれまでずっと制裁を受けつづけてきたのであって、制裁を受けなかったことは一度としてなかった、われわれはアメリカが制裁措置を取り消

してもよいし、取り消さなくてもよい、ときっぱり言明した。

主席に会ったカーターは、理路整然として一家言を吐く主席の明晰な判断力と神秘なまでの分析力、祖国と人民にたいする深い愛と信頼にもとづく確固とした意志と烈々たる情熱、豪放磊落（らいらく）な度量とそこからくる親近感、満面にあふれる天才的な英知と全身にただよう熱い気品にすっかり魅了された。

カーターは帰国の途次ソウルでおこなった記者会見で、金日成主席はじつに精力的で、英知に富み、すべての問題で細密かつ広い知識をもっているばかりでなく、心の広い人物だと評し、「金日成主席はあたかもアメリカの初代大統領でもっとも名望の高かったジョージ・ワシントン、トーマス・ジェファソン、アブラハム・リンカーンのすべてを合わせた総合体とも言える傑出した人物だ」と激賞した。

主席はカーターとの会談を通して、核問題と関連した朝米会談や北南最高位級会談の開催に有利な状況をつくりだした。

他方、6 月 20 日から 7 月 5 日にかけて、北南最高位級会談と関連して数十回の教示、10 余件の親筆教示を与え、7 月 6 日には金正日将軍と電話で北南最高位級会談に関する問題を具体的に討議した。

主席は 7 月 7 日、偉大な生涯の最後の日もしばしの休息も忘れて、緊張した時間を送った。この日、早暁から執務にあたり、日課の散策時間まで犠牲にして祖国統一に関する文書にくまなく目を通し、修正、加筆して完成し、闊達な筆致で、「金日成　1994 ・ 7 ・ 7」という歴史的な親筆を残した。そして、午前 10 時には、某幹部を呼んで、天気予報によると大雨になるそうだから現地へ出かけて水位とダムの状態を確認してくるようにと指示し、ついで午

後の天気を確かめたあと、大きな川や貯水池の水があふれないように非常対策を講ずるよう指示した。午後 3 時 55 分には、某幹部に会って、カーターの朝鮮訪問後の動向と日本の情勢について分析したあと、効果的な外交活動をおこなうよう説き、4 時 9 分と 5 時 25 分、5 時 37 分には当該幹部に電話で、電力問題をはじめ革命的経済戦略の貫徹で提起されている問題について重要な教示を与えた。午後 7 時 30 分ごろ、5 分たらずで形ばかりの夕食をすませると、そのまま執務室にもどり、文書に目を通しながら、ときにはアンダーラインを引き、ときには余白一杯に筆を加えるなど夜更けまで執務に没頭した。

このように、主席は党と革命、祖国と人民のために、重なる心身の疲労をいやすいとまもなく、生の最後の瞬間まで精力的な活動をつづけ、チュチェ 83(1994)年 7 月 8 日午前 2 時、執務室で急病で逝去した。

これは、朝鮮民族 5，000 年の歴史上たぐいなき最大の痛恨事であり、天にも地にもとってかえられない喪失であった。

この悲報は、7 月 9 日正午、重大ニュースとして全国、全世界に流された。

主席の急逝という、青天の霹靂ともいうべき悲報に接した朝鮮人民の悲しみは天にもとどかんばかりであった。太陽の火が消え、地球が割れ、天が崩れたかのような衝撃に、全国は号泣の海、涙の海と化し、山川草木も悲憤にうち震えた。

主席を民族の父、革命の領袖にいただき、誇りにみちた生を享受してきた朝鮮の労働者と協同農民、人民軍将兵と知識人、青年学生と子どもたちなど、全国、全人民が喪主となり、日夜主席の霊前

や銅像、革命事績記念碑を訪れて護衛に立ち、最大の哀悼の意を表し、無量の思いをこめて追慕した。哀悼期間(7月8日〜20日)だけでもじつに延べ2億1,200余万名の各階層人民と軍人が主席を追慕し、弔意を表した。

7月19日、革命の首都平壌では主席との告別式がおごそかに挙行された。主席の霊柩を葬送する行列の先頭車には、主席の明るく笑う太陽像がかかげられていた。

40余キロの沿道に雲集した200余万の首都市民は胸をかきむしり、地を踏んで「主席！　逝ってはなりません。主席が逝かれたら、わたくしたちはどうすればよいのです」と号泣し、涙にくれて主席と永訣した。

翌20日には、金日成広場で中央追悼大会がおごそかに挙行され、同時に全国すべての地方で追悼式がおこなわれた。

南朝鮮の青年学生や在野の人士、広範な人民も、敵のファッショ的な弾圧にもめげず各地に焚香所や祭壇を設けて主席に深い哀悼の意を表し、追悼集会を開いた。各大学のキャンパスには哀悼の意を表する壁新聞が大きく掲示され、各地に数万枚のビラがまかれ、諸団体、各界の人士が哀悼声明を発表し、合法および非合法のルートを通して、多くの弔電や弔文が平壌に届けられた。獄中でも哀悼断食闘争がおこなわれた。

総聯をはじめ海外同胞組織や同胞は民族の父を失ったやるかたない悲しみのなかで主席を追慕し、弔電や花輪を送り、祖国の人民とともに喪に服した。同胞の住むすべての地で追慕行事がとりおこなわれ、多くの弔問代表団や弔客が祖国にはせつけ、主席の霊前と銅像を訪れて弔意を表した。

世界の政治元老であり、自主時代の傑出した領袖である金日成主席が逝去したという悲報に接して、中国、キューバ、カンボジアをはじめ世界のほとんどすべての国の国家元首、政府首班、政党指導者、各界人士、広範な人民が心からなる哀悼の意を表し、4，000 余通の弔電、3，300 余の花輪を寄せ、各国駐在の朝鮮大使館、代表部、領事館を弔意訪問した。

20 余の国と国際機関が哀悼の日、哀悼の期間を定めて弔旗をかかげ、160 余の国で追慕行事がとりおこなわれた。

さらには、米大統領をはじめ政治的に敵対関係にある国の現・元大統領や首相、資本主義諸国の高位政客、御用出版物も正式に哀悼の意を表した。

国連事務総長、国連総会議長も深い哀悼の意を表し、国連本部の建物に弔旗がかかげられた。これはまったく前例のないことであった。哀悼期間、世界の 120 余の国で 700 余のマス・メディアが特集を組み、200 余の通信、放送が延べ 2，200 余回にわたって特別放送をおこなった。

金日成主席は世を去ったが、朝鮮人民と世界の革命的人民の心の中にチュチェの太陽として生きつづけている。

金正日将軍はつぎのように述べている。

「偉大な金日成同志の心臓は鼓動を止めたが、金日成同志はきょうも朝鮮人民とともにあります。金日成同志は領袖、党、大衆の混然一体の最高頭脳として、民族の太陽として生きつづけているのです」

領袖の永生は、その偉大さゆえに、そして領袖にこのうえなく忠実な後継の領袖によって確固と保障されることになる。

金日成主席は偉大な指導者、偉大な革命家、偉大な人間であり、偉大な哲学者、偉大な政治家、偉大な軍事戦略家、偉大な指導の芸術家であった。

主席はつとに 10 代にして革命の道に立ち、日本帝国主義とアメリカ帝国主義に抗する 2 度の革命戦争と 2 つの段階の社会革命、2 度にわたる復興建設、諸段階の社会主義建設を輝かしい勝利に導き、立ち後れた植民地・半封建社会であった朝鮮を自主、自立、自衛の社会主義強国に変え、全世界の自主化偉業の遂行に不滅の貢献をなした。

主席は「以民為天」「以身為民」の理念を座右の銘とし、人民を天のごとくみなして、人民のために全生涯をささげた。

主席は祖国解放後の 50 年のあいだに 8，000 余回にわたり、1 万 8，000 余の単位を訪ねて、55 万余キロもの長い現地指導の道のりを歩んだ。

また世界の自主化偉業の勝利をめざして精力的に活動しながら、国家元首、政党指導者、政府首班をはじめ延べ 7 万余名の外国人訪問客を接見し、50 余回にわたり延べ 80 余の国を公式ないし非公式訪問した。

主席はチュチェの革命偉業と世界の自主化偉業に積んだ不滅の業績によって、朝鮮民主主義人民共和国大元帥称号と共和国英雄称号(3 回)、労働英雄称号を受けた。そして 70 余の国と国際機関から 180 余の最高勲章とメダル、30 余都市の名誉市民称号、外国の著名な 20 余大学の名誉教授、名誉博士の称号を受け、170 余か国の党首および国家元首、政府首班、進歩的人民から心のこもった 16 万 5，000 余点の贈り物を受けた。中国とモンゴルには主席の銅像

が建てられ、世界的に「国際金日成賞」が制定、授与されている。また 100 余か国 480 余の街と機関、団体に主席の名が冠せられている。

108 か国の出版社が主席の古典的著作を 63 の民族語で翻訳、出版した。

主席が人民大衆の自主偉業、社会主義偉業の勝利のために積みあげた革命の業績は、歴史とともに永久に残るであろう。

先代領袖への限りない忠孝心ともっとも崇高な共産主義的徳義を抱いている金正日将軍は、主席をチュチェの太陽として永久にいただこうと念ずる朝鮮人民と世界の革命的人民の一致した念願と意志をこめて、主席が長年執務した錦繍山（クムスサン）議事堂を錦繍山記念宮殿と改称して、錦繍山地区をチュチェの最高の聖地として最上の水準で整備し、錦繍山記念宮殿に主席を生前の姿で安置し、とこしえに人民とともにあるようにはからった。

金正日将軍は「偉大な領袖金日成同志は永遠にわれわれとともにある」「偉大な領袖金日成同志の革命思想でいっそうしっかり武装しよう!」という信念のスローガンを示し、主席の遺訓をあくまで貫くようはからうことによって、朝鮮労働党と朝鮮人民が社会主義朝鮮の始祖である金日成主席を偉大な領袖として子孫万代にわたって高くいただき、その偉大な革命思想と不滅の業績をとこしえに輝かせ、革命と建設を主席の意図どおり、主席の方式でおし進めるようにしている。

また、主席の誕生日にあたる 4 月 15 日を「太陽節」として記念し、1912 年を元年とする「チュチェ年号」を制定するとともに、主席を朝鮮民主主義人民共和国の永遠の主席として憲法に明記する

措置を講じた。

主席の偉大な革命思想は金正日将軍の思想によってさらに光り輝き、主席の指導は金正日将軍の卓抜で洗練された指導によって、りっぱに継承されている。

金正日将軍が朝鮮労働党と朝鮮人民の首位にあるがゆえに、金日成主席はきのうもきょうも、そしてあすも、千年万年とこしえに朝鮮人民の心の中に生きつづけ、主席の遺訓が花と咲く金日成祖国、金日成民族のきわまりのない繁栄のなかで、主席の革命活動史は連綿と継がれていくであろう。

注　釈

［１］　**チュチェ 1(1912)年**　朝鮮では、不滅のチュチェ思想を創始し、革命と建設を勝利へと導いた金日成主席の革命的生涯と不滅の業績を末長く伝え、その革命偉業を継承、完遂するため、主席が誕生した 1912 年を元年(チュチェ 1 年)とするチュチェ年号が制定された。これは主席の 3 周忌にあたる 1997 年 7 月 8 日に決定された。

［２］　**3 大覚悟**　金日成主席が父の金亨稷先生から譲り受けた遺産の一つ。飢え死にする覚悟、なぐり殺される覚悟、凍え死にする覚悟をもって最初に抱いた大志を守り抜いてこそ、革命闘争であらゆる試練に耐え、勝利をおさめることができるということ。

［３］　**6・10 万歳デモ**　1926 年 6 月 10 日、日本帝国主義の軍政に抗して展開された大衆的な反日デモ。1920 年代に入って朝鮮では労働者、農民の革命的進出が積極化し、全国的に反日気運が高まった。1926 年 4 月、李朝最後の王である純宗の死を契機に朝鮮人民の反日感情はその極に達した。王の葬儀参列を名目にソウルに集まった数十万の群衆は集会を開いて反日扇動をおこない、6 月 10 日、柩輿がさしかかると道路の両側に立ち並んでいた群衆は「朝鮮独立万歳!」「日本軍は帰れ!」と叫びながら反日デモをくりひろげた。デ

モはソウルだけでなく、仁川をはじめ全国各地で断行された。この闘争を通じて、朝鮮人民は決して日本帝国主義者に屈しないということを示した。

［4］　**正義府**　1925 年に 10 余の民族主義的団体の統合によって組織された民族主義者の反日団体の一つ。1929 年 4 月、正義府は同じ民族主義者の反日団体である参議府、新民府との統合によって「国民府」となった。

［5］　**「中東鉄道事件」**　中国国民党の奉天系軍閥の軍隊が中東鉄道を奪取し、ソ連に侵攻した事件。ソ満戦争ともいう。中東鉄道は1924 年の中ソ協定によって両国が共同で経営していた。ところが、日本をはじめ帝国主義者の教唆のもとに、1929 年 7 月、中国の反動軍閥が武力を行使して鉄道の無線電信局と管理局を占拠したため、流血の惨事を招いた。この事件は 1929 年 12 月 1 日、両国が「ハバロフスク協約」を結ぶことによって終結した。

［6］　**新民府**　朝鮮の民族主義者の独立運動団体。1925 年 3 月、北満州の寧安県でいくつかの民族主義者の軍事団体の統合によって組織された。1929 年 4 月の 3 府(正義府、新民府、参議府)統合によってその存在を終えた。

［7］　**参議府**　朝鮮の民族主義者の独立運動団体。統議府から脱退した一部の民族主義者によって、1923 年 8 月に南満州の通化県で組織された。参議府は軍資金の調達に明け暮れ、上層部さえ統一を欠い

ていた。1929 年 4 月に表面上は国民府に統合されたが、その一部は離脱した。

［８］　**国民府**　朝鮮の民族主義者の独立運動連合団体。1920 年代の中ごろから中国東北の南北満州に割拠していた 3 府(正義府、新民府、参議府)は、日本帝国主義に抗して戦うどころか、管轄区域を広げる競争に明け暮れていた。3 府が誕生した当初から、独立運動の先覚者たちは統合の必要性を痛感し、その実現のために力を尽くした。1928 年の夏に始まった「3 府統合会議」は場所を変えながらつづけられ、1929 年 4 月に形ばかりではあったが、国民府という名で統合された。しかし、それも日本帝国主義の弾圧とそれ自体の弱点のため解散を余儀なくされた。

［９］　**『朝鮮の星』**　金日成主席の初期革命活動の時期、革命詩人金赫が創作した不滅の革命頌歌。1928 年作。金日成主席を朝鮮の明星、民族の太陽として高く戴こうという切々たる願いがこめられている。この歌は抗日革命闘争の初期から広範な人民のあいだで広く歌われ、いまも愛唱されている。

［１０］　**吉東地区**　中国東北の吉林省東部地域の蛟河、敦化、延吉、安図、汪清、和竜、琿春などの各県を含むかなり広い地帯。

［１１］　**東北軍**　中国東北地方(満州)の奉天軍閥系の正規軍。東北軍の前身は奉天系軍閥の張作霖が総指揮をとった軍隊で、奉軍ともいわれた。この軍隊は 1928 年末、満州が蒋介石の国民党政府の統治下

に入った後、東北別方軍(東北軍)と改称された。東北軍は張作霖の息子である張学良を司令とし、兵力は約 30 万に達した。

［１２］　**救国軍**　中国東北地方で活動した中国人の反日武装勢力。中国人反日部隊のなかで、国民党の影響下にあり、「満州事変」を契機に抗日・救国の旗をかかげた旧東北軍の残存部隊や農民が蜂起して組織した反日武装部隊のような民族主義的な武装勢力を抗日救国軍と呼んだ。

［１３］　**反「民生団」闘争**　「民生団」は、朝鮮革命の主体的力量の成長におそれをなした日本帝国主義者が、革命隊伍を内部から切り崩すため、1932 年 2 月に中国の間島地方でつくりあげた反革命スパイ団体である。「民生団」は組織された当初からその反革命的正体が露見し、人民から糾弾、排撃され、1932 年 7 月に解体した。しかし、狡猾な日本帝国主義者は、その後も「民生団」組織が多く残存しているかのように見せかけるため謀略と術策の限りを尽くした。彼らの奸計にはまった民族排外主義者と分派・事大主義者は反「民生団」闘争を極左的におこない、隊伍の統一団結と朝鮮革命の発展に重大な損失をもたらした。反「民生団」闘争における極左的な偏向は、金日成主席の原則的な闘争によって克服された。

［１４］　**「恵山事件」**　1937 年と 1938 年に日本帝国主義者が朝鮮の北部国境地帯の鴨緑江沿岸一帯で強行した 2 回にわたる朝鮮の革命家と愛国的人民にたいする大検挙事件。1941 年 8 月、「咸興地方法

院」だけでも権永璧、李悌淳、朴達など 167 名の革命家と愛国者が死刑または無期懲役を宣告され、残忍な方法で拷問、虐殺された。

［１５］　**熱河遠征**　極左冒険主義者がコミンテルンの名を借りて、中国東北地方で活動していた抗日武装部隊に、「満州国」の首都長春を包囲、攻撃し、熱河方面へ進出するよう強要し、おこなわれた遠征を指す。この遠征は重大な損失をもたらし失敗に終わった。

［１６］　**「カルキンゴル事件」**　「ノモンハン事件」とも言う。1939 年 5 月 28 日から 9 月 16 日にかけて日本軍がカルキンゴル地域でモンゴル人民共和国とソ連にたいして引き起こした武力侵略事件。日本軍はモンゴル東部の突出部を占領し、さらにソ連に攻め入ってシベリア鉄道を断ち切り、極東地方を奪い取るため、関東軍傘下の数多くの精鋭部隊をつぎ込んだが、ほぼ 6 万 1，000 人の死傷者を出し、モスクワで停戦協定を結ばざるを得なかった。

［１７］　**「M・L 派」**　1926 年 4 月に組織された「マルクス・レーニン主義同盟」。同年秋に朝鮮共産党に編入。その後、党内では M・L 派と他の分派との「ヘゲモニー」争いが極に達し、朝鮮の共産主義運動と労働運動の分裂をまねき、1928 年には朝鮮共産党自体が解散を余儀なくされた。

［１８］　**「火曜派」**　1920 年代に朝鮮共産主義運動内にあらわれ、革命運動に大きな弊害を及ぼした分派の一つ。1924 年 11 月、マルクスの誕生日が火曜日であることにちなんで「火曜会」と改称された。

［１９］　**「長安党」「再建党」**　朝鮮の解放後も分派分子は正常な党創立事業を妨害し、それぞれ「共産党」の看板をかかげて派閥争いに明け暮れた。「M ・ L 派」はソウルの長安ビルで「共産党」を組織したが、これが「長安派共産党」または「長安党」と呼ばれた。一方、「火曜派」は「桂洞活動者大会」を開いて「共産党の再建」を宣したが、これが「再建派共産党」または「再建党」と呼ばれた。

［２０］　**『正路』**　朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』の前身。1945 年 11 月 1 日創刊。1946 年 8 月 28 日に共産党と新民党が合同し、勤労者大衆の統一的な政党である労働党が創立され、同年 9 月 1 日に『正路』は『労働新聞』と改称された。

［２１］　**「人民共和国」**　朝鮮が解放された後、反党反革命分派分子である朴憲永一味はアメリカ帝国主義と反動層の教唆のもとに、「人民共和国」の看板をかかげたブルジョア共和国を樹立するという「路線」をうちだした。これは、極悪な反共分子、アメリカの子飼いの手先である李承晩をはじめ親日派、民族反逆者と派閥分子を軸とする反人民的なブルジョア政権の樹立をもくろむものであった。かれらの策動は、主体的立場と革命的原則に徹した金日成主席によって破綻した。

［２２］　**「反託」謀略**　1945 年 12 月にモスクワで開かれたソ・米・英の 3 国外相会議でアメリカ代表は、南北朝鮮で一定の期間(その期間は不定)アメリカ軍とソ連軍が軍政を敷き、その後の 5 年間は

ソ・米・英・中(中華民国)4 か国の信託統治を実施し、必要に応じてこれをさらに 5 年間延期することを主張した。ソ連代表は朝鮮に直ちに民主的臨時政府を樹立すべきだと主張し、これを援助するため 5 年間の後見制を実施することを提案した。会議ではソ連案が採択された。5 年内に朝鮮に統一的自主独立国家が樹立することを望まないアメリカはこの決定に反する行動をとった。当時のアメリカ大統領トルーマンは自国の政策に反する決定を下したとし、帰国した国務長官バーンズを即時罷免した。

南朝鮮駐屯アメリカ軍司令官ホッジは、3 国外相会議におけるアメリカ案については言及を避け、朝鮮人には 3 国外相会議の決定に反対する自由があると重ねて公言し、この決定に反対するよう反動勢力をそそのかした。3 国外相会議の決定が実現すれば、朝鮮を植民地にしようとするアメリカの目的が達成できなくなるが、これに署名したアメリカ自身が真っ向から反対を唱えるわけにはいかなかった。それでアメリカは、3 国外相会議の決定は信託統治案であるという手前勝手な見解を暗々裏に流布させ、即時独立を望む人民大衆を刺激する一方、反動勢力をそそのかして「反託運動」(モスクワ 3 国外相会議の決定に反対する運動)を起こした。したがって、「反託運動」は、信託統治に反対するという名目をかかげ、実際は信託統治(植民地支配)を実現させようとする売国的な運動であり、徹頭徹尾アメリカ帝国主義の侵略政策に荷担する反民族的な運動であった。

［２３］　**「李桂山運動」**　解放後、朝鮮で展開された識字運動。1947 年 8 月に金日成主席は、解放後に分与された土地で初めて収穫した穀

物を携えて平壌を訪ねた江原道平康郡の農民李桂山に会った。そのとき主席は、彼女が読み書きができないことを知り、3 か月の間に字を習って自分で書いた手紙をよこし、識字運動の先駆者になるよう励ました。これが発端となって全国的な規模で識字運動が展開された。そして、1949 年 3 月までに 230 余万の勤労者が識字者となった。この運動が「李桂山運動」といわれた。

［２４］　**革命的スローガンの記された樹木**　金日成主席が組織・指導した抗日革命闘争の時期、朝鮮人民革命軍の隊員と革命組織のメンバーが祖国解放の願いをこめて、樹皮をはいでスローガンを記した樹木。「白頭山に縮地の術をつかう将帥出現」「ああ　朝鮮よ、白頭山に白頭光明星誕生」といったスローガンが記された樹木は、実物によって抗日革命闘争の輝かしい歴史を末長く伝える、文献的意義を有する財宝となっている。